

朝日の遺跡Ⅲ

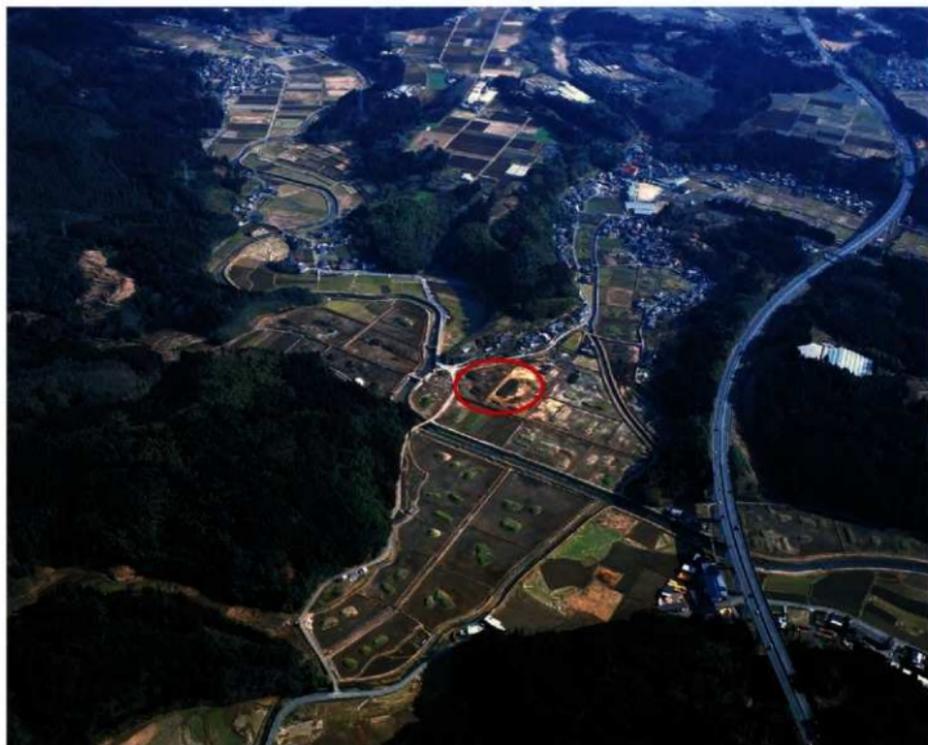
— 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3） —

花ノ木遺跡1次の調査

附編 「朝日の遺跡」の自然科学分析

2015年

日田市教育委員会



花ノ木遺跡 1次調査の空中写真（西から）枠内が調査地



花ノ木遺跡 1次調査の空中写真（西から）



花ノ木遺跡1次調査出土土器集合写真



4号竪穴建物出土土器集合写真

序 文

この報告書は、日田市教育委員会が平成 23 年度に県営経営体育成基盤整備事業朝日地区の工事実施に伴って発掘調査を行った、花ノ木遺跡 1 次調査の内容をまとめたものです。

花ノ木遺跡では、周辺を流れる二串川左岸に位置する沖積地に弥生時代末から古墳時代前期頃の竪穴建物や古代の溝状遺構などが確認されるなど、集落跡や水田に関する遺構が周辺に広がっていたことが明らかになりました。

これらの発見から、調査地周辺の谷部では、弥生時代末から古墳時代にかけて水田を営む集落がつかわれ、それが後の古代まで断続的におこなわれるという土地利用の変遷を追う事が出来ました。これは、この地域の歴史を知る上で貴重な成果となりました。

こうした発掘調査の内容をまとめた本書が、今後、文化財の保護や活用、朝日地区の歴史解明、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、ご協力を賜りました朝日地区圃場整備組合や地元の皆様方、全ての関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成 27 年 3 月

日田市教育委員会

教育長 三笥 眞治郎

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が平成 23 年度に実施した花ノ木遺跡 1 次調査報告書である。
2. 調査は、平成 23 年度に県営経営体育成基盤事業朝日地区朝日工区の工事実施に伴い、大分県西部振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり、実施した。
3. 調査に当たっては、朝日地区圃場整備組合、市農業振興課にご協力を賜った。
4. 発掘調査は、予備調査を若杉が担当し、本調査は上原が担当した。
5. 花ノ木遺跡 1 次調査の発掘調査は、地形測量、メッシュ杭設置、平面遺構実測、個別遺構実測、土層実測、空中写真撮影を調査補助業務として株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施した。
6. 遺構の写真撮影は上原が行った。
7. 遺物実測・製図・写真撮影・遺構製図は、有限会社九州文化財リサーチ及び雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。また、遺物図の割付・観察表・写真図版割付は雅企画株式会社に委託し、その成果品を使用した。
8. 第 4 章は、株式会社パレオ・ラボに委託した成果品を編集し使用した。
9. 附編の平田遺跡・本村遺跡 5 次の自然科学分析は、平成 24・25 年に報告した「朝日の遺跡Ⅰ・Ⅱ」の追加報告である。
10. 附編は、株式会社パレオ・ラボ及び株式会社古環境研究所に委託した成果品を編集し使用した。
11. 挿図中の方位・文中の方位角は、真北を示す。
12. 出土遺物、図面及び写真類は
日田市埋蔵文化財センターに保管している。
13. 本書の執筆は第 1 章を若杉が行い、
第 4 章・附編以外の執筆及び全体の
編集は上原が行った。



日田市の位置

本文目次

第1章 調査の経緯	
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の組織	2
(3) 発掘調査の経過	3
(4) 整理作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第3章 調査の内容	
(1) 調査の概要	7
(2) 遺構と遺物	
1. 竪穴建物	7
2. 掘立柱建物	28
3. 溝状遺構	32
4. 土坑	66
5. ピット	71
6. その他の遺物	78
第4章 自然科学分析	
(1) 出土木材及び炭化材の樹種同定	81
(2) 出土木材の樹種同定	91
(3) 大型植物遺体同定	97
(4) 出土種実年代測定	101
第5章 総括	104
附編 「朝日の遺跡」の自然科学分析	
(1) 平田遺跡出土木材の樹種同定	161
(2) 本村遺跡5次調査出土木材の樹種同定及び年代測定	164

挿図目次

第1図 工事実施区域と調査区位置図 (1/10,000)	3	第9図 3号竪穴建物出土遺物実測図 2 (1/2,1/4)	13
第2図 花ノ木遺跡調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000)	6	第10図 4号竪穴建物実測図 (1/60)	14
第3図 1号竪穴建物実測図 (1/60)	8	第11図 4号竪穴建物出土遺物実測図 1 (1/4)	15
第4図 1号竪穴建物実測図出土遺物実測図 (1/4)	8	第12図 4号竪穴建物出土遺物実測図 2 (1/4)	16
第5図 2号竪穴建物実測図 (1/60)	9	第13図 4号竪穴建物出土遺物実測図 3 (1/4)	17
第6図 2号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	10	第14図 5号竪穴建物実測図 (1/60)	18
第7図 3号竪穴建物実測図 (1/60)	11	第15図 5号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)	18
第8図 3号竪穴建物出土遺物実測図 1 (1/4)	12	第16図 6号竪穴建物実測図 (1/60)	19

第17図	6号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)	20	第52図	3号溝状遺構出土遺物実測図2(1/4)	50
第18図	7号竪穴建物実測図(1/60)	21	第53図	4号溝状遺構実測図・土層断面図(1/100・1/40)	51
第19図	7号竪穴建物跡出土遺物実測図(1/2・1/4)	22	第54図	4号溝状遺構出土遺物実測図(1/4)	52
第20図	8号竪穴建物実測図(1/60)	23	第55図	5号溝状遺構実測図・土層断面図(1/100・1/40)	52
第21図	8号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)	23	第56図	5号溝状遺構出土遺物実測図(1/4)	52
第22図	9号竪穴建物実測図(1/60)	24	第57図	6号溝状遺構実測図・断面図(1/100・1/40)	53
第23図	9号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)	24	第58図	6号溝状遺構出土遺物実測図(1/4)	54
第24図	11号竪穴建物実測図(1/60)	25	第59図	7号溝状遺構実測図・遺物出土状況実測図 ・土層断面図(1/100・1/20・1/40)	56
第25図	10号竪穴建物実測図(1/60)、 カマド個別実測図(1/30)	25	第60図	7号溝状遺構出土遺物実測図1(1/4)	57
第26図	11号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)	25	第61図	7号溝状遺構出土遺物実測図2(1/4)	58
第27図	1号孤立柱建物跡実測図(1/60)	26	第62図	8号溝状遺構実測図(1/200)	59
第28図	1号孤立柱建物出土遺物実測図(1/2)	26	第63図	8号溝状遺構(サブトレッチ1) 実測図及び土層断面図(1/40)	59
第29図	2号孤立柱建物実測図(1/60)	27	第64図	8号溝状遺構(サブトレッチ2) 実測図及び土層断面図(1/40)	60
第30図	3号孤立柱建物実測図(1/60)	27	第65図	8号溝状遺構出土遺物実測図1(1/4)	61
第31図	4号孤立柱建物実測図(1/60)	28	第66図	8号溝状遺構出土遺物実測図2(1/4)	62
第32図	4号孤立柱建物出土遺物実測図(1/4)	28	第67図	土坑実測図1(1/40)	64
第33図	5号孤立柱建物実測図(1/60)	29	第68図	土坑実測図2(1/40)	65
第34図	6号孤立柱建物実測図(1/60)	29	第69図	土坑実測図3(1/40・1/60)	66
第35図	7号孤立柱建物実測図(1/60)	30	第70図	土坑出土遺物実測図(1/4)	67
第36図	8号孤立柱建物実測図(1/60)	31	第71図	ビット出土遺物実測図(1/4・29～31は1/2)	69
第37図	9号孤立柱建物実測図(1/60)	32	第72図	検出・攪乱出土遺物実測図(1/4・1/2)	71
第38図	1号溝状遺構・土層実測図1(1/100・1/40)	33	第73図	出土石製品実測図1(2/3)	72
第39図	1号溝状遺構・土層実測図2(1/100・1/40・1/80)	34	第74図	出土石製品実測図2(1/4・1/2)	73
第40図	1号溝状遺構出土遺物実測図1(1/4・1/2)	35	第75図	出土石製品実測図3(1/4)	74
第41図	1号溝状遺構出土遺物実測図2(1/4)	36	第76図	出土石製品実測図4(1/4)	75
第42図	1号溝状遺構出土遺物実測図3(1/4)	37	第77図	出土石製品実測図5(1/4)	76
第43図	1号溝状遺構出土遺物実測図4(1/4)	38	第78図	出土石製品実測図6(1/4)	77
第44図	2号溝状遺構実測図・土層断面図(1/100・1/40)	41	第79図	出土石製品実測図7(1/4)	78
第45図	2号溝状遺構出土遺物実測図1(1/4)	42	第80図	出土木製品実測図(1/4)	79
第46図	2号溝状遺構出土遺物実測図2(1/4)	43	第81図	暦年校正結果	103
第47図	2号溝状遺構出土遺物実測図3(1/4)	44	第82図	切り合い関係整理表	104
第48図	2号溝状遺構出土遺物実測図4(1/4)	45	第83図	時期別遺構図	107
第49図	2号溝状遺構遺物実測図5(1/4)	46	附	花ノ木遺跡調査区遺構配置図(1/400)	
第50図	3号溝状遺構実測図・遺物出土状況 (1/100・1/20・1/40)	48			
第51図	3号溝状遺構遺物実測図1(1/4)	49			

写真図版目次

巻頭写真図版1

花ノ木遺跡1次調査の空中写真(西から)枠内が調査地

巻頭写真図版2

花ノ木遺跡1次調査の空中写真(西から)

巻頭写真図版3

花ノ木遺跡1次調査出土土器集合写真

4号竪穴建物出土土器集合写真

写真図版1

上 調査区空中写真(東から)

下 調査区空中写真(南から)奥が平田遺跡

写真図版2

上 調査区全景(上が北)

下 調査区北側発掘状況(東から)

写真図版 3

- 上 調査区中央発掘状況（西から）
- 下 調査区北側発掘状況（西から）

写真図版 4

- ① 1号竪穴建物発掘状況（南から）
- ② 2号竪穴建物発掘状況（南から）
- ③ 3号竪穴建物発掘状況（南から）
- ④ 3号竪穴建物土製模造鏡出土状況
- ⑤ 3号竪穴建物柱木出土状況
- ⑥ 5号竪穴建物発掘状況（南から）
- ⑦ 5号竪穴建物遺物出土状況
- ⑧ 5号竪穴建物炭化物出土状況

写真図版 5

- ① 4号竪穴建物遺物出土状況（南から）
- ② 4号竪穴建物遺物出土状況
- ③ 6号竪穴建物発掘状況（東から）
- ④ 6号竪穴建物遺物出土状況（北から）

写真図版 6

- ① 7号竪穴建物発掘状況（西から）
- ② 7号竪穴建物中央が跡発掘状況（南から）
- ③ 8号竪穴建物発掘状況（南から）
- ④ 9号竪穴建物発掘状況（南から）
- ⑤ 10号竪穴建物発掘状況（南から）
- ⑥ 10号竪穴建物カマド発掘状況（西から）
- ⑦ 11号竪穴建物発掘状況（南から）
- ⑧ 1号掘立柱建物発掘状況（南から）

写真図版 7

- ① 2号掘立柱建物発掘状況（南から）
- ② 3号掘立柱建物発掘状況（南から）
- ③ 4号掘立柱建物発掘状況（西から）
- ④ 5号掘立柱建物発掘状況（南から）
- ⑤ 6号掘立柱建物発掘状況（南から）
- ⑥ 7号掘立柱建物発掘状況（南から）
- ⑦ 8号掘立柱建物発掘状況（南から）
- ⑧ 9号掘立柱建物木板発掘状況

写真図版 8

- ① 1号溝状遺構土層断面 A（東から）
- ② 1号溝状遺構土層断面 B（東から）
- ③ 1号溝状遺構土層断面 C（南から）

- ④ 1号溝状遺構土層断面 C（近景）
- ⑤ 1号溝状遺構土層断面 D（西から）
- ⑥ 1号溝状遺構土層断面 E（西から）
- ⑦ 1号溝状遺構 7区出土遺物発掘状況
- ⑧ 2号溝状遺構遺物出土状況

写真図版 9

- ① 2号溝状遺構土層断面 A（東から）
- ② 2号溝状遺構土層断面 B（東から）
- ③ 3号溝状遺構土層断面（西から）
- ④ 3号溝状遺構遺物出土状況 1
- ⑤ 3号溝状遺構遺物出土状況 2
- ⑥ 4号溝状遺構土層断面 A（西から）
- ⑦ 4号溝状遺構土層断面 C（東から）
- ⑧ 5号溝状遺構土層断面（東から）

写真図版 10

- ① 6号溝状遺構土層断面（東から）
- ② 7号溝状遺構土層断面（東から）
- ③ 7号溝状遺構遺物出土状況（東から）
- ④ 8号溝状遺構サブレンチ周辺発掘状況（北から）

写真図版 11

- ① 8号溝状遺構サブレンチ 2 遺物出土状況（北から）
- ② 8号溝状遺構サブレンチ 1 遺物出土状況（北から）
- ③ 8号溝状遺構サブレンチ 2 遺物出土状況（南から）

写真図版 12

- ① 8号溝状遺構サブレンチ 2 遺物出土状況（近景）
- ② 8号溝状遺構サブレンチ 2 土層断面（南から）
- ③ 8号溝状遺構サブレンチ 1 土層断面（南から）

写真図版 13

- ① 1号土坑発掘状況（東から）
- ② 18号土坑発掘状況
- ③ P7 遺物出土状況
- ④ P146 遺物出土状況
- ⑤ P310 遺物出土状況
- ⑥ P630 完掘状況

写真図版 14～37 出土遺物

本文写真目次

写真1	重機作業風景	3
写真2	発掘調査風景	4
写真3	整理作業風景	4

表目次

第1表	県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧	1
第2表	樹種構成	81
第3表	花ノ木道跡1次調査出土木材の器種別樹種構成	85
第4表	花ノ木道跡1次調査の樹種同定結果	86
第5表	器種別の樹種同定結果	91
第6表	樹種同定結果一覧表	96
第7表	花ノ木道跡1次調査から出土した大型植物遺体(括弧内は破片数)	97
第8表	花ノ木道跡1次調査から出土した大型植物遺体(括弧内は破片数)	99
第9表	測定試料および処理	101
第10表	放射性炭素年代測定及び歴年較正の結果	102
第11表	花ノ木道跡1次遺構時期変遷表	106
第12表	出土土器観察表1	109
第13表	出土土器観察表2	110
第14表	出土土器観察表3	111
第15表	出土土器観察表4	112
第16表	出土土器観察表5	113
第17表	出土土器観察表6	114
第18表	出土土器観察表7	115
第19表	出土土器観察表8	116
第20表	出土土器観察表9	117
第21表	出土土器観察表10	118
第22表	出土土器観察表11	119
第23表	出土土器観察表12	120
第24表	出土土器観察表13	121
第25表	出土土製品・瓦観察表	121
第26表	出土石製品観察表	122
第27表	出土木製品観察表	122

附編表目次

第28表	樹種構成	161
第29表	平田道跡の樹種同定結果	162
第30表	本村道跡5次調査における樹種同定結果	164
第31表	測定試料及び処理	165
第32表	測定結果	166

第1章 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

県営経営体育成基盤整備事業（担い手育成型）朝日地区（主管部署：大分県西部振興局農林基盤部、以下、県振興局）の事業の全体概要や埋蔵文化財調査に至る経緯に関しては、『朝日の遺跡Ⅰ』で述べていることから、ここでは、花ノ木遺跡Ⅰ次調査に至る経緯を記述する。

朝日工区については、その大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地外であった。しかし、平成22年度に大分県教育庁文化課（以下、県文化課）が実施した農林業関係事業実施予定地の分布調査の結果、周知外を含むものの全体の予備調査が必要と判断された。

これを受け、日田市教育庁文化財保護課（以下、市文化財保護課）が予備調査を実施することとなり、稲刈り後の平成22年11月15日から12月17日にかけて実施した。工事対象面積177,044㎡のうち、工事により削平を受ける水田を対象にトレンチを設定した。最終的にはトレンチ40本、調査面積約850㎡となり、このうち、3ヶ所9本のトレンチで遺構・遺物が確認された（花ノ木・平田・尾部田遺跡）。何れも工事による削平が及ぶため発掘調査が必要であると考えられ、この段階で、花ノ木遺跡の調査対象面積は16,000㎡であった。なお、今回の報告対象である花ノ木遺跡は、予備調査時は周知遺跡の対象外であったことから、字名を取って、平成23年1月18日に遺跡の新登録を行った。

平成22年12月20日付けで県振興局長へ結果報告を行うとともに、遺構面を保護するための工法変更について協議をおこない、工法変更を行ったものの、遺構を損なう可能性が高い12,000㎡について調査対象とすることとなった。平成23年2月24日付けで、文化財保護法第94条の通知文を大分県教育委員会に提出し、平成23年3月3日付けで発掘調査の実施通知を受けることになった。

以上の経過を経て、平成23年6月15日付けで花ノ木遺跡の発掘調査について、県振興局と委託契約を締結し、調査に着手した。また、本事業に伴って実施した発掘調査の概要、予備調査および発掘調査は下表の通りである。

註1）若杉竜太編『朝日の遺跡』Ⅰ 平田遺跡・尾部田遺跡Ⅱ次調査 日田市埋蔵文化財調査報告書第108集 日田市教育委員会 2012

第1表 県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧

工区	開発面積(㎡)	実子協働年調査	面積(㎡)	予備調査	時代	地畵	発掘調査等の委託契約				備考
							遺跡名	業務内容	契約履行期間	発掘調査期間	
朝日1・2工区	177,044	H22	850	弥生～中世	一部、 発掘調査	花ノ木	発掘	H23.6.15～H24.3.19	H23.7.4～12.5	10,723	本報告
							平田	H23.6.15～H24.2.29	H23.10.3～12.24	2,749	
							尾部田	H23.6.15～H24.1.23	H23.10.19～11.16	1,055	
小迫1・2工区	213,303	H23	955	弥生～古代	一部、 発掘調査	鍛冶屋敷 本村	発掘	H24.6.15～H25.1.15	H24.7.23～8.24	560	
							発掘	H24.8.1～H25.2.28	H24.8.22～11.21	2,498	
							花ノ木		-	-	
朝日1・2工区						平田	整理	H24.6.15～H25.3.26	-	-	朝日の遺跡Ⅰ
							報告書		-	-	
							尾部田		-	-	
若迫工区	76,000	H24	219	中世	一部、 発掘調査	若迫	発掘	H25.7.1～H26.1.15	H25.8.19～11.12	580	
朝日1・2工区						花ノ木	整理	H25.6.1～H26.3.20	-	-	朝日の遺跡Ⅱ
小迫1・2工区					鍛冶屋敷 本村	報告書		-	-		
二車工区	54,000	H25	870	弥生	一部、 発掘調査	山ノ神(二車)	発掘	H26.7.15～H26.12.19	H26.8.20～H26.11.25	1,349	
朝日1・2工区						花ノ木	整理	H26.8.10～H27.3.31	-	-	朝日の遺跡Ⅲ

(2) 調査の組織

調査関係者は以下の通りで、職名・氏名は当時のままとしている。

平成 23 年度 (2011) / 発掘調査

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原 多賀雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括 財津 隆之 (日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 土居 和幸 (同課埋蔵文化財係長)、井上 和泉 (同課主査)、若杉 竜太 (同課主査)
調査担当 上原 翔平 (同課主事)
調査員 行時 桂子 (同課主査)、若杉 竜太 (同課主査・予備調査担当)、渡邊 隆行 (同課主査)
発掘作業員

赤尾直盛、赤尾ミチ子、秋吉新六、安心院信治、石井百合子、石谷アサカ、石松高子、伊藤暁子、伊藤武士、伊藤大地、伊藤博之、井上能、宇野正雄、江川洋、江藤キミ子、江藤恵子、小ヶ内カオル、梶原紀二六、加藤寿子、加藤祐一、蒲池妙子、河津定雄、河津博文、河津モリ、川津良成、北澤幾子、黒瀬順次、小暮裕次、合原建国美、五反田静子、坂田次光、坂本利子、坂本由紀子、佐々木誠一郎、佐藤帽子、重松拓也、高倉英明、高村三郎、高村秀一、竹本和則、谷口なつ子、谷口芳江、津村小夜子、長野東吉、橋原理恵、長谷部修一、原田強、深町正博、松尾久美子、宮木博幸、宮崎幸也、宮本栄二、森輝雄、森山順、森山直郁、山中美利、矢幡誠二、矢幡輝明、弥吉直美、横尾辰巳、米村公弘

来訪者 下村智 (別府大学文学部教授)、後藤見一 (県文化課)

平成 24 年度 (2012) / 整理作業

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原 多賀雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括 財津 俊一 (日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 土居 和幸 (同課埋蔵文化財係長)、井上 和泉 (同課主査)、若杉 竜太 (同課主査)
報告書担当 上原 翔平 (同課主事)
調査員 行時 桂子 (同課主査)、渡邊 隆行 (同課主査)
整理作業員 伊藤一美、黒木千鶴子、武石和美、安元百合

平成 25 年 (2013) / 整理作業

調査主体 日田市教育委員会
調査責任者 合原 多賀雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括 財津 俊一 (日田市教育庁文化財保護課長)
調査事務 園田 恭一郎 (同課埋蔵文化財係長)、武内 貴彦 (同課専門員)、華藤善紹 (同課副主幹)、若杉 竜太 (同課主査)
報告書担当 上原 翔平 (同課主任)
調査員 行時 桂子 (同課主査)、渡邊 隆行 (同課主査)
整理作業員 伊藤一美、黒木千鶴子、高田美保、武石和美、安元百合

平成 26 年（2014）／整理作業・報告書作成

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 合原 多賀雄 4月～6月／三笠 眞治郎 7月～（日田市教育委員会教育長）

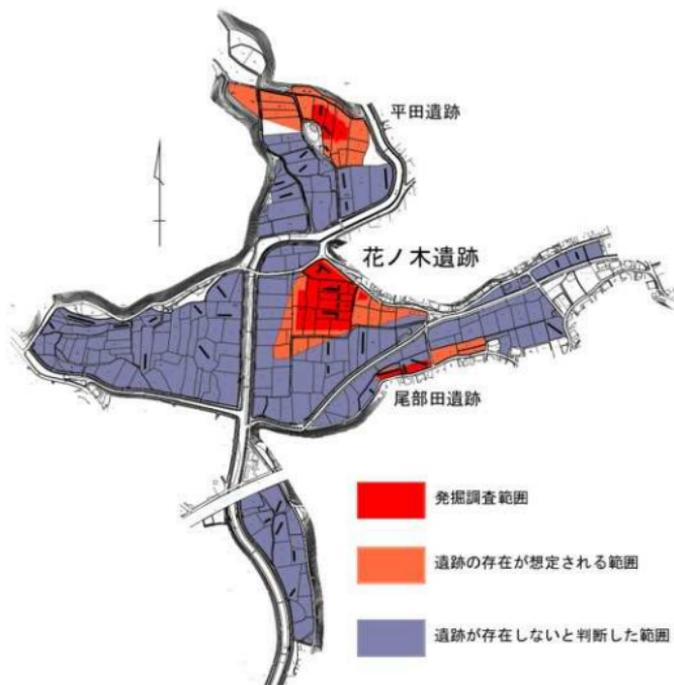
調査統括 財津 俊一（日田市教育庁文化財保護課）

調査事務 園田 恭一郎（同課埋蔵文化財係長）、若杉 竜太（同課主査）、謙山 温子（同課主事）

報告書担当 上原 翔平（同課主任）

調査員 行時 桂子（同課主査）、渡邊 隆行（同課主査）

整理作業員 伊藤 一美、黒木 千鶴子、高田 美保、武石 和美、安元 百合



第1図 工事实施区域と調査区位置図（1/10,000）

（3）発掘調査の経過

発掘調査の経過を以下に述べる。

- 7月 4日 重機による耕作土除去を開始
- 7月 25日 遺構検出を開始
- 7月 27日 作業員による遺構検出を開始、器材の搬入を開始
- 8月 9日 一部遺構の掘り下げを開始



写真1 重機作業風景

- 9月22日 補助業務を開始（委託先：株式会社理蔵文化財サポートシステム大分支店）
- 11月11日 後藤副主幹（大分県文化課）が現場を視察
- 11月14日 下村教授（別府大学文学部）による現場来訪
- 11月15日 空中写真撮影を行う。
- 12月 1日 器材の整理及び撤去を開始
- 12月 5日 現場の器材等の撤収を終えて、現場終了



写真2 発掘調査風景

（4）整理作業の経過

整理作業の経過を以下に述べる。

整理作業は、調査終了の翌年、平成24年7月2日より遺構ごとに出土遺物の水洗・注記・接合作業を開始した。平成24年度は一部、遺物の実測・製図業務委託を行った。平成25年度は、10月～3月まで整理作業を再開し、翌平成26年1月に遺物実測・製図・写真撮影業務と遺構製図業務委託を行った。平成26年度は、6月～8月まで整理作業を実施、7月に遺物実測・製図・写真撮影及び全体図作成業務を委託し（11月14日完了）、9月に出土遺物の年代測定業務を委託した（11月30日完了）。そして、12月に出土遺物写真図版割付業務を委託し（1月30日完了）1月末に委託業務を含む整理の全ての作業を終了した。

なお、整理の過程で器面の剥落など脆くなっている遺物や接合時に不安定な遺物に関しては、バンダー処理や石膏などで補強を行っている。



写真3 整理作業風景

第2章 遺跡の位置と環境

今回調査をおこなった花ノ木遺跡は日田市大字小迫に所在し、日田盆地の北部、吹上原台地と山田原（宮原）台地の谷部に位置している。

遺跡の所在する大字小迫は、日田市の町名区分上では朝日地区に含まれている。朝日地区は大字小迫（小迫町、朝日町、朝日ヶ丘、清岸寺町）をはじめ、大字二串（二串町、君迫町、北友田2丁目）、大字山田（朝日町、山田町）の3地域で構成されている^{註1）}。

この朝日地区は、明治22年～昭和15年の日田郡の自治体区分である朝日村〔日田盆地の北部、筑後川（三隈川）支流二串川の中・下流域に位置する〕の範囲を踏襲したもので^{註2）}、この朝日村は小迫・二串・山田村の3地域が明治22年に合併し誕生している。

このように朝日地区の歴史を辿ると古くは豊後国日田郡亘里郷の一部に位置していたと推測されており、古代日田五郷の一つとして『和名類聚抄』に記載されている^{註3）}。

以下には、朝日地区に所在する主な遺跡について時代ごとに概観していく。

旧石器・縄文時代の遺跡は、朝日地区内では大分県教育委員会が高速道路建設にともない、二串西原遺跡の調査をおこなっており、旧石器時代後期～終末期に属する石器（ナイフ形石器、台形様石器、細石刃など）が10数点確認されている^{註4）}。縄文時代の遺跡は、尾部田遺跡の調査で縄文時代の集落が確認され、縄文時代の集落立地を考える上で貴重な例となった^{註5）}。

弥生時代の遺跡は、吹上原台地に所在し、弥生時代を通じて拠点的な集落を営んだと考えられる吹上遺跡が挙げられる。6次調査では、銅剣や銅戈・貝輪など豪華な副葬品を有する喪棺墓で構成される特定集団墓が確認され、台地一帯が地域の中心的位置を占めていたと考えられる^{註6）}。また、本村遺跡では、辻原台地と吹上台地の谷部に位置する沖積地上で、弥生時代後期～終末期の遺構が検出されている^{註7）}。鍛冶屋廻り遺跡では、小迫の谷部から後期後半頃の土坑が多く検出されている。従来この谷部周辺では弥生時代の遺構が確認されていなかったことから、周辺に同時代の遺跡が展開する可能性が考えられる^{註8）}。

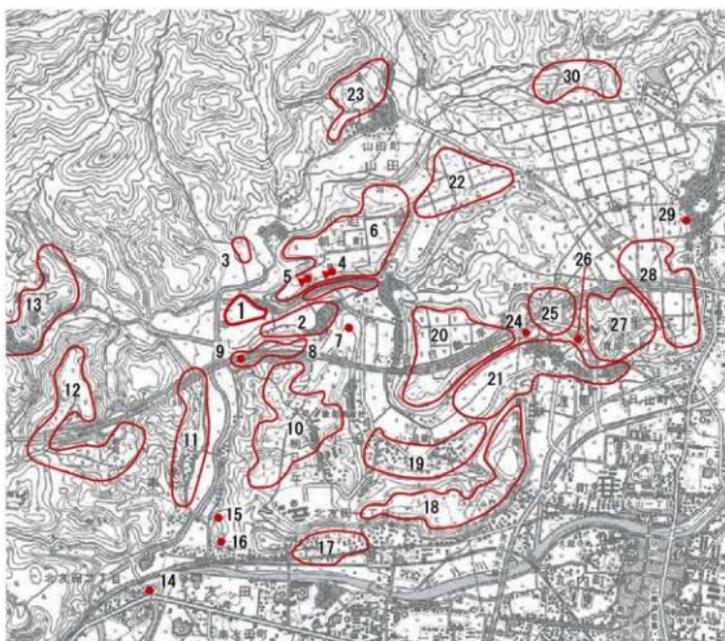
古墳時代に入ると、朝日地区では小迫辻原遺跡や朝日天神山古墳といった日田市を代表する遺跡が登場する。吹上遺跡の所在する吹上原台地の北側、辻原台地上に所在する小迫辻原遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけて営まれた三つの方形環濠建物、三つの環濠集落とこれらを区画するように掘り込まれた溝が2条確認されており、弥生時代末～古墳時代初頭の国家形成期の社会状況を解明する上で重要な集落が所在していたと考えられる^{註9）}。また、尾部田遺跡では、沖積地上でも確認され小迫辻原遺跡と同時期の集落が沖積地上にも展開する様相などが明らかになった。本村遺跡では、古墳時代後期の集落や古代の水田用水路が検出されている^{註10）}。6世紀中頃には、宮ノ原台地上にこの時期では県下最大級の前方後円墳である朝日天神山2号墳が築かれる。2号墳からは、埴輪の代わりと考えられる大型平底壺が出土している。その後の6世紀後半には1号墳が築かれる。1号墳からは、大和政権とのつながりを考えることの出来る三輪玉が出土している^{註11）}。

古代になると小迫辻原遺跡で、大型掘立柱建物や『大領』領墨書土器が出土しており、建物群の規模や規則的な配置から、郡司クラスの人物の居宅と想定されている。そのほか、中世では小迫辻原遺跡で建物群を堀や溝で囲んでいる方形環溝屋敷跡が6ヶ所確認される。また、朝日宮ノ原遺跡B地区では中世の青磁や潮州鏡や合子などが一括で副葬された土坑墓が発見され^{註12）}、近世においては、鍛冶屋廻り遺跡で道路や水路などが発見されている^{註13）}。

このように、朝日地区は数多くの古代の遺跡が所在し、日田市の歴史を知る上で重要な地区であるといえる。

- 註1) 日田市町名に関する告示 平成13年3月13日 告示第19号
 註2) 『角川日本地名大辞典』編纂委員会『角川日本地名大辞典44大分県』角川書店 1980
 註3) 日田市『日田市史』1990
 註4) 清水宗明ほか『九州横断自動車道路建設に伴う発掘調査概報』大分県教育委員会 1984
 註5) 行時志郎『尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書34集 日田市教育委員会 2001
 註6) 渡邊隆行『吹上IV—吹上遺跡6次調査の記録—』日田市埋蔵文化財調査報告書70集
 (日田地区遺跡都発掘調査報告8) 日田市教育委員会 2006
 註7) 若杉竜太『本村遺跡3次』日田市埋蔵文化財調査報告書51集 日田市教育委員会 2004
 註8) 上原理平『朝日の遺跡II』日田市埋蔵文化財調査報告書111集 日田市教育委員会 2014
 註9) 田中裕介・土居和幸・清水宗明『小迫辻原遺跡1』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10
 大分県教育委員会 1999
 註10) 註8に同じ
 註11) 若杉竜太『朝日天神山古墳群』日田市埋蔵文化財調査報告書60集(日田地区遺跡都発掘調査報告7) 日田市教育委員会 2005
 註12) 土居和幸編『朝日宮ノ原遺跡・谷ノ久保遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書104集(市内遺跡発掘調査報告書10)
 日田市教育委員会 2012
 註13) 若杉竜太『殿治屋廻り遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書92集 2010

1. 花ノ木遺跡
2. 尾部田遺跡
3. 平田遺跡
4. 朝日天神山1号墳
5. 朝日天神山2号墳
6. 朝日宮ノ原遺跡
7. 城ノ越古墳
8. 小迫横穴墓群
9. 小迫古墳
10. 朝日ヶ丘遺跡
11. 山ノ神(二串)遺跡
12. 二串西原遺跡
13. 君迫遺跡
14. 三郎丸古墳
15. 鳥越古墳
16. 片山石棺
17. 今泉遺跡
18. 吹上遺跡
19. 殿治屋廻り遺跡
20. 小迫辻原遺跡
21. 本村遺跡
22. 山田原遺跡
23. 山ノ口遺跡
24. 草場原古墳
25. 草場第2遺跡
26. 草場古墳
27. 草場第1遺跡
28. 後迫遺跡
29. 用松中村古墳
30. 谷ノ久保遺跡



第2図 花ノ木遺跡調査地周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第3章 調査の内容

(1) 調査の概要

調査は、朝日工区の中央に位置する区画の内、当初 12,000㎡を対象に行った。調査区は北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。遺構検出面までは、重機を用いて耕作土除去作業を行った。遺構は、現地表面より約 20cm 下(標高約 78.5 m前後)で検出され、検出面直上には現況水田基盤層が堆積しているのみであった。その後、人力による遺構検出を行った後に、遺構を掘り下げ、記録作成を行った。なお、調査地東側の飛び地は間に水路が通っており、調査後も利用する計画であったため、水路部分を調査範囲から外して東側に飛び地を設ける形で遺構検出をおこなった。最終的な調査面積は 10,723㎡となった。

遺構の埋土は、大きく黒褐色土・暗褐色土・灰色土に分かれ、黒褐色土は主に古墳時代頃、暗褐色土は古代頃の埋土で灰色土は中世以降と考えられ、色が明るくなるにつれて時期が新しくなる傾向が見られた。地山は主に黄褐色土が見られるが、調査区南側においては、灰褐色土になる部分が見られ、一部に遺物の出土が見られた事から、南側は包含層であった可能性がある。調査地の地形は南に向かって緩やかに傾斜している為、北側部分は削平を受けていた可能性が考えられる。

調査において検出された遺構は竪穴建物 11 軒、掘立柱建物 9 棟、溝状遺構 8 条、土坑 18 基、ピット 700 基以上である。遺構密度は調査区北側で濃く、南側に向かうに従って薄くなるという状況が見られた。先に述べた竪穴建物や掘立柱建物のほとんどが調査区北側で検出されている。また、8 号溝状遺構については、工事によって掘削が及ばないことから遺構検出に留め、トレンチを 2 本設定して遺構の状況を確認した。

なお、遺構配置図は附図を参照されたい。

(2) 遺構と遺物

1. 竪穴建物

竪穴建物は 11 軒検出されているが、そのほとんどが調査区の北側で検出されている。一部に切り合い関係が見られるものの、ほとんどが単独で検出されている。時期は弥生時代後期から古墳時代中期頃と考えられる。またその内の 1 軒からは日田における導入期のものと考えられるカマドが附される建物が検出されている。

1号竪穴建物(第3図、写真図版4)

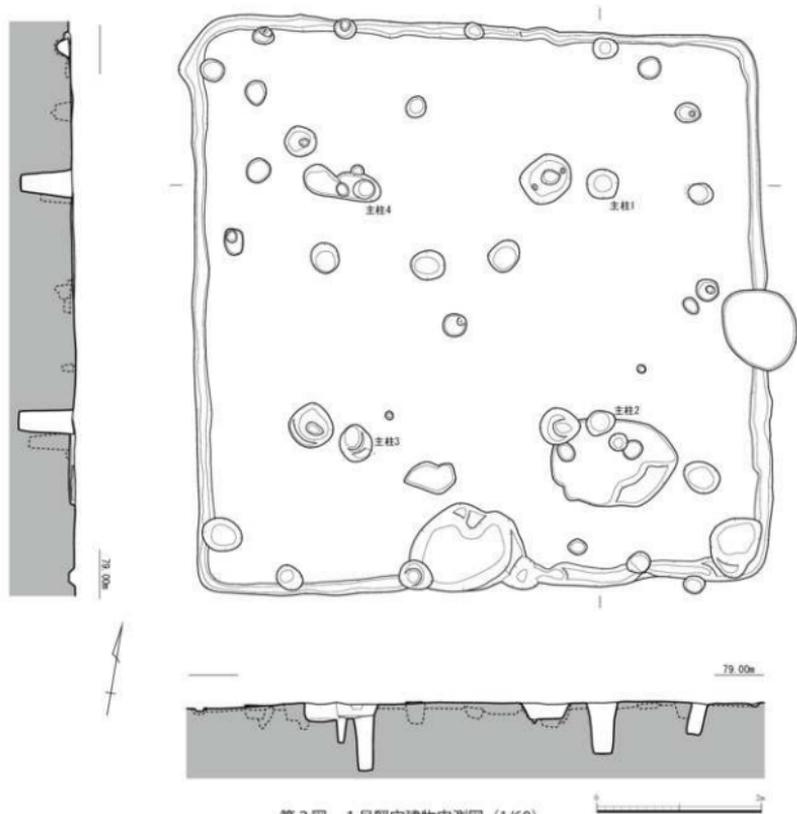
調査区北側で4号溝状遺構を切る形で検出された。床面は削平を受けておりほとんど残っておらず、周溝は5cm前後残るのみであった。平面・規模は、残った周溝から東西、南北ともに約6.8mの正方形を呈すると考えられる。建物内に残る柱穴の位置と深さから4本の主柱穴を持ち、図中に示していないが、中央付近に少量の焼土が検出されていることからがを持つ建物であったと考えられる。また、南壁側には屋内土坑を持つ。主柱穴の規模は直径約40cmで深さは60cm前後を測る。主柱穴間の距離は東西・南北ともに約3.0mを測る。

出土遺物(第4図、写真図版14)

1は土師器の甕である。口縁部はやや外側に向かって立ち上がる。内外面ともにケズリが施され、一部に指オサエも見られる。

2号竪穴建物(第5図、写真図版1)

調査区北側で1号竪穴建物の東側で検出された。南東の一部を4号掘立柱建物に切られ、北東側は3号土坑



第3図 1号竪穴建物実測図 (1/60)

に切られており、南西隅は1号土坑に切れ、4号溝状遺構を切っている。建物内の柱穴の位置、2条の周溝(内側の深さ約6cm前後、外側の深さ20cm前後)から主柱穴は4本と考えられる。この2条の周溝に対応する主柱穴が他にないことから、この建物は位置を維持したまま拡張または縮小したものが、あるいは四方にベッドを持つ建物と考えられる。床面は削平を受けておりほとんど残っていない。その他に、南壁側に屋内土坑があり、建物中央には灰が検出された。

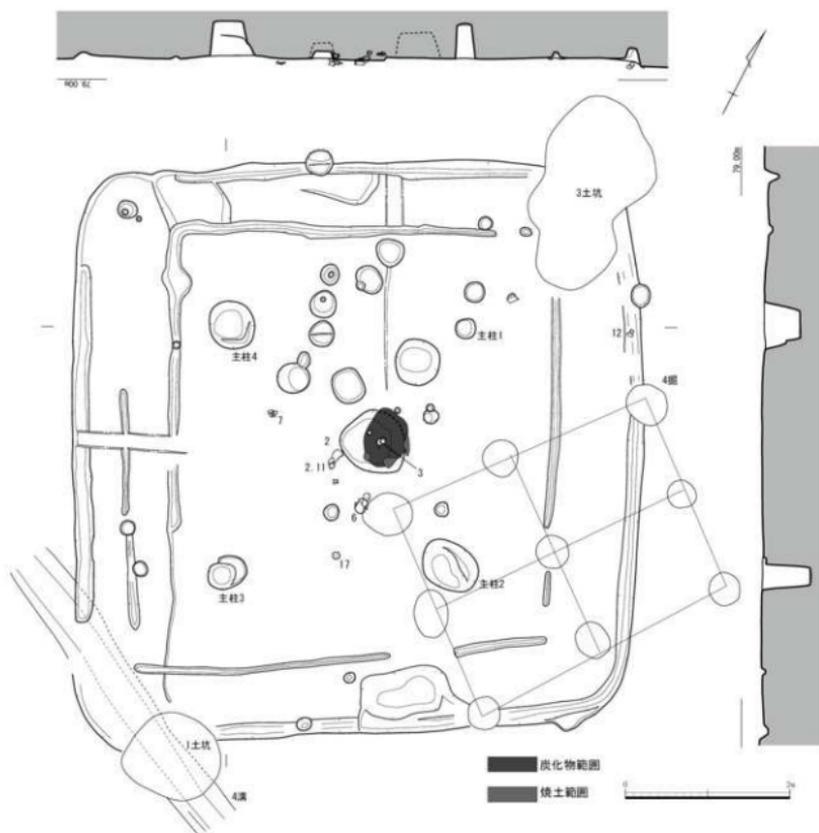
平面・規模は、内側の周溝では南北4.8m×東西5.6mの方形を呈する。外側の周溝では南北7.0m×東西7.0mの正方形を呈する。主柱穴間は南北2.8m、東西3.0mで、主柱穴の深さは40cm～60cmを測る。



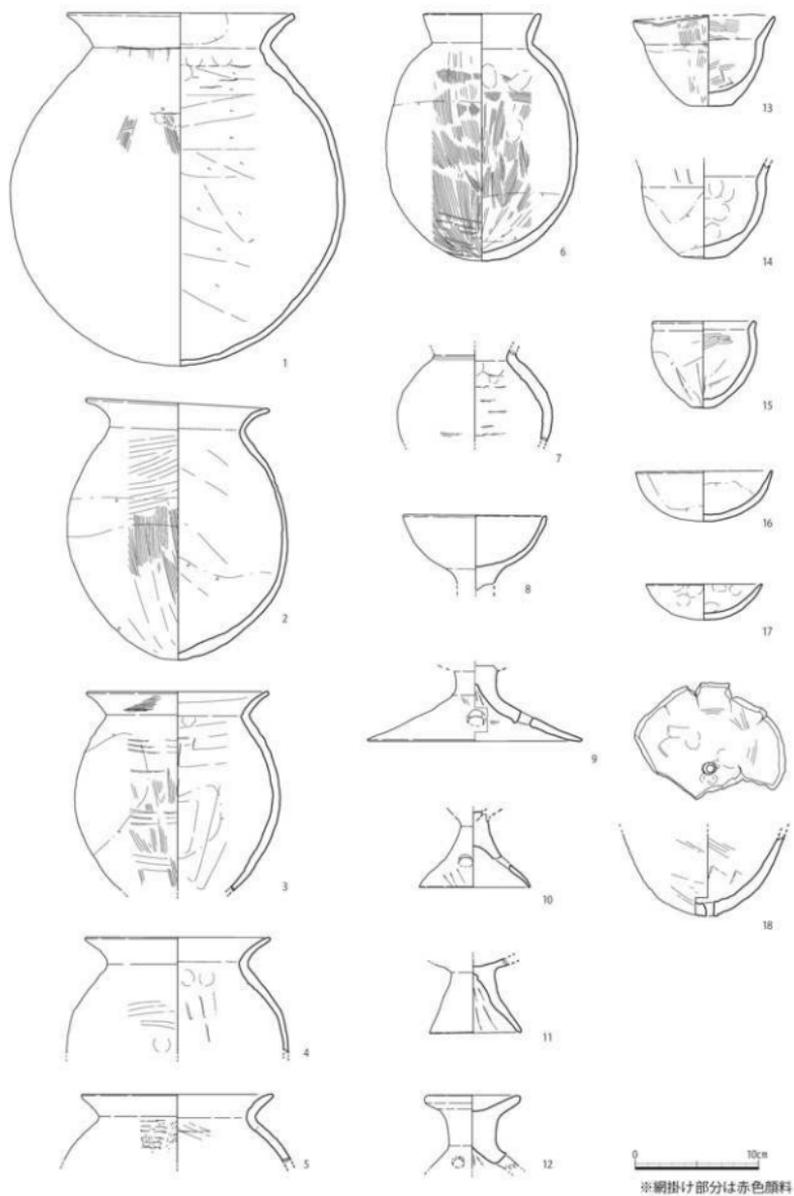
第4図 1号竪穴建物実測図出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物（第6図、写真図版14～15）

1～6は土師器の甕である。1～5は口縁が外反しながら立ち上がる。1の内面頸部付近では指オサエが施される。外面にはススが附着する。2・3の内外面にはススが附着する。5の外面肩部付近にはタキが施される。6の口縁部にはほぼ垂直に立ち上がり、外面底部付近にタキが施されている。7は土師器壺の胴部である。外面頸部付近に赤色顔料が施されている。8～11は土師器の高坏である。8は坏部で口縁部にむかって内湾しながら立ち上がる。9～11は脚部である。9は短脚で裾に向かって大きく外側に開く。内面にはススが附着している。また、脚部には穿孔が4個確認される。10～11はスカート状に開き、10は端部で内湾している。脚部には穿孔が3個確認される。12は土師器の支脚か。脚部には穿孔が3個確認される。13～15は土師器の鉢である。13の口縁部には歪みがみられる。14の外面は被熱により赤化している。16、17は土師器の坏で16の口縁はほぼ垂直に立ち上がる。17は緩やかに外側に向かって立ち上がる。18は単孔深鉢型の甗である。



第5図 2号竪穴建物実測図 (1/60)



第6図 2号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

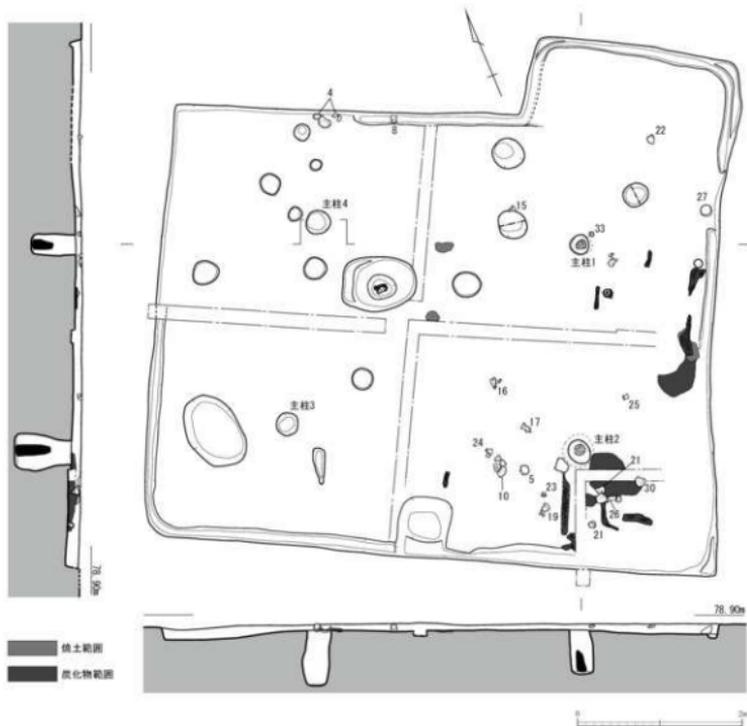
3号竪穴建物（第7図、写真図版1）

調査区の北東で検出された。竪穴建物の中では南側に位置する。建物の中で検出された柱穴の位置から4本の主柱穴を持つ竪穴建物と考えられる。北東隅では北側に約1mの張出がある。建物南壁側では屋内土坑を検出し、中央ではが跡が確認された。周溝が部分的に残っており、深さは約5cm程である。また、主柱2周辺の南東隅と東壁付近では多くの炭化物が出土している。

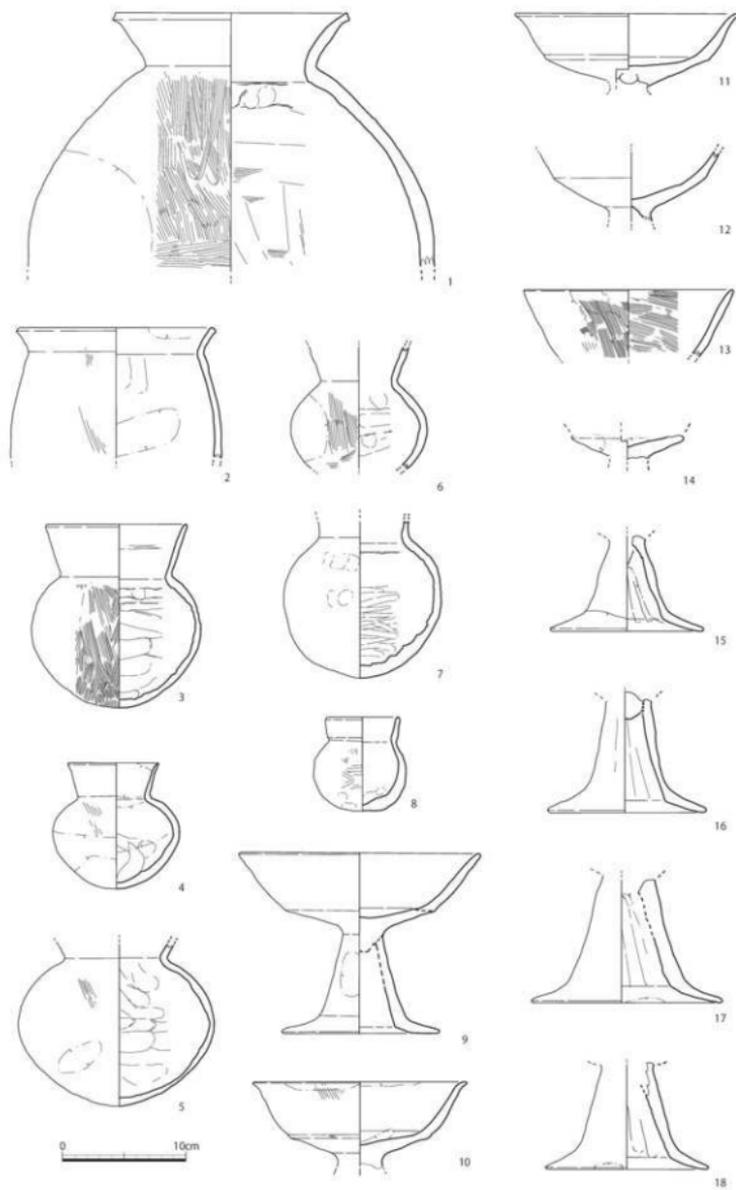
平面・規模は、東西6.8m×南北5.6m（張出部を含めると6.6m）の方形を呈す。床面までの深さは約10cm、主柱穴間の距離は東西3.1m、南北2.8mで主柱穴の深さは50～60cmを測る。また、東側の2本の主柱穴では柱木が残っており、柱材はクリとニレ属であった。これらはともに重硬で靱性の材質を持っており、柱材として有用とされる。

出土遺物（第8・9図、写真図版15～16）

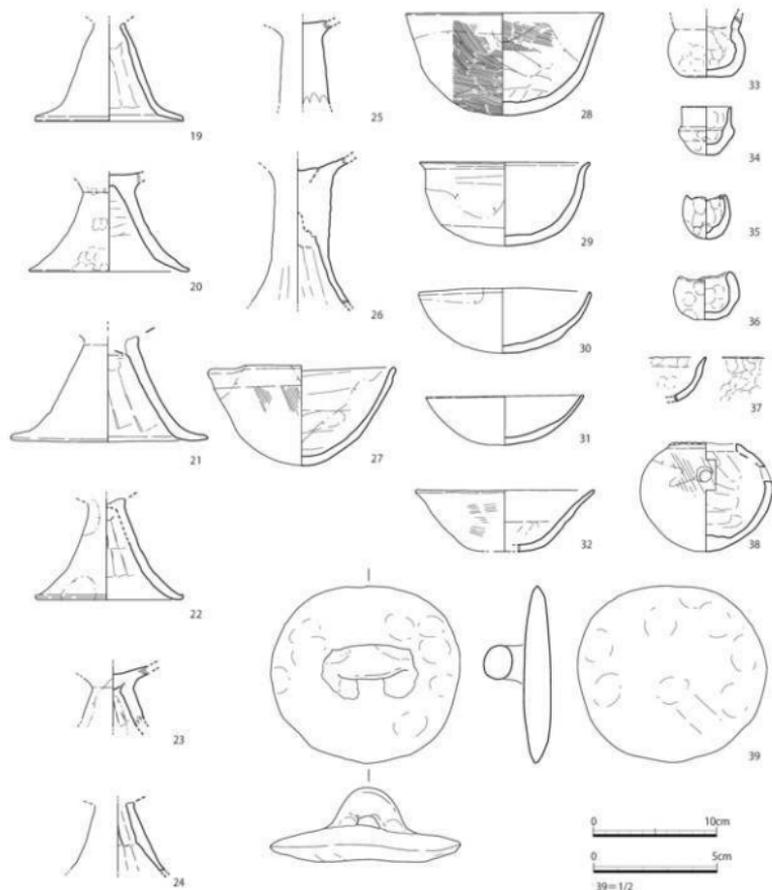
1・2は土師器の裏である。1は口縁が外反しながら立ち上がる。外面の頸部から胴部にかけて全体にハケ目が施される。2の口縁は短く外反する。1・2の外面にはススが附着する。3～8は土師器の壺である。3～7は小型丸底壺で、4の内面にはススが附着している。7の内面は強い工具ナデが施される。8は外面に打ち欠き



第7図 3号竪穴建物実測図 (1/60)



第8图 3号整穴建物出土遗物实测图1 (1/4)



第9図 3号竪穴建物出土遺物実測図2 (1/2・1/4)

によるものと考えられる剥離面がある。9～26は土師器の高坏である。また、10～14はその坏部である。9の坏部は口縁部に向かって一度屈曲したのち、緩やかに外傾しながら立ち上がる。脚部は裾端部で屈曲して外反する。10、11の坏部は口縁部に向かって一度屈曲し緩やかに外傾しながら、口縁端部で外反する。11の接合部には粘土充填痕が残る。12は口縁部にむかって一度屈曲し外傾しながら立ち上がる。15～26は脚部で15～19は脚裾付近で、屈曲して外反する。16は接合部に粘土充填痕が残る。19は裾端部で内側に短く折り込まれる。20～22の脚部は端部に向かってスカート状に開く。22は端部をわずかに外反させる。27～30は鉢である。27・28は口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。また、27の内外面にはススが付着する。29は口縁部に向かって垂直に立ち上がり、口縁端部で外反する。また、外面にはススが付着する。また、31～32は土師器の坏である。32は口縁部に向かって外傾しながら立ち上がる。33～37はミニチュア土器の壺・鉢である。33・36は主柱穴付近で出土している。38は土師器の踵である。口縁付近は意図的に打ち欠いたものと考えられる。

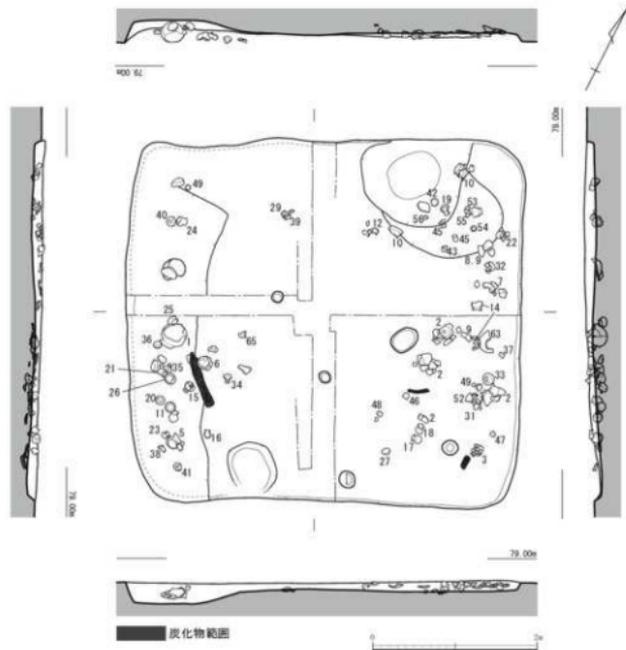
胴部に穿孔が1個確認される。内外面にはススが附着する。39は土製模造鏡で床部付近の炭化物に混じって出土した。ほぼ完形で残っており、鏡面は指オサエで調整しており線刻などの装飾は施されていない。

4号竪穴建物（第10図、写真図版5）

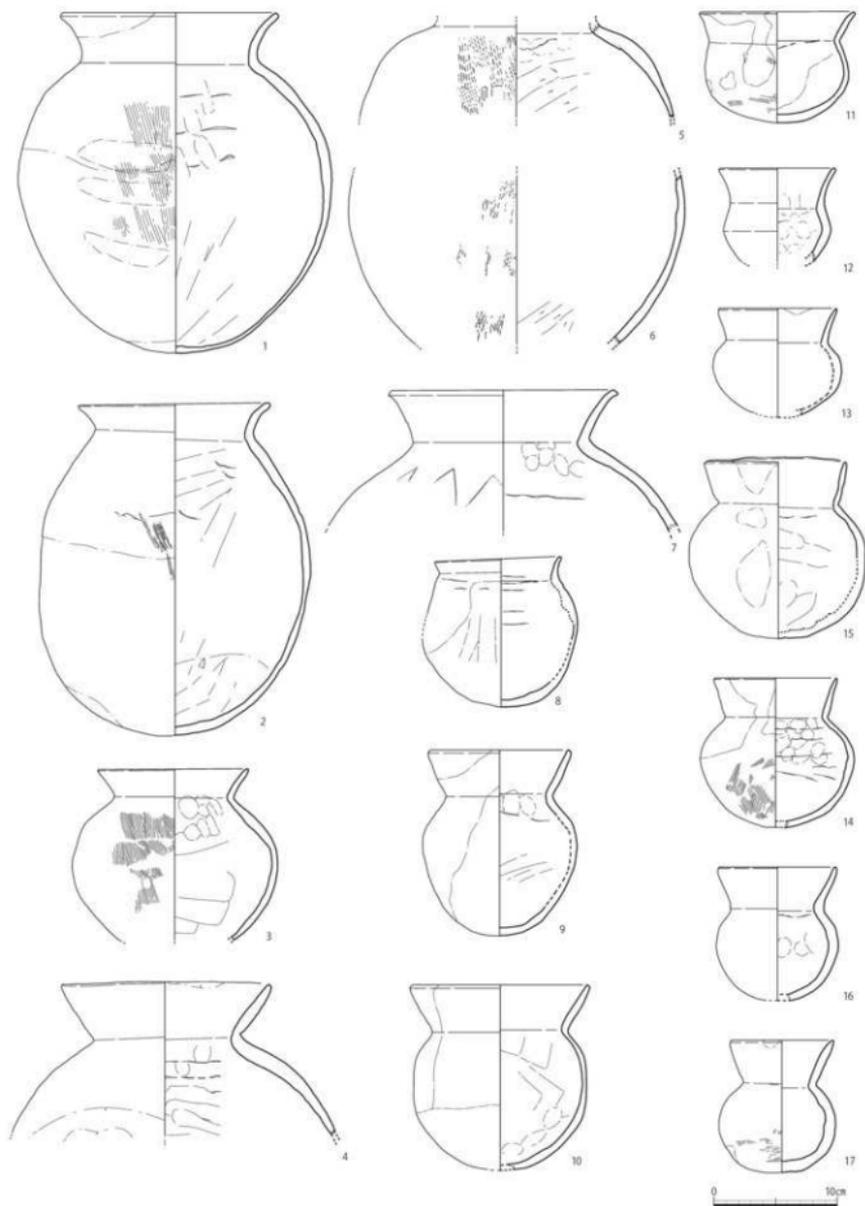
調査区内で検出された竪穴建物のうち、最も南側に位置し、3号溝と4号溝の一部を切っている。平面・規模は、東西4.8m×南北4.2mで方形を呈し、床面までの深さは約20cmを測る。この建物からは柱跡が検出されず、焼土なども建物内では検出されなかった。また、建物内の東側と西側周辺部に多量の土器、特にミニチュア土器が多量に出土している。遺物が集中する西側は一段下がっており、北東隅は土坑状の落ち込みが見られる。この他に、南西の落ち込み付近と北東側の一部で炭化物が検出されている。この遺構は、調査区で検出されている他の建物から離れている点、区画溝や水田に関連すると考えられる溝状遺構の近くで検出されていることから、住居ではなく、祭祀に関連する建物であった可能性が想定される。

出土遺物（第11～13図、写真図版16～18）

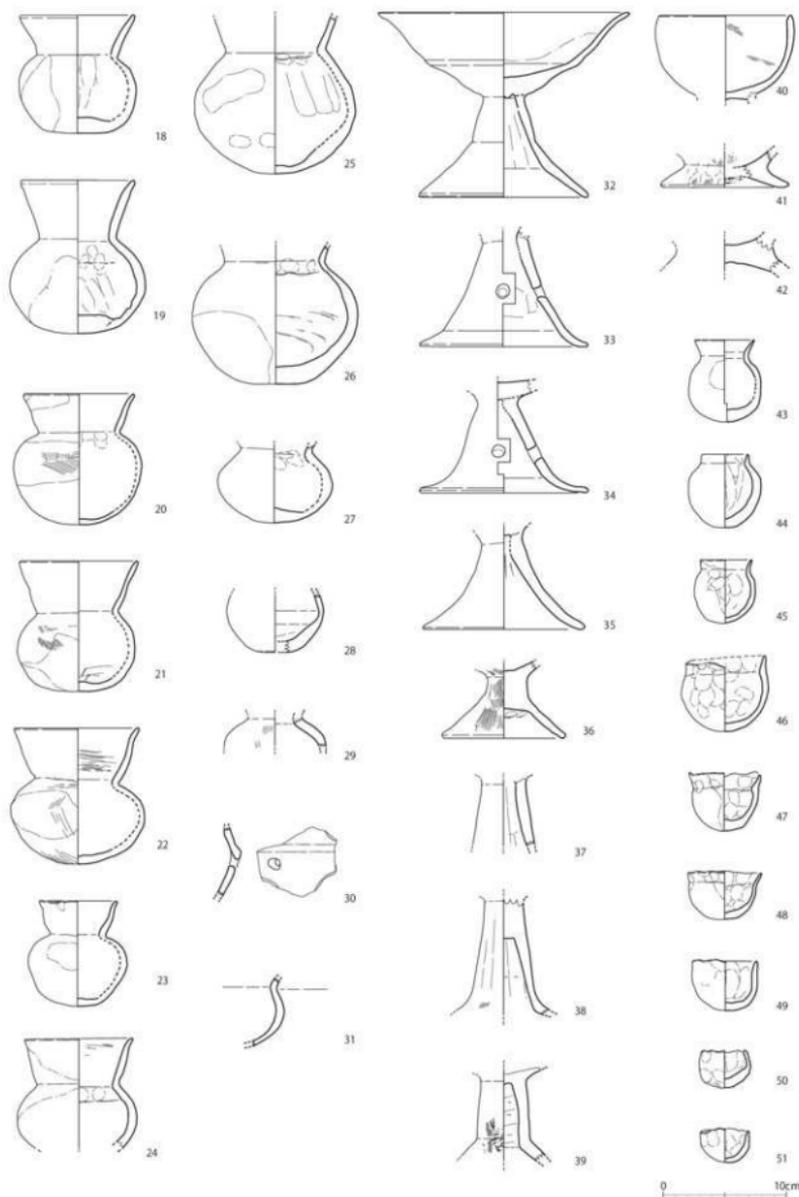
1～7は土師器の甕である。1の口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。また、外面にはススが附着する。2の口縁部も外反するが1に比べて口縁部が短い。内外面にススの付着が見られる。このほか内面には糊痕と考えられる小穴がみられる。4の口縁部は外傾しながら立ち上がる。また、外面にはススが附着している。7は口縁部で緩やかに外反して立ち上がる。7の肩部付近にクシ描き文様と考えられる線刻が見られる。8～31は土



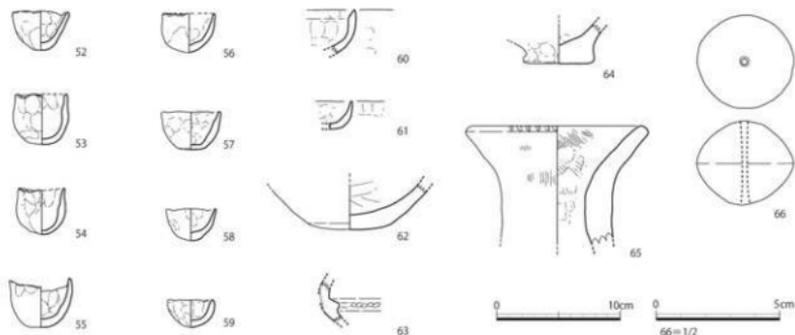
第10図 4号竪穴建物実測図 (1/60)



第 1 1 图 4 号竖穴建物出土遺物実測図 1 (1/4)



第12图 4号竖穴建物出土遺物実測図2 (1/4)



第 1 3 図 4 号竪穴建物出土遺物実測図 3 (1/4)

師器の壺である。8～16 は小型丸底壺で 10 の外面には 2 次被熱の痕跡が見られる。11 の口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。また、外面にススの付着が見られる。12 の口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。13～15 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。16 の口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。17～31 は小型壺で 17 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。18～21 は外傾しながら直線的に立ち上がる。19 は内面底部に粘土充填が見られる。22・23 の口縁部は緩やかに内湾しながら直線的に立ち上がる。23 の外面口縁部にはススが付着する。30 は胴部と考えられ、穿孔が 1 個確認される。32～39 は土師器の高坏である。32 の坏部は口縁部に向かって一度屈曲し、外傾しながら直線的に立ち上がり口縁部で外反する。脚部は裾端部に向かってスカート状に開くが、胴部中段で稜が形成される程度に外反する。33～39 は脚部で 33～36 は裾端部に向かってスカート状に開く。33 は穿孔が 1 個、34 は 2 個確認される。40～42 は台付き鉢である。40 の鉢の口縁部は直口縁で深い。43～61 はミニチュア土器の甕・鉢である。4 号竪穴からはこれらミニチュア土器が 19 点出土しており、当調査地で最も多く出土している。いずれも指オサエやナデで調整が施される。また、61 の胎土には黒曜石が混入している。62～65 は弥生土器である。62 は甕の底部である。丸底に近い平底を呈する。63 は壺の頸部片で刻み目突帯が施される。64 は壺の底部である。65 は器台で口縁端部に刻み目が施される。66 は土玉である。中心には 2～3mm 程度の穿孔が施される。

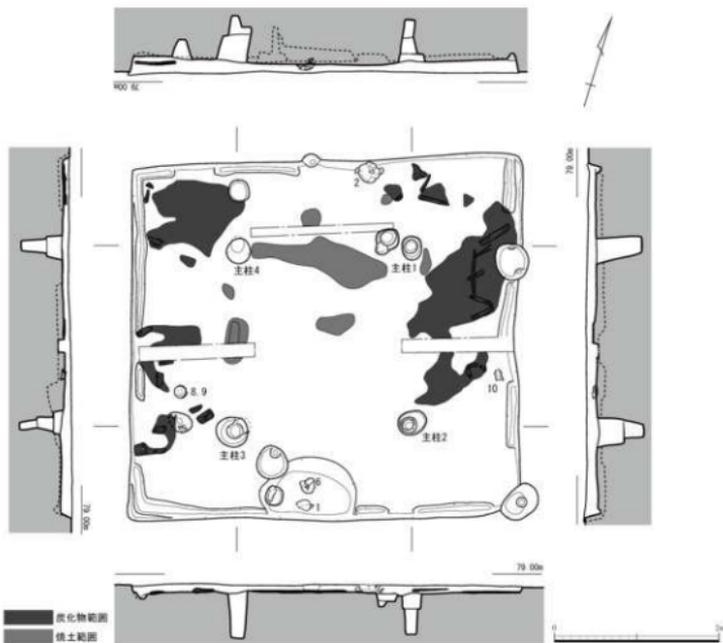
5 号竪穴建物 (第 1 4 図、写真図版 4)

調査区北側で検出された。建物内の柱穴の位置から 4 本の主柱穴を持つ建物であると考えられる。平面・規模は東西約 4.7m × 南北約 4.4m の方形を呈し、床面までの深さは 10cm 前後、主柱穴間の距離は東西 2.1m、南北 2.2m で主柱穴の深さは 50cm 前後を測る。カマドは検出されなかったが中央付近に一部焼土が確認された事から炉を持つ建物であった可能性がある。その他に、深さ 5cm 前後の周溝、建物の南端に屋内土坑を有する。

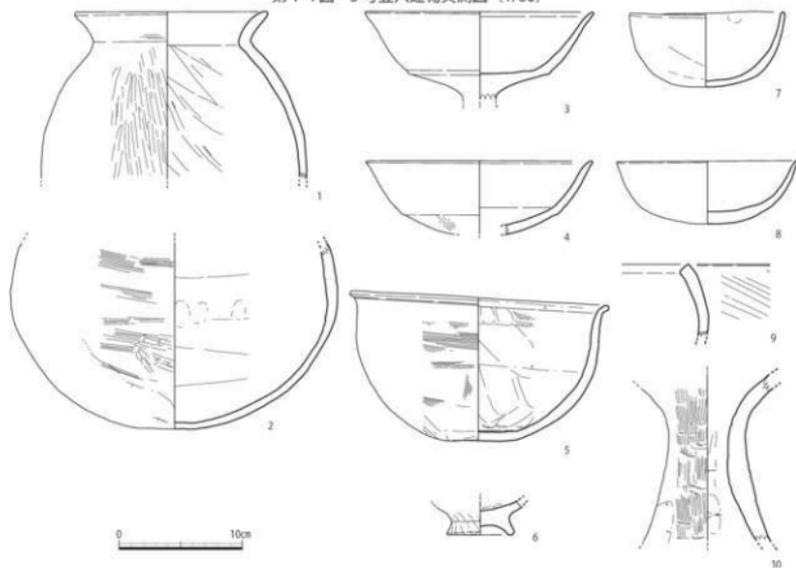
また、この建物跡では炭化物が全体に広がって確認されている事から廃棄時に燃やしたか、火事などで焼失してしまっただけの可能性を考える事ができる。

出土遺物 (第 1 5 図、写真図版 18・19)

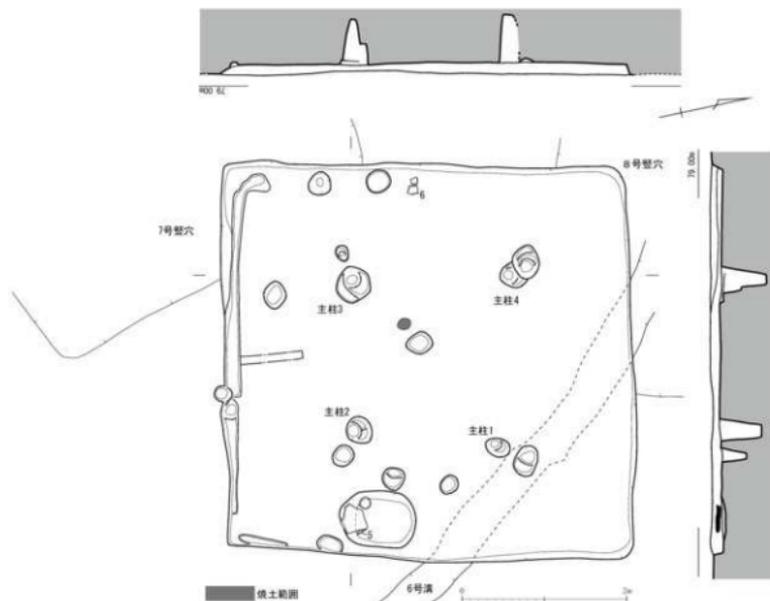
1 は土師器の甕である。外面にススが付着する。2 は土師器の壺である。2 の底部外面にはススが付着する。3・4 は土師器高坏の坏部である。ともに屈曲し、緩やかに内湾しながら口縁部に向かって立ち上がり、口縁部で



第14图 5号竖穴建物实测图 (1/60)



第15图 5号竖穴建物出土遗物实测图 (1/4)



第16図 6号竪穴建物実測図 (1/60)

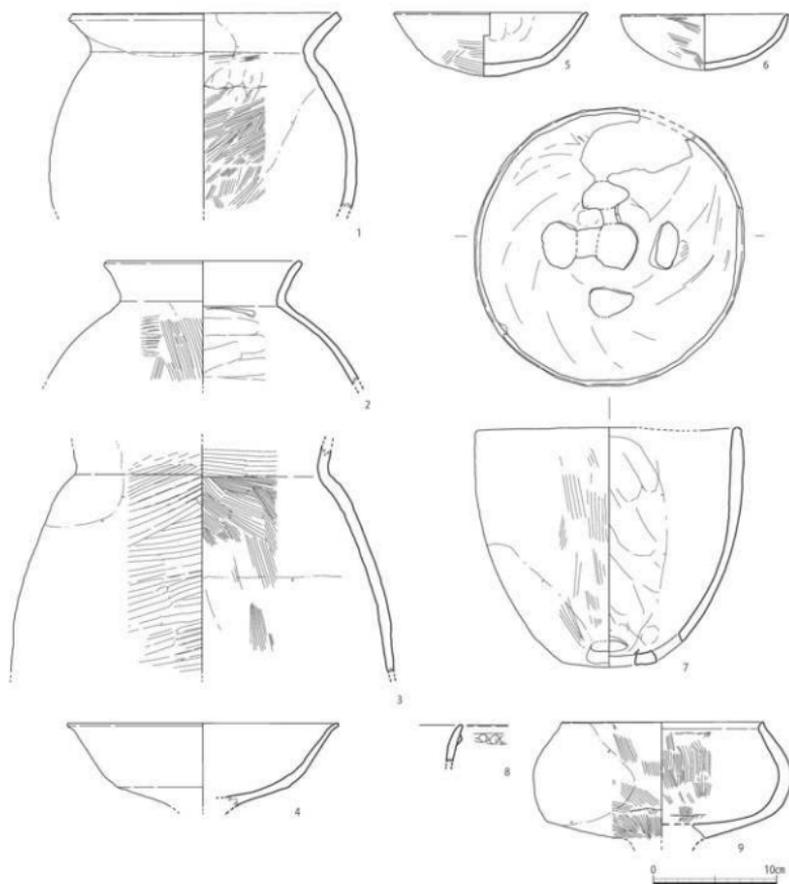
若干外反する。5は土師器の鉢で直口縁で口縁端部が外反する。6は土師器の台付き鉢である。7～9は土師器の甕である。7は直口縁で口縁部は直立に立ち上がる。外面にススが付着し、内面は被熱による赤化が見られる。8は直口縁で緩やかに外傾し直線的に立ち上がる。9は口縁端部か。10は弥生土器の器台で内外面にススの付着が見られる。

6号竪穴建物（第16図、写真図版5）

調査区北側で検出され、7・8号竪穴建物及び6号溝を切っている。建物内で検出された柱穴から4本柱の建物であると考えられる。平面・規模は東西4.8m×南北5.0mの方形を呈し、床面までの深さは約20cmで主柱穴間の距離は東西、南北ともに約1.9mで主柱穴の深さは60cm前後を測る。建物中央に一部焼土が確認されている事からが跡と考えられる。その他に、南側で深さ5cm程度の周溝と東側で屋内土坑が検出されている。

出土遺物（第17図、写真図版19）

1～3は土師器の甕である。1の口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外面には被熱による剥離が見られる。2の口縁部は外反して立ち上がる。3は胴部である。4は土師器の高環の環部で口縁部に向かって一度屈曲し、外傾しながら直線的に立ち上がり、端部付近で外反する。5・6は土師器環である。ともに直口縁で5は外傾し、直線的に立ち上がる。6は口縁部付近でほぼ直立する。7は土師器の甕である。多孔式で、底部に蒸気孔が5個ある。取手のつかない甕である。8は弥生土器の甕で口縁部付近に刻み目が施される。9は弥生土器の高環の環部で、口縁部に向かって内湾しながら立ち上がり口縁端部を摘み上げる。

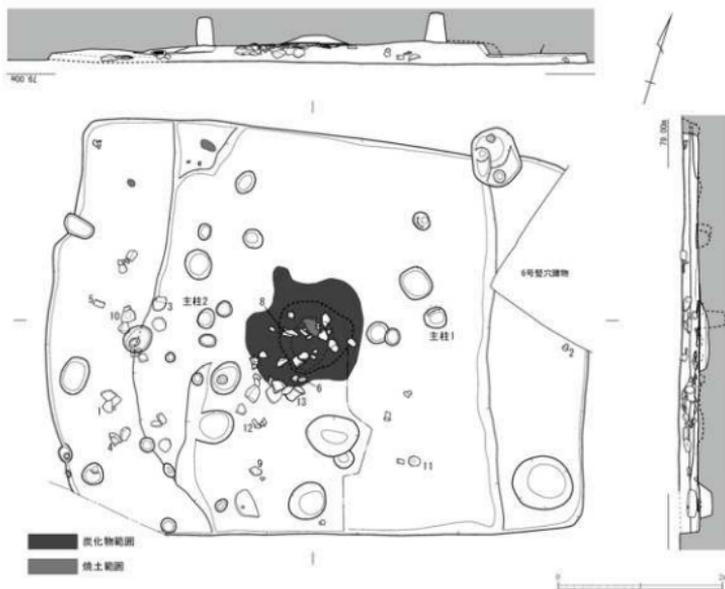


第17図 6号竪穴建物出土遺物実測図(1/4)

7号竪穴建物(第18図、写真図版6)

調査区北側で検出されており、前述したように6号竪穴建物に西端の一部を切られている。建物内の柱穴の位置から2本柱の建物跡であると考えられる。平面・規模は東西約6.4m×南北4.9mの方形を呈し、床面までの深さは20cm前後で主柱穴間の距離は約2.8mで主柱穴の深さは40cm前後を測る。建物中央に焼土・炭化物が検出されていることからがを持つ建物であったと考えられる。また、東西に幅1m前後のベッド状遺構を有する。出土遺物(第19図、写真図版19・20)

1～4は土師器の鉢である。1・2は直口縁で口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がる。ともに外面にスガが付着する。3は直口縁で外傾しながら直線的に立ち上がる。4は口縁部が外反しながら外傾する。5～11は弥生土器の甕である。5の口縁部は外反しながらほぼ垂直に立ちあがる。頸部に刻み目帯文が付く。6の口縁部は



第18図 7号竪穴建物実測図 (1/60)

短く外反し、頸部に刻み目突帯文が付く。7は胴部に穿孔が1個あり、底部は平底を呈する。外面にはススが付着する。8～11は平底を呈する。8は外面に被熱による赤化が見られる。12は弥生土器の高環で脚部に穿孔が3個ある。13は弥生土器の器台である。外面底部付近ではタタキが施される。また、被熱による赤化がみられる。14は鉄礫と考えられる。先端部は欠損している。

8号竪穴建物（第20図、写真図版6）

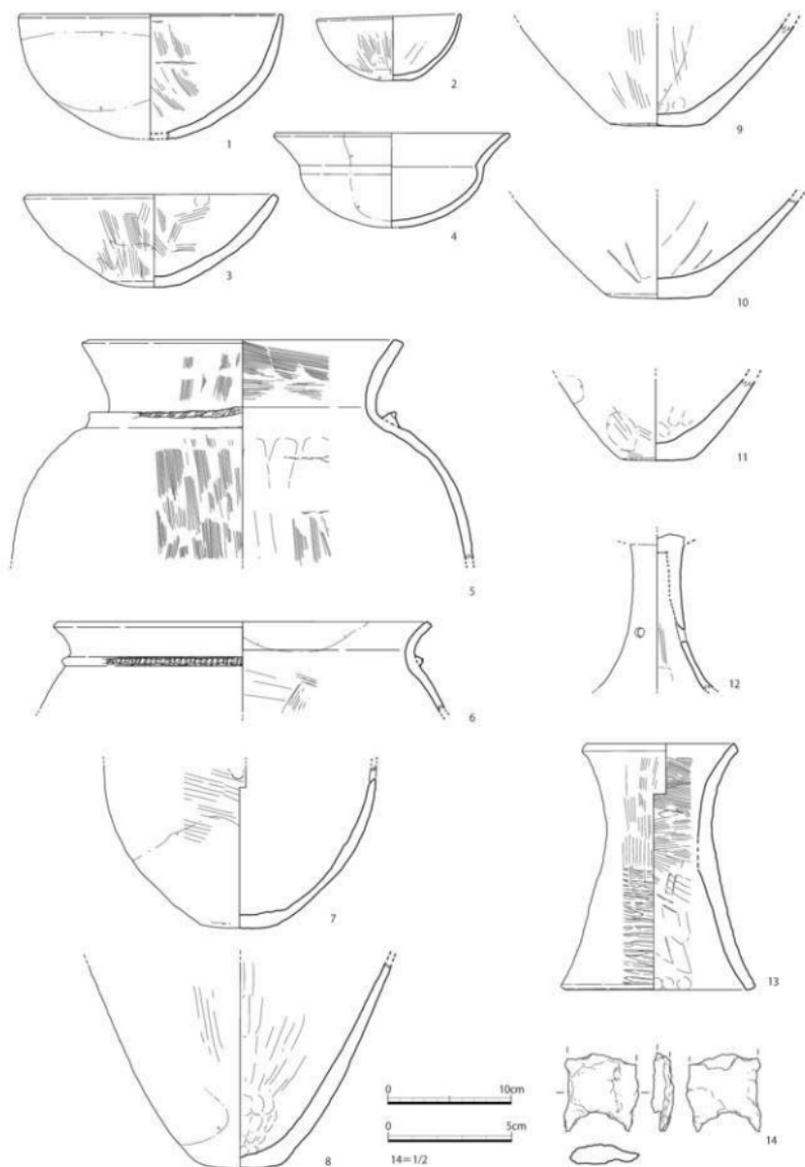
調査区北側で検出された。6号溝状遺構の一部を切り、6号竪穴建物によって南東隅を切られている。建物内の柱穴の位置から2本柱と考えられる。平面・規模は東西約5.6m×南北4.8mであるが、調査時に西側の一部を掘りすぎてしまった為、平面が不定形を呈しているが、従来は方形に近いものであったと考えられる。床面までの深さは10cm未満と非常に浅い。主柱穴間の距離は約1.9mで主柱穴の深さは約60cmを測る。建物中央に深さ10cm程度の土坑（凹み）が検出されている。焼土等は確認されていないが、中央炉の可能性が考えられる。また、南端には屋内土坑を有し、この土坑内からは少量であるが焼土が検出されている。

出土遺物（第21図、写真図版20）

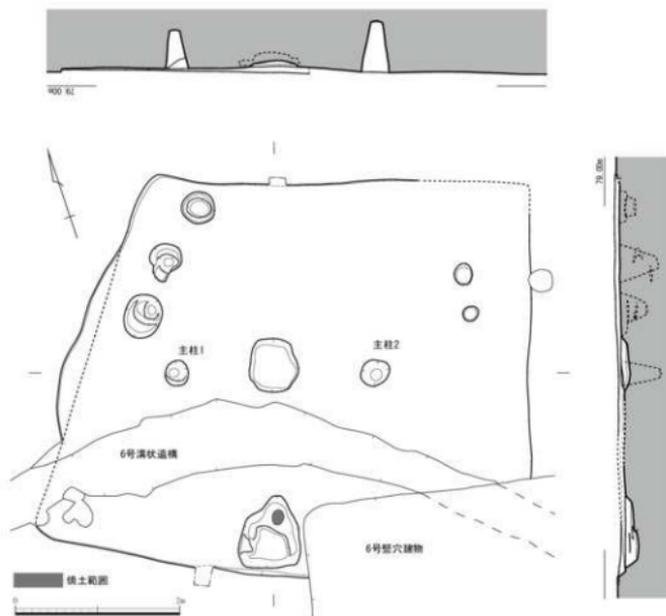
1は土器器の裏底部で外底部付近にススが付着する。屋内土坑より出土している。2は土器器の高環脚部である。内面にススが付着する。

9号竪穴建物（第22図、写真図版6）

調査区北側で検出された。大きく削平を受けており、床面はほとんど残っていないが、わずかに残った部分と



第19图 7号竖穴建物跡出土遺物実測図(1/2、1/4)

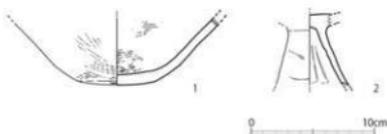


第20図 8号竪穴建物実測図 (1/60)

柱穴から2本柱の建物であったと考えられる。平面・規模は(推定)南西-北東約5.2m×北西-南東約4.2mで床面までの深さは10cm未満で、建物内中央に一部焼土が確認された事から中央柱の可能性が考えられる。南東端に屋内土坑を有し、土坑内からは灰が出土している。また、南西端では推定のラインより1m内側で若干の段差がある事から、ベッド状遺構を有していた可能性が考えられる。

出土遺物 (第23図、写真図版20)

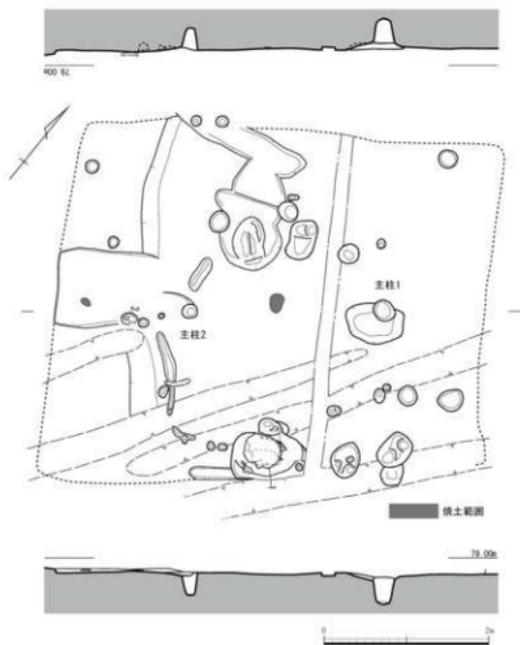
1は弥生土器の灰である。内外面共にハケ目が施されており、ススが付着する。また底部は平底である。2は弥生土器の高環の坏部である。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。



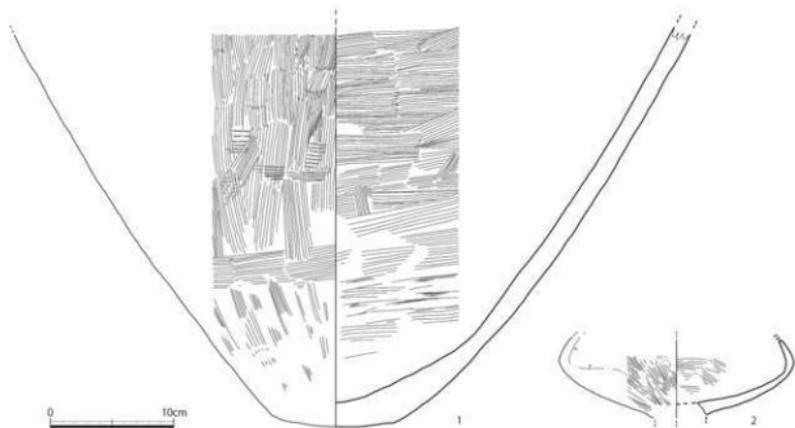
第21図 8号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

10号竪穴建物 (第24図、写真図版6)

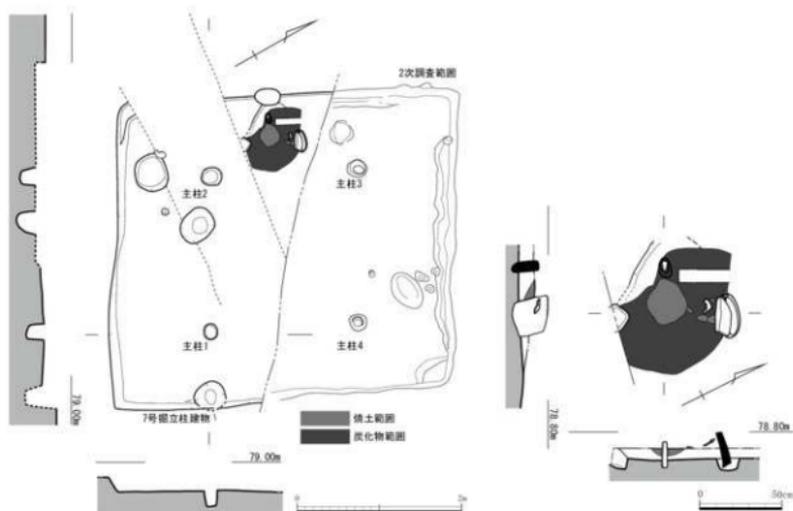
調査区北東側に検出された。北側半分が調査区外に伸びており、この北側半分は花ノ木遺跡2次調査区の1号竪穴建物として報告している。中央部は攪乱を受けている。建物内の柱穴の位置から4本柱と考えられる。平面・規模は前回の2次調査の成果とあわせて南北4.0m×東西3.5mの方形で、床面までの深さは約20cmを測る。北



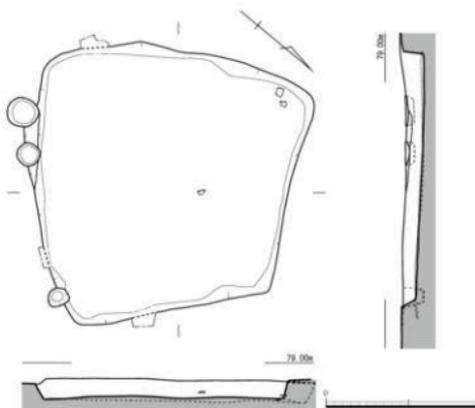
第 2 2 图 9 号竖穴建物实测图 (1/60)



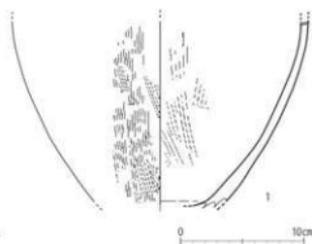
第 2 3 图 9 号竖穴建物出土遗物实测图 (1/4)



第24図 10号竪穴建物実測図 (1/60)、カマド個別実測図 (1/30)



第25図 11号竪穴建物実測図 (1/60)

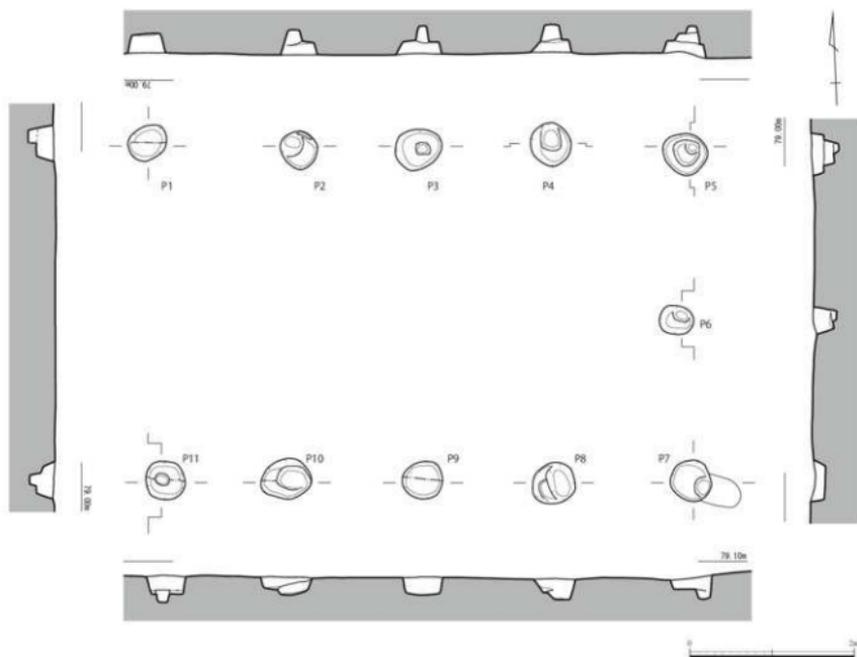


第26図 11号竪穴建物出土遺物実測図 (1/4)

西端にカマドが敷設される。袖石、支脚が残っており、袖は左側（南側）だけ残っていたが、天井石は残っていない。袖の長さは左右とも約60cmで袖石間は約80cmを測る。支石手前に焼土が検出されており火床面と考えられる。また、右側の袖が検出されなかった事、焼土を含んだ炭化物が袖を超えて右側に広がっている事から右袖はカマド廃棄時に破壊されたものと考えられる。2次調査区では東壁付近で炭化物が出土している。

出土遺物

少量の土器片が出土しているものの、図示できる遺物はなかった。しかし、2次調査の範囲では概ね古墳時代



第 27 図 1 号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

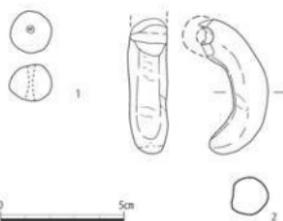
中期頃の環や高環が多く出土している。また、中央を切る視乱より土製模造鏡が出土しており、10号竪穴建物の遺物である可能性が考えられる。

11号竪穴建物 (第25図、写真図版6)

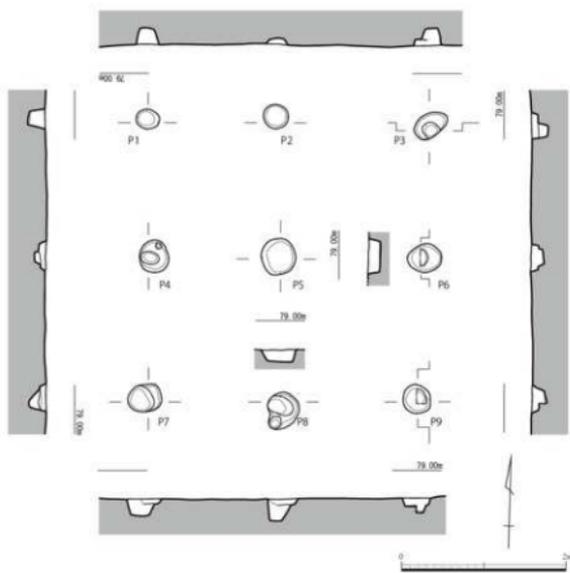
調査区北側で検出された。6号竪穴建物のすぐ東側に位置し、6号溝状遺構を一部切っている。平面・規模は北西-南東3.2m×南西-北東3.0mの方形で床面までの深さは20cm前後を測る。主柱穴と考えられるようなピットが周辺を含め確認されず、焼土・炭化物などが跡を示すようなものは検出されていない。

出土遺物 (第26図、写真図版20)

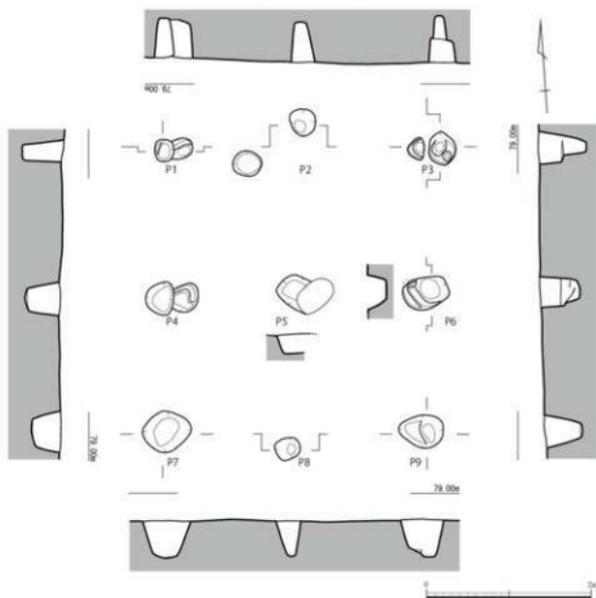
1は弥生土器の裏である。内外面にハケ目調整が施される。外面には剥離が見られる。



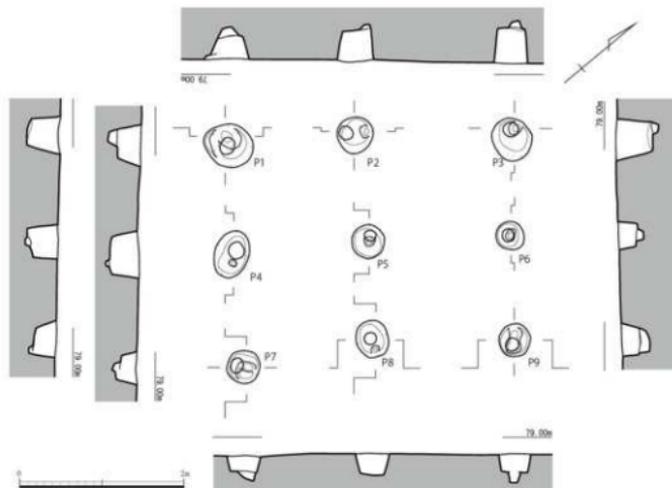
第 28 図 1 号掘立柱建物
出土遺物実測図 (1/2)



第 2 9 图 2 号掘立柱建物实测图 (1/60)



第 3 0 图 3 号掘立柱建物实测图 (1/60)



第31図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)

2. 掘立柱建物

調査区全体で掘立柱建物と確認する事ができたのは9棟である。調査区全体で多数のピットが確認されている事から、これ以外に掘立柱建物があった可能性も考えられる。

検出された掘立柱建物は、東西に軸を持つ1・9号と南北に軸を持つ2・3・6号（総柱建物）、北東-南西に軸を持つ4・5・7（総柱建物）・8号に分かれる。また、1～3号掘立柱建物と5～7号掘立柱建物は比較的に近い位置にあるものの、それぞれに規則的な配置を確認する事はできなかった。出土遺物は総じて少なく、時期比定は難しいが、いずれも古墳時代後期～古代頃と想定される。



第32図 4号掘立柱建物出土遺物実測図 (1/4)

1号掘立柱建物（第27図、写真図版6）

調査区中央よりやや北側で検出された。東西方向に軸をとる。遺構西側では梁行方向の柱穴が検出できなかったが2間×4間の掘立柱建物と考えられる。

桁行方向の柱穴間の距離は約1.6mで梁行方向の柱穴間の距離は約2.0mを測り、心々距離で東西長軸約6.6m、南北短軸約4.2m、柱穴の深さは40cm前後を測る。

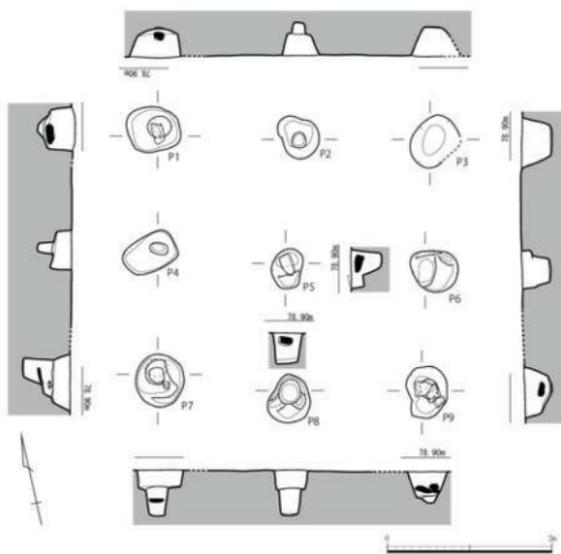
出土遺物（第28図、写真図版20）

1は土玉である。両端より穿孔されている。2は土製の勾玉である。端部が欠損しているが、穿孔の一部が確認できる。いずれもP4で出土している。

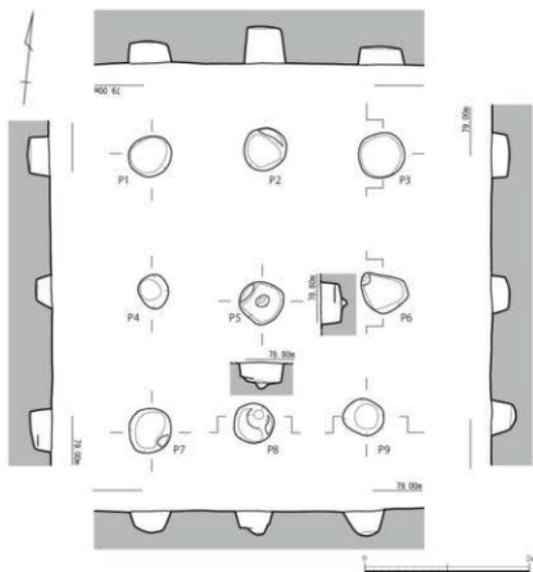
2号掘立柱建物（第29図、写真図版7）

調査区中央よりやや北側で1号掘立柱建物の西側に隣接して検出された。2間×2間の総柱建物である。柱穴間の距離は1.6～1.8mで、心々距離は東西長軸で約3.5m、南北短軸約3.4m、柱穴の深さは20～30cmを測る。

少量の土器片が出土しているものの図示できる遺物は出土しなかった。



第 3 3 图 5 号掘立柱建物实测图 (1/60)



第 3 4 图 6 号掘立柱建物实测图 (1/60)

3号掘立柱建物（第30図、写真図版7）

調査区中央よりやや北側、1号掘立柱建物より東側で検出された。2間×2間の総柱建物である。柱穴間の距離は約1.8mで心々距離は南北長軸約3.5m、東西短軸で約3.4mで柱穴の深さは50～60cmを測る。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。

4号掘立柱建物（第31図、写真図版7）

調査区北側、2号竪穴建物の南東隅を切る形で検出された2間×2間の総柱建物跡である。柱穴間の距離は東北-南西1.4m、北西-南東1.9mで心々距離は南北長軸3.6m、東西短軸2.6mで柱穴の深さは30～50cmを測る。

出土遺物（第32図、写真図版21）

1は須恵器の坏蓋である。口縁部に向かって垂直に降りる。内外面とも調整は不明瞭である。2は須恵器の坏身である。口縁部は外反しながらほぼ垂直に短く立ち上がる。いずれもP2より出土している。

5号掘立柱建物（第33図、写真図版7）

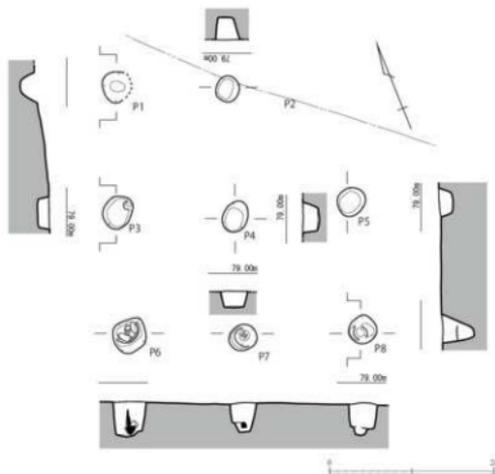
調査区東側で検出された2間×2間の総柱建物である。一部、6号掘立柱建物によって切られている。柱穴間の距離は1.8mで心々距離は長軸・短軸ともに3.4mで柱穴の深さは40cm前後を測る。P1・5・9からは根締め石と思われる石が出土している。

少量の土器片が出土するものの図示ができる遺物は出土しなかった。

6号掘立柱建物（第34図、写真図版7）

調査区東側、5号掘立柱建物と隣接して検出された2間×2間の総柱建物である。5号掘立柱建物の一部を切っている。柱穴間の距離は東西で1.4m、南北で1.8m、心々距離は南北長軸で3.6m、東西短軸で2.8mで柱穴の深さは20～40cmを測る。

少量の土器片が出土するものの、図示できる遺物は出土しなかった。



第35図 7号掘立柱建物実測図 (1/60)

7号掘立柱建物（第35図、写真図版7）

調査区東側、10号竪穴建物の一部を切る形で検出された2間×2間の総柱建物と考えられる。柱穴の一部が調査区外に伸びるものの同年に調査した花ノ木遺跡2次では、この続きを確認する事はできなかった。柱穴間の距離は1.5m前後で心々距離は3.0m前後、柱穴の深さは20～40cmを測る。P6・7からは根締め石と思われる石と柱木が出土している。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。

8号掘立柱建物（第36図、写真図版7）

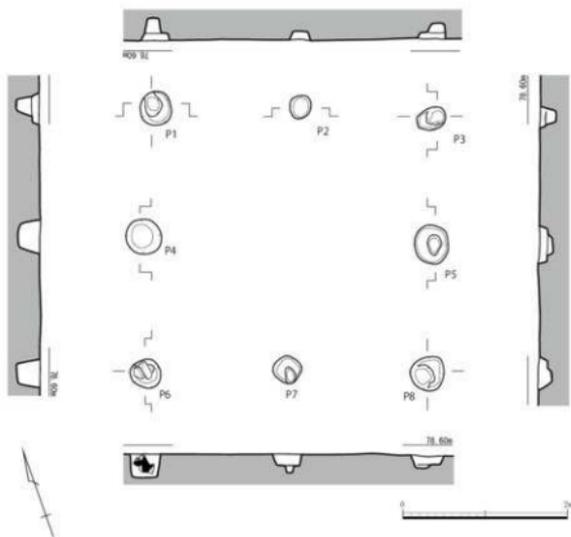
調査区のほぼ中央で検出された2間×2間の掘立柱建物である。その他の掘立柱建物から離れた位置で検出され、7号溝状遺構の一部を切っている。調査時に中央の柱穴を検出する事ができなかった事から、総柱建物ではなく、側柱建物と考えられる。柱穴間の距離は南北1.6mで東西1.7m、心々距離は南北短軸で3.2m、東西長軸で3.4m、柱穴の深さは20～30cmを測る。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。

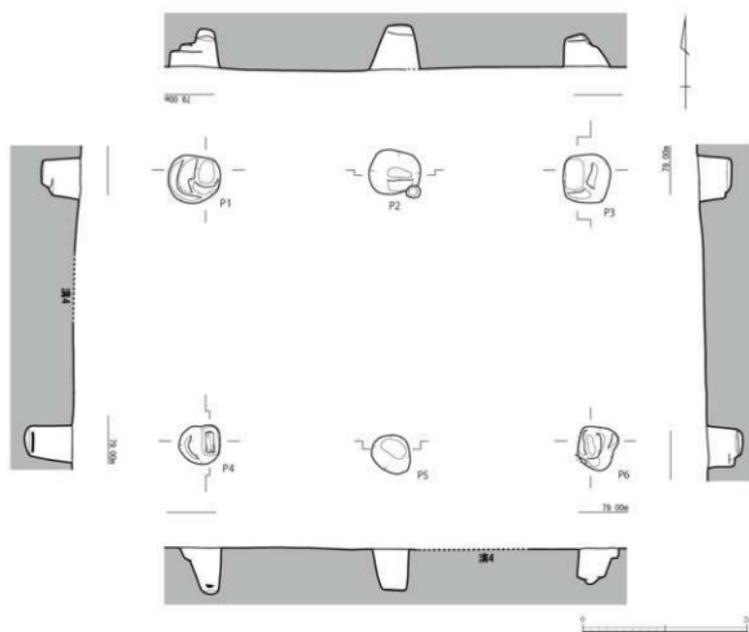
9号掘立柱建物（第37図、写真図版7）

調査区東側で検出された2間×1間の掘立柱建物である。東西方向に軸をとる。柱穴間の距離は東西約2.2m、南北約3.4mで心々距離は東西長軸で4.4m、南北短軸で3.4m、柱穴の深さは40～50cmを測る。P4からは礎板と考えられる木製の板が出土している。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。



第36図 8号掘立柱建物実測図（1/60）

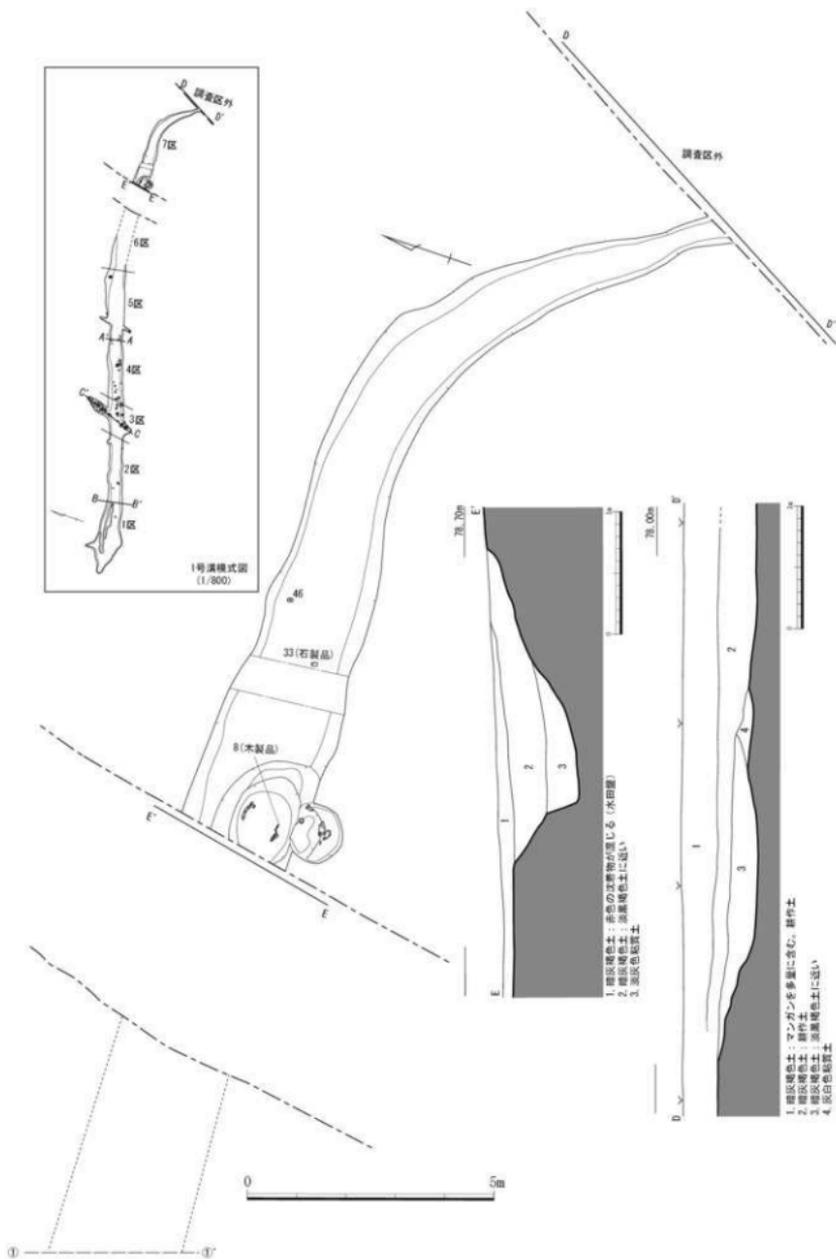


第37図 9号掘立柱建物実測図 (1/60)

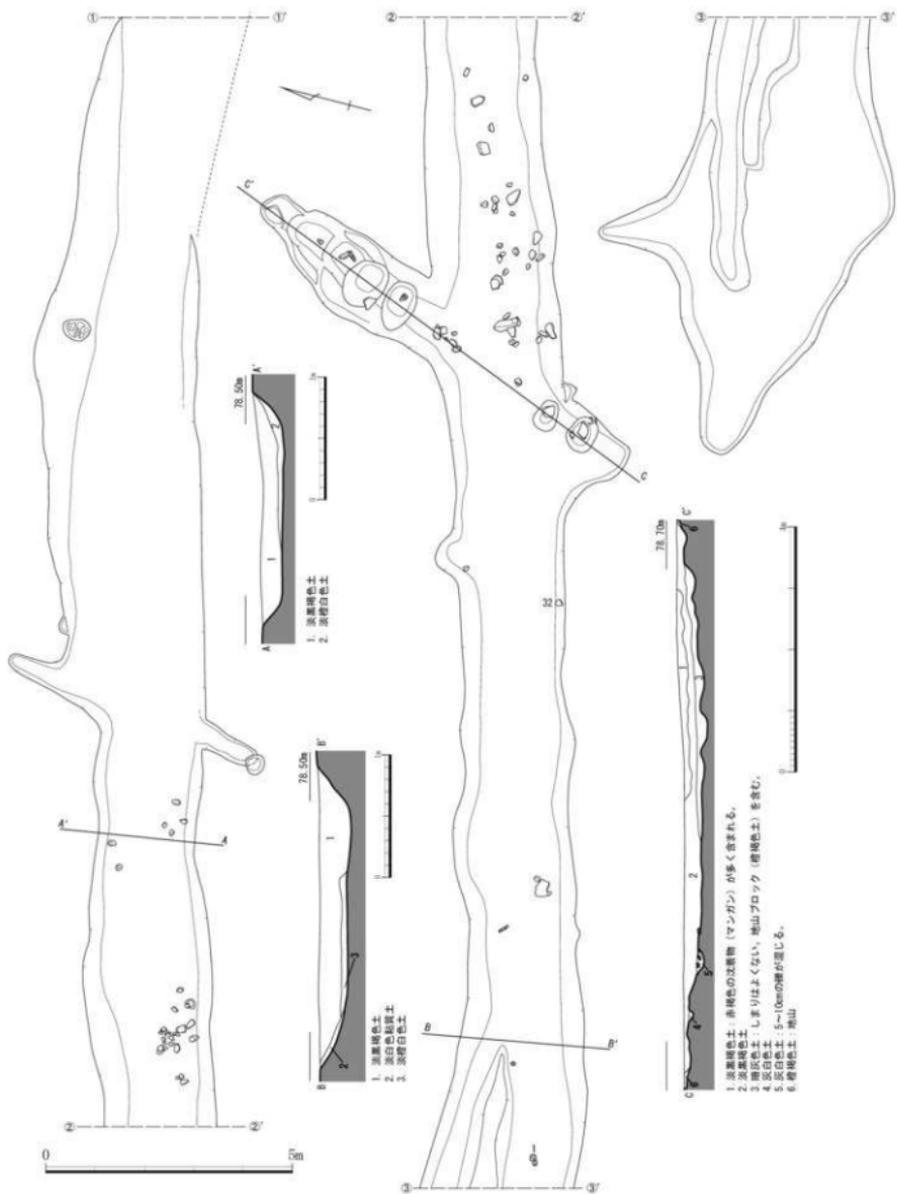
3. 溝状遺構

調査区全体で8条確認されている。その内、軸の方向から東西に伸びる1・2・5・7号溝と南東から北西に伸びる3・4号溝、調査区北端で検出され北東から南西方向に伸びると考えられる8号溝、そして7号竪穴建物の周囲を巡る6号溝に分ける事が出来る。また、断面形状では1・2・5・8号溝状遺構の船底形状と3・4・6・7号溝状遺構の逆台形状に分ける事が出来る。1・2・5号溝状遺構は溝幅(1~2m)に対して深さが20cm前後と浅く、3・4・6・7号溝状遺構は溝幅(約50cm前後)に対して深さが30cm前後と深い。これら軸方向や断面形状の違いはそれぞれ時期差などを反映している可能性が考えられる。

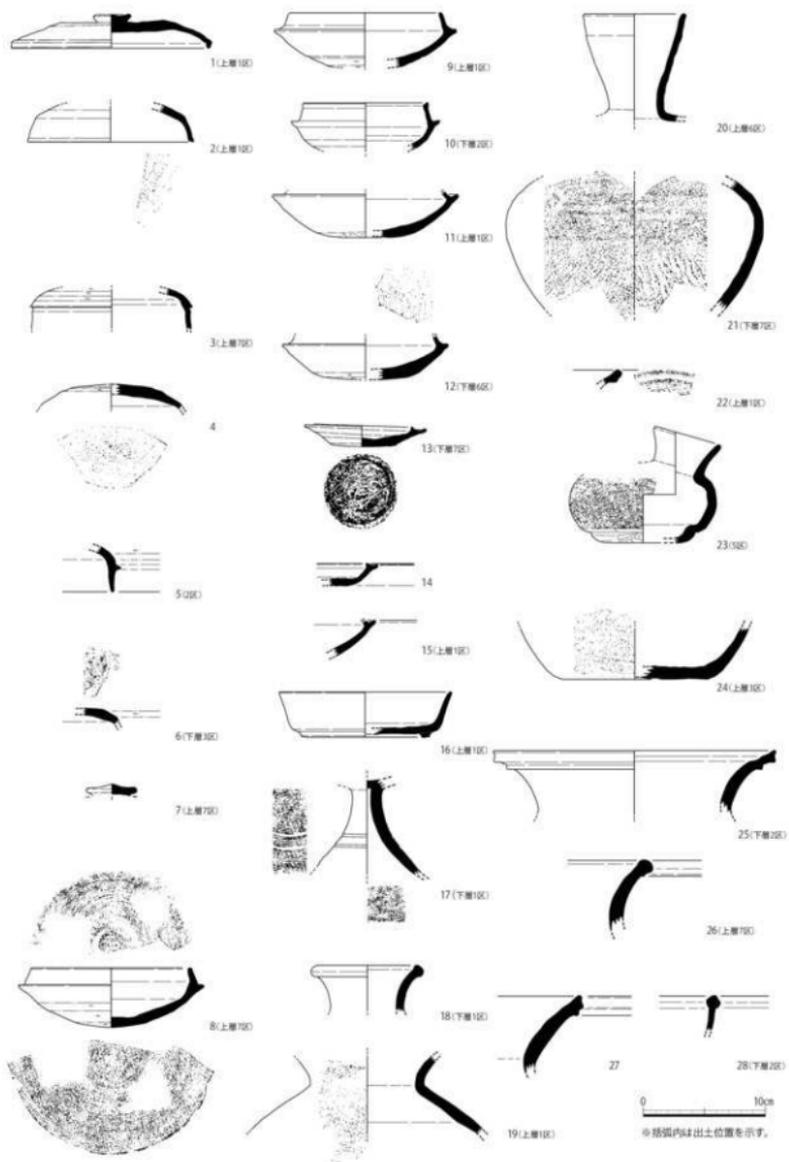
なお、1・2号溝状遺構は調査区東端で切り合っていた可能性があるが、調査時に担当が掘り過ぎてしまったため、切り合い関係などは分からなくなってしまっている。3・6号溝状遺構は途切れているが、幅、断面形状や遺物の時期が近いことから一連の遺構であった可能性が考えられる。5・7号溝状遺構はほぼ平行して検出されており同時期の遺構である可能性がある。全体の規模に関しては、そのほとんどが東側は調査区外へ、西側は近世以降の削平を受けているため、その全容を確認することはできなかった。それぞれの時期に関しては、出土遺物や切り合い関係から弥生時代後期、古墳時代後期~古代の2時期が想定される。



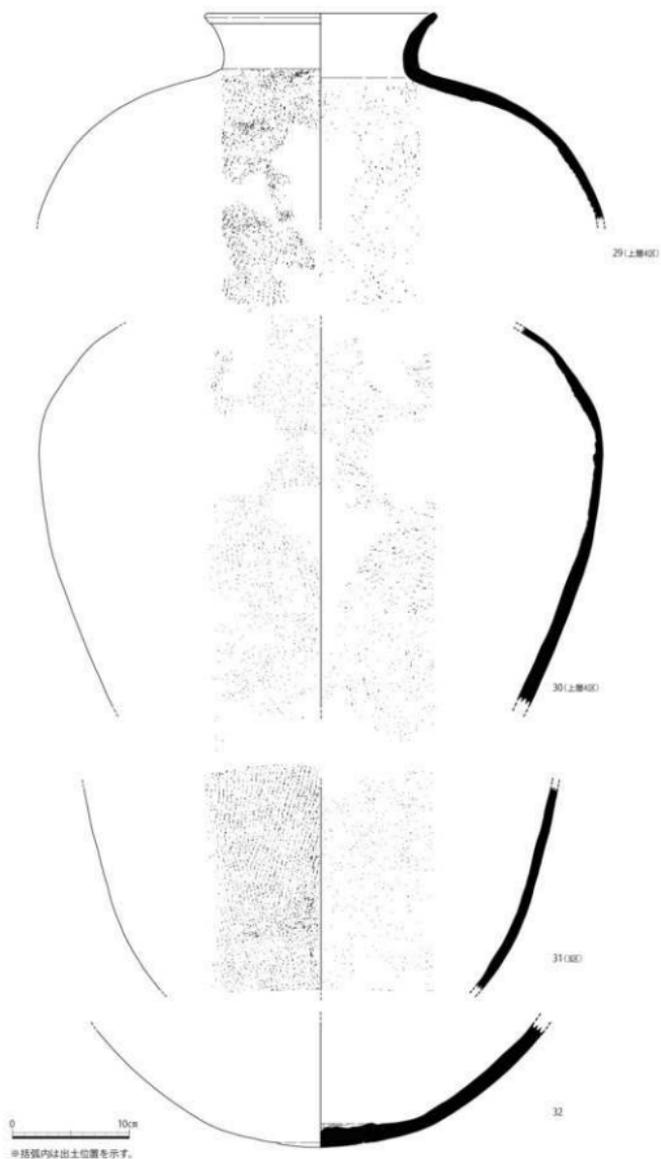
第38図 1号溝状遺構・土層実測図1 (1/100・1/40)



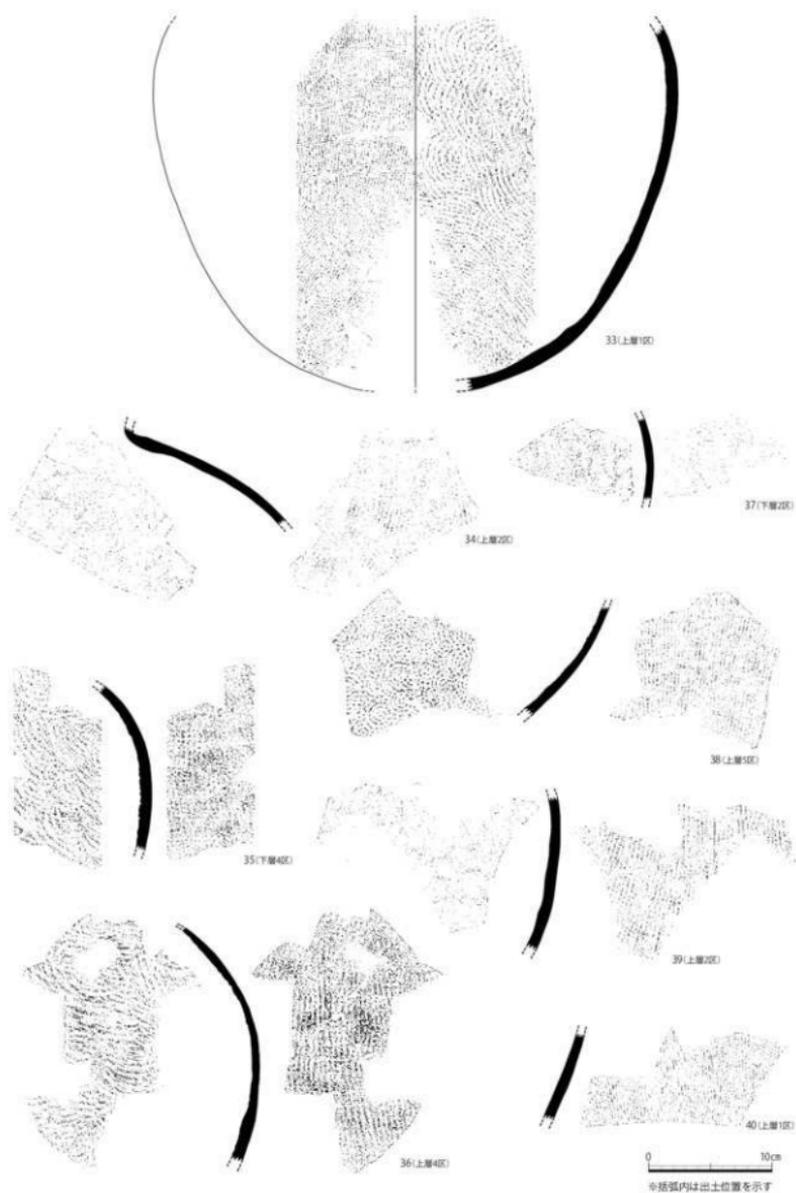
第39図 1号溝状遺構・土層実測図2 (1/100・1/40・1/80)



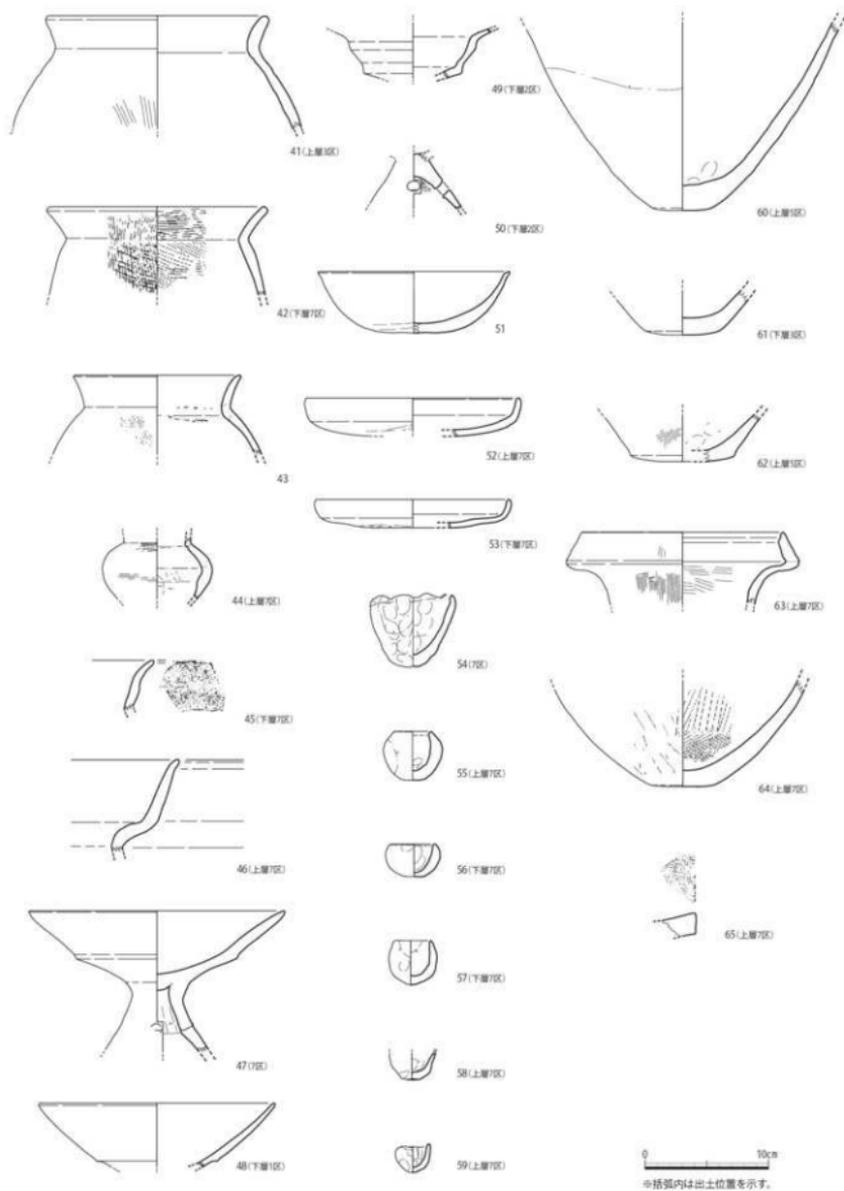
第40图 1号溝状遺構出土遺物実測図1 (1/4・1/2)



第41図 1号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)



第42図 1号溝状遺構出土遺物実測図3 (1/4)



第43図 1号溝状遺構出土遺物実測図4 (1/4)

1号溝状遺構（第38・39図、写真図版8）

調査区中央で検出される。調査区を東から西に向かって横断している溝である。調査区内の長さは75m + α で幅は2.0m前後で深さは平均で20cm～30cm前後、最も深い所では約50cmを測る。水の流れは、東から西に向かって流れていたと考えられる。西に向かうほど後世の削平の影響を強く受け、途中で途切れる為、全体を確認することはできなかった。東端では、大きく南に曲がる状況が見られた。これは、調査区より東が台地の斜面になっているため、地形にそって曲げられたものと考えられる。遺構の西端より約5m、25m、42mの地点でそれぞれ南北に幅5.5m、9m、5.5mほどの張り出し部が見られる。土層の堆積状況より下層から粘質土が出土していること、暗褐色土が厚く堆積していることから流れが緩やかで、長い時間をかけて埋没したものと考えられる。また、3ヶ所の張り出し部は南から北に向かって緩やかに傾斜しており、柱穴など井堰の痕跡は見られないものの、その形状から水田に水を引くための水口であったと想定しておく。張り出し部間の距離は約16mでこれらを水田に伴う水口と考えると当時の水田規模を想定することができる。また、この張り出し部周辺からは、礫などに混じって多くの土器が出土していることから、張り出し部周辺では水が一時的に溜まるような状況であった可能性がある。この他に、図示した木製品（第81図8）の周辺から少量であるが種実が出土している。出土遺物（第40～43図、写真図版21～23）

出土遺物の位置に関して模式図を用いて説明を行う。上・下層に関しては、層序ごとに定めたものではなく、遺構検出面から底部までを大きく2分割したものである。

上層からは1・2などの須恵器杯蓋や8・9・11・13などの須恵器杯身をはじめ、23などの提瓶や31や33などの須恵器甕が出土しているほか、41や47の土師器甕や高坏の他に52などの土師器の皿や55などのミニチュア土器なども出土している。また、60などの弥生土器も出土している。

下層からは10・12などの須恵器杯身や17の高坏や18の壺や25などの甕が出土している。他、42・45などの土師器甕や壺、53の土師器皿や56・57などのミニチュア土器も出土している。また、上流側の5～7区からは須恵器杯身や杯蓋のほか、土師器の甕や高坏、弥生土器やミニチュア土器が出土している。下流側の1～4区からも上流側と同様の遺物が出土している。この他、水口のある3・4区周辺では、須恵器の甕が多く出土するのが特徴として挙げられる。一部で弥生土器などが出土しているものの、これらは切り合いが想定される5・6区周辺で見られることから、周囲からの流れ込みと考えられる。全体を通して、大きな時期差はないと考えられる。

以下、番号順に説明を行う。

1～7は須恵器の杯蓋である。1は摘みが残り、口縁部は下方に摘み下げる。2の内面にはヘラ記号があり、口縁部にはスミが付着する。4は内面に、6の外面向ヘラ記号が施される。7は摘み部分のみ残存している。8～15は須恵器の杯身である。8は受け部を持ち、口縁は内傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。また、外面底部にヘラ記号が施される。9の口縁部は屈曲し垂直に立ち上がる。10の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で摘み上げている。12は内面底部にヘラ記号が施される。13の外面底部にはヘラ記号が施される。口縁部の立ち上がりがほとんど無い。14・15は杯身片である。16は須恵器の杯である。高台を持ち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。17は須恵器の高坏脚部である。内面に工具痕が残る。18～21は須恵器の壺である。18は口縁部で外反しながら立ち上がり、口縁部を摘み上げる。19は頸部から肩部にかけての破片で頸部から口縁部にかけて波状文が施される。20は長頸壺の口縁部である。21は胴部で外面底部付近に格子目タタキが施される。また、外面に付着物が残る。22はハソウ（外字）の口縁部と考えられ、波状文が施される。23は平瓶である。外面にはカキ目・ヘラケズリが施される。24は提瓶の底部と考えられる。外面にはカキ目が施される。25～40は須恵器の甕である。25～27は外反しながら口縁部に向かって立ち上がる。内外面に自然軸が残る。28は

口縁端部に厚みを持つ。29の口縁部は外反しながら立ち上がる。外面に格子目タタキが施される。30・31は胴部で外面に格子目タタキが施される。32は壘底部で充填痕が残る。33は胴部から底部で、外面には平行タタキが施される。内面には自然軸が残る。34は肩部から胴部で外面に自然軸が残る。35～40は胴部で35・36、38・39の外面には格子目タタキが施される。37の外面には自然軸が残る。39は内外面にわずかに自然軸が残る。41～43は土師器の甕である。41の口縁部は緩やかに外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。42の口縁部は外傾しながら立ち上がる。外面の一部にタタキが施される。43は緩やかに外反しながらほぼ垂直に立ち上がる。44～46は土師器の甕である。45は口縁部で外面に線刻が施される。47～50は土師器の高環である。47の環部は屈曲し大きく外傾しながら口縁部に向かって立ち上がる。内外面は被熱による赤化が見られる。また、脚部に穿孔が1個確認される。48は環部で屈曲し、外傾しながら口縁部に向かって立ち上がる。49は複合口縁の高環口縁部でやや外傾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。50は脚部で穿孔が4個確認される。51は土師器の環である。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で外反する。52・53は土師器の皿である。口縁部は垂直に短く立ち上がる。54～59は土師器の鉢である。これらはミニチュア土器で55・56は内面に被熱によるものと考えられる黒斑が見られる。58は外面底部に板状圧痕が残る。60～62は弥生土器の甕である。いずれも底部は平底で60・62の内面には指頭圧痕が残る。63・64は弥生土器の甕で63は複合口縁部で口縁部は内傾し短く立ち上がる。64は甕の底部か、甕の可能性も考えられる。65は平瓦の破片である。

2号溝状遺構（第44図、写真図版9・10）

調査区中央ややや南側で検出され、北東から南西に向かって伸びている溝である。規模は長さ53m + α で幅は1.0m前後で深さは約20cm～25cmを測り、流れの方向は北東から南西に向かっていたと考えられる。土層断面から、1号溝状遺構と同様に水の流れは緩やかに廃絶時に一気に埋まったものと考えられる。また、北東端は、1号溝に切られていたと想定され、南西端は1号溝状遺構と同様に削平の為か途切れている。この他、土層断面A～Bの間にかけて部分的に検出面から10cm前後の深さで炭化物が帯状に検出されていることから、水腫状の遺構が敷設され、水を引いていた可能性が考えられるものの、調査時に平面では確認できなかった。出土遺物は上流部の東側を除いて全体的に万遍なく出土しており、炭化物が検出される前後の深さで多く見られる。また、器種は甕・甕が見られるほか、高環と小型丸底甕が特に多く出土している。

出土遺物（第45～49図、写真図版24～28）

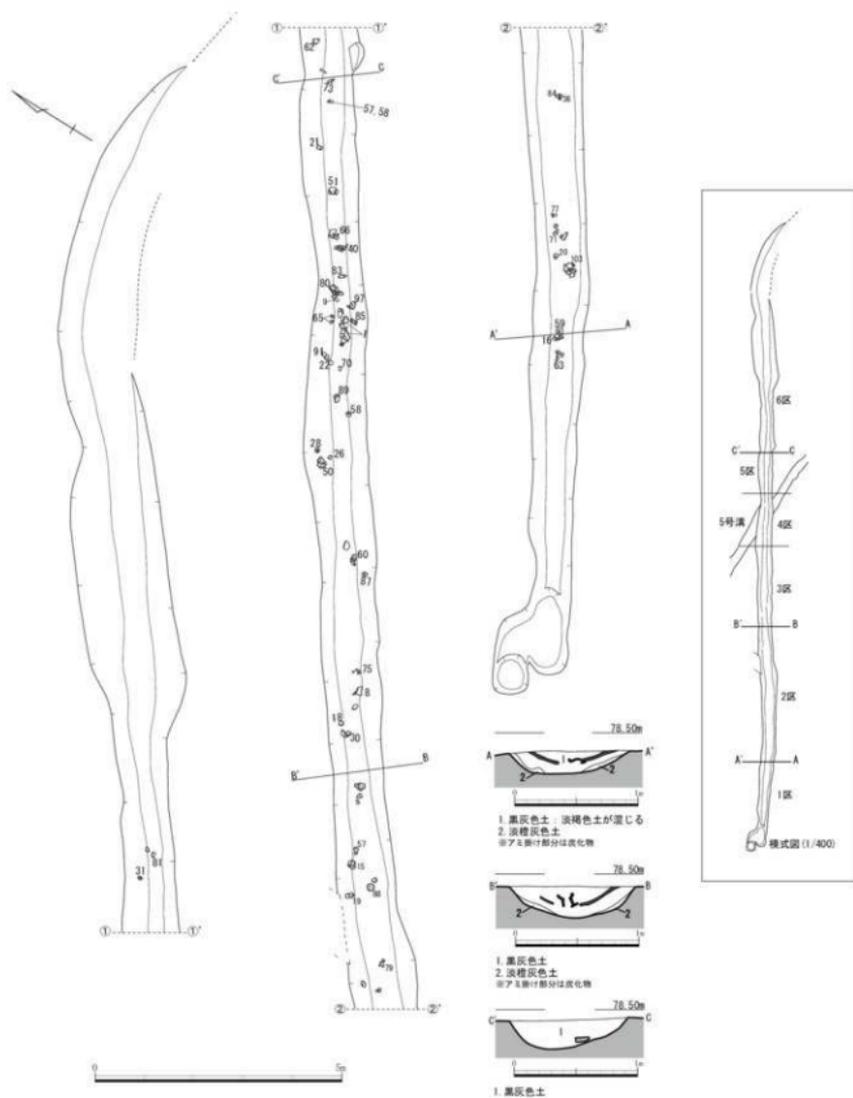
出土遺物の位置に関して模式図を用いて説明をおこなう。上・下層は層序ごとに定めたものではなく、検出面から底部までを大きく分けたものである。

上層からは5・7・10などの土師器の甕、17・28・29などの小型丸底甕、41・47・51などの高環、91などの環の他、100・101のミニチュア土器が出土している。

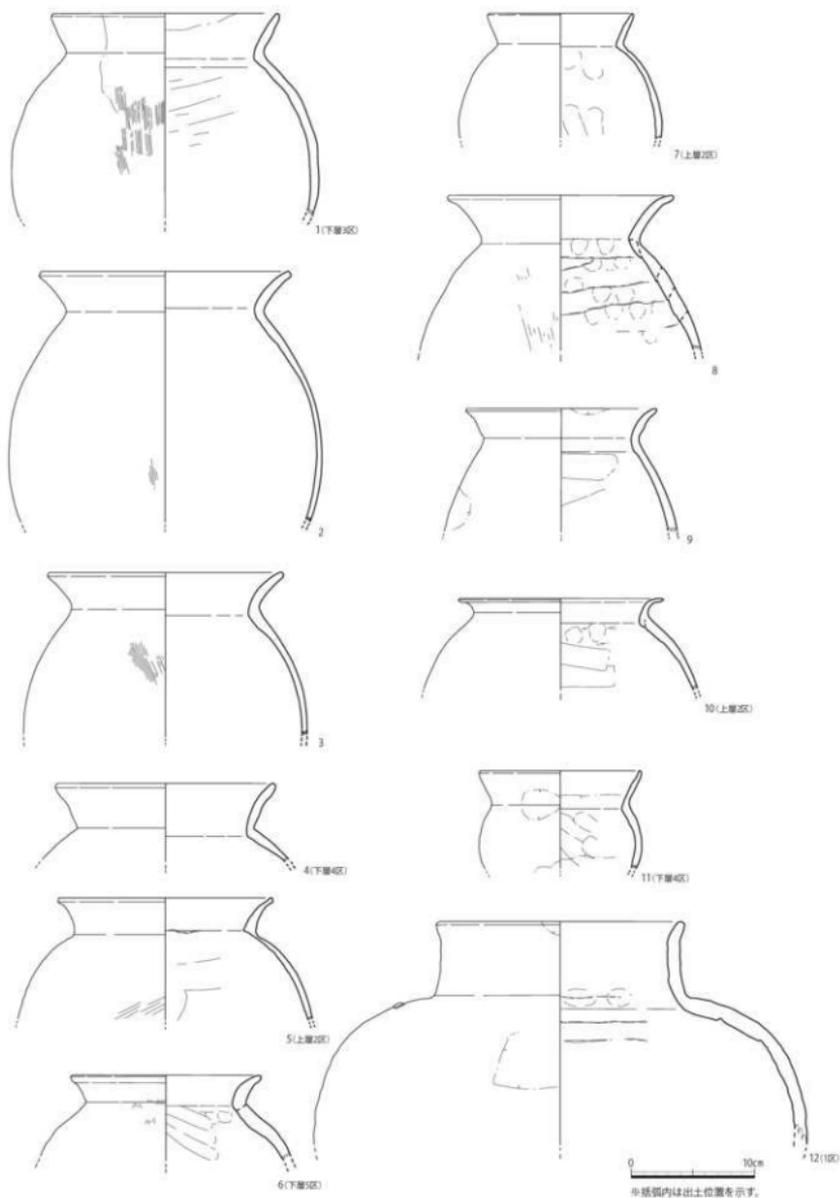
下層からも上層と同様に1・4などの土師器の甕、23や35・37の小型丸底甕、40・46などの高環、98のミニチュア土器や甕が出土している。上流部（4・5・6区）と下流部（1・2・3区）では出土遺物に大きな差は見られなかった。全体的に上層部分からの出土が多く、上流よりも下流部である1～3区からの出土が多いことが特徴として挙げられる。また、出土遺物の一部に弥生土器が混ざるものの、弥生後期に比定される7号溝状遺構との切り合いによる影響と考えられ、全体を通して大きな時期差はないと考えられる。

以下、番号順に説明を行う。

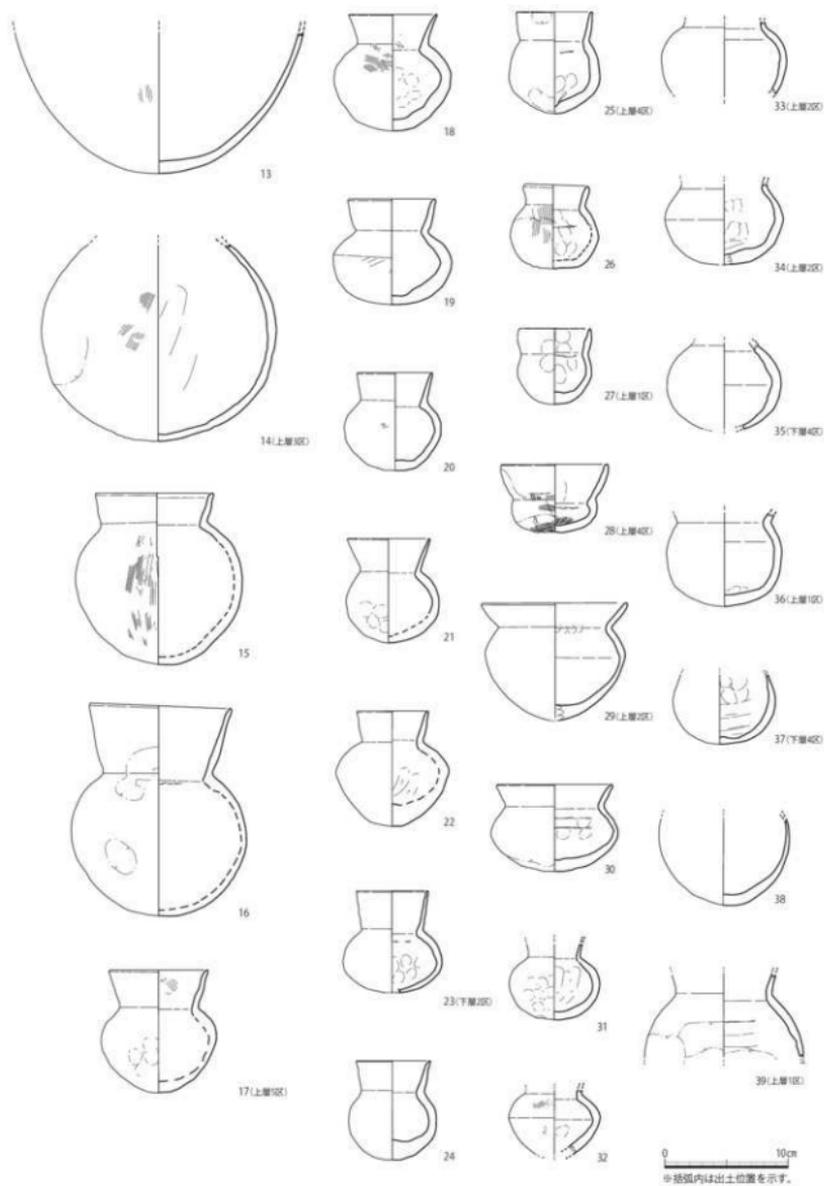
1～11は土師器の甕である。1・7の口縁部は直線的にやや外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。1の内外面にはススが付着している。7の内面頸部は明瞭に屈曲する。2～6及び8・9の口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。3の内外面には被熱による赤化がみられる。4の口縁部にはススが付着する。5の内面頸部は明瞭



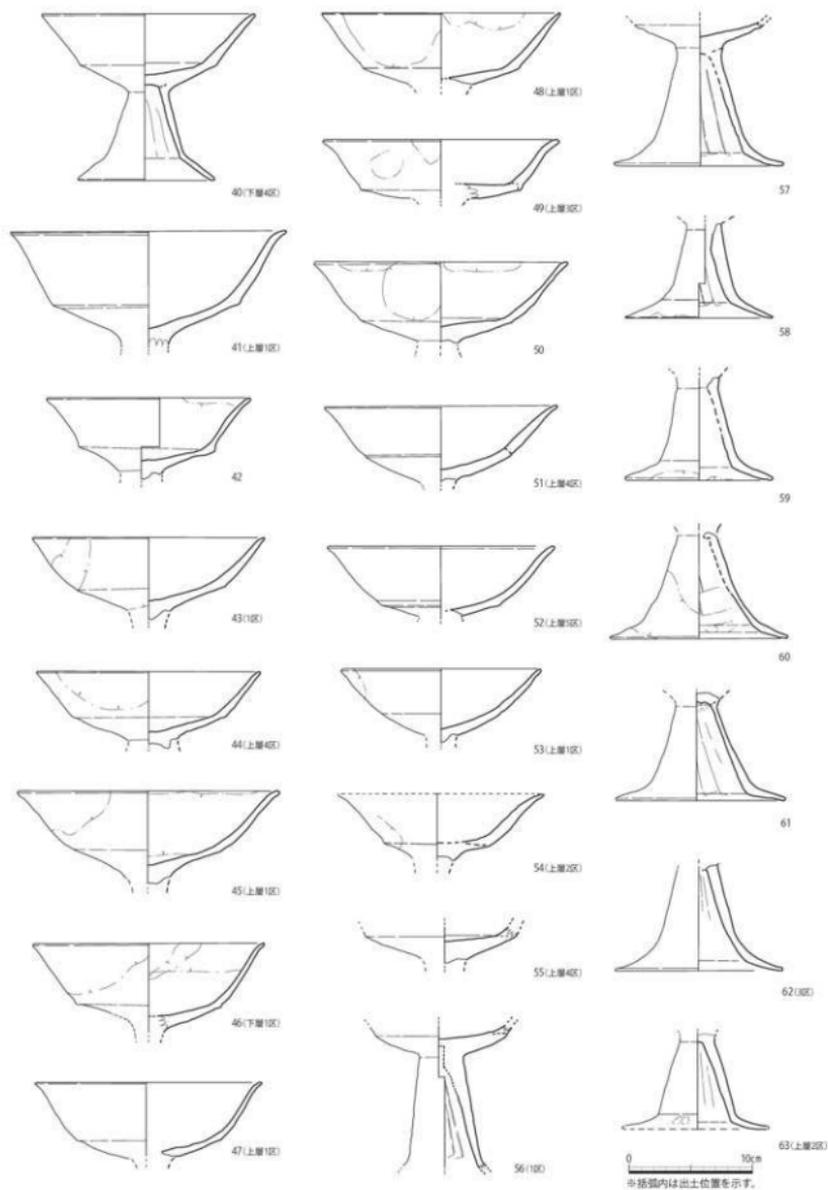
第44図 2号溝状遺構実測図・土層断面図 (1/100・1/40)



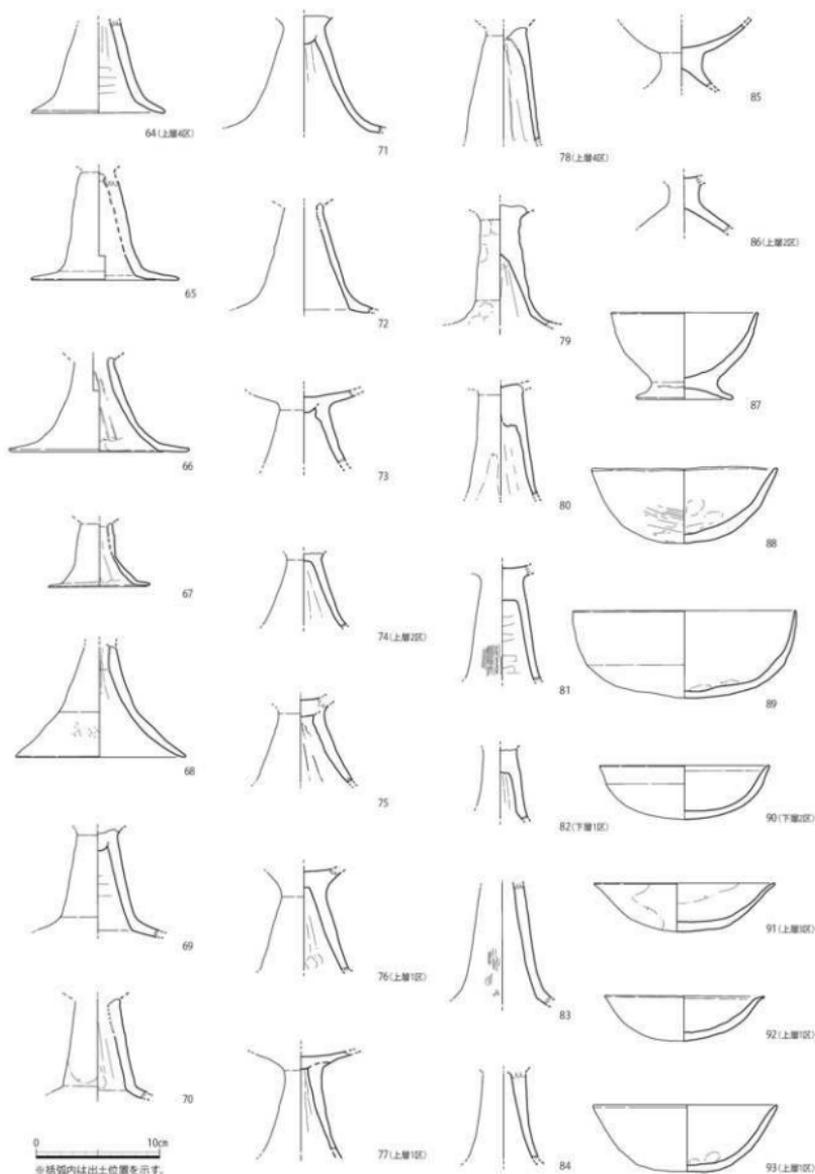
第45図 2号溝状遺構出土遺物実測図1 (1/4)



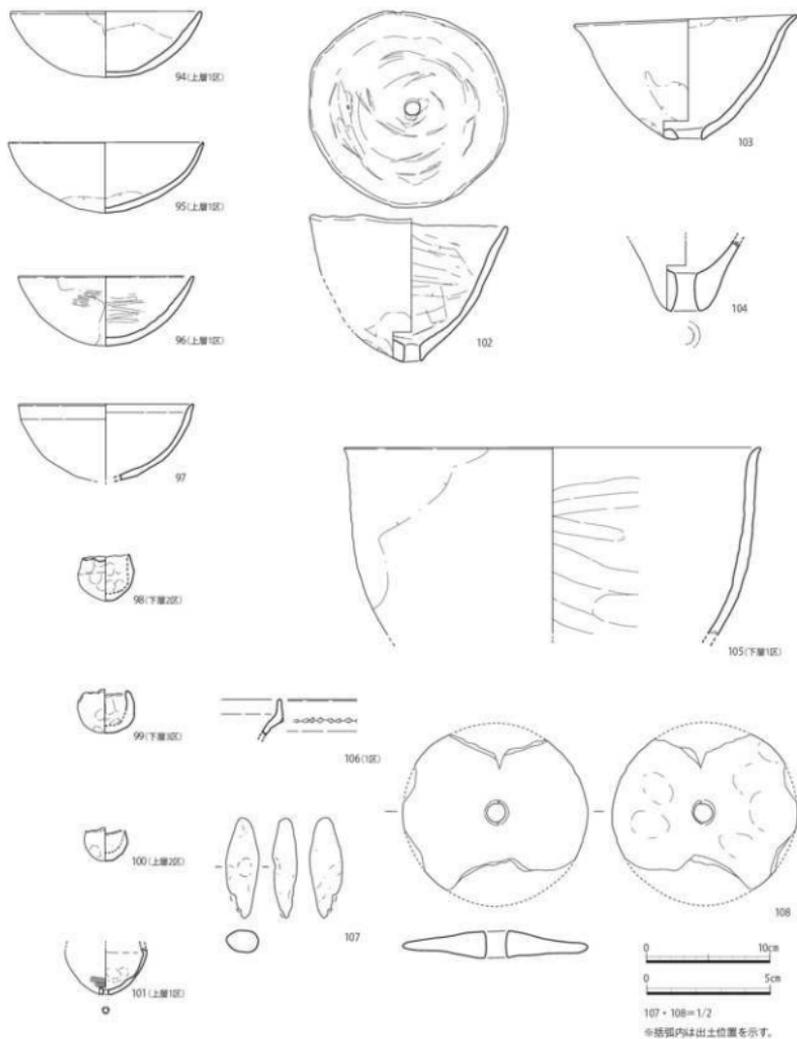
第46图 2号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)



第47圖 2号溝状遺構出土遺物実測圖3 (1/4)



第48図 2号溝状遺構出土遺物実測図4 (1/4)

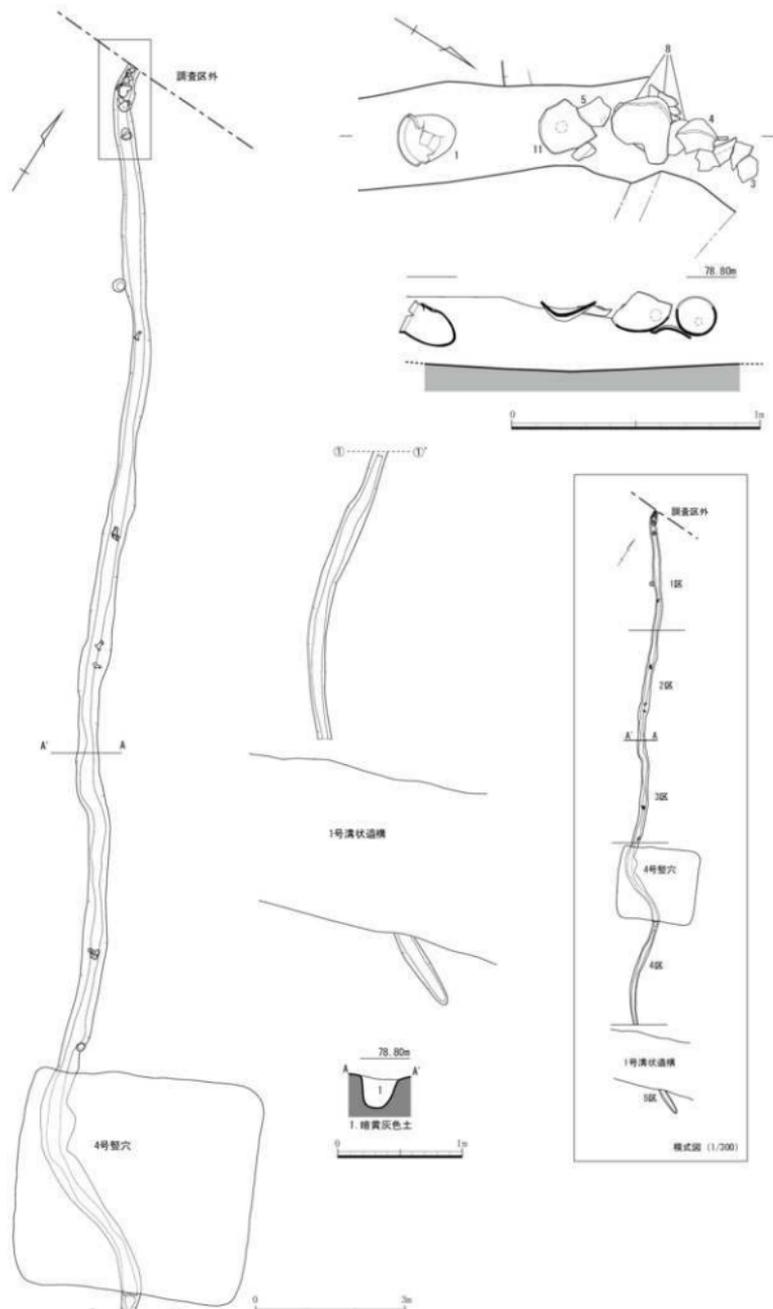


第49図 2号溝状遺構遺物実測図5 (1/4)

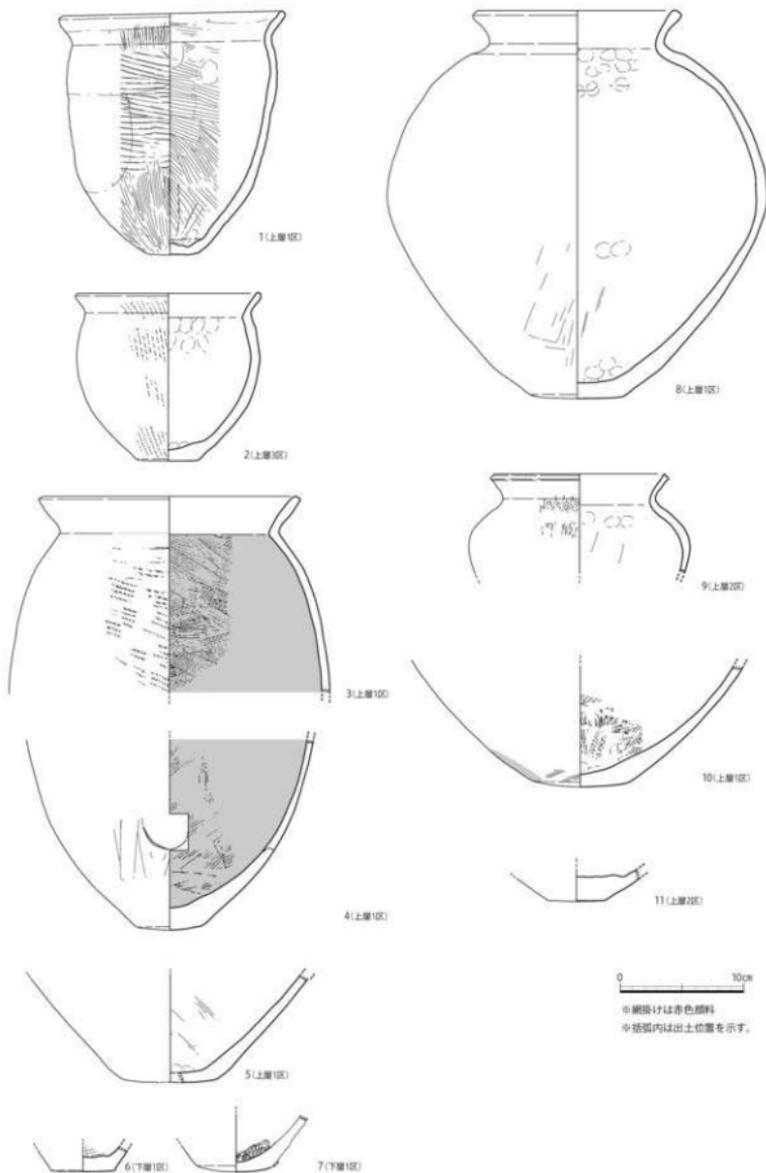
に屈曲し残る。また、内面に鉄分が付着する。8の内面には粘土痕が残る。9の外面にはススが付着する。10の口縁部は強く外反し短く立ち上がる。11の口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。12～39は土師器の壺である。12の口縁部は垂直に立ち上がる。頸部から肩部にかけて大きく張り出し、肩部には粘土が付着している。また、外面には鉄分が付着している。13・14は胴部から底部にかけて残存しており、外面にススが付着する。15～39の器高は15cm前後でいずれも小型丸底壺である。15～17、19～26の口縁部は直線的にほぼ垂直に立ち上がる。15の底部は被熱による赤化が見られる。16・23の口縁部は長く立ち上がり、胴部の2分の1程度の長さを持つ。18の口縁部は若干外反しながら立ち上がる。19は被熱による剥離が見られる。20は内面頸部に明瞭な屈曲を持つ。また外面にススが付着する。26は丸底と平底の中間的な底部になっている。27の口縁部は若干内湾しながら短く立ち上がる。28～30の口縁部は、胴部径と同等または大きく開く。28の外底部にはススが付着し、29・30の外面にもススが付着している。31～39は壺の胴部から底部である。31は内外面ともに指オサエによる調整が施される。38の外面には被熱による赤化・黒化が見られるほか、内面には環状にススが付着している。40～86は土師器の高坏である。40の坏部は屈曲し、外傾しながら直線的に立ち上がる。脚部は裾部付近で緩やかに屈曲して開く。41～55は坏部である。41の坏部は深く、口縁部に向かって屈曲し、直線的にほぼ垂直に立ち上がり、端部付近で外反する。42は口縁部に向かって屈曲し、緩やかに外反しながら立ち上がる。内外面に被熱による赤化がみられる。43～53は口縁部に向かって屈曲し、緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部で外反する。43の内面にススが付着する。46の外面には被熱による赤化、内面にはススが付着している。47・50の内外面には被熱による赤化がみられる。51・52は屈曲部が不明瞭になる。51の外面には被熱による赤化がみられる。53は屈曲部がわずかに残る程度で、外傾しながら口縁部に向かって若干内湾しながら立ち上がる。54は口縁部に向かって外反しながら立ち上がる。56～86は脚部である。56の内面にはケズリがみられる。57～65は端部付近で屈曲し大きく外反する。58の外面にはススが付着する。59の内外面には被熱による剥離がみられる。60の外面にはススが付着する。62～64及び68の内面には絞り痕が残る。65～67は端部付近での屈曲が大きく、端部の接地面が広い。67は坏部との接合面にススが付着しており、廃棄後に被熱を受けた可能性を考慮することが出来る。また68は屈曲部が不明瞭で端部に向かって緩やかに広がる。また、69～84は脚部の柱部のみで形状は不明である。69・71・73は内面の接合部に粘土の充填がみられる。87は台付きの鉢である。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。88～97は土師器の坏である。88は口縁部に向かい若干外傾するもの、ほぼ垂直に立ち上がる。89は底部付近に稜を形成し、口縁部に向かって垂直に立ち上がる。90は内湾しながら立ち上がり、口縁付近で稜を形成し口縁部に向かって外反する。91・92は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁端部で若干外反する。93は若干外傾しながら直線的に立ち上がる。いずれも内湾しながら口縁部にむかって立ち上がる。94は内外面にススが付着する。95は内外面に被熱による赤化がみられる。97は口縁端部付近で稜を形成し端部を積み上げる。98～101はミニチュア土器である。98～100は鉢で101は甗と考えられ、単孔で外面にススが付着する。102～105は土師器の甗である。102～104は単孔の甗で102は外面底面に、103は内外面にススが付着する。105は胴部のみで、単孔か多孔かは不明である。106は弥生土器の甗である。口縁部付近で刻み目紋が施される。107は土玉と考えられる。108は土製の紡錘車と考えられる。

3号溝状遺構（第50図、写真図版9）

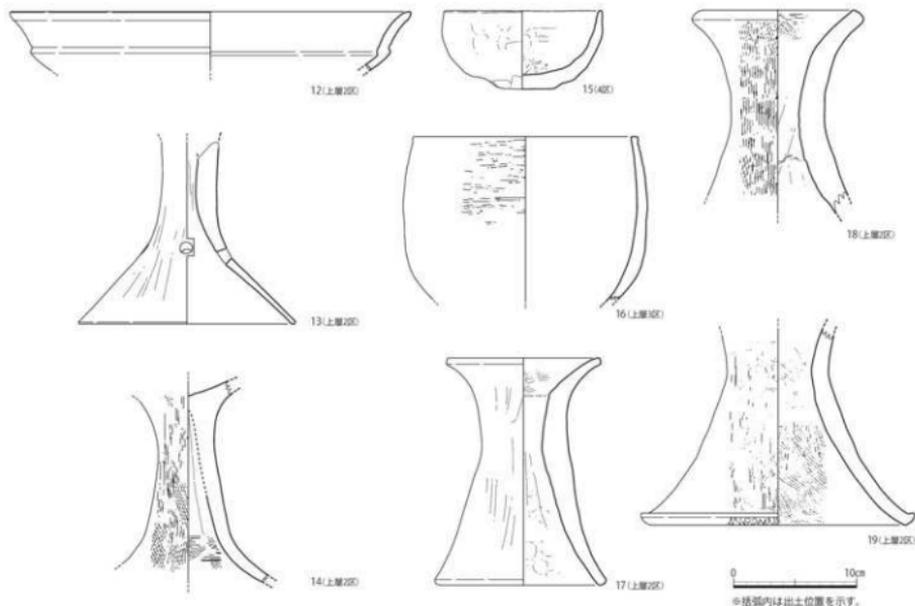
調査区やや東で検出され、調査区を南北に縦断している溝である。規模は長さは37m+aで幅は0.4m前後、深さは約25cm～30cmを測る。北から南に向かって傾斜を持つ溝で、途中4号溝状遺構を切り、4号竪穴建物、1・2号溝状遺構に切られている。北端は調査区外の畦にぶつまっている為、延長は不明だが、調査区北で検出される6号溝状遺構がその延長上にあり、U字を呈する断面形状が似ていることから接している可能性が考えられ



第50図 3号溝状遺構実測図・遺物出土状況・土層断面図 (1/100・1/20・1/40)



第51図 3号溝状遺構遺物実測図1 (1/4)



第52図 3号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)

る。また北端付近では襖などがまとまって出土している。南端は、検出時にこの区画を掘り過ぎてしまったため、残存していたかどうかの判断をすることは出来なかった。

出土遺物 (第51・52図、写真図版28・29)

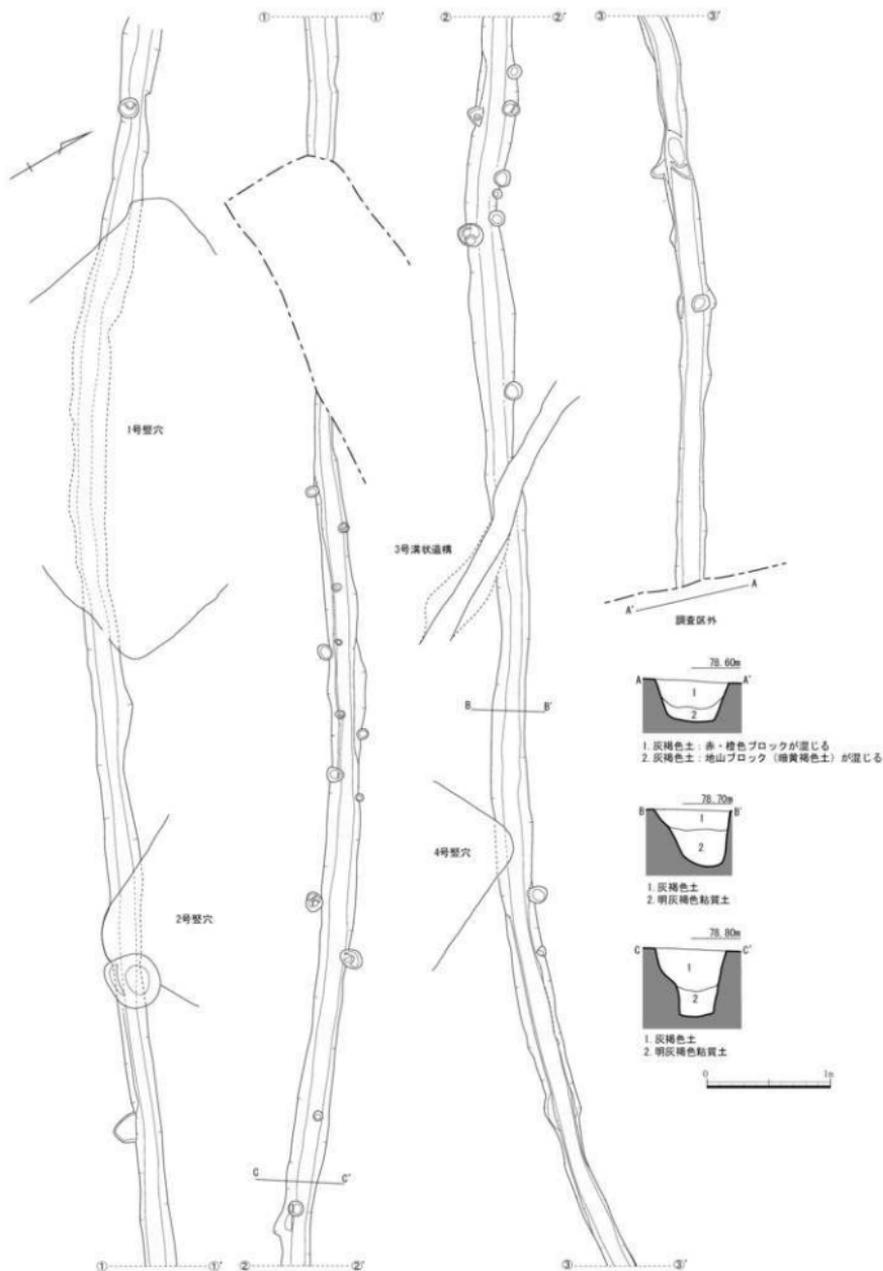
模式図を参考に遺物の出土位置に関して説明をおこなう。

上層からは1～5の弥生土器襖、8・9の甕や12・13の高坏、17などの器台が出土している。

下層からは6・7の弥生土器の底部が出土している。上流部の1～3区からは1・2、4～19が出土しており、下流部の4～5区からは3が出土しているのみであり、出土遺物のほとんどが上流部分に集中しており、下流部ではほとんど見られなかった。また、遺物の時期差は見られなかった。

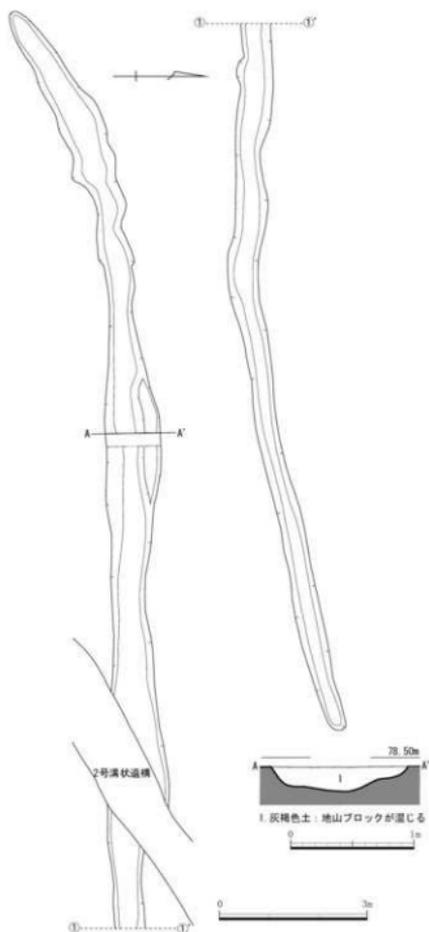
以下、番号順に説明をおこなう。

1～7は弥生土器の襖である。1～3の口縁部は外傾しながら直線的に短く立ち上がる。1・2の底部は平底で内面に指オサエが施される。1の内外面はハケ目で調整が施されており、ともにススが付着する。また、被熱による黒化も見られる。2は内面頸部付近で指オサエが施される。3の外表面はタタキが施される。内面は頸部より胴部にかけて赤色顔料が施される。4の底部はやや凸レンズ状を呈する。胴部やや下位に打ち欠きによる穿孔がある。内面には赤色顔料が施される。3と同一個体の可能性が考えられる。5～7は底部で5・6は平底で7はやや凸レンズ状を呈する。5・7は外面に被熱による赤化がみられる。8～11は弥生土器の甕である。8・9の口縁部は外反しながら短く立ち上がる。8は肩部から胴部中段にかけて大きく張り出し、底部は平底を呈する。内面は頸部と底部付近に指オサエが施され、被熱による赤化がみられる。9の口縁部は握み調整が施される。10・11は底部で10はやや凸レンズ状を呈し、外面底部付近に赤色顔料が施される。11は平底である。12～



第53図 4号溝状遺構実測図・土層断面図 (1/100・1/40)

14は弥生土器の高環である。12は坏部で屈曲し外反しながら口縁部に向かって立ち上がる。外面口縁部付近にススが附着する。13は柱部から端部に向かって緩やかに開く。穿孔が確認される。14の外面にはススが附着する。15は弥生土器の鉢である。口縁部に向かって垂直に立ち上がる。底部は平底に近い凸レンズ状を呈する。全体に被熱による赤化がみられる。16は鉢と考えられる。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。また外面にはタタキが施される。17～19は弥生土器の器台である。しまり部分はいずれも中段よりやや上位に位置する。17の内面には絞り痕が残る。18・19の外面にはハケメが施される。また、19の端部には刻み目文が施されている。



第55図 5号溝状遺構実測図・土層断面図 (1/100, 1/40)

4号溝状遺構 (第53図、写真図版9)

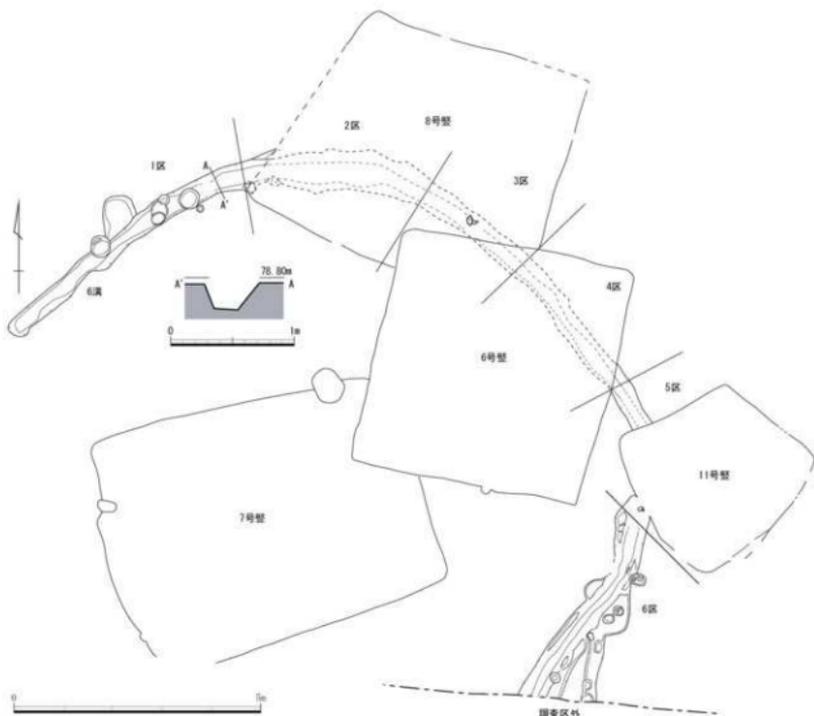
調査区やや北側、南東から北西に向かって横断する溝で、長さは約 $87\text{ m} + \alpha$ で幅は 0.5 m 前後、深さは $30\text{ cm} \sim 50\text{ cm}$ を測り、南東から北西に向かって傾斜している。一部で1・4号竪穴建物、3号溝状遺構に切られている。断面形状は、調査区外と接するA断面では逆台形状を呈し、B断面はU字状を呈し、C断面は形状を呈し、C断面の底面は平坦である。また、B・C断面は北側はほぼ垂直に立ち上がり、南側は傾斜を持ち緩やかに立ち上がる。また、いずれも埋土は灰褐色土が厚く堆積していることから、流れは緩やかであったと考えられる。このほか、2・3ヶ所で小さな張出部が検出されており、水田に関する水口などの可能性も考えられる。



第54図 4号溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)



第56図 5号溝状遺構出土遺物実測図 (1/4)



第57図 6号溝状遺構実測図・断面図 (1/100・1/40)

南東端は調査区外の畦にぶつかっている為、その延長を判断することができなかった。しかし、溝の方向から1号溝状遺構と合流していた可能性を考えることができる。須恵器などが一部で出土しているものの弥生時代と考えられる3号溝状遺構に切られていることから、それ以前の時期のものとして想定しておきたい。

出土遺物 (第54図、写真図版29)

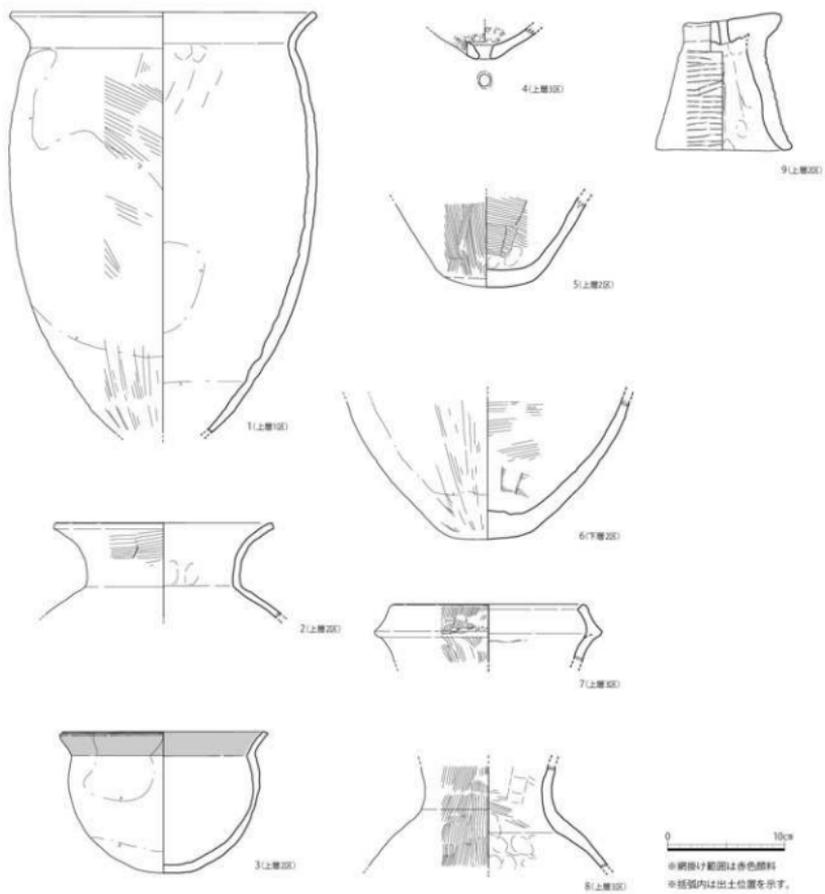
1は須恵器の環である。底部は回転ヘラ切り離しである。2は弥生土器脚付の裏と考えられる。

5号溝状遺構 (第55図、写真図版9)

調査区中央やや南側で検出され、調査区を東西に横断する溝である。規模は、長さは約33m+αで幅は1.0m前後、深さは20cm前後を測る。一部を2号溝状遺構に切られている。このほか、後述する7号溝状遺構とほぼ平行して検出されていることから、7号溝状遺構と一連の遺構の可能性も考えられる。東端は掘りすぎによって、西端は後世の削平によって溝全体の長さを確認することはできなかった。

出土遺物 (第56図、写真図版29)

1は硬玉製の小玉で両端から穿孔が施されている。その他には図示できる遺物は出土しなかった。



第58図 6号溝状遺構出土遺物実測図(1/4)

6号溝状遺構（第57図、写真図版10）

調査区北側で検出される。6・8・11号竪穴建物に切られている。7号竪穴建物を巡るように配置されている溝である。出土遺物も7号竪穴建物とほぼ同時期と考えられることから、7号竪穴建物に伴う排水施設の可能性を考えておきたい。規模は長さは12m + α で幅は0.4m前後、深さは20cmを測る。7号竪穴建物を中心に半径約7mの距離で周囲を巡る。断面形状は逆台形上を呈する。前述したように、3号溝状遺構とも時期が近く接する可能性が考えられることから、3号溝状遺構に接合して排水をしていた可能性も考えられる。

出土遺物（第58図、写真図版29）

上層からは1～3の弥生土器甕、4の弥生土器甕、7～8の弥生土器壺、9の支脚が出土している。

下層からは6の弥生土器甕と考えられる底部が出土している。また、出土遺物は主に上流部（1～3区）から弥生時代後期と古墳時代前半の二つの時期に分けられると考えられるが、新しい時期の遺物に関しては、複数切り合っている竪穴建物からの流れ込みの可能性が高いものと考えられる。

以下、番号順に説明をおこなう。

1は土師器の甕である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、長い胴を持つ。2は土師器の甕である。口縁部は外反しながら立ち上がり、端面断面形状は方形を呈する。3は土師器の鉢である。口縁部は外傾しながら直線的に短く立ち上がる。外面にはススガ、内面口縁部には赤色顔料が付着する。4は土師器の単孔の甕である。5・6は弥生土器の甕である。ともに底部で5は凸レンズ状を呈し、6はやや丸みを持った底部を持つ。7・8は弥生土器の甕である。7は複合口縁を呈する。8は頸部から肩部にかけて残存しており、内面肩部付近に指頭圧痕を残す。また、7と同一個体であると考えられる。9は弥生土器の支脚である。外面にはタタキが施され、内面には絞りが残る。外面には被熱による黒化がみられる。上部には穿孔が1個確認される。

7号溝状遺構（第59図、写真図版10）

調査区ほぼ中央で検出され、調査区を東西に横断する溝である。1号溝状遺構に切られており、切り合う部分では3号溝状遺構と同様に遺物が一括して出土している。また、そこから西に向かうと北側2ヶ所で張り出しが見られる。前述したように5号溝状遺構と平行に検出されていることから、合わせて水田に伴う水路の可能性を考えたことが出来る。断面形状はU字状を呈する。淡灰色土が厚く堆積していることから、流れは緩やかであり、廃絶時に一気に埋没した可能性を考えたことができる。規模は、約54m + α で幅は0.5m前後、深さは約25cmを測る。東端は1号溝状遺構に切られており、中央付近では8号掘立柱建物に切られている。また、西端はその他の遺構と同様に削平により全体を確認することはできなかった。遺構からは弥生土器が多く出土している。

出土遺物（第60・61図、写真図版29・30）

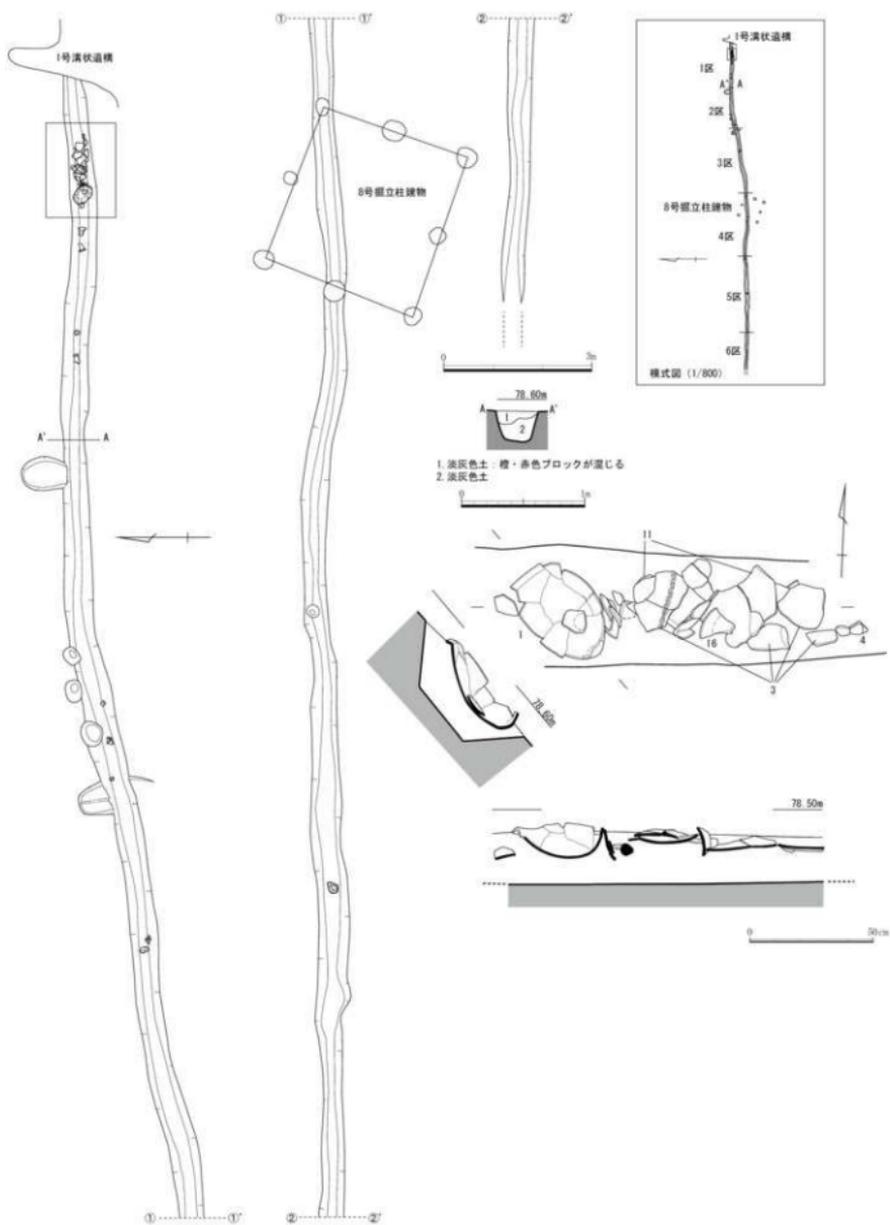
模式図を用いて遺物の出土位置について説明をおこなう。

上層からは2・3などの弥生土器甕、8・9などの高坏、11の壺や16の器台が出土している。

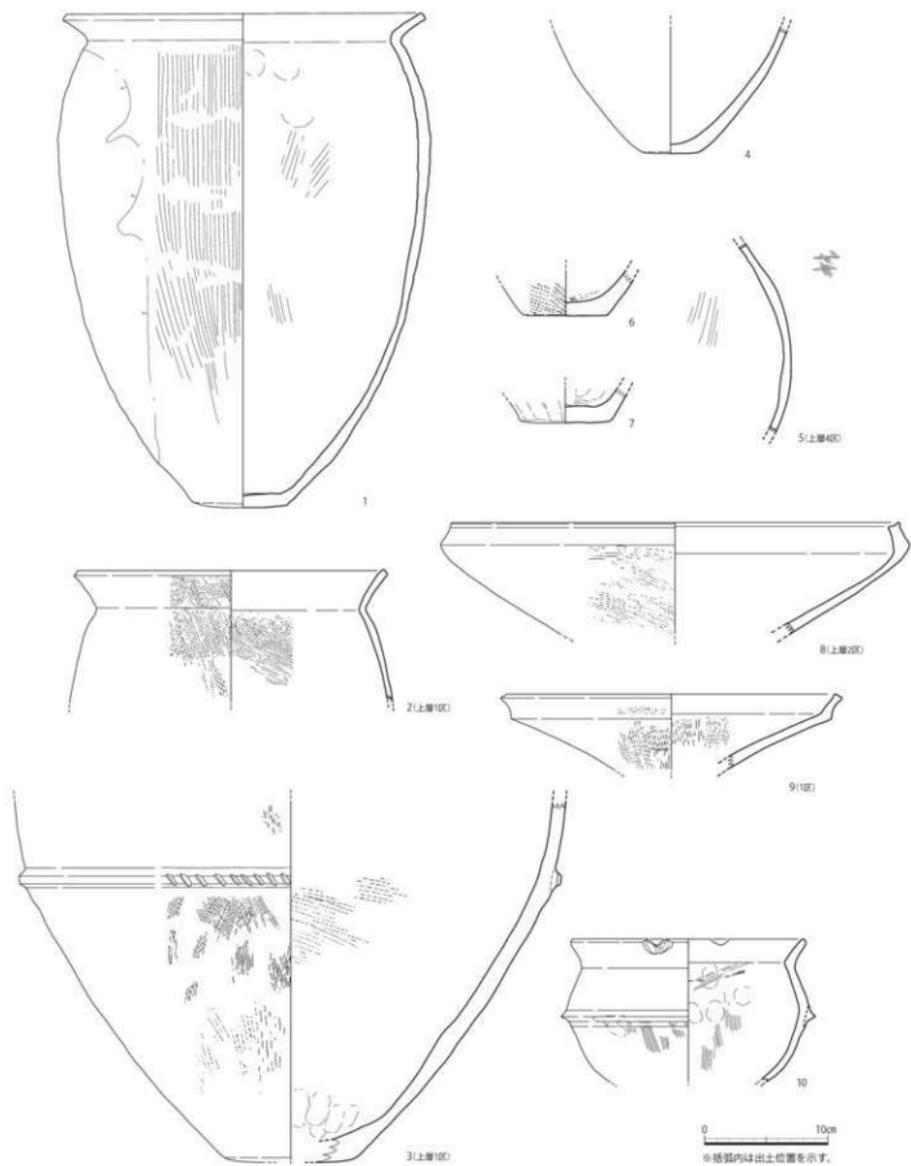
下層から明確に出土した遺物は確認されていない。また、出土位置は上流部と考えられる1～3区までがほとんどで、唯一4区上層から1点出土しているのみである。これらのなかで、はっきりとした時期差は見られなかった。

以下、番号順に説明をおこなう。

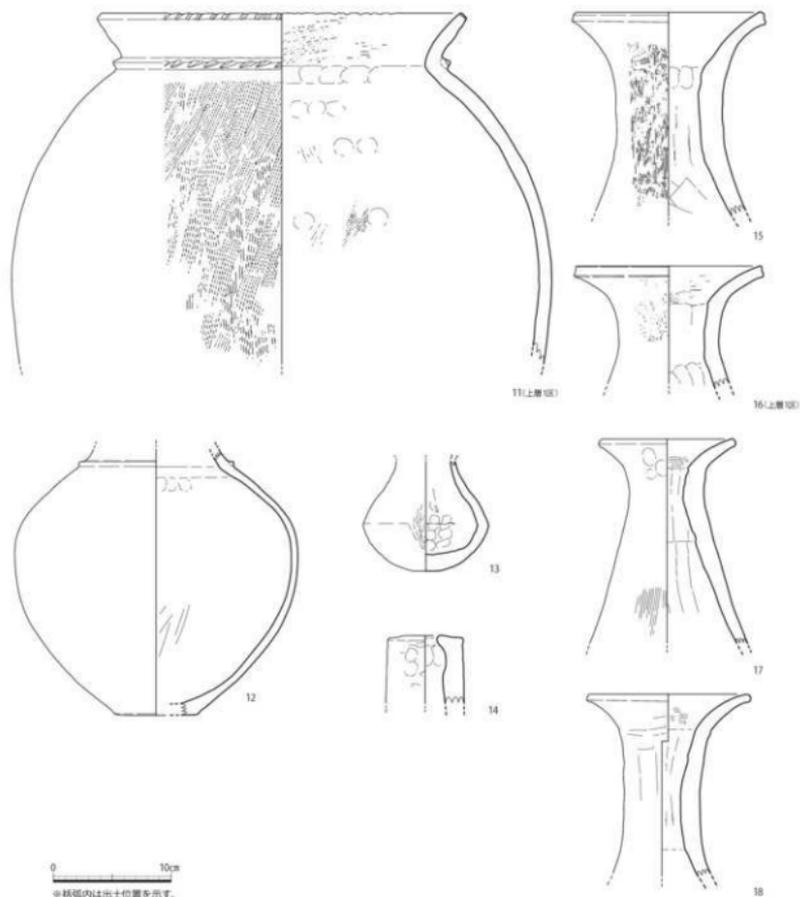
1～7は弥生土器の甕である。1の口縁部は強く外反し短く立ち上がる。所謂くの字状口縁を呈する。肩から胴部にかけて強らずに底部に向かう。また、底部は丸底に近い凸レンズ状の底部を呈する。内外面にはススが付着する。2の口縁部は外反しながら立ち上がる。外面口縁部付近には被熱による赤化がみられる。3・4の底



第59図 7号溝状遺構実測図・遺物出土状況実測図・土層断面図 (1/100・1/20・1/40)

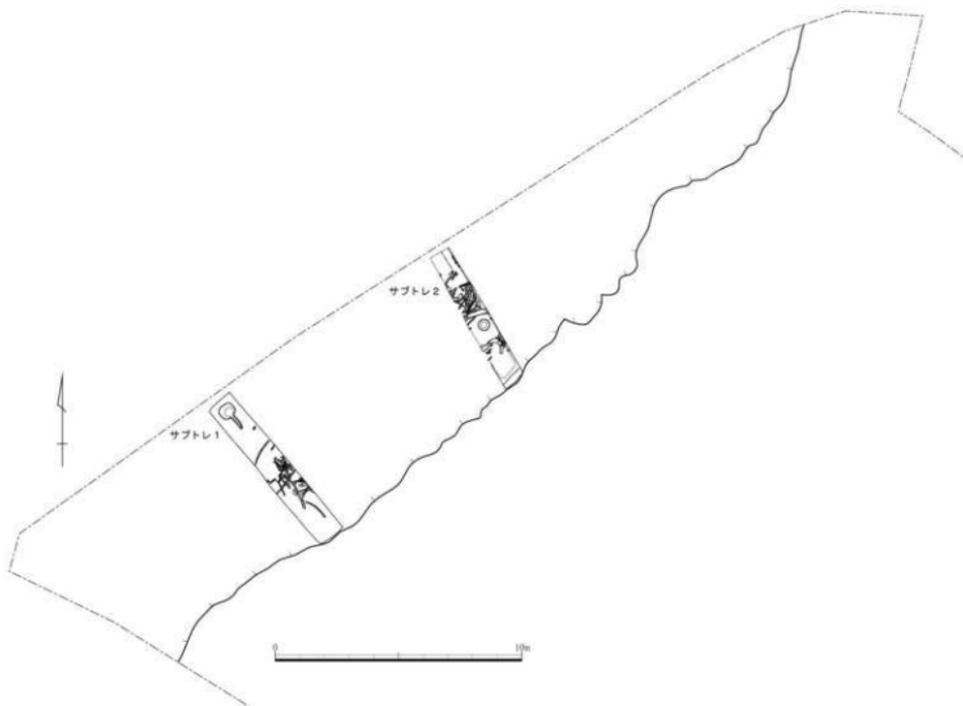


第60図 7号溝状遺構出土遺物実測図1(1/4)

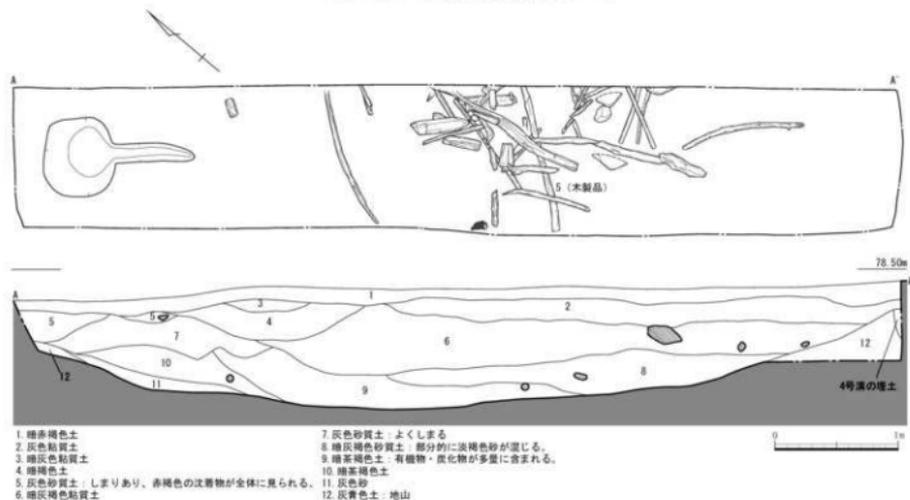


第61図 7号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)

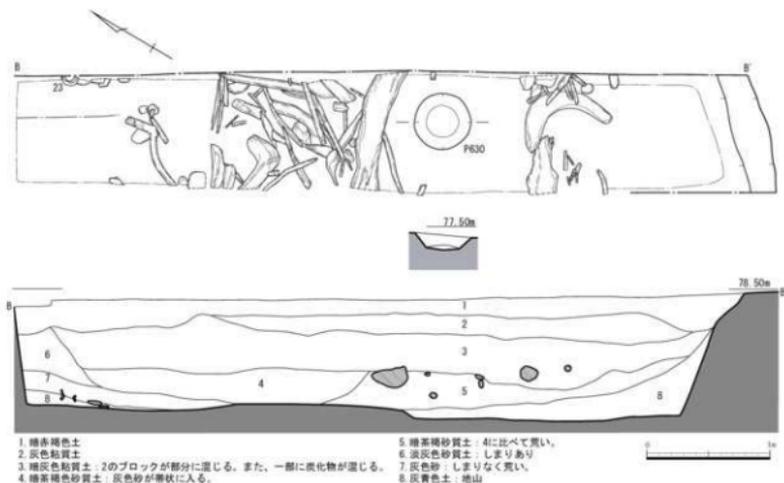
部は平底を呈する。3の外面部には刻み目突帯が付される。また、底部内面には指頭圧痕が残る。5は胴部で内外面にハケ目が施される。6・7の底部は平底である。8・9は弥生土器の高環である。8の口縁部は内湾し短く立ち上がる。また、端部は方形を呈し、頂部を窪ませる。9の口縁部は外反ししながら短く立ち上がる。口縁端部は方形を呈し、頂部を窪ませる。外面口縁部に被熱による赤化がみられる。10は弥生土器の鉢と考えられる。口縁部は緩やかに外反し立ち上がる。また、一部に打ち欠きがみられる。胴部には突帯が貼り付けられる。11～13は弥生土器の壺である。11の口縁部は外反ししながら立ち上がり、所謂くの字状口縁を呈する。口縁端部には刻み目文が、頸部には刻み目突帯が付される。12の頸部には突帯が付される。内面頸部付近には指オサエが施される。底部は平底を呈する。13の胴部最大径が中位よりも下段に来る。内外面は被熱による黒化がみられる。底部は丸底に近い。外面はミガキが、内面は指オサエが施される。14は弥生土器の支脚である。内外面



第62図 8号溝状遺構実測図 (1/200)



第63図 8号溝状遺構(サブトレンチ1) 実測図及び土層断面図 (1/40)



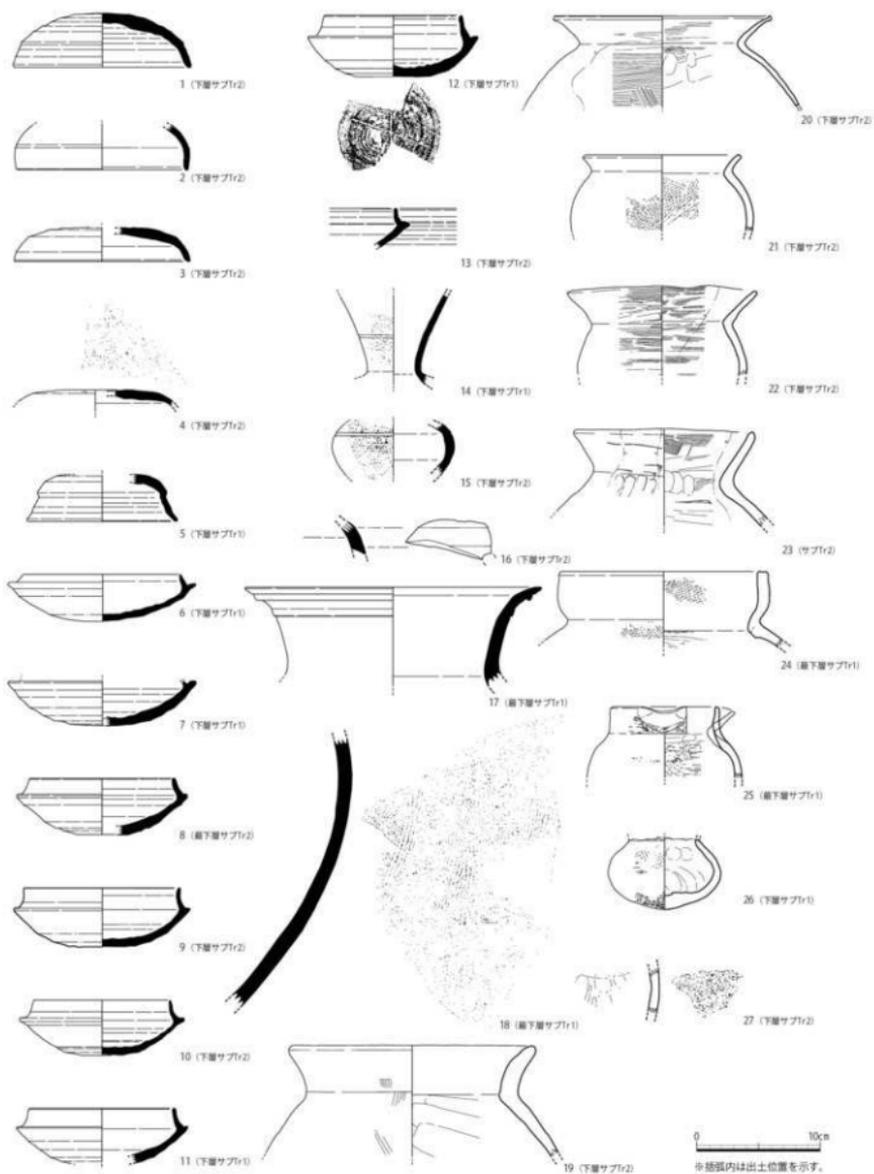
第64図 8号溝状遺構（サブトレンチ2）実測図及び土層断面図（1/40）

に指オサエが施され、頂部に穿孔が確認される。15～18は弥生土器の器台である。15・18の内面には絞り痕が残る。17の外面には被熱による赤化がみられる。いずれの器台もくびれの位置が中段よりもやや上位にある。

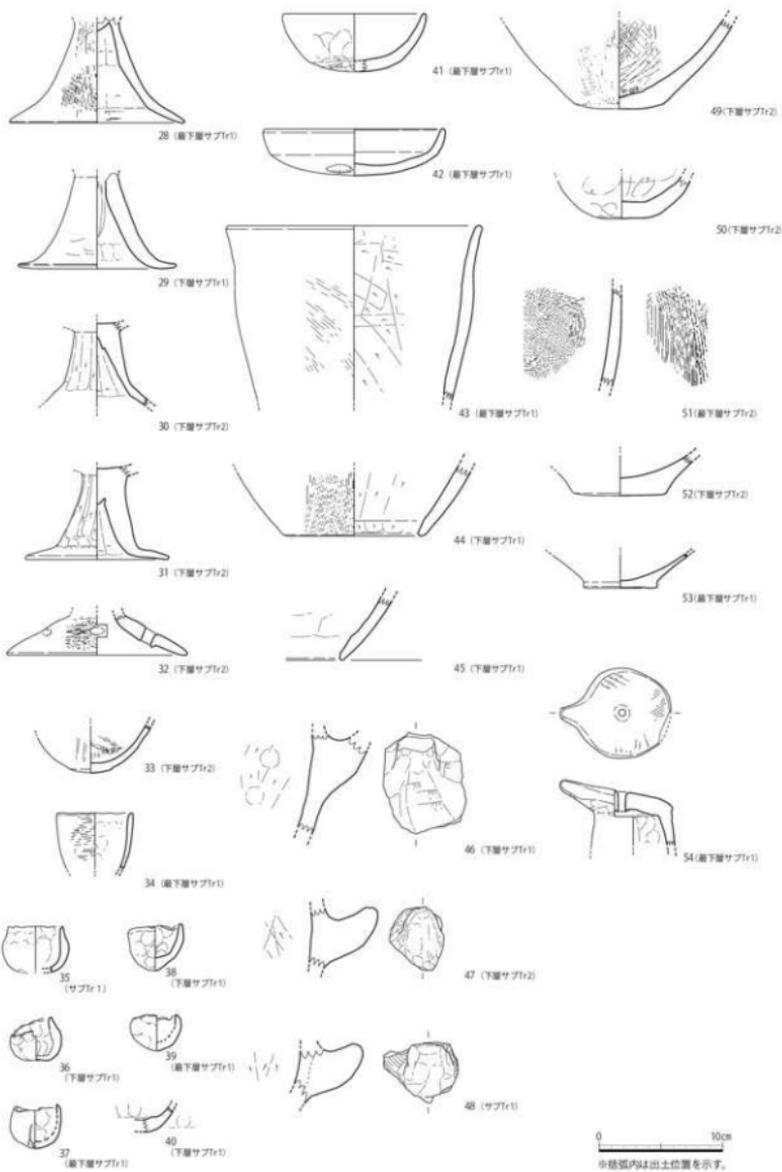
8号溝状遺構（第62～64図、写真図版10～12）

調査区の最も北側で検出され、調査区を北東から南西に向かって流れる溝である。工事によって遺構が損なわれることがなかった為遺構検出に留め、2ヶ所にトレンチを設定して規模などの確認を行った。サブトレンチ1は長さ約7mで幅は1.2m、深さは最も深いところで1mを測る。サブトレンチ2は長さ6mで幅1.2m、深さは最も深いところで約90cmを測る。これらのトレンチから8号溝状遺構の規模は、長さは38m+aで幅は最も広いところで約7.0m、深さは1m前後を測り、北東から南東に向かって流れていたと考えられる。また、サブトレンチ1の土層断面から、下層に灰色砂（12層）や暗茶褐色土（9・10層）が堆積しており、中段に暗灰褐色の粘質土（6層）が検出されていることなどから、水の流れがあり、時間をかけて埋没をされていたものと考えられる。また、4号溝状遺構を切っていた。サブトレンチ2の土層からはサブトレンチ1と同様に下層から暗茶褐色砂質土（4・5層）が確認されており、ある程度水の流れがあったものと考えられる。この遺構から出土した木製品などは主に、サブトレンチ1の8・9層とサブトレンチ2の4・5層で多く出土している。

溝の方向と調査区北側を流れる二串川が近いことから、この遺構は二串川から水を引くための溝であったと考えられる。また、トレンチ2底部からは種実が大量に出土したピット（P630）が検出されている。この種実は第4章自然化学分析によって弥生時代後期という結果が出ている。このピットは検出段階で上部のほとんど削平されているものと考えられ、断面形状は半円形を呈している。出土遺物は、土器などの他に木製品、木材や自然木が多量に出土しており、今回確認できなかったが、近辺には、井堰などの水を溜めておく施設があった可能性が考えられる。主な時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。また、一部に弥生土器が出土しているが、これは前述したピット（P630）が削平されたことによる混入の可能性が考えられる。



第65図 8号溝状遺構出土遺物実測図1 (1/4)



第66図 8号溝状遺構出土遺物実測図2 (1/4)

出土遺物（第65・66図、写真図版30～33）

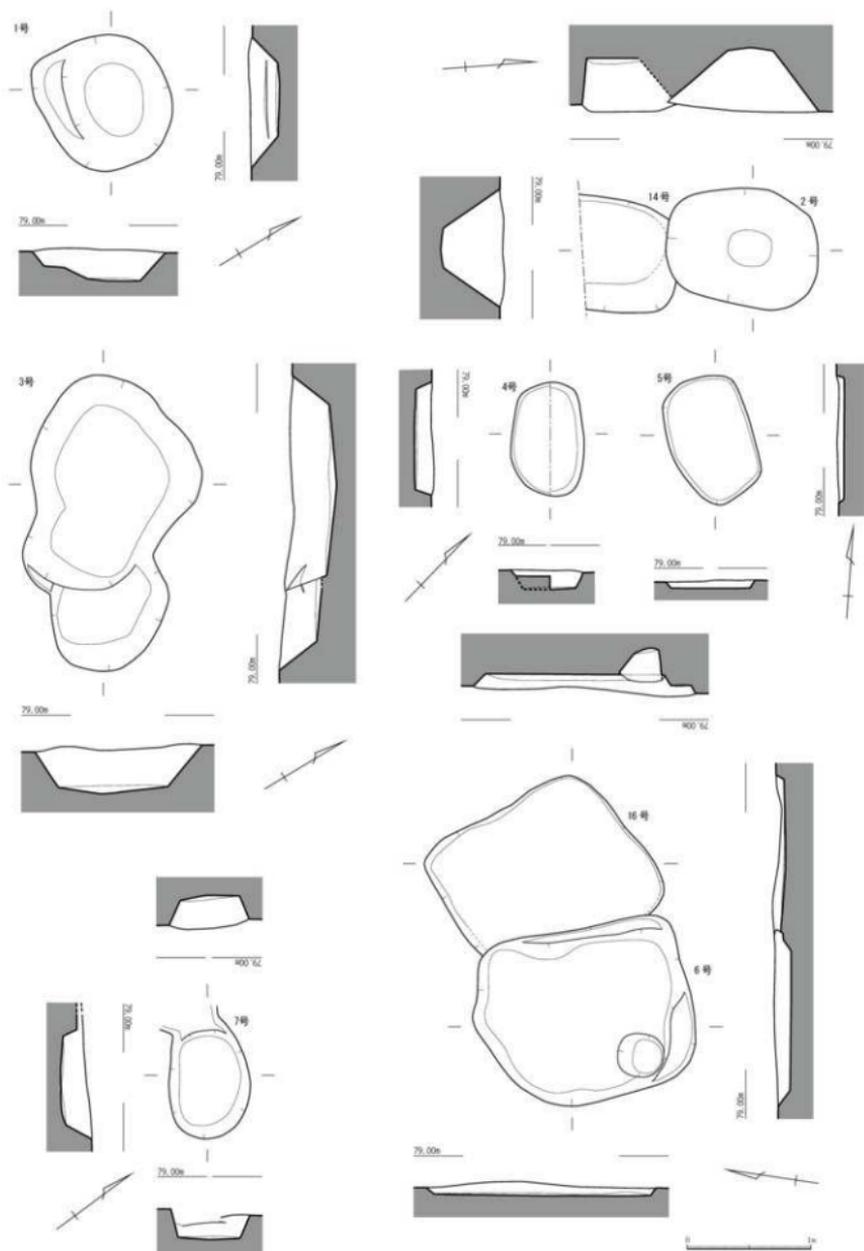
出土位置について、上層・下層・最下層とに分けて説明を行う。ここでの分層は、層序ごとに定めたものではなく、遺構検出面から底部までを大きく2分割し、更に底部付近（サブトレンチ1では8・9・11、サブトレンチ2では4・5・7・8周辺）から出土した遺物に関して最下層として分類している。

上層からは35のミニチュア土器、48の土師器壺が出土している。

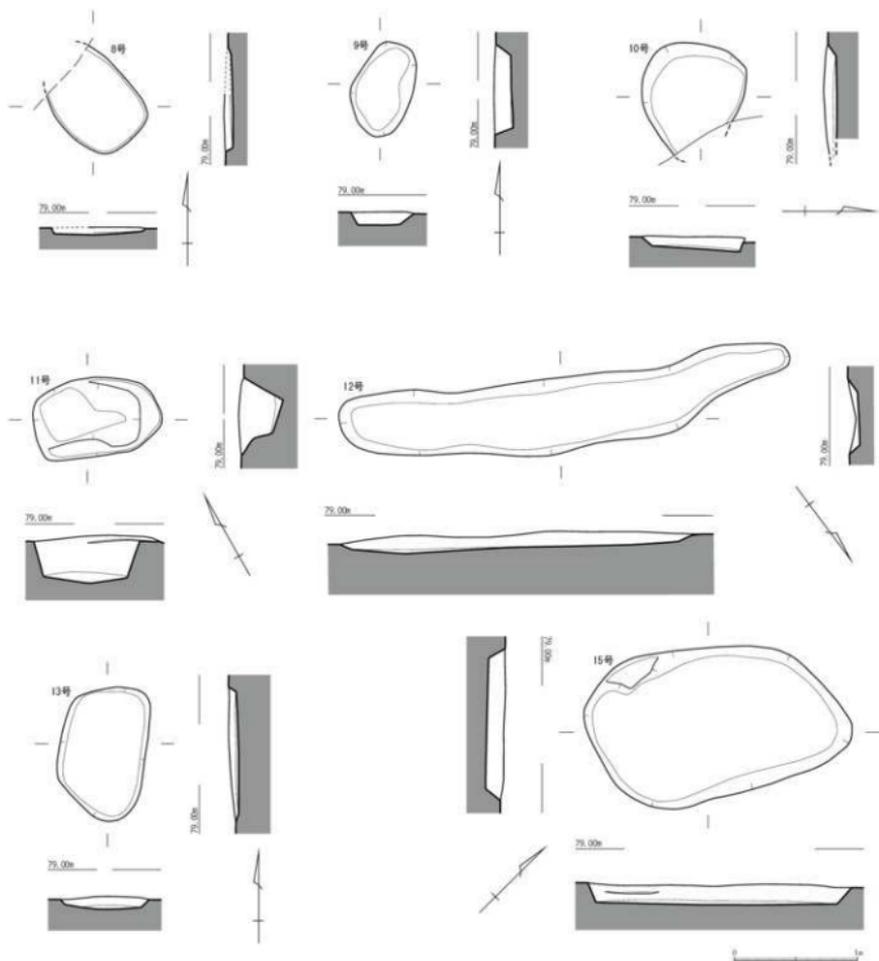
下層からは主に1～5の須恵器杯蓋、6・7などの須恵器杯身、19などの土師器甕、26の小型丸底甕、29などの高杯、36などのミニチュア土器や49の弥生土器甕と考えられる底部などが出土している。

最下層からは8の須恵器杯身、17・18の須恵器甕、24などの土師器壺、28の土師器高杯や41の杯、54の支脚などが出土している。上層からの出土はほとんどなく、主に下層・最下層からの出土がほとんどであった。また、一部に縄文・弥生土器が出土しているものの、ほとんどが古墳時代後期で取まるものと考えられることから、長期間使用されたような溝ではなかったと想定される。

1～5は須恵器の杯蓋である。1は外面へラ削りが施され、細かく稜が形成される。また、天井部と口縁部の境に明確な段を持ち、内面には付着物がある。2は内外面とも調整不明瞭であるが、天井部と口縁部の境には明瞭な段を持ち、口縁端部には稜が形成される。3は外面へラ削りが施され、口縁端部には段が形成される。4は外面へラ削りが施され、自然軸がかかる。このほか外面にはへラ記号が施される。5は外面へラ削りが施され、細かく稜が形成される。屈曲部で段を形成し、外傾しながら広がる。口縁端部には摘み調整がほどこされる。6～13は須恵器の杯身である。6・8は立ち上がり部が内傾し、直線的に立ち上がる。6の外面はへラ削りが施され、稜が形成される。8の口縁端部には摘み調整が施され、外面にはへラ削りが施される。7の外面はへラ削りが施され、細かく稜が形成される。9～13の立ち上がり部は口縁端部に向かって一度屈曲した後に、垂直に立ち上がる。9・10・12・13の屈曲部には稜が形成される。11・12の端部は摘み調整が施される。また、12の外面底部にはへラ記号が施される。13の外面はへラ削り施され、細かく稜が形成される。14～16は須恵器の甕である。14は口縁部から頸部にかけての破片で中段付近に線刻がある。また、頸部付近には波状文が施される。15は胴部で外面はハケメが施される。16は胴部片であると考えられる。穿孔の一部が残存しており、内面には被熱による焼き膨れによる割れが確認できる。17・18は須恵器の甕である。17の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で大きく外反する。また、端部には断面三角形の突帯が2条施される。（内、1条はほとんど三角を呈していない。）18は胴部で外面全体にハケメが施される。19～23は土師器の甕である。19の口縁は外反しながら立ち上がる。また、口縁部は厚みがあり、外面にはススが付着する。内面は被熱による剝離が見られる。20の口縁部は強く外反しながら立ち上がる。また、口縁端部は摘み上げられ、全体的に器壁は薄い。外面にはススが付着する。21の口縁部は外反ながら短く立ち上がる。外面にはススが付着する。22の口縁部は外反しながら立ち上がる。また、歪みがみられる。内外面共に工具ナデが施される。このほか、外面は被熱による黒化がみられる。23の口縁部は若干内湾しながら外傾しながら立ち上がる。内面外面共に頸部付近で指オサエが施される。24～27は土師器の甕である。24の口縁部は内湾しながら垂直に立ち上がる。口縁断面は方形を呈する。25の口縁部は垂直に立ち上がり、注口がつく。26の口縁部は打ち欠かかれている。内面底部には指ナデが施される。また底部にはヒビ割れがみられる。27は胴部と考えられ、外面には線刻が施される。28～32は土師器の高杯である。28～30の脚部は端部に向かってなだらかに開く。28の外面は全体にハケ目が施される。内面は工具ナデが施される。29は脚部端部で若干外反する。内面には絞り痕が残る。外面には工具痕が施される。30は内外面共にケズリが施される。31は脚部端部付近で大きく外反して外に開く。内外面にケズりおよび横ナデが施される。32は短脚で端部に向かって大きく開く。穿孔が2個確認されている。33～40は土師器の鉢である。これらはいずれもミニチュア土器である。34～36・38・40は内外面に指オサエが施される。41・

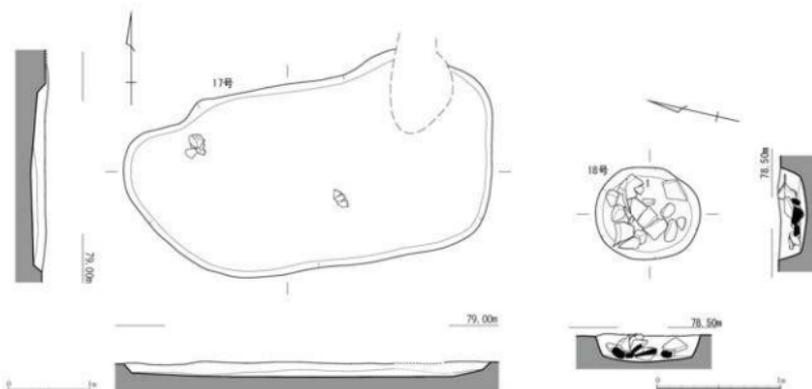


第67图 土坑实测图1 (1/40)



第68図 土坑実測図2 (1/40)

42は土師器の坏である。41の口縁部は直口縁でほぼ垂直に立ち上がる。外面に指ナデが施される。このほか1～3mm程度の赤色粒子が多く含まれる。42は浅い坏である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。外面にはススが付着する。また外面底部付近には剥落がみられる。43～49は土師器の甗である。43・44は単孔の甗で、43の内面にケズリが施され、外面はナデが施される。44は外面ハケ目が施され、内面はケズリが施される。45は単孔の甗か、内外面に横ナデが施される。46～48は取手で46は外面に工具痕が残る。47・48は内面をケズリが施され、外面は指オサエが施される。49～51は弥生土器の甗である。49は平底の底部で内外面にナデが



第69図 土坑実測図3 (1/40・1/60)

施される。外面全体にススが付着している。50は平底の底部で内外面に指オサエが施される。また、外面底部には布目痕が残る。51は胴部で内面にハケ目が施され、外面はハケ目後にタタキが施されている。52は縄文土器鉢の底部と考えられる。磨耗の為に内外面共に調整は不明瞭である。53は縄文土器の鉢と考えられる。平底である。内外面は磨耗の為、調整は不明瞭である。54は弥生土器の支脚である。頂部には穿孔がある。外面はタタキが施され、内面には指オサエが施される。

4. 土坑 (第67～69図、写真図版12・13)

土坑は調査区全体で確認されており、特に北側で多く見られる。しかし、平面形が不定形のものや深さが異なるものなどが多い。その中には近世以降の擾乱や自然地形の落ち込みと考えられるものも多く見られる。今回は遺物が出土したものや、埋土がその他の遺構に類似したものに関して報告する。なお、出土遺物については全体に少量であった為、この項目の最後にまとめて報告する。

1号土坑

調査区の北側で検出された。調査区を南東から北西に向かって流れる4号溝状遺構を切る形で検出されている。東西、南北ともに約1.0mで円形を呈し、深さは約20cmを測る。西端にテラスを持ち、底面はほぼ平坦である。

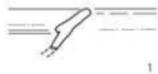
2号土坑

調査区北側で検出された。平面形は南北1.2m×東西0.9mの楕円形を呈し、深さは約50cmを測る。底面はほぼ平坦である。後述する14号土坑を切っている。

3号土坑

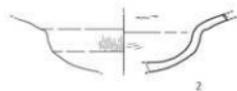
調査区北側で検出された。2号竪穴建物の北西隅を切っている。平面形は南北2.4m×東西1.3mの楕円形で、深さは最も深い所で34cmを測る。底面は中心が下がりにレンズ状を呈する。出土遺物として陶磁器片が出土している。

3号土坑

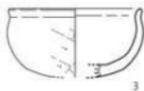


1

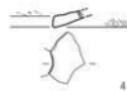
6号土坑



2



3



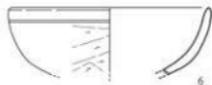
4

8号土坑



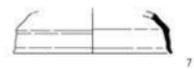
5

12号土坑

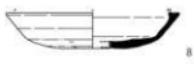


6

17号土坑



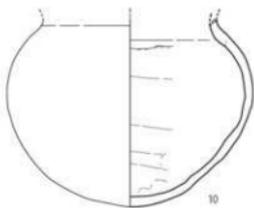
7



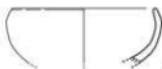
8



9



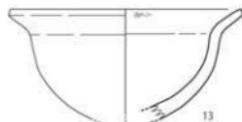
10



11

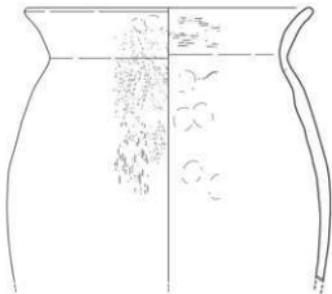


12

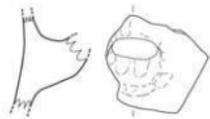


13

18号土坑



15



14



16

0 10cm

第70图 土坑出土遗物实测图(1/4)

4号土坑

調査区北側で検出された。平面形は南北1.0m×東西0.7mの楕円形で、深さは約20cmで、底面はほぼ平坦である。

5号土坑

調査区北側、9号竪穴建物付近で検出された。平面形は南北1.0m×東西0.7mの楕円形で、深さは約6cmと非常に浅く、底面はほぼ平坦である。

6号土坑

調査区中央より北側で検出された。平面形は南北約1.8m×東西約1.4mの楕円形で、深さは最も深い所で検出面から約14cmと浅い。底面はほぼ平坦で、隣接する16号土坑を切っている。出土遺物も少量ながら出土している。

7号土坑

調査区北側、土坑の中でも最も北側で8号溝状遺構の近くで検出された。平面形は北東-南西約0.6m×南東-北西約0.9mの楕円形で、深さは最も深い所で検出面から約24cmを測る。

8号土坑

調査区北側、東寄りの調査区境界付近で北側でも比較的遺構密の低い場所で検出され、東側一部を近世の掘削で削平を受けている。平面形は南北0.8m×東西約0.8mのやや楕円で、深さは検出面より約8cmと非常に浅い。

9号土坑

調査区北側、5号土坑の南側、9号竪穴建物付近で検出された。平面形は南北約0.9m×東西0.5mの楕円形で、深さは検出面より最も深い所で16cmを測る。底面はほぼ平坦である。

10号土坑

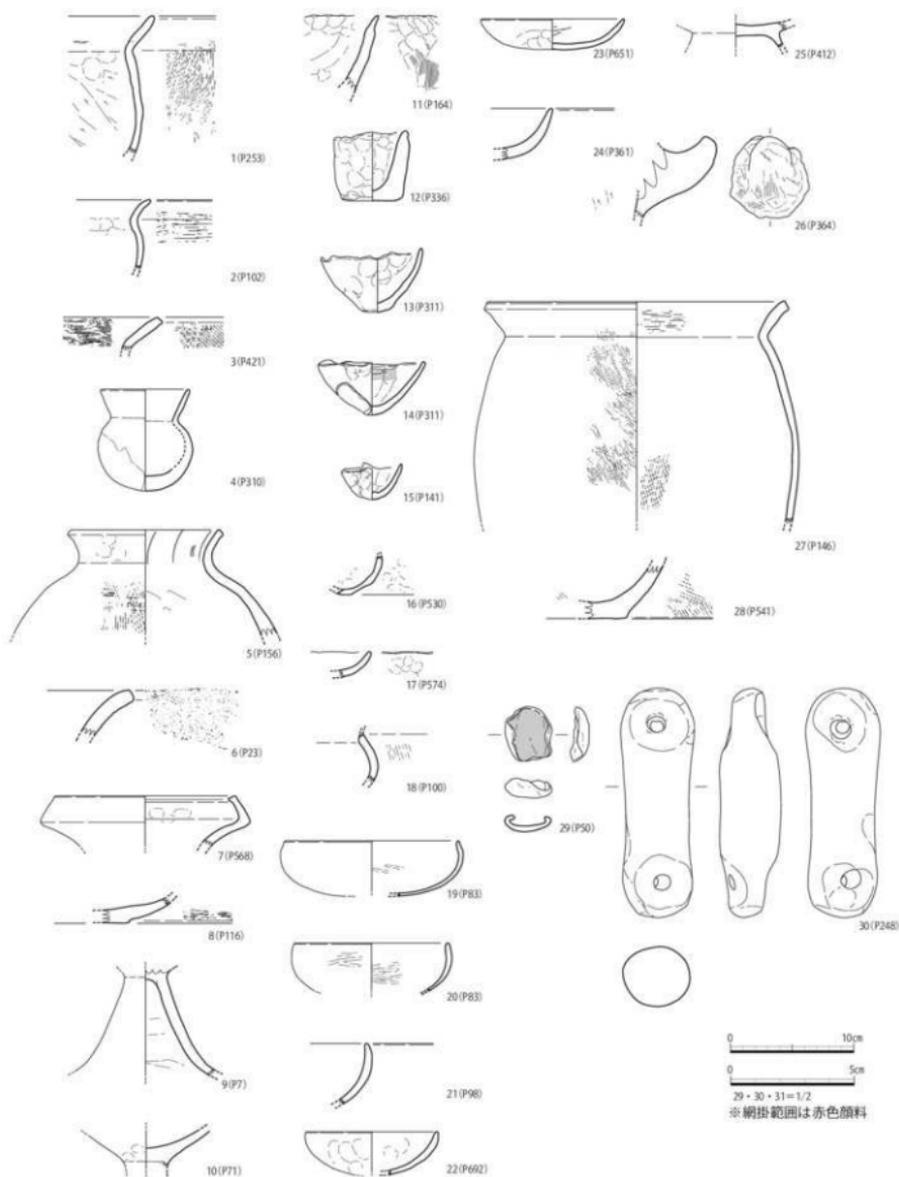
調査区北側で検出され、東側の一部を3号溝状遺構に切られている。平面形は南北0.8m×東西0.7（残存部）で楕円形を呈すると考えられる。深さは検出面より最も深い部分で約12cmを測る。底面は北側に向かって緩やかに下がっており、平坦である。

11号土坑

調査区北側、検出された。平面形は北東-南西約0.6m×北西-南東1.0mの楕円形を呈する。深さは検出面より最も深い所で40cmを測る。東側に一部テラスを持つ。底面は中央が下がる。

12号土坑

調査区北側で検出された。平面形は北東-南西0.6m×北西-南東約2.9mで非常に長い楕円形を呈する。深さは検出面よりも最も深い所で約14cmを測る。底面はほぼ平坦である。



第71図 ビット出土遺物実測図 (1/4・29～31は1/2)

13号土坑

調査区の北側、3号竪穴の西側で検出された。平面形は南北1.1m×東西0.7mでやや楕円形を呈する。深さは検出面より約8cmと非常に浅い。底面はほぼ平坦である。

14号土坑

調査区北側、2号竪穴建物の南側で2号土坑に北側の一部を切られた状態で検出された。南側半分は調査区外に伸びており、全体は確認できなかった。確認できる範囲でその規模は、南北0.7m+ α ×南北0.9mで楕円形を呈すると考えられる。深さは検出面より50cmを測る。底面は中央がやや下がる。

15号土坑

調査区北側で検出された。平面形は北東-南西2.1m×南東-北西1.2mの楕円形を呈し、深さは検出面より約15cmを測る。底面はほぼ平坦である。南東側に一部にテラスが確認できる。

16号土坑

調査区北側で検出された。西側を6号土坑によって切られている。平面形は南北約1.8m×東西1.3mの楕円形を呈する。深さは検出面より約10cmを測る。平面はほぼ平坦である。

17号土坑

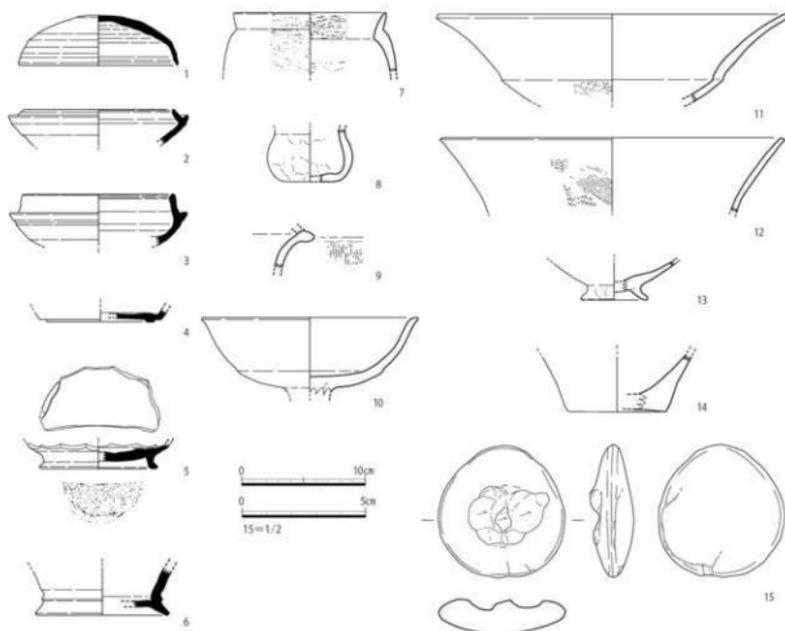
調査区のほぼ中央で検出された。北東の一部を擾乱によって切られている。平面形は南北2.3m×東西4.5mの楕円形を呈し、深さは検出面より約20cmを測る。今回確認された土坑の中で最も大きい。平面はほぼ平坦である。遺物も比較的多く出土している。

18号土坑

調査区南側で1号溝と2号溝の間で検出された。平面形は南北0.8m×東西0.7mでほぼ円形を呈し、深さは検出面より約20cmを測る。底面は中央が下がりレンズ状を呈する。遺構からは土器以外に礫が多く出土している。その用途は不明だが、廃棄土坑の可能性を考えておきたい。

出土遺物（第70図、写真図版33・34）

1は3号土坑から出土した陶器の皿である。口縁部は肥厚しており、内面には段が付く。内外面には鉄軸が施される。2～4は6号土坑から出土した遺物である。2は土師器の高杯で、口縁端部付近で外反し大きく外に開く。内面にはミガキが施される。3は土師器の杯である。口縁部に向かって内湾しながらほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で若干外反し外に開く。4は土師器の甌である。穿孔部分の一部が残存しており、多孔式の甌底部と考えられる。5は8号土坑から出土した弥生土器の甕である。口縁端部付近の破片で刻み目文が施される。6は12号土坑から出土した土師器の杯である。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。外面口縁端部付近では沈線が巡る。また外面では被熱による赤化が一部にみられる。7～13は17号土坑より出土した遺物である。7は須恵器の杯蓋で内外面ともに回転ナデが施される。口縁部に向かって段が形成され、垂直に降りる。端部は摘み上げによる調整が施される。8は須恵器の杯身で外面は回転ケズリが施される。受け部には若干の窪みがみられる。9は須恵器の壺と考えられる。口縁部は垂直に短く立ち上がる。外面肩部にはカキ目が施される。10は土師器の甕で底部は丸底を呈し、外面全体に被熱による赤化がみられる。内面にはススが付着する。11は土師器の杯である。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。内外面とも摩耗の為調整が不明瞭である。12は土



第72図 検出・攪乱出土遺物実測図 (1/4、1/2)

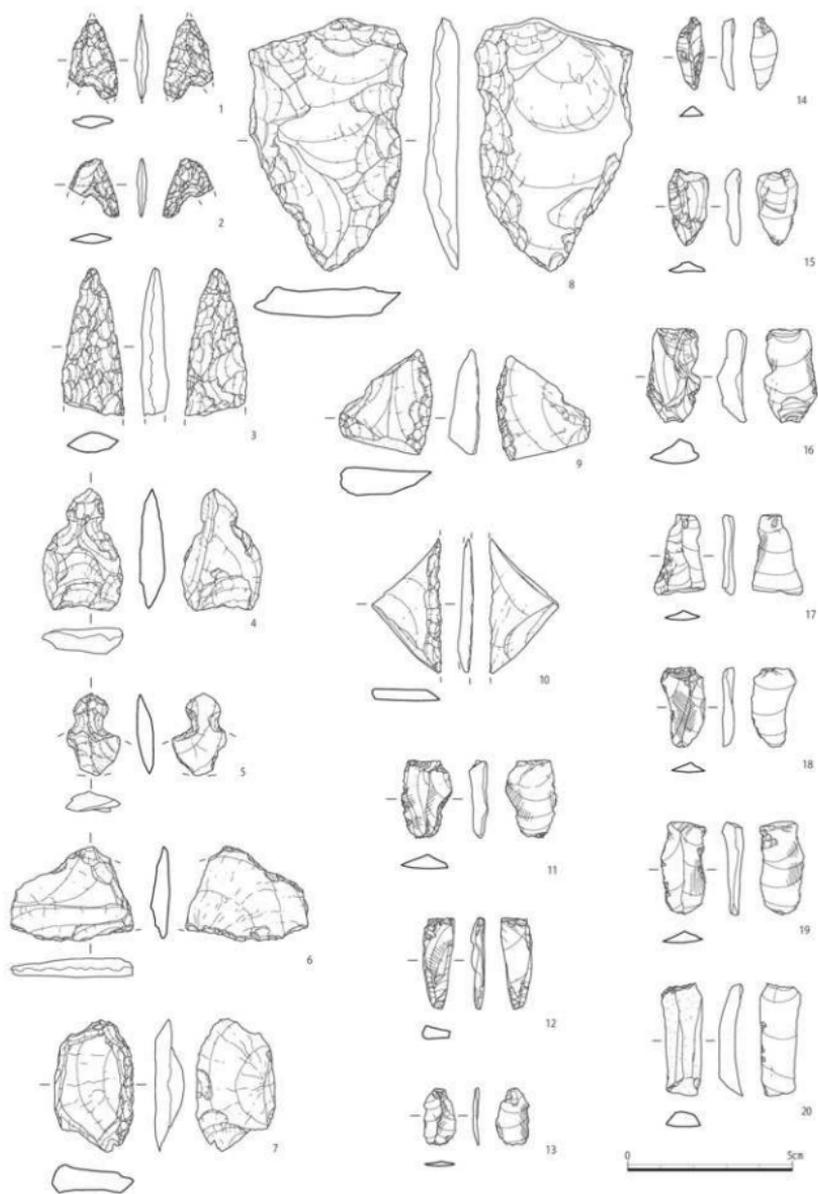
師器の甕把手である。外面には指オサエが施される。13は弥生土器の鉢である。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がり、端部付近で大きく外反する。胎土には1～3mm程度の砂礫が多く含まれる。14～16は18号土坑より出土した遺物である。14は土師器の甕把手である。外面は指オサエが施される。15は弥生土器の甕である。口縁部は外反しながら立ち上がる。外面口縁端部付近で指オサエが施される。頸部から肩部にかけてあまり張らずに胴部に向かう。16は弥生土器の甕である。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。また、端部断面は方形を呈する。内外面ともにハケ目が施されており、胎土には1～3mm程度の砂粒が多く含まれている。

5. ビット

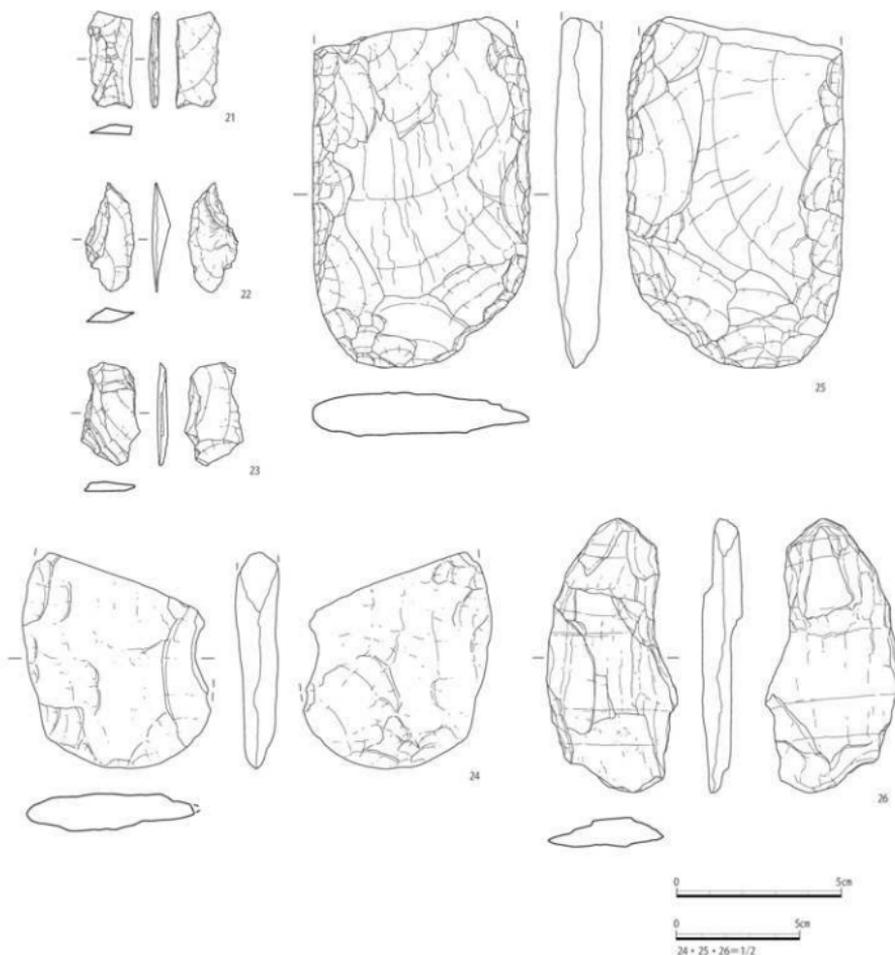
本調査区でビットは約700基以上検出している。その他の遺構と同様に多くは北側でその密度が高く、南にいくにしたがって密度が薄くなっていく。特に、5・7号竪穴建物周辺や、1～3号掘立柱建物周辺で多くみられる。この周辺に、他に建物が成立する可能性がある。ここでは、ビットから出土した主な遺物について解説する。
出土遺物 (第71図、写真図版3・4・3・5)

出土したビットに関しては附図及び第24・25表を参考にしていただき、ここでは遺物の器種ごとに説明をおこなう。

1～3は土師器の甕である。1の口縁部は外傾し、若干内湾しながら立ち上がる。外面はハケ目が施され、ススが附着する。内面は頸部付近で指オサエが施される。また、胎土に6mm程度の白色粒子が混じる。2の口縁部は

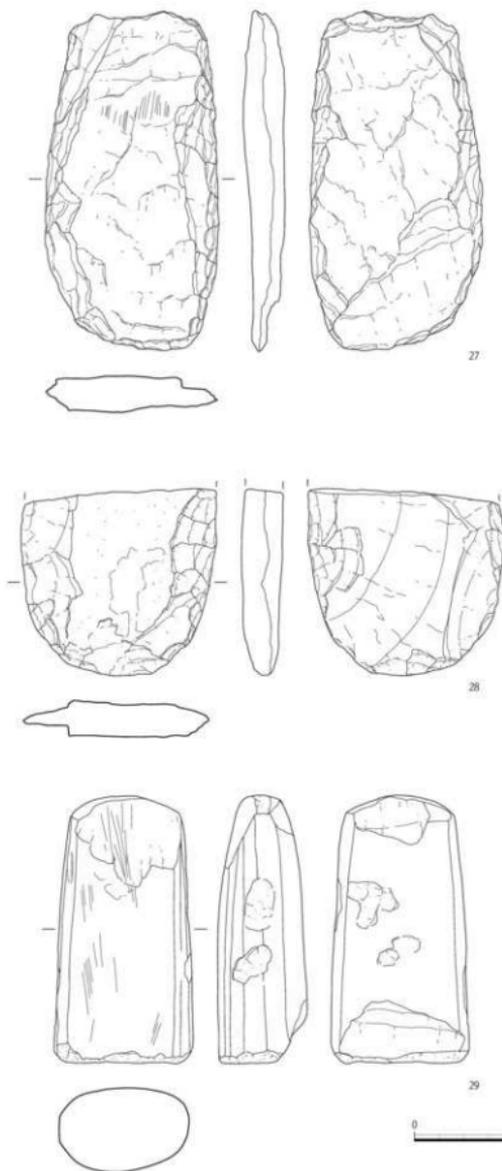


第73图 出土石製品実測図1 (2/3)

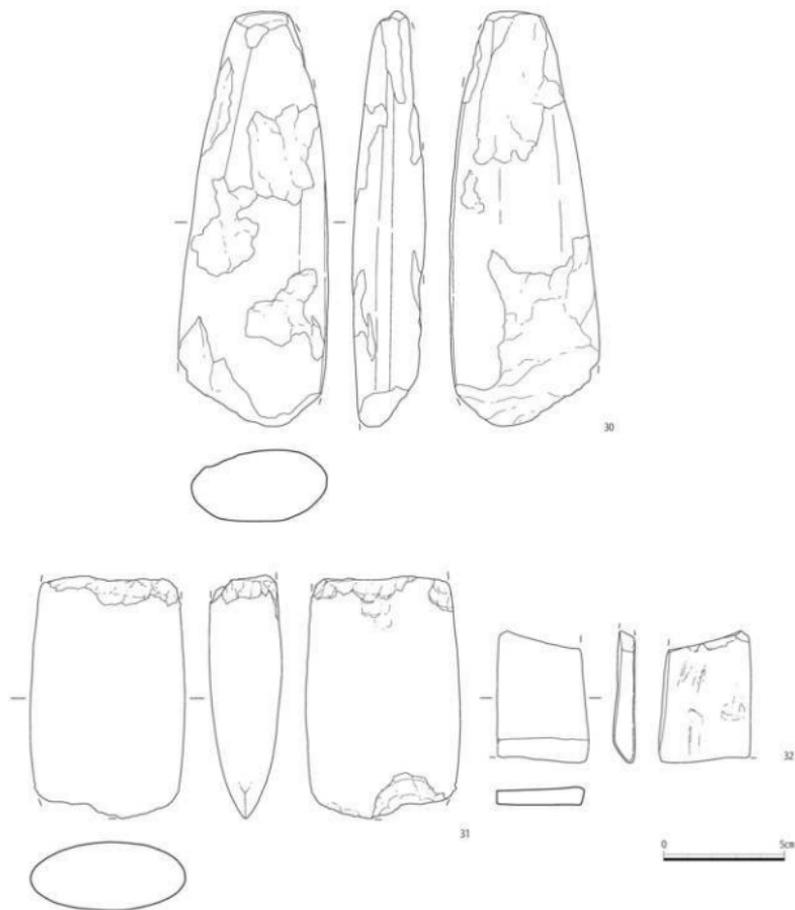


第74図 出土石製品実測図2 (1/4・1/2)

外反しながら立ち上がる。外面はタタキが施される。内面頸部付近は指オサエが施される。3は外傾し、直線的に大きく外に開きながら立ち上がる。断面形状は方形を呈する。4～8は土師器の壺である。4は小型丸底壺である。口縁部は外傾し直線的に立ち上がる。外面にはススが付着する。5の口縁部は外反しながら立ち上がる。外面口縁部には指オサエが施され、胴部にはタタキ後にハケメが施される。内面胴部には工具痕が残る。6の口縁部は断面形状が方形を呈し、外面には波状文が施される。7は複合口縁壺で屈曲部から内傾しながら直線的に立ち上がる。内面には指オサエが施される。8は底部で外面にタタキが施される。9～10は高坏で9の脚部

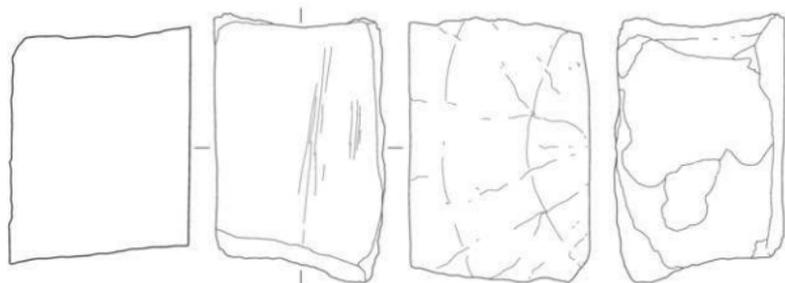


第75図 出土石製品実測図3 (1/4)

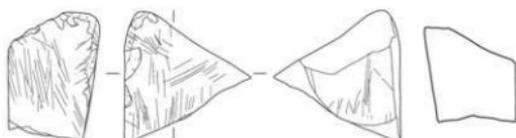
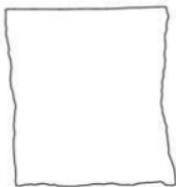


第76図 出土石製品実測図4 (1/4)

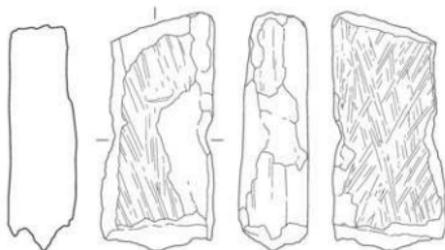
は端部に向かってスカート状に開く。内面にはナデが施される。10は坏部である。内外面ともに摩擦によって調整は不明瞭である。11～17はミニチュア土器の鉢である。いずれも内外面全体に指オサエが施されており、所謂手づくね土器と考えられる。11の口縁端部は摘みにより調整が施される。12の底部は平底を呈し、13～16は丸底を呈する。また14の外面には剥離痕が残る。18はミニチュア土器の壺で外面帯状に黒斑が巡る。19～24は土師器の坏である。19は口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。内面一部にはミガキが施される。20～22の口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。20は内外面にミガキによる調整が施される。21は内外面とも摩擦の為調整は不明瞭。22は内外面に指オサエが施される。23の口縁部は外傾し直線的に立ち上がる。外面底部付近で指オサエが施され、内面にはススが付着する。深さは浅い。24は口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。内外面とも調整は不明瞭だが、底部付近でススが付着している。25は土師器の高台付坏と考えられる。26は土



33



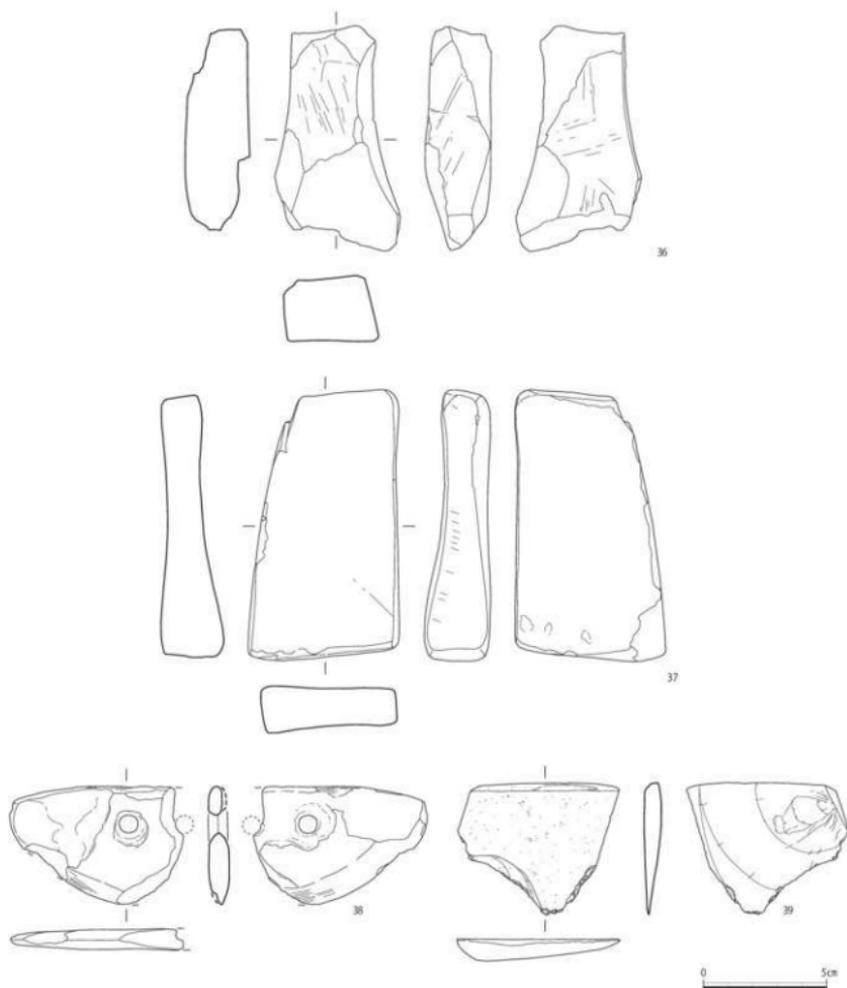
34



35

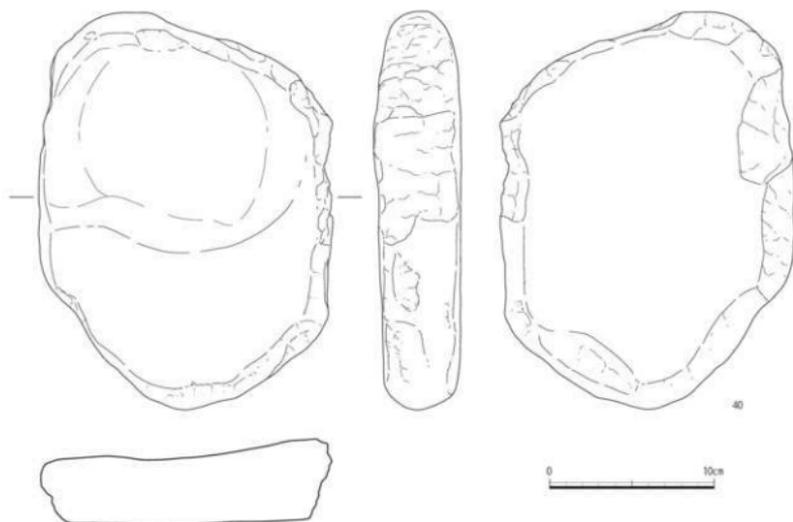


第77図 出土石製品実測図5 (1/4)



第78図 出土石製品実測図6 (1/4)

師器の瓶把手である。内外面にはケズリによる調整が施される。27・28は弥生土器の裏である。27の口縁部は、くの字状口縁を呈し、頸部から肩部にかけて張らずに胴部に向かう。内外面ともにハケメが施され、外面にはススが付着する。28の底部は平底を呈し、外面にはタタキが施される。29はミニチュア土器の皿と考えられる。両端を内側に折り込み、内面には赤色顔料が施される。30は土錘である。双孔棒状土錘と考えられ、管状の土錘とセットで用いられていたものと考えられる。両端を指で摘み形成し、穿孔を施している。一部にススの付着がみられる。



第79図 出土石製品実測図7 (1/4)

6. その他の出土遺物 (第72図、写真図版35～36)

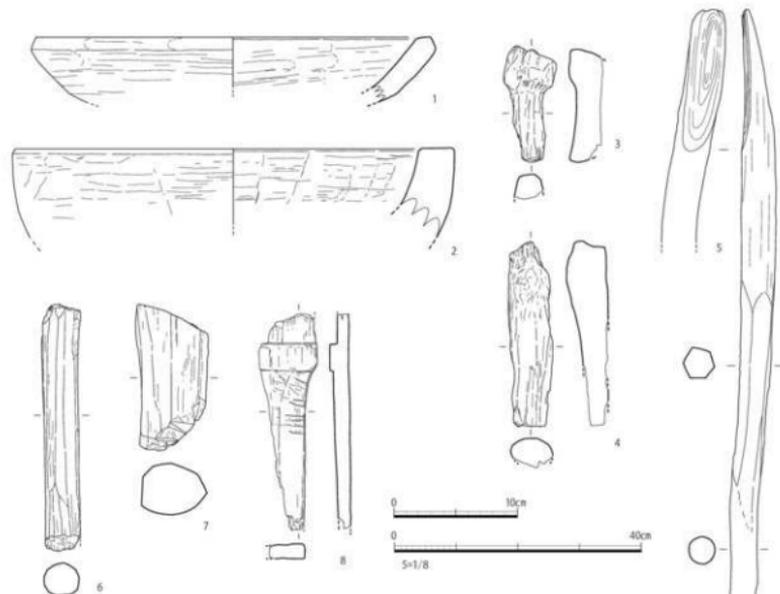
1～15は検出時および廃土より出土した遺物である。遺跡の時期や性格を考える上で必要と考えられる遺物を以下で解説する。

1は須恵器の環蓋である。回転ケズリが施され、細かく稜が形成される。天井部と口縁部の境は不明瞭である。2・3は須恵器の坏身である。2の立ち上がり部は内傾し短く立ち上がり、受け部には窪みが見られる。3の立ち上がり部はほぼ垂直に立ち上がり口縁端部にわずかに段が形成される。4・5は須恵器の高台付坏である。4の高台は短く底部外周よりやや内側に付く。5の高台は底部外周に付され、端部に向かって伸び、端部付近で屈曲する。坏部は打ち欠きが施され、外面底部にはヘラ記号が施される。6は須恵器の壺である。高台は底部外周から外側に向かって直線的に伸びる。外面には自然軸が残る。7は土師器の甕である。口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がる。内面頸部では明瞭に屈曲し稜が形成される。内外面ともにヘラミガキが施され、内面にはヘラ削りが施される。また、内外面ともにススが付着する。8・9は土師器の壺である。8はミニチュア土器の壺で内外面ともに指オサエが施される。底部は平底である。9は複合口縁で内外面とも摩耗の為、調整は不明瞭である。10～12は土師器の高坏である。10の坏部は屈曲し若干内湾しながら立ち上がり、端部付近で外反する。坏部は深い。11の坏部は屈曲し外反しながら外に向かって立ち上がる。12は坏部口縁部と考えられる。13は土師器の台付鉢である。外面台部には指オサエが施される。14は弥生土器の甕である。底部は平底で若干上げ底を呈する。15は土製品の模造鏡である。紐部分は残存していない。鏡面を含め全体にナデが施されている。

石器・石製品 (第73～79図、写真図版36・37)

ここでは、各遺構より出土した石器・石製品をまとめて解説する。

1・2はサマサイト製の打製石鏃である。1は2号竪穴建物より出土している。基部を窪ませており、先端部



第80図 出土木製品実測図 (1/4)

は欠損している。2は6号溝状遺構より出土している。1と同様に基部を窪ませている。3は4号溝状遺構より出土した安山岩製の尖頭器である。全体的に丁寧な調整が施される。4～6は石匙である。4は安山岩製で2号溝状遺構より出土している。両端を欠損しており、つまみ部のみ残る。5はサヌカイト製で1号溝状遺構より出土している。4と同様に両端部を欠損しており、つまみ部のみ残存する。6は安山岩製で1号溝状遺構より出土している。刃部には丁寧な加工が施される。7～10は削器である。7・8はサヌカイト製で1号溝状遺構より出土している。7の刃部は側面に付けられ丁寧に加工されている。8の刃部は側面から端部にかけて付けられ加工されており、一部に鉄分が付着している。9は安山岩製で2号溝状遺構より出土している。刃部は側面に付けられ丁寧に加工されている。10は粘板岩製で4号溝状遺構より出土している。11～23は剥片である。いずれも縦長剥片と考えられる。11は黒曜石製で1号溝状遺構より出土している。12・13は黒曜石製で2号溝状遺構より出土している。13は上部に打面が残る。14は黒曜石製で2号竪穴建物より出土している。15は9号竪穴建物より出土している。16は黒曜石製で11号竪穴建物より出土している。17は黒曜石製で4号竪穴建物より出土している。上部には打面が残る。18・19は黒曜石製でピットから出土している。18の上面には打面が残る。20は黒曜石製で5号竪穴建物より出土している。表面には自然面が残る。21は安山岩製で1号溝状遺構より出土している。22はサヌカイト製で6号竪穴建物より出土している。23は片岩製で7号竪穴建物より出土している。24～28は打製石斧である。24・25は安山岩製で1号溝状遺構より出土している。24は全面摩耗のため調整面が不明瞭である。25は側面全体に加工を施している。26～28はピットから出土している。26・27は片岩製

28は砂岩製である。27・28は側面全体に加工が施されている。特に27は丁寧な加工が見られる。29～32は磨製石斧である。29は安山岩製で2号溝状遺構より出土している。29の断面は楕円形を呈する。刃部は直刃である。(敲石としての転用された可能性がある。)30は蛇紋岩製で8号溝状遺構より出土している。両側面及び頭部に研磨がみられ、断面は楕円形を呈する。刃部は破損しており形状は不明である。31は輝緑凝灰岩製で5号溝状遺構より出土している。研磨痕は不明瞭である。刃部は一部欠損がみられるが蛤刃と考えられる。断面は楕円形を呈する。30・31は定角式磨製石斧と考えられる。32は砂岩製(凝灰岩の可能性あり)で17号土坑から出土している。両側面及び頭部に研磨がみられ、刃部は片刃で断面は方形を呈する。扁平片刃石斧と考えられるが、砥石の可能性も考えられる。33～37は砥石である。33・34は1号溝状遺構から出土している。33は安山岩製で使用痕は2面で確認される。34は泥岩製で使用痕は表裏を含め3面で確認される。35は片岩製で2号溝状遺構より出土しており、3面から使用痕が確認される。また、この砥石はその形状と中央部に括れがあることから柱状石斧未成品の転用が考えられる。36は砂岩製で8号溝状遺構より出土している。3面から使用痕が確認される。37はビットより出土している。側面に研磨が見られる。全面に使用痕が確認されるが、特に側面の利用が著しい。38は8号溝状遺構から出土した石包丁である。38は片岩製で約2分の1残存しており、穿孔が1個確認される。39は8号溝状遺構より出土した石包丁か。サマカイト製で表面に自然面が残る。40は石皿で7号竪穴建物より出土している。安山岩製で表面上部を窪ませて使用していたものと考えられる。

木製品(第80図、写真図版37)

溝状遺構からは多くの有機物が出土しており、特に8号溝状遺構の下層からは多くの自然木に混じって木製品が出土している。ここでは、出土した木製品の解説をおこなう。

1・2は8号溝状遺構より出土した容器(割りもの)である。1は口縁部に向かって外傾しながら直線的に立ち上がり口縁端部で内側に向かって屈曲する。横木取りにより製作されたものと考えられる。木材はコナラ属アカガシ亜族である。2は口縁部に向かって内湾しながらほぼ垂直に立ち上がる。器壁は厚く断面は方形を呈する。横木取りにより製作されたものと考えられる。木材はサクラ属である。3・4は8号溝状遺構より出土した垂木である。これらは同一個体で3が上部になる。木材はサクラ属である。5は8号溝状遺構から出土した構造材で両端を加工しているほか、側面の一部で面取りを行っている。木材はイヌガヤである。6は8号溝状遺構より出土した柄と考えられる。側面は面取りをおこなっている。芯持ち丸太より製作されたものと考えられる。木材はイヌガヤである。7は8号溝状遺構より出土した木製品の残材と考えられる。どのような製品なのかは不明だが、両端を加工している。また、片側には伐採痕と考えられる痕跡が残る。木材はコナラ属アカガシ亜族である。8は1号溝状遺構より出土した未成品である。どの製品として作成されたかは不明である。板目を持つ。木材はモミ属である。

第4章 自然科学分析

(1) 出土木材及び炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市の二串川左岸の沖積面に所在する花ノ木遺跡1次調査から出土した木材および炭化材について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

花ノ木遺跡1次調査の試料は、古墳時代中期の3号竪穴建物の主柱1・2から出土した柱材、同じく3号竪穴建物から出土した炭化材、8号竪穴建物から出土した自然木?、古墳時代後期の8号溝状遺構から出土した木製品と、加工木、構造材、自然木、古墳時代の遺構9号掘立柱建物のP4と、P298、P500、P606から出土した加工木、古代の1号溝状遺構から出土した加工木と自然木、計42点である。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。プレパラートは(株)パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

花ノ木遺跡1次調査では、針葉樹はモミ属とマキ属、イヌガヤの3分類群、広葉樹はクリとツブラジイ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節、ムクノキ、ニレ属、クワ属、クスノキ科、ツバキ属、サカキ、イスノキ、ノリウツギ、サクラ属、モチノキ属の15分類群が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

第2表 樹種構成

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版1 1a-1c (花ノ木No.39)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅう状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、1分野に1~4個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約5種がある。材は柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) マキ属 *Podocarpus* マキ科 図版1 2a-2c (花ノ木No.4)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は豊富で、年輪内にほぼ均等に散在する。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1~2個存在する。

分類群	計
モミ属	1
マキ属	1
イヌガヤ	5
クリ	3
ツブラジイ	2
スダジイ	2
コナラ属アカガシ亜属	3
コナラ属コナラ節	3
ムクノキ	1
ニレ属	2
クワ属	1
クスノキ科	2
ツバキ属	8
サカキ	1
イスノキ	1
ノリウツギ	1
サクラ属	3
モチノキ属	2
計	42

マキ属は関東以西の暖帯から亜熱帯に生育する常緑高木で、イヌマキとナギの2種がある。材は耐朽性があり、樹脂が多く、耐水性がある。

- (3) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イヌガヤ科 図版1 3a-3c (花ノ木 No.7)

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。仮道管にらせん肥厚がみられる。樹脂細胞は早材と晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で2~5細胞高、分界壁孔はトウヒ型で1分野に1~2個存在する。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する、常緑の低木または小高木である。材は堅硬および緻密である。

- (4) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. ブナ科 図版1 4a-4c (花ノ木 No.36)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性や耐湿性に優れ、保存性が高い。

- (5) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 図版1 5a-5c (花ノ木 No.13)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きい。接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火災状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や乾燥は中庸だが、耐久性は著しく低い。

- (6) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版1・2 6a-6c (花ノ木 No.18)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きい。接線方向に連続しない。晩材部では、徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火災状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県・新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

- (7) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版2 7a-7c (花ノ木 No.27)

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシとハナカガシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材はきわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

- (8) コナラ属コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版2 8a-8c (花ノ木 No.34)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

- (9) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版2 9a-9c (花ノ木 No.38)

やや大型で厚壁の道管が、単独ないし2～3個複合し、年輪を通じて均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～5列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～4列幅で、方形細胞もしくは直立細胞が上下端に2細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯、亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く密で、強靱である。

(10) ニレ属 *Ulmus* ニレ科 図版2 10a-10c (花ノ木No.21)

大型の道管が年輪のはじめに並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜めに配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、3～5列幅程度である。

ニレ属は温帯から暖帯に分布する落葉高木で、アキニレとハルニレ、オヒョウの3種がある。ハルニレの材は、中庸からやや重硬でやや粘り気があるが、狂いが出やすく、保存性もよくない。

(11) クワ属 *Morus* クワ科 図版2・3 11a-11c (花ノ木No.29)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワやマグワ、ヤママグワなどがある。材は堅硬で、韌性に富む。

(12) クスノキ科 *Lauraceae* 図版3 12a-12c (花ノ木No.15)

やや小型の道管が、単独ないし2～4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。クスノキを含むニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など8属がある。

(13) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版3 13a-13c (花ノ木No.40)

小径でほぼ単独の道管が、晩材に向けてやや径を減じながら均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は10段階程度の階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で2列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工や割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

(14) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版3 14a-14c (花ノ木No.42)

小径の道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は30段階程度の階段状である。放射組織は異性で、ほぼ1列である。

サカキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱で、割裂は困難である。

(15) イスノキ *Distylium racemosum* Siebold et Zucc. マンサク科 図版3 15a-15c (花ノ木No.28)

小径の道管が、単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は20段階程度の階段状である。軸方向柔組織は散在もしくは帯状～線状にいびつに配列する。放射組織は1～3列幅の異性で、細胞中に結晶を含む。

イスノキは関東以西の暖帯に分布する常緑高木である。材はきわめて重硬で強度も大きいのが、切削加工と割裂は困難である。

(16) ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc. ユキノシタ科 図版3 16a-16c (花ノ木No.8)

小型でやや角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は40段階程度の階段状である。放射組織は異性で1～2列幅で、単列部と多列部の幅が同じである。

ノリウツギは北海道から九州(屋久島まで)に分布する落葉小高木あるいは低木である。温帯林の先駆樹種で、伐採跡地に最初に出現する種の一つである。材は強靱である。

(17) サクラ属 (広義) *Prunus* s.l.バラ科 図版4 17a-17c (花ノ木No.3)

小型の道管が、単独あるいは斜め方向に数個複合して散在する散孔材である。道管に着色物質を含む場合もある。道管の穿孔は単一である。道管要素にはらせん肥厚がみられる。放射組織は1~5列幅の異性である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属やスモモ亜属、モモ亜属、ウヅミザクラ亜属などに分類され、25種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この2種を除いたサクラ属とする。材は比較的重硬および緻密であり、加工性がよい。

(18) ネムノキ属 *Albizia* マメ科 図版4 18a-18c (平田No.10)

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列並び、晩材に移行するに従って徐々に径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状で、晩材部では翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1~3列幅で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ネムノキは暖帯から熱帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で割裂性は大きく、切削加工は容易であるが、耐朽性や保存性は低い。

(19) キハダ *Phellodendron amurense* Pupr. ミカン科 図版4 19a-19c (平田No.6)、20a-20c (平田No.8)

大型の道管が早材部に配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状~斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性で、1~5列幅のきれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

(20) モチノキ属 *Ilex* モチノキ科 図版4 21a-21c (花ノ木No.22)

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状で、道管要素ではらせん肥厚が明瞭である。放射組織は2~7列幅の異性である。

モチノキ属は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。日本には23種があるが、大きく常緑性のモチノキ亜属と落葉性のウメドモキ亜属に分けられる。材は重硬および強靱である。

4. 考察

花ノ木遺跡1次調査から出土した木材の樹種構成を表3に示す。古墳時代前期の3号竪穴建物では、柱材はクリとニレ属、器種不明の炭化材はサカキであった。6号竪穴建物の自然木?はイスノキであった。柱材に利用されていたクリとニレ属は、重硬で靱性の材質をもつ樹木であり、柱材として有用である。

古墳時代後期の8号溝状遺構では、刳物がアカガシ亜属、刳物の未成品と思われる木材がサクラ属であった。構造材はイヌガヤであった。加工木では針葉樹のマキ属とイヌガヤ、広葉樹のクリとツブラジイ、アカガシ亜属、コナラ節、クスノキ科、ツバキ属、ノリウツギ、サクラ属、モチノキ属が確認された。自然木および自然木?では、イヌガヤとスダジイ、ニレ属、ツバキ属が確認された。器種不明の木材はモチノキ属であった。8号溝状遺構の加工木はツブラジイとツバキ属、自然木?はムクノキであった。構造材と加工木、自然木および自然木?では、イヌガヤが共通して確認されている。イヌガヤは耐陰性のある陰樹で、適潤な土地に生育する小高木もしくは低木である。イヌガヤとツバキ属は、自然木と加工木の両方で確認されている。その他の加工木で確認されたマキ属とクリ、ツブラジイ、アカガシ亜属、コナラ節、クスノキ科、ノリウツギ、サクラ属、モチノキ属も暖帯から温帯に分布する樹木であるため、遺跡周辺に生育していた樹木が加工に利用されたと考えられる。刳物に利用されていたアカガシ亜属は重硬で加工困難、刳物の未成品と思われるサクラ属は重硬および強靱な材質をもつ。

古墳時代の9号掘立柱建物P4から出土した加工木がクリ、P298から出土した加工木がコナラ節、P500から

出土した加工木？がツバキ属、P606 から出土した加工木がツバキ属であった。いずれも暖帯から温帯に分布する落葉もしくは常緑の広葉樹で、材質は重硬である。

古代の1号溝状遺構では、垂木はサクラ属、不明未成品はモミ属、加工木はクワ属、自然木はアカガシ亜属であった。サクラ属とクワ属は比較的重硬な材質をもち、モミ属はやや軽軟で加工容易な材質である。いずれも暖帯から温帯に分布する。

時間的な傾向は、各時期の器種と分析点数が異なるため、把握できなかった。花ノ木遺跡1次調査で確認された樹種は、いずれも常緑広葉樹林帯に分布する樹木である。自然木と加工木、木製品間で樹種を比較しても木材利用に顕著な傾向はみられなかったが、遺跡周辺に生育していた樹木が利用されていたと考えられる。

引用文献

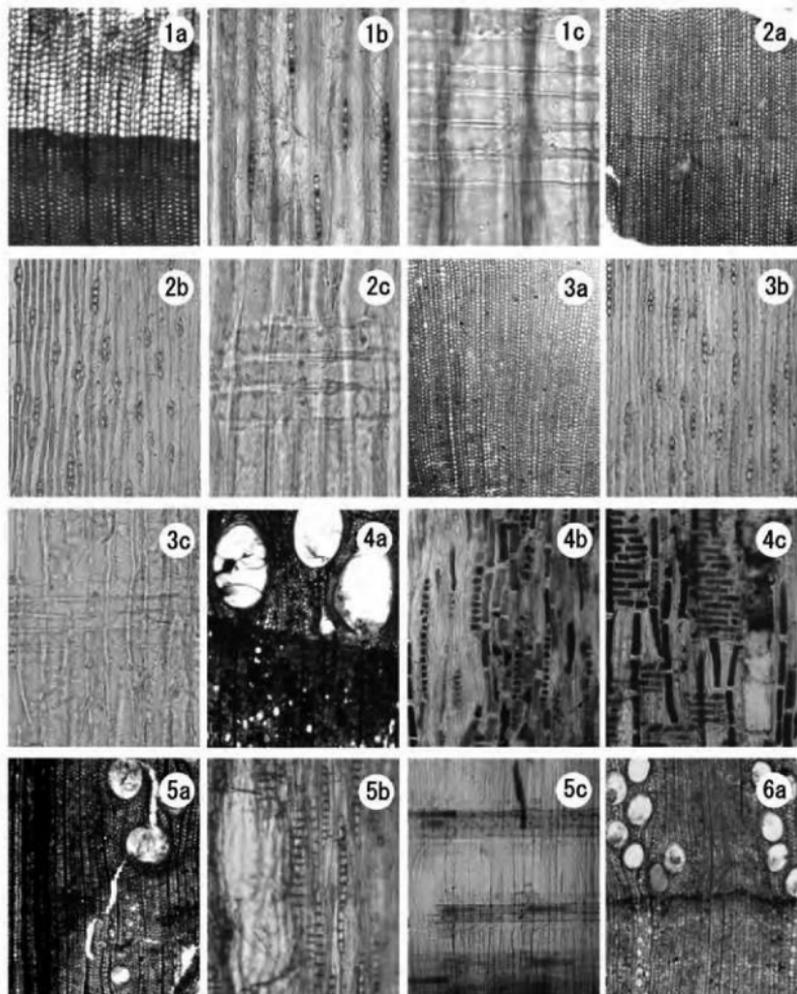
平井信二（1996）木の太百科。394p, 朝倉書店。

第3表 花ノ木遺跡1次調査出土木材の器種別樹種構成

時代	古墳前期			古墳後期				古墳				古代				計				
	3号	6号	8号	9号	P298	P500	P606	1溝	不明未成品	不明未成品	不明未成品	不明未成品	不明未成品	不明未成品						
器種	柱材	不明(炭化材)	自然木?	製物	製物(未成品)	構造材	加工木	自然木	自然木?	不明	加工木	自然木?	加工木	加工木	加工木?	加工木	垂木	不明未成品	加工木	自然木
分類区																				
モミ属																			1	
マキ属							1													1
イヌガヤ						1	2	1	1											5
ケリ	1					1						1								3
ツブラジイ						1					1									2
スダジイ								2												2
コナラ属アカガシ亜属			1			1														1
コナラ属コナラ節						2							1							3
ニレ属	1						1													2
ムクノキ											1									1
クワ属																			1	1
クスノキ科						2														2
ツバキ属						4	1			1				1	1					8
サカキ		1																		1
イスノキ			1																	1
アリウツボ							1													1
サクラ属					1		1											1		3
モチノキ属							1			1										2
計	2	1	1	1	1	1	17	3	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	42

第4表 花ノ木遺跡1次調査の樹種同定結果

№	遺構番号①	遺構番号②	取り上げ 番号等	器種	樹種	木取り	備考	時代
1	3号貯穴建物	1区1	26	柱材	ニレ属	芯持ち丸木	-	古墳中期
2	3号貯穴建物	1区2	27	柱材	クワ	芯持ち丸木	現状は芯が抜け	古墳中期
3	8号溝状遺構	サブT r-1	11	加工木	サクラ属	芯持ち丸木	根皮付、片側端部加工	古墳後期
4	8号溝状遺構	サブT r-1	2	加工木	マキ属	芯持ち丸木	両端切断、片側伐採痕有	古墳後期
5	8号溝状遺構	サブT r-1	31	加工木	ツバラジイ	芯持ち丸木	根皮付、片側端部加工	古墳後期
6	8号溝状遺構	サブT r-1	21	加工木	コナラ属コナラ節	芯持ち丸木	現状では割材、片側端部加工	古墳後期
7	8号溝状遺構	サブT r-1	20	自然木?	イヌガヤ	芯持ち丸木	劣化	古墳後期
8	8号溝状遺構	サブT r-1	22	加工木	ノリウツボ	芯持ち丸木	根皮付、片側端部加工	古墳後期
9	8号溝状遺構	サブT r-1	7	加工木	イヌガヤ	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
10	8号溝状遺構	サブT r-1	1	加工木	イヌガヤ	芯持ち丸木	両端部加工、片側端部炭化	古墳後期
11	8号溝状遺構	サブT r-1	23	構造材	イヌガヤ	芯持ち丸木	両端部加工、側面一部面取り	古墳後期
12	8号溝状遺構	サブT r-1	13	加工木	ツバラジイ	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
13	8号溝状遺構	サブT r-2	下層	加工木	ツバラジイ	割材	片側伐採、片側切断	古墳後期
14	8号溝状遺構	サブT r-1	16	自然木	ツバラジイ	芯持ち丸木	-	古墳後期
15	8号溝状遺構	サブT r-2	14	加工木	クスノキ科	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
16	8号溝状遺構	サブT r-1	12	加工木	ツバラジイ	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
17	8号溝状遺構	サブT r-1	28	加工木	ツバラジイ	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
18	8号溝状遺構	サブT r-1	26	自然木	スダジイ	芯持ち丸木	-	古墳後期
19	8号溝状遺構	サブT r-1	24	加工木	ツバラジイ	芯持ち丸木	両端加工	古墳後期
20	8号溝状遺構	サブT r-2	5	加工木	モミノキ属	割材	表面面取り、両端切断	古墳後期
21	8号溝状遺構	サブT r-1	29	自然木	ニレ属	芯持ち丸木	両端割れ	古墳後期
22	8号溝状遺構	サブT r-2	18	加工木	モミノキ属	平割	腐朽	古墳後期
23	8号溝状遺構	サブT r-2	19	自然木	イヌガヤ	芯持ち丸木	-	古墳後期
24	8号溝状遺構	サブT r-1	14	自然木	スダジイ	芯持ち丸木	根皮付	古墳後期
25	8号溝状遺構	サブT r-2	9	加工木	クスノキ科	芯持ち丸木	根皮付、片側端部切断有	古墳後期
26	8号溝状遺構	サブT r-2	13	器種(別物、未成品か?)	サクラ属	横木取り	両側面割れ	古墳後期
27	8号溝状遺構	サブT r-2	15	加工木	コナラ属アカガシ亜属	平割	片側端部加工	古墳後期
28	6号貯穴建物	⑥	1	自然木?	イスノキ	割材	劣化	古墳中期
29	1号溝状遺構	4区	④	加工木	クワ属	板目	片側炭化	古代
30	9号貯立柱建物	P4	-	加工木	クワ	板目	片側加工	古墳
31	P298	-	-	加工木	コナラ属コナラ節	板目	-	古墳
32	P500	-	-	加工木?	ツバラジイ	割材	劣化	古墳
33	P606	-	-	加工木	ツバラジイ	板目	-	古墳
34	8号溝状遺構	-	-	加工木	コナラ属コナラ節	割材	片側端部炭化	古墳後期
35	8号溝状遺構	サブTr	輸出③	器種(別物)	コナラ属アカガシ亜属	横木取り	-	古墳後期
36	8号溝状遺構	サブT r-1	23	加工木	クワ	割材	片側端部加工、炭化	古墳後期
37	1号溝状遺構	7区	⑦	自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持ち丸木	乾燥劣化	古代
38	8号溝状遺構	サブT r-1	⑤	自然木?	ムクノキ	割材	-	古墳後期
39	1号溝状遺構	7区	⑥	不明未成品	モミ属	板目	片側端部炭化、縁かき?	古代
40	8号溝状遺構	サブT r-2	10	加工木	ツバラジイ	芯持ち丸木	根皮付き	古墳後期
41	1号溝状遺構	サブT r-1	26-1	薪木	サクラ属	芯持ち丸木	-	古代
42	3号貯穴建物	東側床面直上	-	器種不明	サカキ	炭化材	-	古墳中期



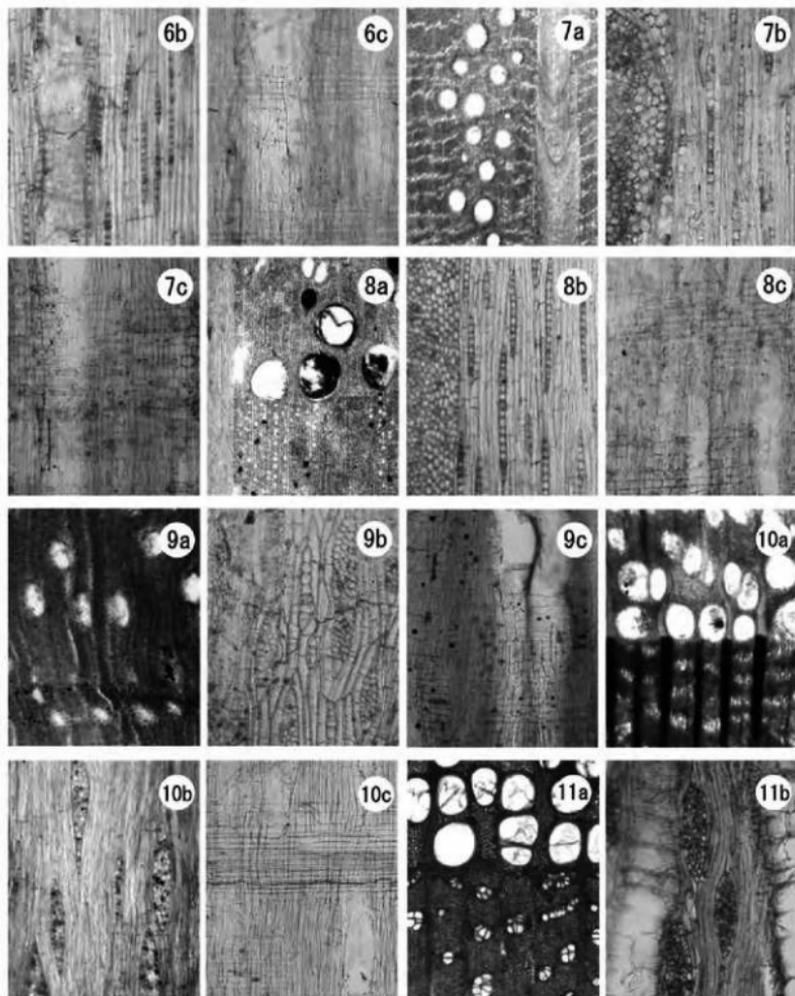
スケール： 

図版1 花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (1)

1a-1c. モミ属 (花ノ木No. 39)、2a-2c. マキ属 (花ノ木No. 4)、3a-3c. イヌガヤ (花ノ木No. 7)、4a-4

c. クリ (花ノ木No. 36)、5a-5c. ツブラジイ (花ノ木No. 13)、6a. スダジイ (花ノ木No. 18)

a: 横断面 (スケール=250 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=1a-1c:25 μ m、2c-5c:100 μ m)

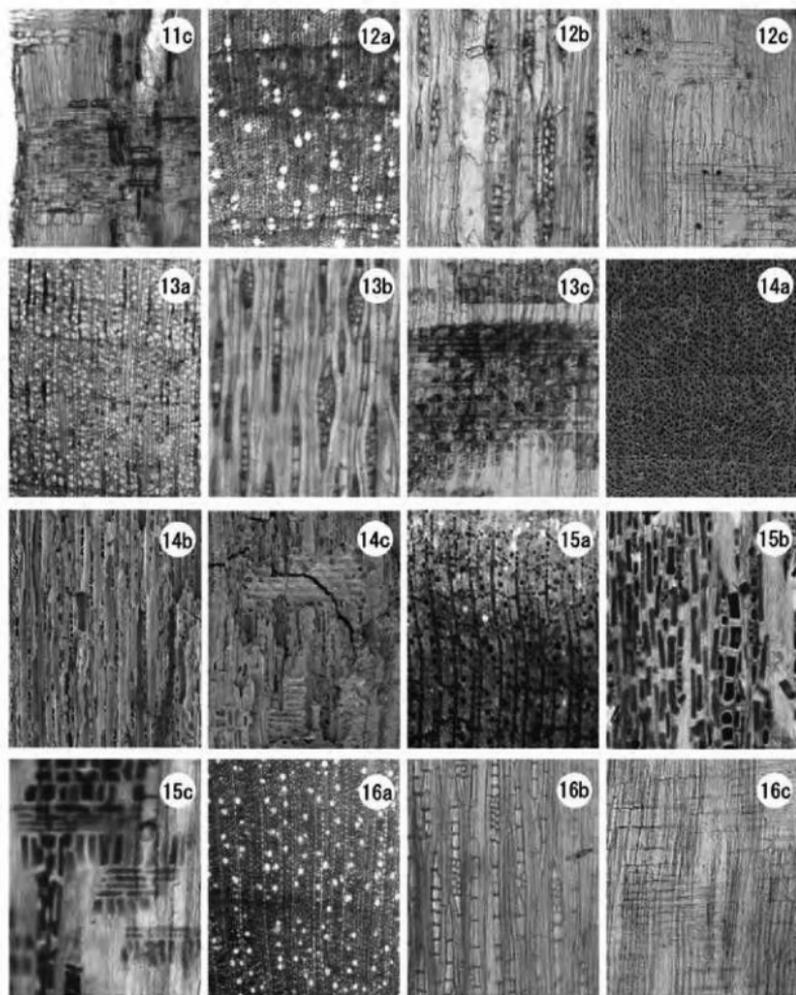


スケール： 

図版2 花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (2)

6b-6c. スダジイ (花ノ木No. 18)、7a-7c. コナラ属アカガシ亜属 (花ノ木No. 27)、8a-8c. コナラ属コナラ節 (花ノ木No. 34)、9a-9c. ムクノキ (花ノ木No. 38)、10a-10c. ニレ属 (花ノ木No. 21)、11a-11b. クワ属 (花ノ木No. 29)

a: 横断面 (スケール=250 μ m)、b: 接線断面 (スケール=100 μ m)、c: 放射断面 (スケール=100 μ m)

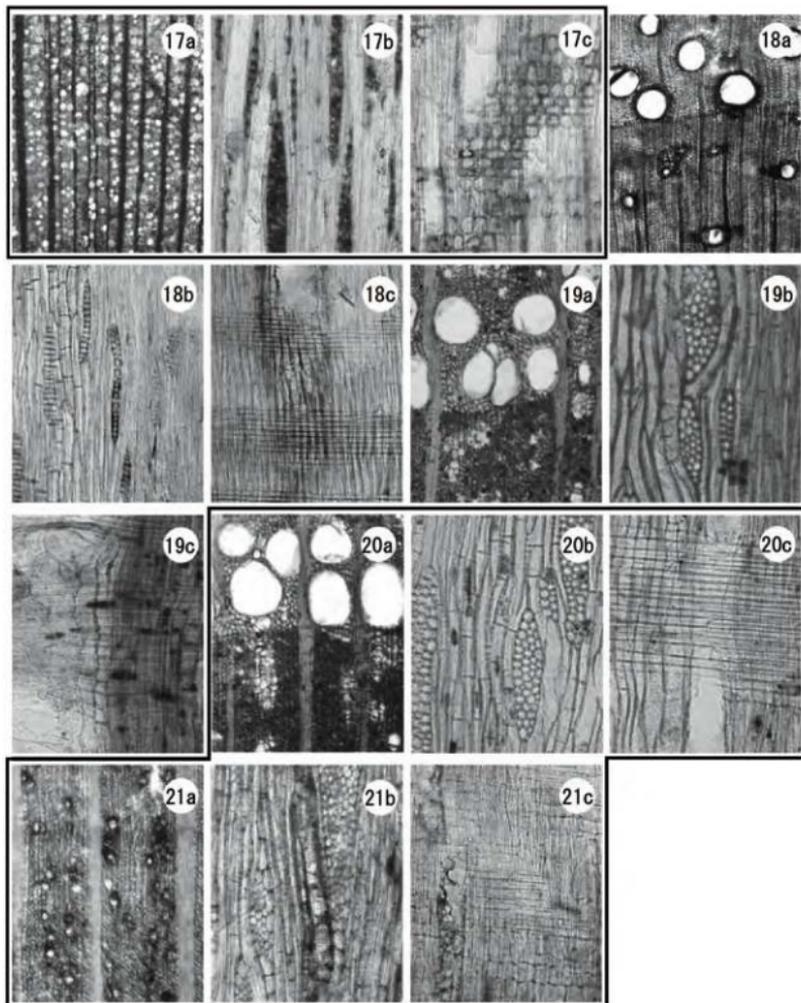


スケール: 

図版3 花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(3)

11c. クワ属(花ノ木No.29)、12a-12c. クスノキ科(花ノ木No.15)、13a-13c. ツバキ属(花ノ木No.40)、14a-14c. サカキ(花ノ木No.42)、15a-15c. イスノキ(花ノ木No.28)、16a-16c. ノリウツギ(花ノ木No.8)

a: 横断面(12a, 13a, 15a, 16a: スケール=250 μ m)、b: 接線断面(12b, 13b, 15b, 16b: スケール=100 μ m)、c: 放射断面(11c, 12c, 13c, 15c, 16c: スケール=100 μ m)



スケール： 100 μm

図版4 花ノ木遺跡・平田遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(4) ※枠で囲ったものが、花ノ木遺跡の資料
 17a-17c. サクラ属(花ノ木No. 3)、18a-18c. ネムノキ属(平田No. 10)、19a-19c. キハダ(平田No. 6)
 、20a-20c. キハダ(HRT8)、21a-21c. モチノキ属(花ノ木No. 22)
 a: 横断面(スケール=250 μm)、b: 接線断面(スケール=100 μm)、c: 放射断面(スケール=100 μm)

(2) 出土木材の樹種同定

株式会社 バレオ・ラボ

1. はじめに

日田市に所在する花ノ木遺跡で古墳時代後期の溝状遺構から出土した木材 17 点について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、溝状遺構から出土した木製品の柄?と加工木、自然木 17 点である。発掘時の所見から、すべて古墳時代後期と推定されている。

樹種同定は、目視で木取りや加工痕を確認した後、剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。プレパラートは（株）バレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

第 5 表 器種別の樹種同定結果

樹種同定の結果、針葉樹はイヌガヤが 1 分類群、広葉樹はツブラジイとスダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、ムクノキ、エノキ属、クワ属、クスノキ、クスノキ科、ツバキ属、キハダ、ムクロジの 11 分類群、その他に分類群不明があり、合計 13 分類群が確認された。

器種別の樹種同定結果を表 1、結果の一覧を付表 1 に示す。柄?はイヌガヤであった。加工

分類群/器種	柄?	加工木	割材	残材	自然木	計
イヌガヤ	1					1
ツブラジイ		1				1
スダジイ					1	1
コナラ属アカガシ亜属				1		1
ムクノキ				1	2	3
エノキ属	1					1
クワ属			1			1
クスノキ			1			1
クスノキ科		2				2
ツバキ属		1			1	2
キハダ					1	1
ムクロジ		1				1
不明				1		1
計	1	6	2	3	5	17

木はツブラジイとエノキ属、クスノキ科、ツバキ属、ムクロジであった。割材はクワ属とクスノキであった。残材はアカガシ亜属とムクノキ、分類群不明であった。自然木はスダジイとムクノキ、ツバキ属、キハダであった。木取りは、柄?と自然木はすべて芯持丸木、加工木はムクロジが板目のほかは芯持丸木であった。割材と残材は、割材のムクノキが板目のほかは割材であった。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

(1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K. Koch イヌガヤ科 図版 1 1a-1c (No.13)

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は早材と晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で 2～5 細胞高、分野壁はトウヒ型で 1 分野に 1～2 個存在する。仮道管にらせん肥厚がある。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材はやや堅硬で緻密である。

(2) ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 図版 1 2a-2c (No.4)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きい。接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸であり、耐久性は著しく低い。

(3) スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版1 3a-3c (No.9)

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きい。接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県と新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

(4) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版1 4a-4c (No.16)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

(5) ムクノキ *Aphananthe aspera* (Thunb.) Planch. ニレ科 図版1 5a-5c (No.11)

径が中型で厚壁の道管が、単独ないし2~3個複合して均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状~5列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1~6列幅で、方形細胞もしくは直立細胞が上下端に2細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯から亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く、密で強靱である。

(6) エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版1・2 6a-6c (No.6)

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線から斜めに配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状~翼状となる。道管の穿孔は単一である。小道管の内壁にらせん肥厚がみられる。放射組織は3~8列幅の異性で鞘細胞がある。上下縁辺の膨らんだ細胞中に結晶を含む。接線断面において放射組織と軸方向柔組織が層界状に配列する。

エノキ属は温帯から熱帯分布する落葉性の小高木から高木で、エゾエノキやエノキなど4種がある。材は比較的硬いが、強度や耐朽性は低く、狂いが出やすい。

(7) クワ属 *Morus* クワ科 図版2 7a-7c (No.15)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3~5列幅で、上下端の1~2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、韌性に富む。

(8) クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) J.Presl クスノキ科 図版2 8a-8c (No.2)

やや大型の道管が単独ないし2~4個複合して散在し、晩材部で徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状~翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1~3細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は、やや軽軟なものから中庸程度まで幅があるが、切削加工は容易で、耐水性や耐朽性、耐虫性は極めて高い。

(9) クスノキ科 *Lauraceae* 図版2 9a-9c (No.5)

やや小型の道管が、単独ないし2~4個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状~

翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3列幅で油細胞がある。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など8属があるが、クスノキ以外は識別困難なため、クスノキを除いたクスノキ科とする。

(10) ツバキ属 *Camellia* ツバキ科 図版2 10a-10c (No.12)

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は10段階程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に2～4細胞連なる異性で、1～3列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

(11) キハダ *Phellodendron amurense* Pupr. ミカン科 図版2・3 11a-11c (No.3)

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1～6列幅できれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

(12) ムクロジ *Sapindus mukurossi* Gaertn. ムクロジ科 図版3 12a-12c (No.17)

大型でやや厚壁の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では小道管が数個放射方向に複合して散在する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がある。軸方向柔組織は周囲状～帯状となる。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性、3～5列幅のややいびつな紡錘形である。

ムクロジは茨城県と新潟県以南の暖帯～亜熱帯に分布する落葉高木である。材はやや重硬から中庸程度である。

(13) 不明 *Unknown* 図版3 13a-13b (No.7)

100 μ m 程の孔が軸方向にあき、均等に配列する。炭化しており組織の詳細な観察が行えず、同定は困難であった。木本ではない可能性もある。

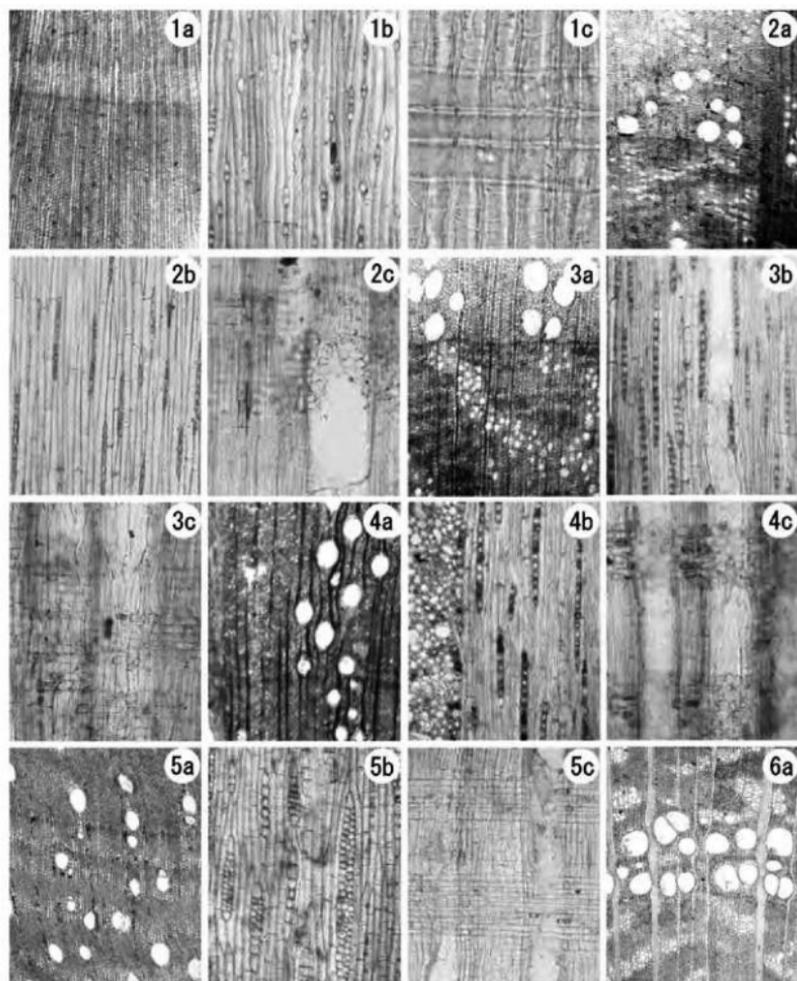
4. 考察

全体では、ムクノギが3点、クスノキ科とツバキ属が2点で、そのほかの分類群は各1点であった。自然木ではスタジイとムクノギ、ツバキ属、キハダが確認された。加工木ではツブラジイとエノキ属、クスノキ科、ツバキ属、ムクロジ、割材ではクワ属とクスノキ、残材ではアカガシ垂属とムクノギ、分類群不明が確認された。加工木と割材、残材で確認されたアカガシ垂属やツブラジイ、クワ属、ツバキ属は重硬、ムクノギやエノキ属、ムクロジは比較的硬な材である。クスノキは、強度はあまりないが耐朽性や防虫性がある。

木製品の柄？はイヌガヤで、木取りは芯持丸木であるが、面取りの加工が施してあった。イヌガヤは、比較的硬で緻密な材質で、縄文時代から古墳時代までは全国的に弓としての利用が多く確認されている。柄としては、埼玉県の小敷田遺跡や神奈川県池子遺跡では弥生時代中期、千葉県国府間遺跡や鳥取県青上寺地遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭の斧柄として利用が確認されている（伊東・山田，2012）。

木取りが芯持丸木であった自然木や加工木は、ツバキ属、キハダ、ツブラジイ、クスノキ科、エノキ属、スタジイ、ムクノギがあり、いずれも直径が5cm以下で小径のため枝材と思われる。なお、イヌガヤも直径2.7cmであるが、小高木または低木の木本のため、幹材の可能性もある。

日田市の周辺地域は常緑広葉樹林帯に属しており、現在の自然植生では高木層にスタジイやタブノキ、カシ類を主体とした常緑広葉樹、亜高木層にヤブツバキやモチノキ、シロダモ（クスノキ科）などの常緑樹や落葉樹、

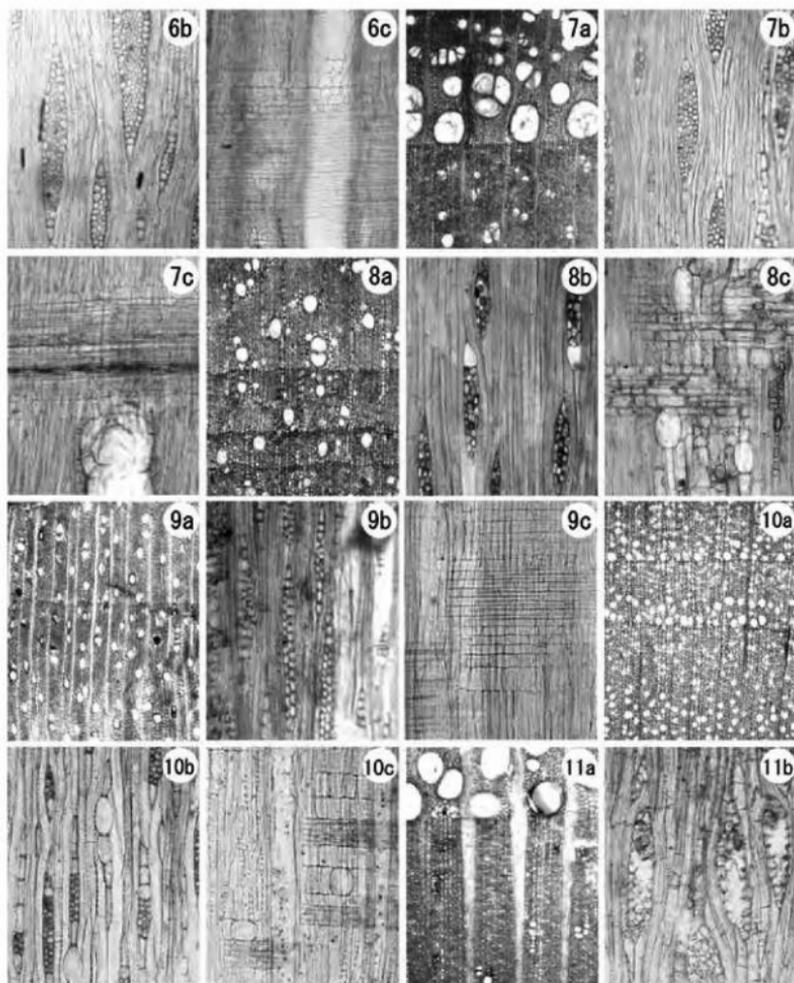


スケール：■

図版5 花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (1)

1a-1c. イヌガヤ (No. 13)、2a-2c. ツブラジイ (No. 4)、3a-3c. スダジイ (No. 9)、4a-4c. コナラ
 属アカガシ亜属 (No. 16)、5a-5c. ムクノキ (No. 11)、6a. エノキ属 (No. 6)

a : 横断面 (スケール=250 μ m)、b : 接線断面 (スケール=100 μ m)、c : 放射断面 (スケール=1c:25 μ m、
 2c-5c : 100 μ m)

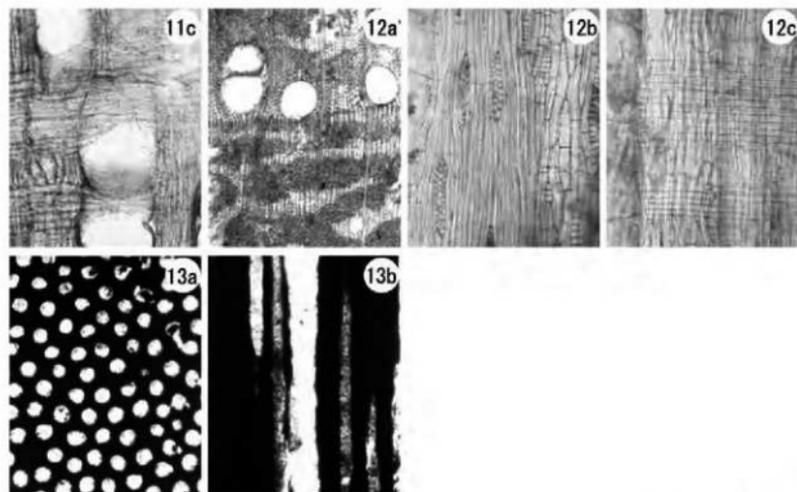


スケール： 

図版6 花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (2)

6b-6c. エノキ属 (No.6) 、7a-7c. クワ属 (No.15) 、8a-8c. クスノキ (No.2) 、9a-9c. クスノキ科 (No.5) 、10a-10c. ツバキ属 (No.12) 、11a-11b. キハダ (No.3)

a : 横断面 (スケール=250 μ m) 、b : 接線断面 (スケール=100 μ m) 、c : 放射断面 (スケール=100 μ m)



図版7 花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真 (3)

11c. キハダ (No. 3)、12a-12c. ムクロジ (No. 17)、13a-13b. 不明 (No. 7)

a: 横断面 (スケール=250 μm)、b: 接線断面 (スケール=100 μm)、c: 放射断面 (スケール=100 μm)

スケール:

低木層にアオキやヒサカキなど耐陰性の常緑低木が生育する (宮脇, 1977)。今回の樹種同定結果も常緑広葉樹林帯の自然植生と類似した樹種構成を示しており、遺跡周辺にはスダジイやツブラジイ、アカガシ亜属、クスノキ、ツバキ属などの常緑広葉樹と、ムクノキやエノキ属、キハダ、ムクロジなどの落葉広葉樹が混生していたと考えられる。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久編 (2012) 木の考古学—出土木製品用材データベース—, 449p, 海青社。
 宮脇 昭 (1977) 日本の植生, 535p, 学研。

第6表 樹種同定結果一覧表

遺跡番号	番号	遺跡番号1	遺跡番号2	F番号	図種	樹種	木取り	直径	所見	備考
1	40	8号溝状遺構	サブF-2	10	自然木	ツバキ属	芯持丸木	4.3cm	-	樹皮付
2	47	8号溝状遺構	サブF-1	8	割材	クスノキ	割材	-	-	-
3	51	8号溝状遺構	サブF-1	下層	自然木	キハダ	芯持丸木	-	-	皮状はワレ
4	56	8号溝状遺構	サブF-1	下層1	加工木	ツブラジイ	芯持丸木	3.3cm	片側部斜断	樹皮付
5	57	8号溝状遺構	サブF-2	下層	加工木	クスノキ科	芯持丸木	3.2cm	片側部斜断	樹皮炭化、切断面にも加工?有
6	58	8号溝状遺構	サブF-2	11	加工木	エノキ属	芯持丸木	3.8cm	片側部斜断	-
7	60	8号溝状遺構	サブF-1	17	残材	不明	割材	-	両端伐採材	全体的に炭化
8	64	8号溝状遺構	サブF-2	3	加工木	クスノキ科	芯持丸木	2.5cm	片側部斜断	樹皮付
9	65	8号溝状遺構	サブF-1	15	自然木	スダジイ	芯持丸木	4.0cm	-	-
10	66	8号溝状遺構	サブF-1	19	自然木	ムクノキ	芯持丸木	3.5cm	加工木の可能性あり	-
11	67	8号溝状遺構	サブF-1	4	自然木	ムクノキ	芯持丸木	4.5cm	-	-
12	68	8号溝状遺構	サブF-2	2	加工木	ツバキ属	芯持丸木	4.8cm	片側部斜断	-
13	69	8号溝状遺構	サブF-1	下層	割?材	イヌガヤ	芯持丸木	2.7cm	側面取り	-
14	69	8号溝状遺構	サブF-1	下層	残材	ムクノキ	板目	-	木くず?、両端加工痕	-
15	71	8号溝状遺構	サブF-2	下層	割材	クワ属	割材	-	-	-
16	71	8号溝状遺構	サブF-2	下層	残材	コナラ属アカガシ亜属	割材	-	両端加工、片側伐採痕?	-
17	71	8号溝状遺構	サブF-2	下層	加工木	ムクロジ	板目	-	木くず?	-

(3) 大型植物遺体同定

株式会社 バレオ・ラボ

1. はじめに

日田市に位置する花ノ木遺跡は、二串川左岸で標高約 78m の場所に立地する。ここでは溝状遺構などから出土した大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物や植生について検討した。なお、一部の同一個体を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査中に目視にて回収された大型植物遺体である。試料の取り上げは、日田市文化財保護課によって行われた。試料は、試料番号が振られた 50 点の種実と、一括で取り上げられた種実である。遺構の時期は、出土土器型式から 1 号溝状遺構は古代、8 号溝状遺構が古墳時代後期、放射性炭素年代測定の結果から 8 号溝状遺構サブトレッチ-2 内の P630 と⑤が弥生時代後期である。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、日田市文化財保護課に保管されている。

3. 結果

同定の結果、木本植物で針葉樹のイヌガヤ種子の 1 分類群、広葉樹のナラガシワ殻斗と、アカガシ殻斗付果実・果実、イチイガシ果実、ウラジロガシ果実、ツクハネガシ殻斗付果実・果実・未熟果、アカガシ・ツクハネガシ果実、コナラ属アカガシ亜属果実、モモ核の 8 分類群の、計 9 分類群が得られた。同定結果を表 1 に示す。

以下に、出土傾向について遺構別に記載する。

8 号溝状遺構サブトレッチ-2 内、P630：ツクハネガシが 491 点（破片 1 点）と非常に多く、アカガシが 130 点とこれに次ぐ。ほかに、モモが 1 点、ウラジロガシが 8 点、イチイガシが 6 点、アカガシ・ツクハネガシが破片で 9 点、コナラ属アカガシ亜属が破片で 1 点得られた。

8 号溝状遺構サブトレッチ-2 内、⑤：ナラガシワが 1 点得られた。

1 号溝状遺構：イヌガヤが 7 点（破片 2 点）得られた。

8 号溝状遺構：アカガシとイチイガシが各 1 点得られた。

廃土中：モモが 1 点得られた。

第 7 表 花ノ木遺跡 1 次調査から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

分類群	番号 遺構名 探出位置 時期 試料 No.	1	5	2	3	4	6	7	
		8 号溝状遺構サブトレッチ-2 内		1 号溝状遺構		8 号溝状遺構			
		P630	⑤	掘出時	トレンチ別	廃土中			
		弥生時代後期		古墳時代後期					
		1	11~47	一括	2	3~6	7~10	48,49	50
イヌガヤ	種子				4	3(2)			
ナラガシワ	殻斗			1					
アカガシ	殻斗付果実	1							
	果実	8		121			1		
イチイガシ	果実			6					
ウラジロガシ	果実			8			1		
ツクハネガシ	殻斗付果実	1		2					
	果実	25	(1)	462					
	未熟果			1					
アカガシ・ツクハネガシ	果実		(1)	(8)					
コナラ属アカガシ亜属	果実		(1)						
モモ	核	1						1	

次に、産出した代表的な分類群の種実について記載し、図版を掲載して、同定の根拠とする。

(1) イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight ex Forbes) K.Koch 種子 イヌガヤ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。縫合線をもつが稜がない。先端部がわずかに突出する。種皮は硬く、顆粒状の低い隆起が全面にある。長さ 13.8mm、幅 9.4mm、厚さ 8.5mm。

(2) ナラガシワ *Quercus aliena* Blume 殻斗 ブナ科

表面は広卵形の鱗片で覆われる。鱗片基部はふくらみがある。形状はコナラよりも深く、ミズナラよりは浅い楕状。殻斗の先端が果実に向かって内側を向き、壁は厚い。高さ 12.4mm、幅 21.0mm。

(3) アカガシ *Quercus acuta* Thunb. 殻斗付果実・果実 ブナ科

暗褐色で、円柱状楕円体。上部は太く、先端は急に細くなる。臍の幅は果実幅の約 50% 以上。果実頂部に輪状紋がみられ、果実から突出し、太い。突出部(首)は伏腕状。臍は膨らむ。殻斗付果実の大きさは、高さ 22.4mm、幅 13.2mm。任意に抽出した 10 点の果実の大きさは、高さ 17.2 ~ 22.1 (平均 19.8 ± 1.7) mm、幅 11.5 ~ 13.8 (平均 12.4 ± 0.7) mm。

(4) イチイガシ *Quercus gilva* Blume 果実 ブナ科

暗褐色で、側面観は楕円形~長楕円形。突出部(首)は円柱状ないし円錐状で輪状紋がある。柱頭は短く横を向く。果実の上部とその付近には毛が密生する。臍は中央部が尖るものが多い。出土した 7 点の果実の大きさは、高さ 14.2 ~ 20.9 (平均 17.9 ± 2.9) mm、幅 10.8 ~ 13.6 (平均 11.8 ± 0.9) mm。

(5) ウラジロガシ *Quercus salicina* Blume f. *angustata* (Nakai) H.Ohba 果実 ブナ科

卵形体で、堅果上部で幅は徐々に狭くなる。柱頭は細長い。臍の幅は果実幅の約 30% と狭い。出土した 8 点の果実の大きさは、高さ 17.1 ~ 18.5 (平均 17.8 ± 0.6) mm、幅 11.1 ~ 12.5 (平均 11.8 ± 0.5) mm。

(6) ツクバネガシ *Quercus sessilifolia* Blume 殻斗付果実・果実・未熟果 ブナ科

暗褐色で、円柱状楕円体。堅果上部は太い。臍の幅は果実幅の約 50% 以上。突出部(首)はなだらかな円錐状。臍は膨らまない。殻斗付果実の大きさは、高さ 22.0mm、幅 14.4mm。任意に抽出した 10 点の果実の大きさは、高さ 19.3 ~ 23.7 (平均 20.9 ± 1.4) mm、幅 13.3 ~ 17.2 (平均 14.7 ± 1.1) mm。未熟果の大きさは、高さ 14.1mm、幅 10.1mm。破片等でアカガシとの区別がしにくい一群はアカガシ・ツクバネガシとした。また、輪状紋が残存するが、全体の形状が不明のものはコナラ属アカガシ亜属とした。

(7) モモ *Amygdalus persica* L. 核バラ科

黄褐色~茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先端が尖る。下端の着点は凹む。表面全体に不規則で深い溝状の凹孔がある。片側側面には縫合線をもつ稜がある。大きさは、長さ 25.1mm、幅 20.2mm、厚さ 16.1mm。

4. 考察

8号溝状遺構サブトレンチ 2内から検出された P630からは、ドングリ類を主体として栽培植物のモモも得られた。ピットである P630からは常緑性のアカガシとツクバネガシを主体として、イチイガシとウラジロガシが少量得られた。このうちアカガシとツクバネガシは殻斗付きの果実も得られ、ツクバネガシは未熟果も混ざる。殻斗付果実や未熟果は採取時に混ざった可能性もあるが、溝付近に生育していた樹木から落下して堆積した可能性も考えられる。これらの4種のドングリ類は結実時期がやや異なるため、同時にピット内に保存されていたかどうかについては検討が必要であろう。さらに、縄文時代にはイチイガシが選択されて貯蔵穴に保管されていた例が明らかになっているが(小畑, 2011)、弥生時代後期のドングリ類の利用についてはほとんど事例がない。日田市佐寺原遺跡では弥生時代中期後葉の土坑が検出され、炭化したイチイガシを主体として、オニグルミやイ

ネ、キビ、アワなどが得られている（佐々木，2011）。8号溝状遺構サブトレンチ2内⑤からは、落葉性のドングリ類であるナラガシワが1点得られた。

1号溝状遺構からは、イヌガヤのみが得られた。イヌガヤは山地や平地の林内に生育する常緑の小高木である。果肉は食用にならないが、種子内部の胚乳は油を絞ると灯明などに利用可能であり、少なくとも利用は平安時代中期まで遡ることができる（長沢，2012）。出土したイヌガヤは完形個体が多く、利用の痕跡は不明であった。

引用文献

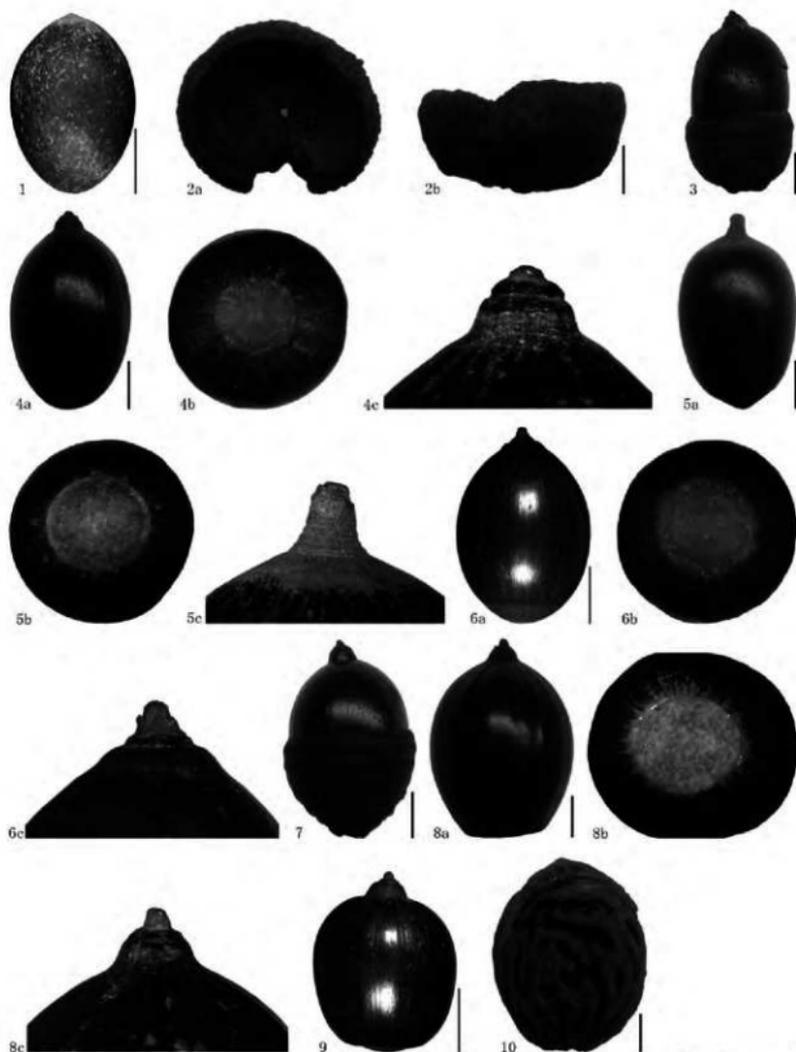
長沢 武（2012）野外植物民俗事苑。443，ほおずき書籍。

小畑弘己（2011）東北アジア古民族植物学と縄文農耕。320p，同成社。

佐々木由香（2011）佐寺原遺跡の植物遺体からみた弥生時代の植物利用。日田市教育庁文化財保護課編「佐寺原遺跡-2・3次調査-」：102-106，日田市教育委員会。

第8表 花ノ木遺跡1次調査から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

試料No.	番号	遺構名	分類群	部位	検出数	年代測定番号
1	1	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(別添)	モモ	核	1	
2	2	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 ⑤	ナラガシワ	殻斗	1	
3	3	1号溝状遺構 検出時	イヌガヤ	種子	1	
4	3	1号溝状遺構 検出時	イヌガヤ	種子	1	
5	3	1号溝状遺構 検出時	イヌガヤ	種子	1	
6	3	1号溝状遺構 検出時	イヌガヤ	種子	1	
7	4	1号溝状遺構 下層3層	イヌガヤ	種子	1	
8	4	1号溝状遺構 下層3層	イヌガヤ	種子	1	(1)
9	4	1号溝状遺構 下層3層	イヌガヤ	種子	1	
10	4	1号溝状遺構 下層3層	イヌガヤ	種子	1	(1)
11	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
12	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
13	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
14	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	コナラ属アカガシ亜属	果実	1	(1)
15	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
16	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
17	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
18	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
19	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
20	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
21	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	(1)
22	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
23	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
24	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
25	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
26	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
27	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
28	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
29	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
30	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
31	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
32	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
33	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
34	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
35	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
36	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
37	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
38	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ-ツクハネガシ	果実	1	(1)
39	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
40	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
41	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
42	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	PLD-27530
43	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	殻斗付果実	1	
44	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	殻斗付果実	1	
45	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	アカガシ	果実	1	
46	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
47	5	8号溝状遺構 サブトレンチ-2 P630(タッパー内)	ツクハネガシ	果実	1	
48	6	8号溝状遺構	アカガシ	果実	1	
49	6	8号溝状遺構	イチイガシ	果実	1	
50	7	廃土中(2011.12・01)	モモ	核	1	



図版8 花ノ木遺跡から出土した大型植物遺体
スケール 1-3, 4a, 5a, 6a, 8a, 9, 10:5mm. 4b-c, 5b-c, 6b-c, 8b-c は任意

1. イスガヤ種子 (1溝、検出時、No.3)、2. ナラガシワ殻斗 (8溝サブトレンチ-2、⑤、No.2)、3. アカガシ
殻斗付果実 (8溝サブトレンチ-2、P630、No.42、PLD-27530)、4. アカガシ果実 (8溝サブトレンチ-2、P
630、一括)、5. イチイガシ果実 (8溝サブトレンチ-2、P630、一括、PLD-27532)、6. ウラジロガシ果実 (8
溝サブトレンチ-2、P630、一括)、7. ツクバネガシ殻斗付果実 (8溝サブトレンチ-2、P630、一括)、8. ツク
バネガシ果実 (8溝サブトレンチ-2、P630、一括、PLD-27531)、9. ツクバネガシ未熟果 (8溝サブトレンチ
-2、P630、一括)、10. モモチ (8溝サブトレンチ-2、P630(別袋)、No.1)

(4) 出土種実年代測定

株式会社 バレオ・ラボ

1. はじめに

花ノ木遺跡から出土した種実試料について、加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて大型植物遺体も行われている (大型植物遺体同定の報告参照)。

2. 試料と方法

試料は、8号溝状遺構サブトレンチ-2の下に位置するピット P630 から出土した種実3点である。アカガシ殻斗付果実が1点 (No.42: PLD-27530) と、ツクバネガシ果実が1点 (一括試料: PLD-27531)、イチイガシ果実が1点 (一括試料: PLD-27532) である。考古学的な所見では、遺構の時期は古墳時代後期である。

測定試料の情報、調整データは表9のとおりである。試料は調整後、加速器質量分析計 (バレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH) を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

第9表 測定試料および処理

測定番号	調整データ	試料データ	前処理
PLD-27530	遺構: 8号溝状遺構サブトレンチ-2 位置: P630 試料 No.42	種類: 生試料・種実 (アカガシ殻斗付果実) 状態: wet	超言液洗浄 機・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-27531	遺構: 8号溝状遺構サブトレンチ-2 位置: P630 試料 No.一括	種類: 生試料・種実 (ツクバネガシ果実) 状態: wet	超言液洗浄 機・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)
PLD-27532	遺構: 8号溝状遺構サブトレンチ-2 位置: P630 試料 No.一括	種類: 生試料・種実 (イチイガシ果実) 状態: wet	超言液洗浄 機・アルカリ・酸洗浄 (塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N, 塩酸:1.2N)

3. 結果

表10に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代 (yrBP) の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い (14C の半減期 5730 \pm 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ 暦年代範囲は 95.4% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第10表 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-27530	-25.86 \pm 0.14	1825 \pm 19	1825 \pm 20	140AD(50.5%)197AD 207AD(17.7%)226AD	132AD(95.4%)238AD
PLD-27531	-25.31 \pm 0.16	1863 \pm 19	1865 \pm 20	89AD(10.8%)102AD 122AD(42.9%)173AD 193AD(14.4%)211AD	84AD(95.4%)219AD
PLD-27532	-24.18 \pm 0.15	1851 \pm 19	1850 \pm 20	129AD(46.5%)177AD 190AD(21.7%)212AD	87AD(5.4%)106AD 121AD(90.0%)232AD

4. 考察

8号溝状遺構サブトレッチ-2の下に位置するピットP630から出土した種実試料3点について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、各試料の暦年較正結果のうち2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、結果を整理する。弥生時代の土器編年と暦年代の対応関係については藤尾(2009)を参照した。

アカガシ殻斗付果実(No.42:PLD-27530)は、132-238 cal AD(95.4%)であった。これは2世紀前半～3世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

ツクバネガシ果実(一括試料:PLD-27531)は、84-219 cal AD(95.4%)であった。これは1世紀後半～3世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

イチイガシ果実(一括試料:PLD-27532)は、87-106 cal AD(5.4%)および121-232 cal AD(90.0%)であった。これは1世紀後半～3世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

今回の試料はいずれも種実であり、測定結果は種実の結実年代を示している。

考古学的な所見では、8号溝状遺構は古墳時代後期の遺構である。しかし溝の下に位置するピットP630から出土した種実試料は、弥生時代後期の暦年代範囲を示しているため、弥生時代後期のピットを切って溝が構築された可能性がある。

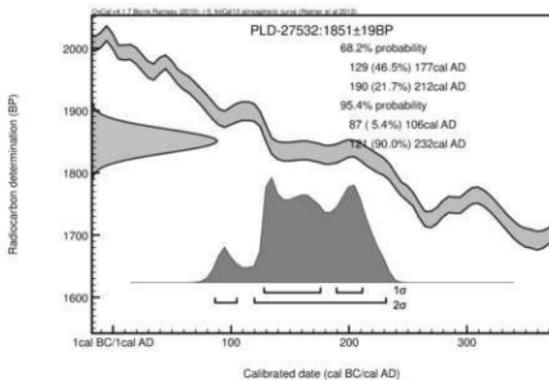
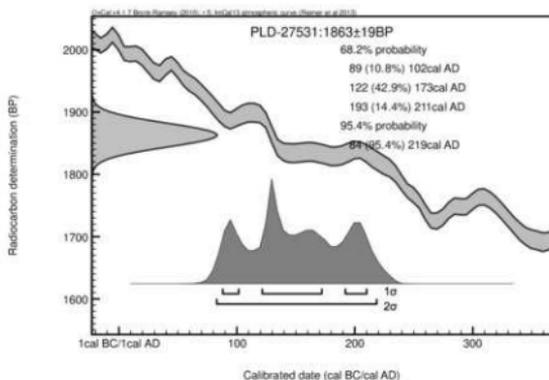
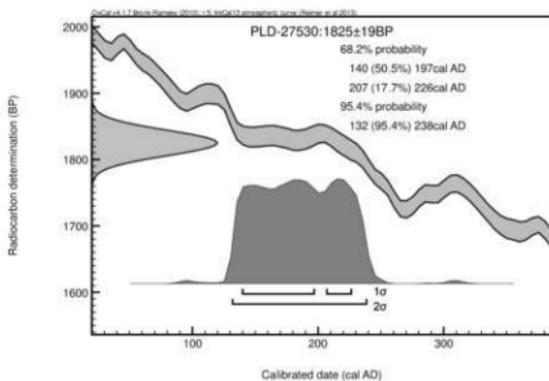
引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎(2009)弥生時代の実年代, 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 9-54, 雄山閣。

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎, 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会。

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.



第 8 1 圖 曆年較正結果

第5章 総括

花ノ木遺跡1次調査について

ここまで、花ノ木遺跡1次の調査で確認された遺物・遺構および自然科学分析の内容について述べてきた。本章では、前章までの調査内容を踏まえて、遺構の時期・性格について検討していく。また、本遺跡を含む周辺谷部の状況について考えておきたい。

各遺構の時期・性格について

花ノ木遺跡1次調査では、竪穴建物11軒、掘立柱建物9棟、溝状遺構8条、土坑18基、ピットが数百基検出されている。ここでは、各遺構の時期や性格を主な出土遺物や遺構の特徴から各時期区分を設定して個別に検討を行う。各時期区分について、弥生時代は渡邊隆行氏によって検討された弥生土器編年を参考にした^{註1)}。土師器は、重藤輝行氏によって検討された筑前・筑後地域の土師器編年^{註2)}を主に用い、須恵器に関しては中村浩氏による須恵器編年^{註3)}を参考にし、第11表の時期区分を設定した。

【旧石器～弥生時代中期頃】

この間の遺構は、本調査地では明確に検出されていないが、石鏃・剥片石器や石包丁などの遺物が出土していることから、人々が調査地周辺で活動をおこなっていたと考えられる。

【弥生時代後期】

本調査地では、この時期から遺構が展開をはじめると考えられる。この時期に該当する遺構としては、7・9号竪穴建物、3～7号溝状遺構が挙げられる。

7号竪穴建物は、第19図5の裏の口縁部の立ち上がりや9～11の裏底部が丸底に変化しつつある状況などから吹上後期4期頃の時期が想定される。一部に古墳時代初頭と考えられる環が出土しているが、主な時期を弥生時代後期後半頃に比定して問題ないと考えられる。9号竪穴建物は、第23図1の裏底部の特徴から吹上後期4期に収まるものと考えられる。第23図2の高環は、金田遺跡17号竪穴建物出土の高環と同系統のもの^{註4)}と考えられること、西側にベッド状遺構、南壁に屋内土坑を有していることなどから、7号竪穴建物と同時期の遺構と考えられる。

3号溝状遺構は遺構全体から出土した遺物の量は少ないが、一部でまとまって出土しており、第51図1の裏外面のタタキ調整や5～7の裏底部の特徴から、吹上後期4期頃の範囲で収まる時期の遺構と考えられる。6号溝状遺構は、第58図5・6の裏底部の特徴や7・8の複合口縁壺の内傾しながら立ち上がる口縁部の特徴などから、吹上後期4期頃が想定される。また、前述した3号溝状遺構と接する可能性があり、遺物の時期もほぼ同時期



第8-2図 切り合い関係

であること、断面の形状も比較的に近いことなどから、7号竪穴建物を巡る一連の排水施設の可能性を考えておきたい。遺構の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。4号溝状遺構より出土した遺物は出土量が少なく、これだけで時期を判断するのは難しい。また、前述した3号溝状遺構に切られていることから、弥生時代後期後半以前の時期を想定しておきたい。

5号溝状遺構は、時期を示す明確な遺物は出土しておらず、遺構から時期を比定することは難しいが、後述する2号溝状遺構に切られている点や7号溝状遺構と並行して検出されていることなどから7号溝状遺構と同時期の可能性を考えておきたい。7号溝状遺構は3号溝状遺構と同様に、全体の遺物出土量は多くないが、一部にまとまって出土している。第60図1の裏は長胴で底部がレンズ状を呈していることから、吹上後期4期の特徴を持つ。また、8・9の高環や15の器台のくびれの位置のなどから弥生時代後期後半頃の遺構と考えられる。

4・5・7号溝状遺構について、これらには張り出し部が付くことや5・7号溝状遺構が平行して検出されていることなどから水田に伴う区画溝、または用水路の可能性を考えておきたい。また一括遺物に関しては、集落内で行われた祭祀で使用した土器を廃棄した可能性を考慮することができる²⁹⁾。この他に、8号溝状遺構サブレンチ2の底部より出土したP630から多量の種実(ドングリ)が出土しており、その年代測定を行った結果、P630出土の種実は弥生時代後期という測定結果が出ている³⁰⁾。8号溝状遺構からは弥生土器の出土が少量ではあるが見られ、これらはピットを削平した際の混入による可能性が考えられる。

【古墳時代前期】

この時期の遺構は1・2号竪穴建物が挙げられる。前の時期に比べると遺跡の規模が若干縮小する時期である。1号竪穴建物は遺物の出土量が少なく、明確な時期比定は出来ないが、4本柱で中央に竈跡、南端に屋内土坑を持ち、壁周溝が巡ることなどから、当該期の遺構であると想定している。2号竪穴建物は第6図6の裏外面のタタキ調整や9・10の高環脚部の特徴から重藤Ⅰ・Ⅱ期頃と考えられる。また、1号竪穴建物に隣接し、4本柱で南端に屋内土坑を有する点や土坑など1号竪穴建物に類似する特徴を持つことから、1・2号竪穴建物ともに、古墳時代前期頃の遺構であるとされる。

【古墳時代中期】

この時期に該当する遺構は、3～6・10号竪穴建物と2・5号溝状遺構である。前段の時期と違い花ノ木遺跡で遺構が大きく展開する時期になる。

3号竪穴建物は、第8図1の裏の特徴や9の高環環部が深く、接合部分に粘土充填が用いられていることなどから、重藤Ⅲ期頃と考えられる。また、この建物は方形の4本柱で南端に屋内土坑を有し、中央に竈跡を持っており、遺物の時期と大きな差はないと考えられる。以上の点から、古墳時代中期前半～中葉頃の遺構と考えられる。当遺構では、これ以外にも東側の主柱穴に木材が残っており、柱穴の近くからミニチュア土器が出土している。また、南東隅に炭化物が集中すること、口縁部を打ち欠いた器や土製模造鏡など出土することから、建物廃棄時に祭祀が行われた可能性が想定される。4号竪穴建物も、第11図1・2の裏の口縁部、小型丸底甕の11の口縁部や、第12図32の環部などの特徴から重藤Ⅲ期頃に該当すると考えられ、古墳時代中期前半～中葉の範囲に収まると考えられる。また、この遺構は他の竪穴建物と離れた位置で検出されていること、主柱穴が検出されておらず、また屋内土坑や竈跡など生活の痕跡を示す遺構が見つかっていないことから、住居以外の用途、祭祀に関連した建物であると考えている。2号溝状遺構は、第46図の小型丸底甕や第47・48図の高環の特徴からその他の建物と同様に重藤Ⅲ期頃の遺構と考えられ、非常に多くの小型丸底甕と高環が出土している。また、同時期の遺構群から離れた位置にあって、水口などの施設は確認されなかったものの、土層断面からU字状に堆積する炭化物が確認されたことから、水樋状遺構を伴い水を引いていた可能性が考えられる。このほかに、建物と離れた位置で検出され、溝全体から高環・小型丸底甕やミニチュア土器(鉢・甕)など祭祀に伴う土器が多

量に出土していることから、この遺構で祭祀がおこなわれたか、集落内でおこなわれた祭祀後の土器を廃棄した可能性も想定される。

5号竪穴建物は、第15図1の裏の口縁部、6の鉢などから重藤Ⅳ期頃と考えられる。また、この遺構は全体に焼土及び炭化物が検出されることから、廃棄時に燃やしたか火事などで焼失してしまった可能性がある。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期中葉に比定される。6号竪穴建物は、カマドを伴わないものの多孔式の甕が出土していることから重藤Ⅳ期以降、古墳時代中期中葉以降に比定される。10号竪穴建物は、2次調査時に重藤Ⅳ期、中村Ⅰ-2、3期の遺物が出土している。また、花ノ木1次調査で唯一カマドが検出されており、4本柱で北西にカマドが付される。出土遺物とこれらの特徴から古墳時代中期中葉の時期に比定されている。

【古墳時代後期～古代(8世紀前半)以降】

この時期に該当する遺構は、1～9号掘立柱建物、1・8号溝状遺構が挙げられる。掘立柱建物については、規則的な配置を確認することはできなかった。4号掘立柱建物は、第32図1の環蓋の特徴から中村編年Ⅱ-3期頃と考えられ、古墳時代後期中葉頃に比定される。4号掘立柱建物以外は遺物が少量しか出土しておらず、明確に時期を比定することは難しい。建物の軸などから大きく2時期に分けられそうであるが、可能性にとどめておき、掘立柱建物は4号掘立柱建物の時期前後の時期に収まる遺構であると考えておきたい。

1号溝状遺構は、第40図9など中村編年Ⅰ-5期頃と考えられる古墳時代中期頃の遺物や第40図1の環蓋端部の特徴や13の坏身、16の底部特徴から中村編年Ⅳ-1期頃の遺物も出土している。このことから、使用時期は最終的には8世紀前半頃まで下ると考えられる。この遺構からは、約3ヶ所から水口と考えられる張り出し部が検出されていることから水田に水を引く為の水路であったと考えられる。一部に弥生や古墳時代中期頃の遺物が出土しており、2・7号溝状遺構からの流れ込みであると考えられる。8号溝状遺構は、第65図19・20の裏や第66図28や32などの高坏の特徴から重藤Ⅰ・Ⅱ期頃と第65図5の环蓋、6・8～10の坏身の特徴から中村編年Ⅱ-3～5期頃の2時期(古墳時代前期と古墳時代後期中葉～後半)が使用時期として想定される。この遺構からは土器の他に、多くの自然木に混じって椀や構造材などの木製品などが出土している。

この時期以降、当調査地で遺構は減少していくが、中世の遺物も少なからず出土していることから、人々の活動は引き続いておこなわれていたものと考えられる。

第11表 花ノ木遺跡1次遺構時期変遷表

時期区分	弥生		古墳									古代		中世以降		
	後期	終末	前期		中期			後期			飛鳥	奈良				
			前半	後半	前半	中葉	後半	前半	中葉	後半						
弥生土器編年	渡邊編年Ⅳ・Ⅴ期															
土器編年	重藤編年	1期	2期	3期	4期	5期	6期	Ⅶ・Ⅷ期	Ⅷ期							
須恵器編年	中村編年			Ⅰ-1期	Ⅰ-2・3期	Ⅰ-4・5期	Ⅱ-1期	Ⅱ-2・3期	Ⅱ-4・6期	Ⅲ-1・3期						
4号溝状遺構																
11号竪穴建物																
18号土坑																
7・9号竪穴建物																
3・5・6・7号溝状遺構																
8号竪穴建物																
1・2号竪穴建物																
6号土坑																
3・4号竪穴建物																
2号溝状遺構																
5・6・10号竪穴建物																
17号土坑																
8号溝状遺構																
1～9号掘立柱建物																
1号溝状遺構																
3号土坑																

※表中で黒く表現している部分はある程度時期比定が出来る期間を示し、薄い部分に用いては時期の想定が可能な期間を示す。

花ノ木遺跡の特徴

前項では各遺構の時期と特徴をまとめてきた。ここでは、以上を踏まえ本遺跡の変遷を整理し、その特徴を考えてみたい。

本遺跡で最初に人々の痕跡が見られるのは旧石器から縄文時代と想定される。その後の弥生時代前期から中期にかけても遺物が出土していることから人々は当地域で活動を行っていたものと考えられる。しかし、建物などの遺構は確認されておらず、集落などを形成し定住していたものとは考えづらい。

弥生時代後期後半以前に調査区を横断する4号溝状遺構がつくられた後、弥生時代後期後半になると7・9号竪穴建物や7号竪穴建物の排水施設と考えられる3・6号溝状遺構が確認されるほか、2ヶ所の張り出しを持ち水口の可能性がある7号溝状遺構とそれに平行する5号溝状遺構が確認される。前述したようにこの頃には建物を確認されることから、集落が営まれ始めたと考えられる。また、5・7号溝状遺構の存在からこの時期には水田も同時におこなわれていた可能性も考えられる。

古墳時代前期頃には1・2号竪穴建物が確認され、断続的に集落が営まれていたものと考えられる。

古墳時代中期になるとミニチュア土器が多く出土し、祭祀施設の可能性がある4号竪穴建物が確認される。ミニチュア土器が大量に出土している事例は市内では、西有田赤ハゲ遺跡の土坑⁸⁾や萩鶴遺跡の溝状遺構⁹⁾などに続く発見で、新たな資料として注目できる。この他に、カマド導入期と考えられるカマドを敷設した10号建物が確認される。日田地域にカマドが導入されたと考えられる5世紀中頃と同時期である事から、従来の調査成果を追認することが出来た。



第83図 時期別遺構図

その後、古墳時代後期になると堅穴建物は見られなくなり、代わりに掘立柱建物が確認されるようになる。古墳時代後期の遺物が少量出土するものの、これらの明確な時期は不明である。掘立柱建物群は軸の方向から2時期に分けることが出来ると考えられ、隣接する平田遺跡では7～8世紀代の掘立柱建物群が見つかったことから、同時期ないし前後に営まれた住居又は倉庫群の可能性を想定しておきたい。1・8号溝状遺構からは古墳時代後期の遺物が多く出土していることから、周辺に同時期の集落が断続的に営まれていた可能性も想定される。その他、2～3ヶ所の水口を持つ1号溝状遺構や大量の自然木に混じって木製品が出土する8号溝状遺構が確認される。木材については第4章の成果から、周辺にある木材が利用されていたことや、利用する目的によって材を選定していたことなど、当時の自然環境や木材の利用状況を知る上で新たな成果が挙げたといえる。またこの時期、当遺跡では引き続き水田が営まれていたものと考えられる。

上記を踏まえて、谷部周辺の遺跡との関係を整理すると、弥生時代後期～古墳時代前期頃にかけて本遺跡を含め平田遺跡や台地裾部に位置する尾部田遺跡などで建物や土坑が確認されるようになり、人々の生活範囲が吹上遺跡や朝日宮ノ原遺跡などの台地上から尾部田遺跡などの台地裾部を経て本遺跡の所在する谷部へと徐々に広がっていったものと想定される。古墳時代中期になると、本遺跡の集落は規模が最も拡大する。現在、この時期に谷部で建物が発見されているのは花ノ木遺跡と隣接する平田遺跡の谷部西側の遺跡のみであるが、今後の調査件数の増加が待って、この時期に集落が存在するのが谷部西側の部分的なものか、谷部全体に広がるものか検討していく必要がある。そのほか、古墳時代後期に入ると当遺跡を含め周辺では住居は確認されないが、代わりに谷部奥または東側の本村遺跡周辺では住居が多く見られる。さらに、水田に水を引くための水路や二串川から水を引くための溝など水田は引き続き営まれていたと考えられ、こうした水田域が周辺まで広がるかなどの検討も今後の谷部及び台地裾部の調査件数の増加を待って検討していく必要がある。

以上のように、花ノ木遺跡1次調査では、二串川の左岸また、小迫谷部の西の入り口に弥生時代後期から古墳時代中期頃にかけて水田を営む集落が見つかったこと。そして、古墳時代後期になっても断続的に水田を営む集落が存在したこと。日田のカマド導入期の時期を追認できたこと。集落内に大量のミニチュア土器が出土し祭祀がおこなわれていたや住居の柱木に使用する木材については周辺の樹木を選別して利用していたことなど多くの成果が得られた。今後は、先に挙げた課題も含め台地周辺の遺跡との関係について検討を行っていく必要がある。

- 註1 渡邊隆行 編『吹上IV—自然科学分析の記録・調査の総括—』日田市埋蔵文化財調査報告書第112集 日田市教育委員会 2014
- 註2 重藤輝行 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の上層部」『佐田茂先生佐賀大学退職記念論文集』2009
- 註3 中村浩 『和泉陶器窯の研究 - 須恵器生産の基礎的研究 - 』柏書房 1981
- 註4 若杉竜太 『求米里遺跡Ⅱ 金田遺跡の調査』日田市埋蔵文化財調査報告書第89集 日田市教育委員会 2009
- 註5 別府大学の山村先生に現地を来訪していただい際にご教授いただいた。
- 註6 本書第4章より
- 註7 上原理平 『花ノ木遺跡2次』日田市埋蔵文化財調査報告書第106集 日田市教育委員会 2012
- 註8 行時志郎 『西有田赤いヶ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第7集 日田市教育委員会 1992
- 註9 行時志郎 『萩鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第9集 日田市教育委員会 1995

第12表 出土土器観察表1

調査番号	No	出土層	種類	図例	法量 (cm)			重量	調整		出土	色調	Hue		備考
					口径	高さ	底径		内部	外部			内面 (裏)	外面 (表)	
第3区	1	1層	土器	黄	(13.8)	(13.3)		(19.8)	ヨコナデ・ケズリ 焼酎サエ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ 焼酎サエ・ナデ	A・D・H	黄	10YR8/4 10YR8/6	10YR8/4 10YR8/6	
第4区	1	2層	土器	黄	18.5	28.8		27.1	ヨコナデ・ナデ・ ケズリ焼ナデ	ヨコナデ・焼酎サ エ・ハク日・ナデ	A・C・D・ E・H	黄 緑	10YR7/4 10YR7/6	10YR7/4 10YR7/6	内外面に黒染あり 外面にスス付着 内外面に鉄分付着
第5区	2	2層	土器	黄	(14.9)	20.5	2.0	(17.8)	ヨコナデ・ケズリ 焼ナデ	ヨコナデ・ハク日・ ナデ	A・C・D・ E	黄 緑	7.5YR6/6 7.5YR7/6	7.5YR 6.5R ~ 7.8R	内外面に黒染あり 内外面にスス付着
第6区	3	2層	土器	黄	(14.8)	(16.3)		(16.6)	ヨコナデ・ナデ・ ケズリ	ヨコナデ・ハク日 焼ナデ	A・C・E	黄 緑	10YR7/6 10YR7/1	7.5YR6/6 7.5YR6/6	内外面に黒染あり スス付着
第7区	4	2層	土器	黄	(15.0)	0.5			ヨコナデ?・焼酎 サエ・ナデ	ヨコナデ・ハク日・ ナデ	A・C・H	黄	7.5YR 6.5R ~ 6.8R	7.5YR 6.5R ~ 7.8R	
第8区	5	2層	土器	黄	(15.4)	0.8			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・平打タ タタキ焼ナデ	A・D・E	黄	10YR8/3	10YR8/3	外面に黒染にスス付着
第9区	6	2層	土器	黄	19.8	20.1		(15.5)	ヨコナデ・焼酎サ エ・ハク日・ケズリ 焼ナデ	ヨコナデ・ハク日・ ナデ・タタキ焼ハ ケ日	A・C・D・ E・H	黄 緑	10YR6/1 10YR6/3	10YR6/4 10YR6/6	内外面に黒染あり 外面に鉄染にスス付着
第10区	7	2層	土器	赤		0.8		(12.6)	ナデ・焼酎サエ	ミカクナデ?	A・C・D・ E	黄 赤	5YR 3Y3 ~ 3/4	7.5YR4/6 7.5YR3/6	内外面にスス付着 内外面に黒染あり 外面に赤染付着
第11区	8	2層	土器	黄	11.7	0.0			ナデ	ナデ	A・C・D・ E	黄 緑	10YR8/4 10YR7/4	10YR8/6 10YR7/6	
第12区	9	2層	土器	黄		6.1	(17.4)		厚裂のため調整不 明	厚裂のため調整不 明	C・D・E・ H	黄 緑	10YR 8/4 ~ 8/6	10YR 8/4 ~ 8/6	外面に鉄染によるスス付 着あり 厚裂 3個
第13区	10	2層	土器	黄		6.2	0.0		ナデ	ナデ	A・C・E・ H	黄 緑	10YR8/6 10YR7/6	10YR8/6 10YR7/6	厚裂 3個
第14区	11	2層	土器	黄		6.1	7.4		ナデ	ナデ	A・C・D・ E	黄 緑	10YR 8/6 ~ 7/8	10YR8/6 10YR7/6	
第15区	12	2層	土器	黄	13.0	0.8			ナデ	ナデ・焼酎サエ	A・C・D・ E	黄 緑	7.5YR7/4 10YR7/6	10YR7/4 10YR7/6	厚裂 3個
第16区	13	2層	土器	黄	11.5	7.5	3.0		ハク日・ナデ・ケ ズリ焼ナデ	ナデ・ハク日	A・C・D・ E	黄 緑	10YR8/4 10YR7/4	10YR8/4 10YR7/4	内外面に黒染あり 赤染あり
第17区	14	2層	土器	黄		0.8	3.6		ケズリ焼酎サエ・ナ デ	工芸ナデ?・ナデ	A・B・C・ H	黄 緑	10YR7/6	10YR8/6 10YR7/6	外面に黒染あり 外面に鉄染による赤化形 あり
第18区	15	2層	土器	黄	18.4	7.1	1.8	(16.5)	ヨコナデ・ケズリ ナデ・ミカク	ヨコナデ・ケズリ 焼ナデ	A・C・D・ E	黄 緑	10YR7/8 10YR6/8	10YR7/8 10YR6/8	外面に黒染あり
第19区	16	2層	土器	黄	11.0	4.1			ナデ	ナデ・ケズリ焼ナ デ	A・C・D・ E	黄 緑	10YR 7/2 ~ 7/3 2.5Y3/1	10YR 7/2 ~ 7/4 10YR2/1	内外面に黒染あり
第20区	17	2層	土器	黄	11.2	2.9			焼酎サエ・ナデ	焼酎サエ・ナデ	A・C・D・ E	黄 緑	7.5YR7/4 7.5YR6/2	7.5YR6/6 7.5YR7/2	
第21区	18	2層	土器	黄		6.7			ケズリ焼ナデ	ケズリ焼ナデ	A・B・C・ D・H	黄 緑	10YR7/6 10YR7/8	10YR7/6 10YR7/8	厚裂
第22区	1	3層	土器	黄	(19.2)	(20.7)			ヨコナデ・焼酎サ エ・ナデ・ハク日・ ケズリ焼ナデ	ヨコナデ・ハク日・ ナデ	A・C・E・ H	黄 緑	7.5YR8/2 7.5YR7/2	7.5YR 6/4 ~ 8/6	外面に黒染あり 外面にスス付着
第23区	2	3層	土器	黄	(16.2)	(15.7)			ナデ	ナデ	A・C・D・ E・H	黄 緑	7.5YR6/6 7.5YR5/6	7.5YR 6/6 ~ 8/6	外面に黒染あり 外面にスス付着
第24区	3	3層	土器	赤	(11.5)	0.0		(13.2)	ヨコナデ・ケズリ ナデ	ヨコナデ・ハク日 ナデ	A・D・E・ H	黄 赤	7.5YR7/6 7.5YR6/6	7.5YR 6/4 ~ 6.8R	5YR8/6
第25区	4	3層	土器	赤	17.3	10.3		10.2	ヨコナデ・ナデ・ ケズリ	ハク日・ナデ	C・D・E	黄 赤	7.5YR7/6 7.5YR6/6	7.5YR 7/8 ~ 8R	内外面にスス付着
第26区	5	3層	土器	赤		(13.2)		(15.5)	ナデ・ケズリ焼ナ デ・焼酎サエ?	ナデ・ハク日	A・B・C・D・ E・H	黄 赤	2.5YR6/8	7.5YR7/8 5YR7/8	外面に黒染あり
第27区	6	3層	土器	赤		0.8		(11.8)	ヨコナデ・ケズリ ナデ	ヨコナデ・ハク日・ ナデ	A・C・E	黄 赤	7.5YR7/6 7.5YR7/8	7.5YR7/6 7.5YR7/8	外面に黒染あり
第28区	7	3層	土器	赤		(2.80)			ナデ・ヨコナデ・ 工芸ナデ	焼酎サエ・ナデ	A・B・D	黄 赤	5YR 7/8 ~ 6/8	5YR7/4 5YR6/2	
第29区	8	3層	土器	赤	5.8	7.2		7.4	ヨコナデ・焼酎サ エ・ナデ	ヨコナデ・焼酎サ エ・ナデ	A・B・D・ E・H	黄 赤	5YR7/6	7.5YR7/6	外面に鉄染 (打ちつき?) あり
第30区	9	3層	土器	黄	(19.6)	14.7	(12.8)		ナデ・ケズリ焼ナ デ	ナデ・焼酎のため 調整不明	A・C・D・ E	黄 赤	7.5YR6/6 10YR6/8	7.5YR6/6 7.5YR6/8	外面赤染付着
第31区	10	3層	土器	黄	(17.4)	6.8			ヨコナデ	ハク日・ナデ?	A・B・C・ H	黄 赤	10R 5/8 ~ 4/8 10R2/1	10R 5/8 ~ 4/8 10R2/1	1層部にスス付着
第32区	11	3層	土器	黄	18.2	0.8			厚裂のため調整不 明	厚裂のため調整不 明	B・D・E	黄 赤	7.5YR 6/8 ~ 6/8	7.5YR 6/8 ~ 6/8	河原赤染あり
第33区	12	3層	土器	黄		0.7		(5.7)	厚裂のため調整不 明	厚裂のため調整不 明	A・C・D・ E	黄 赤	7.5YR7/6 7.5YR7/8	7.5YR7/8 7.5YR6/8	
第34区	13	3層	土器	黄	(17.0)	0.5			ハク日・ナデ	ヨコナデ・ハク日・ ナデ	A・C・E	黄 赤	10YR2/1	10R4/8 10YR2/1	内外面にスス付着
第35区	14	3層	土器	黄		0.8			ナデ	ナデ	A・C・E	黄 赤	7.5YR 7/4 ~ 6/8	7.5YR 6/4 ~ 8/6	内外面に黒染あり
第36区	15	3層	土器	黄	17.3	(12.4)			ケズリ焼ナデ・ナ デ	ナデ	A・C・E・ H	黄 赤	7.5YR6/4 7.5YR5/4	7.5YR6/4 7.5YR5/4	2次焼あり
第37区	16	3層	土器	黄	19.3	(12.9)			ナデ・ケズリ	ナデ	A・C・E	黄 赤	2.5YR6/8 2.5YR6/8	2.5YR6/8 2.5YR6/8	河原赤染あり
第38区	17	3層	土器	黄		(10.4)	(15.5)		ケズリ焼ナデ・ナ デ	ナデ	A・C・D・ E	黄 赤	7.5YR6/6 7.5YR7/6	7.5YR6/6 7.5YR7/4	内外面に黒染あり
第39区	18	3層	土器	黄		8.7	(15.2)		ナデ?・ケズリ焼 ナデ・厚裂のため 調整不明	ナデ?厚裂のため 調整不明	A・C・D	黄 赤	5YR6/6	5YR 6/8 ~ 7/8	

第13表 出土土器観察表2

図録番号	No.	出土層	種別	器型	法量 (cm)			調整		出土	構成	色調			備考
					口径	底径	高さ	内径	外径			内面 (裏)	底	外面 (表)	
第99図	19	3層	土師器	高坪	88.0	12.0		ケズリ・ナデ	ココナデ	A・C・D・E	灰褐色	5.9YR 5.5R ~ 7.5R	黄褐色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	
第99図	20	3層	土師器	高坪	88.0	16.0		ケズリ残ナデ・ナデ	ナデ	B・C・D・E	褐色	5YR7/8	褐色	5YR6/8	
第99図	21	3層	土師器	高坪	88.1	13.0		ナデ・ココナデ	高オサエ残ナデ	A・C・E	褐色	5YR7/6	褐色	5YR6/8	
第99図	22	3層	土師器	高坪	88.0	12.0		ナデ・ケズリ残ナデ	ナデ	A・C・D・H	褐色	5YR 6.5R ~ 6.8R	Cに黄褐色 褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/8	外面に黒染あり
第99図	23	3層	土師器	高坪	85.0			ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・D・E	黄褐色	10YR8/4 10YR7/4	Cに黄褐色 褐色	10YR7/4 10YR7/6	外面に黒染あり
第99図	24	3層	土師器	高坪	85.0			ケズリ・ナデ	ココナデ・ナデ	A・C・D・E	褐色	5YR6/8	褐色	5YR 6.5R ~ 6.8R	
第99図	25	3層	土師器	高坪	85.0			ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D	灰褐色	10YR7/1 10YR7/2	黄褐色	10YR 8.0 ~ 8.4	
第99図	26	3層	土師器	高坪	112.0			ケズリ残ナデ・ナデ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E・H	中黄褐色	2.5Y 6.1 ~ 5.1	灰褐色 灰褐色	2.5Y7/1 2.5Y7/2	
第99図	27	3層	土師器	鉢	15.3	8.2		ナデ・ケズリ	ナデ・ハヤ目・ケズリ残ナデ	A・B・C・D・E	黄褐色	7.5YR 7.0R ~ 7.4R	黄褐色	7.5YR7/8 7.5YR7/8	内外面にスス付着 内外面に黒染あり
第99図	28	3層	土師器	鉢	16.0	8.3		ハヤ目・ケズリ残ナデ	ココナデ・ハヤ目	A・B・C・H	褐色	7.5YR 7.0R ~ 6.6R	Cに黄褐色 褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/8	外面に黒染あり
第99図	29	3層	土師器	鉢	13.8	7.8		ココナデ・ナデ・高オサエ残ナデ	高オサエ残ナデ	D	褐色	7.5YR 6.5R ~ 6.8R	褐色	7.5YR6/8 7.5YR6/8	外面にスス付着
第99図	30	3層	土師器	鉢	13.7	5.3		摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E・F	Cに黄褐色 褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/1	褐色	7.5YR7/5 7.5YR7/8	1層黒染あり
第99図	31	3層	土師器	坪	12.8	4.1		高オサエ・ナデ	高オサエ・ナデ	A・C・D・E	黄褐色	2.5YR5/8 2.5YR4/8	黄褐色	5YR 7.8R ~ 6.8R	
第99図	32	3層	土師器	筒	14.5	5.0		ナデ・高オサエ残ナデ	ナデ・ハヤ目	A・C・D	黄褐色	7.5YR7/2 7.5YR7/4	黄褐色	7.5YR7/2 7.5YR7/4	赤みあり
第99図	33	3層	土師器	筒	85.1	4.1	6.0	ナデ・高オサエ	ナデ・高オサエ	A・D・E	褐色	10YR7/3	Cに黄褐色 褐色	10YR7/3	ミニチュア
第99図	34	3層	土師器	鉢	14.0	3.9	1.5	ケズリ残ナデ・高オサエ・ナデ	高オサエ・ナデ	A・C・E・H	黄褐色	10YR8/4 10YR8/6	黄褐色	10YR 8.0 ~ 8.4	外面下部に黒染あり 内面にスス付着 ミニチュア
第99図	35	3層	土師器	鉢	3.1	3.6		ナデ・高オサエ	ナデ・高オサエ	A・C	黄褐色	7.5YR7/8 7.5YR7/2	黄褐色	7.5YR7/8 7.5YR7/2	内外面にスス付着 ミニチュア
第99図	36	3層	土師器	鉢	4.1	3.9		高オサエ残ナデ	高オサエ残ナデ	A・B・C・D・E	灰褐色	10YR7/1	灰褐色	10YR6/1	ミニチュア
第99図	37	3層	土師器	鉢	8.4	8.0		高オサエ・ナデ	高オサエ・ナデ	A・C・D・E	Cに黄褐色 褐色	10YR7/4	Cに黄褐色 褐色	10YR7/4	ミニチュア
第99図	38	3層	土師器	鉢	5.3	8.9	10.7	ナデ・ケズリ残ナデ・ケズリ	ココナデ・ハヤ目 残ナデ・ナデ	A・C・D・E	黄褐色	5YR2/1	褐色 黄褐色	5YR 7.0R ~ 7.4R 5YR2/1	内外面にスス付着 1層黒染・打付赤染 黒染あり
第118図	1	4層	土師器	甕	17.7	27.8	25.4	ナデ・高オサエ・ケズリ	ナデ・ハヤ目	A・C・E・H	黄褐色	10YR8/4 10YR7/2	黄褐色	10YR8/4 10YR7/2	外面に黒染あり 内面にスス付着 外面に黒染あり
第118図	2	4層	土師器	甕	15.6	27.2	22.0	ナデ・ケズリ残ナデ	ナデ・ハヤ目・ヒヤ目	A・C・E・H	Cに黄褐色 褐色	10YR7/3 7.5YR6/8	Cに黄褐色 褐色	10YR 7.0 ~ 7.4 10YR2/1	内外面に黒染あり 内面にスス付着 外面に黒染あり
第118図	3	4層	土師器	甕	12.2	114.0	16.6	ナデ・高オサエ・ケズリ	ナデ・ハヤ目	A・C・E	黄褐色	10YR5/2	黄褐色	7.5YR6/2	底付着
第118図	4	4層	土師器	甕	17.0	112.0		ナデ・高オサエ・ケズリ残ナデ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	黄褐色	7.5YR 6.4 ~ 8.6R	黄褐色	7.5YR6/8 7.5YR6/8	内外面に黒染あり 内外面にスス付着
第118図	5	4層	土師器	甕	17.3			高オサエ・ハヤ目	ココナデ・ハヤ目	A・C・E	黄褐色	2.5Y7/2	黄褐色	10YR6/2	内面にスス付着 外面に黒染あり
第118図	6	4層	土師器	甕	113.8	87.2		ケズリ・摩耗のため調整不明	ハヤ目・摩耗のため調整不明	A・C・E・H	黄褐色	10YR5/2	Cに黄褐色 褐色	10YR7/4	内面にスス付着
第118図	7	4層	土師器	甕	18.6	111.0		ココナデ・高オサエ・ナデ	ココナデ・ナデ	A・C・E	黄褐色	2.5YR7/2 7.5YR8/3	灰褐色	10YR8/2	外面に黒染あり
第118図	8	4層	土師器	甕	10.3	12.3	12.5	ナデ	ナデ・土具ナデ	A・B・C・D	黄褐色	10YR8/4	灰褐色	7.5YR8/2	外面に黒染あり
第118図	9	4層	土師器	甕	11.0	15.2	12.5	ココナデ・高オサエ・土具ナデ	ココナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E	黄褐色	2.5Y7/4	灰褐色	2.5YR7/2	外面に黒染あり
第118図	10	4層	土師器	甕	14.0	115.1	14.0	ナデ・ケズリ・高オサエ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	黄褐色	10YR8/3	黄褐色	7.5YR7/2	外面に黒染あり 2層黒染あり
第118図	11	4層	土師器	甕	12.6	9.1	11.6	ココナデ・ナデ	ココナデ・ハヤ目 残ナデ	A・C・E	黄褐色	10YR8/3	灰褐色 黄褐色	10YR6/2 10YR5/2	外面にスス付着 底付着
第118図	12	4層	土師器	甕	8.2	17.0	8.8	ナデ・高オサエ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・E・H	Cに黄褐色 褐色	10YR8/4	Cに黄褐色 褐色	10YR8/4	外面に黒染あり
第118図	13	4層	土師器	甕	9.6	8.7	10.4	ココナデ・摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	灰褐色	7.5YR8/2	黄褐色	7.5YR8/3	1層黒染・黒染あり
第118図	14	4層	土師器	甕	11.5	14.8	14.3	ナデ・ケズリ	ナデ	A・C・E・H	黄褐色	10YR8/6	黄褐色	10YR7/6	外面に黒染あり
第118図	15	4層	土師器	甕	10.0	12.2	12.5	ココナデ・高オサエ・ナデ	ココナデ・ハヤ目	A・C・D・E	灰褐色	10YR5/1	10YR7/2 10YR5/2	外面に黒染あり 内面に黒付着	
第118図	16	4層	土師器	甕	8.0	10.8	9.0	ナデ・高オサエ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・D	Cに黄褐色 褐色	5YR6/3	Cに黄褐色 褐色	7.5YR7/4	外面に黒染あり
第118図	17	4層	土師器	甕	8.4	10.8	9.4	ナデ・高オサエ	ナデ・ハヤ目	A・B・C・D	Cに黄褐色 褐色	10YR8/3	黄褐色	7.5YR8/6	外面に黒染あり
第118図	18	4層	土師器	甕	8.3	9.6	9.5	ナデ・高オサエ	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E	黄褐色	7.5YR8/3 5YR6/1	灰褐色 黄褐色	5YR8/1 10YR8/3	外面に黒染あり 底付着
第118図	19	4層	土師器	甕	8.2	12.5	11.0	ナデ・高オサエ・ケズリ	ナデ	A・C・D・E	黄褐色	7.5YR8/6 7.5YR3/1	黄褐色	7.5YR8/8 7.5YR3/1	内外面に黒染あり 内面底付着
第118図	20	4層	土師器	甕	9.0	10.7	10.4	土具ナデ・高オサエ・ナデ	ココナデ・ハヤ目 ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	黄褐色	10YR8/4	黄褐色 黄褐色	7.5YR8/8 7.5YR7/2	外面に黒染あり 外面に黒付着
第118図	21	4層	土師器	甕	9.6	10.7	9.5	ココナデ・土具ナデ	ココナデ・ハヤ目 残ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E	灰褐色	7.5YR5/1	黄褐色	10YR7/3	外面に黒染あり 底付着

第14表 出土土器観察表3

図録番号	No.	出土遺跡	種類	器種	法量 (cm)			器體		胎土	焼成	色調		備考			
					1径	口径	底径	内面	外面			内面 (裏)	外面 (表)				
第121号	22	4号	土師器	甕	10.1	11.1	10.8	上土ナデ・ナデ	ココナデ・ハク白	A・C・E	灰	黄褐色	N4	黄褐色	2.5Y7/3	外面に黒染あり	
第122号	23	4号	土師器	甕	6.3	8.6	8.0	ナデ・白オサエ・厚肉のため調整不明	ナデ・上土ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・E	灰	黄白色	10Y88/2	黄白色	10Y88/2	1層加工・ス付着	
第123号	24	4号	土師器	甕	8.8	10.0	9.7	ハク白地ナデ・ナデ	ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・D	灰	黄褐色	10Y88/3	黄褐色	5Y87/2	外面に黒染あり	
第124号	25	4号	土師器	甕		12.0	13.0	白オサエ・ナデ・胎ナデ	ナデ・白オサエ・厚肉のため調整不明	A・B・C・E	灰	黄褐色	7.5Y88/3	黄褐色	5Y88/3	外面に黒染あり	
第125号	26	4号	土師器	甕		(11.4)	3.6	13.4	ハク白・ナデ・胎ナデ	ナデ・上土ナデ・厚肉のため調整不明	A・C・E	灰	黄褐色	2.5Y7/2	黄褐色	2.5Y8/3	
第126号	27	4号	土師器	甕		(6.4)		9.3	白オサエ・上土ナデ	厚肉のため調整不明	A・C・E	灰	黄褐色	7.5Y88/4	黄褐色	10Y88/3	
第127号	28	4号	土師器	甕		(4.7)	(3.0)		ナデ	ナデ	A・C・D	灰	黄褐色	10Y88/3	黄褐色	10Y88/3	外面に黒染あり
第128号	29	4号	土師器	甕		(2.5)			ナデ	ハク白地ナデ	A・C	灰	黄白色	10Y87/1	褐色	7.5Y87/6	ニニチュア?
第129号	30	4号	土師器	甕		(5.0)			厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・C	灰	黄白色	2.5Y7/1	黄褐色	2.5Y5/1	厚肉・1層焼成
第130号	31	4号	土師器	甕		(5.0)			厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・D・E	灰	黄白色	10Y88/2	黄白色	10Y88/2	ニニチュア
第131号	32	4号	土師器	高杯	(20.4)	15.1	(13.0)		厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・B・C・E・H	灰	黄褐色	7.5Y88/6	黄褐色	7.5Y85/8	外面に黒染あり 内面露部に黒付着
第132号	33	4号	土師器	高杯		(9.6)	13.7		ナデ・ココナデ	厚肉のため調整不明	A・B・C・D・E	灰	黄褐色	10Y88/6	黄褐色	7.5Y88/3	厚肉・1層
第133号	34	4号	土師器	高杯		(9.2)	(13.8)		ナデ・ココナデ・厚肉のため調整不明	ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・D	灰	黄褐色	2.5Y7/2	黄褐色	5Y88/3	厚肉・2層
第134号	35	4号	土師器	高杯		(8.5)	13.2		ナデ・厚肉のため調整不明	ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・E	灰	黄白色	10Y88/2	黄白色	10Y88/2 10B6/6	2次焼成あり
第135号	36	4号	土師器	高杯		(6.2)	10.0		白オサエ・ナデ・ハク白地ナデ	ハク白	A・C・D	灰	黄白色	10Y87/2	黄褐色	7.5Y85/2	
第136号	37	4号	土師器	高杯		(5.5)			上土ナデ	ナデ	A・C・E	灰	黄白色	10Y87/3	黄褐色	10Y87/3	
第137号	38	4号	土師器	高杯		(9.3)			上土ナデ・ナデ・ハク白	ハク白	A・C・D・E	灰	黄白色	5Y87/4	褐色	2.5Y87/2	外面に焼成による赤染あり
第138号	39	4号	土師器	高杯		(7.0)			ハク白・ハク白	ナデ・ハク白	A・C・E・H	灰	黄白色	2.5Y7/1	黄褐色	10Y87/2	
第139号	40	4号	土師器	打付鉢	10.8	(6.9)			ハク白地ナデ	ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・D	灰	黄褐色	5Y88/3	黄褐色	7.5Y88/3	
第140号	41	4号	土師器	打付鉢		(3.0)	10.4		ハク白・ナデ・厚肉のため調整不明	ハク白・白オサエ・厚肉のため調整不明	C・E	灰	黄白色	10Y87/2	黄褐色	10Y87/2	
第141号	42	4号	土師器	打付鉢		(2.8)			ナデ	ナデ	A・C・E・H	灰	褐色	7.5Y86/6	黄白色	10Y88/2	
第142号	43	4号	土師器	甕	(4.6)	(6.7)	5.8		ナデ	ナデ	A・B・C・D	灰	黄褐色	7.5Y88/6	黄褐色	10Y87/3	外面に黒染あり ニニチュア
第143号	44	4号	土師器	甕	(3.8)	6.0	(5.8)		白オサエ・ナデ	厚肉のため調整不明	A・C・E	灰	黄白色	2.5Y8/2	黄白色	2.5Y8/2	ニニチュア
第144号	45	4号	土師器	甕	4.2	5.2	4.9		白オサエ・ナデ	厚肉のため調整不明	A・C・E	灰	黄褐色	2.5Y7/2	黄白色	10Y88/2	外面に黒染あり ニニチュア
第145号	46	4号	土師器	甕	6.5	6.2	7.1		白オサエ	白オサエ	A・C・E	灰	黄褐色	7.5Y85/1	黄褐色	2.5Y7/2	ニニチュア
第146号	47	4号	土師器	甕	5.7	6.8	5.4		白オサエ	白オサエ	A・B・C・E	灰	黄褐色	5Y85/6	褐色	2.5Y86/9	外面に黒染あり ニニチュア
第147号	48	4号	土師器	甕	6.0	4.0			白オサエ	白オサエ・ナデ	A・B・C	灰	黄褐色	2.5Y8/3	黄白色	2.5Y8/2	1層加工・黒染あり ニニチュア
第148号	49	4号	土師器	甕	5.3	4.2			白オサエ	白オサエ・厚肉のため調整不明	A・C	灰	黄褐色	2.5Y8/3	黄白色	2.5Y88/2	ニニチュア
第149号	50	4号	土師器	甕	3.6	3.1			白オサエ	白オサエ	A・B・C	灰	黄褐色	2.5Y7/2	黄褐色	2.5Y8/2	ニニチュア
第150号	51	4号	土師器	甕	4.0	2.8			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・B・C・D	灰	黄褐色	2.5Y8/3	黄褐色	2.5Y8/3	内外面に黒染あり ニニチュア
第151号	52	4号	土師器	甕	4.6	3.2			白オサエ	白オサエ・ナデ	A・B・C・D	灰	黄白色	10Y87/2	黄褐色	2.5Y8/3	外面に黒染あり ニニチュア
第152号	53	4号	土師器	鉢	4.2	4.1			白オサエ・ナデ	白オサエ	A・C・E	灰	褐色	7.5Y86/6	黄褐色	2.5Y7/2	外面に黒染あり ニニチュア
第153号	54	4号	土師器	鉢	3.8	3.8			白オサエ	白オサエ	A・C・E	灰	黄白色	10Y88/2	黄白色	2.5Y8/2	外面に黒染あり ニニチュア
第154号	55	4号	土師器	鉢	5.0	4.0			白オサエ	白オサエ・ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・E	灰	黄褐色	10Y88/4	黄褐色	7.5Y88/3	内面に黒付着 ニニチュア
第155号	56	4号	土師器	鉢	4.3	3.2			白オサエ・ナデ	ナデ	A・B・C・E	灰	黄白色	10Y88/2	黄褐色	2.5Y8/3	外面に黒染あり ニニチュア
第156号	57	4号	土師器	鉢	(4.0)	3.1	(2.0)		白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・D・E	灰	褐色	7.5Y86/6	褐色	10Y87/3	ニニチュア
第157号	58	4号	土師器	鉢	(3.0)	2.6			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C	灰	黄白色	10Y87/4	黄白色	10Y88/2	ニニチュア
第158号	59	4号	土師器	鉢	3.5	2.3			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C・E	灰	黄褐色	10Y88/3	黄褐色	10Y88/3	外面に黒染あり ニニチュア
第159号	60	4号	土師器	鉢		(3.6)			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C	灰	黄褐色	10Y86/6	黄褐色	10Y86/6	外面に黒染あり ニニチュア
第160号	61	4号	土師器	鉢		(2.3)			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C	灰	黄褐色	10Y87/6	黄褐色	10Y87/3	厚肉・面人 ニニチュア
第161号	62	4号	赤土土器	甕		(3.7)	(6.0)		上土ナデ	ナデ	A・C・E	灰	黄褐色	10Y84/1	黄褐色	10Y87/2	外周部に黒染あり
第162号	58	4号	土師器	鉢	(3.0)	2.6			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C	灰	黄白色	10Y87/4	黄白色	10Y88/2	ニニチュア
第163号	59	4号	土師器	鉢	3.5	2.3			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C・E	灰	黄褐色	10Y88/3	黄褐色	10Y88/3	外面に黒染あり ニニチュア
第164号	60	4号	土師器	鉢		(3.6)			白オサエ・ナデ	白オサエ・ナデ	A・C	灰	黄褐色	10Y86/6	黄褐色	10Y86/6	外面に黒染あり ニニチュア

第15表 出土土器観察表4

調査番号	出土遺構	種類	形種	法量 (cm)				調整		出土	形状	色		備考		
				口径	高さ	口径	底径	内径	外径			内面	外面		Hue	Value
第133号	61	4号	土師器	鉢	(2.3)	6.8			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR7/6	紅褐色	10YR7/3	窯痕み認め ニニチュア
第133号	62	4号	赤土 土器	甕	(3.7)	6.8			上耳ナデ	ナデ	A・C・E	灰白色	10YR4/1	紅褐色	10YR7/2	外面に窯痕あり
第133号	58	4号	土師器	鉢	(3.0)	2.6			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR7/4	灰白色	10YR6/2	ニニチュア
第133号	59	4号	土師器	鉢	3.5	2.3			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C・E	淡黄褐色	10YR8/3	淡黄褐色	10YR8/3	外面に窯痕あり ニニチュア
第133号	60	4号	土師器	鉢	(3.0)				胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR6/6	紅褐色	10YR6/6	外面に窯痕あり ニニチュア
第133号	61	4号	土師器	鉢	(2.3)	6.8			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR7/6	紅褐色	10YR7/3	窯痕み認め ニニチュア
第133号	62	4号	赤土 土器	甕	(3.7)	6.8			上耳ナデ	ナデ	A・C・E	灰白色	10YR4/1	紅褐色	10YR7/2	外面に窯痕あり
第133号	58	4号	土師器	鉢	(3.0)	2.6			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR7/4	灰白色	10YR6/2	ニニチュア
第133号	59	4号	土師器	鉢	3.5	2.3			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C・E	淡黄褐色	10YR8/3	淡黄褐色	10YR8/3	外面に窯痕あり ニニチュア
第133号	60	4号	土師器	鉢	(3.0)				胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR6/6	紅褐色	10YR6/6	外面に窯痕あり ニニチュア
第133号	61	4号	土師器	鉢	(2.3)	6.8			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C	紅褐色	10YR7/6	紅褐色	10YR7/3	窯痕み認め ニニチュア
第133号	62	4号	赤土 土器	甕	(3.7)	6.8			上耳ナデ	ナデ	A・C・E	灰白色	10YR4/1	紅褐色	10YR7/2	外面に窯痕あり
第133号	63	4号	赤土 土器	甕	(3.4)				摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	紅褐色	10YR7/3	紅褐色	10YR7/3	胎目調整あり
第133号	64	4号	赤土 土器	甕	3.3	5.7			胎オサエ・ナデ	胎オサエ・ナデ	A・C・D・E	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	外面に窯痕あり
第133号	65	4号	赤土 土器	胎付	(13.4)	6.7			ハヤ目胎ナデ・工具類	ハヤ目胎ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	紅褐色	10YR7/3	紅褐色	10YR7/3	胎目付文
第153号	1	5号	土師器	甕	15.7	(13.7)			ココナデ・ケズリ 胎ナデ	ココナデ・ハヤ目・ ヒヨケ・ナデ	A・B・C・ D・E	紅褐色	7.5YR5/4	紅褐色	7.5YR2/1	内面に窯痕あり スス付着
第153号	2	5号	土師器	甕	15.2	(26.4)			ナデ・ココナデ・胎 オサエ	ハヤ目・ナデ・ヒ ヨケ	A・C・D・ H	胎赤褐色	5YR 5/6～5/8	赤褐色	5YR4/6	外面に窯痕あり スス付着
第153号	3	5号	土師器	高坪	18.5	(7.1)			ナデ・ココナデ	ナデ・ココナデ	A・B・D	褐色	5YR6/8	褐色	5YR6/8	
第153号	4	5号	土師器	高坪	18.4	(5.0)			ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ・ハヤ目・摩 耗のため調整不明	A・D・E	褐色	5YR7/8	褐色	5YR6/8	
第153号	5	5号	土師器	鉢	21.1	12.3	3.8		ナデ・ハヤ目・胎 オサエ・ケズリ	ナデ・ハヤ目	A・B・C・ E・H	紅褐色	2.5YR5/8	紅褐色	2.5YR5/8	内面に窯痕に窯痕あり 外面にスス付着
第153号	6	5号	赤土 土器	鉢	(2.8)	5.2			ナデ・胎オサエ	胎オサエ・胎ナデ	A・B・C・ D	黄褐色	7.5YR7/8	黄褐色	7.5YR6/8	
第153号	7	5号	土師器	坪	12.4	6.2			ケズリ胎ナデ	ナデ・ケズリ胎ナ デ	A・C・E	紅褐色	5YR6/4	褐色	5YR 7/6～7/8	外面にスス付着 内面に窯痕による赤化あり
第153号	8	5号	土師器	坪	14.5	3.2			ナデ・摩耗のため調整不明	ココナデ・ハヤ目・ 摩耗のため調整不明	A・C・D・ E	灰白色	7.5YR8/2	褐色	5YR 6/8～7/8	
第153号	9	5号	土師器	坪	(5.0)				ココナデ・ナデ	ココナデ・ハヤ目	A・C	紅褐色	10YR7/3	黄褐色	10YR3/1	内面に窯痕あり
第153号	10	5号	赤土 土器	胎付	(13.4)				ナデ・胎オサエ	ハヤ目	A・B・C・ E	紅褐色	7.5YR 6/3～5/3	紅褐色	7.5YR6/4	外面に窯痕あり 内面に窯痕によるススあり
第173号	1	6号	土師器	甕	(22.0)	(10.0)	(4.4)		ナデ・ハヤ目・胎 オサエ	ココナデ・ナデ	A・C・D・ E	淡黄褐色	7.5YR 6/4～6/6	褐色	5YR6/6	外面に窯痕による赤化あり
第173号	2	6号	土師器	甕	(16.0)	(10.2)			ココナデ・ケズリ 胎ナデ	ココナデ・ハヤ目 胎ナデ	A・B・C・ D	胎赤褐色	5YR 5/6～5/8	胎赤褐色	5YR 5/6～5/8	
第173号	3	6号	土師器	甕	(18.4)				ハヤ目	ココナデ・ハヤ目	A・C・D・ H	紅褐色	10YR7/4	紅褐色	7.5YR6/4	内面に窯痕あり
第173号	4	6号	土師器	高坪	(22.0)	(6.8)			ココナデ・ナデ	ココナデ・ナデ	A・C・D・ E・H	褐色	5YR 7/6～6/8	黄褐色	5YR6/4	
第173号	5	6号	土師器	坪	(15.7)	5.3			胎オサエ・ナデ	ナデ・上耳ナデ	A・C・E・ H	胎赤褐色	5YR5/8	褐色	2.5YR6/8	外面に窯痕あり
第173号	6	6号	土師器	坪	13.6	4.6			ナデ	ハヤ目・ナデ	D・G	褐色	5YR8/8	紅褐色	7.5YR7/4	
第173号	7	6号	土師器	甕	21.4	19.6			ナデ・ケズリ胎ナ デ	ナデ・ハヤ目・ナ デ	A・C・D・ E	褐色	7.5YR 7/6～6/6	紅褐色	7.5YR7/4	内面に窯痕あり 外面にスス付着 (厚さ5層)
第173号	8	6号	赤土 土器	甕	(3.0)				摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・ E	灰白色	10YR3/1	灰白色	10YR6/2	内面に窯痕あり 胎目付文
第173号	9	6号	赤土 土器	高坪	(18.5)	(9.5)			ナデ・ハヤ目	ナデ・ハヤ目	A・C・D・ H	淡黄褐色	10YR6/4	淡黄褐色	7.5YR6/8	胎目調整あり
第193号	1	7号	土師器	鉢	(21.2)	(10.2)			ココナデ・ハヤ目・ 胎ナデ	ココナデ・ナデ	A・C・D・ E	灰白色	5YR8/2	黄褐色	5YR7/2	外面に窯痕あり 外面にスス付着
第193号	2	7号	土師器	鉢	11.6	5.4	2.5		ココナデ・ハヤ目・ 摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D	淡黄褐色	7.5R8/3	灰白色	7.5R8/2	外面に窯痕にスス付着
第193号	3	7号	土師器	鉢	(20.0)	7.6	6.4		胎オサエ・ナデ・ ハヤ目	ココナデ・ケズリ 胎ナデ	A・B・C・ D・E	紅褐色	7.5YR7/4	褐色	7.5YR7/8	外面に窯痕に窯痕あり
第193号	4	7号	土師器	鉢	(19.2)	7.8			摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・ E	淡黄褐色	(10YR8/4)	黄褐色	10YR8/8	外面にスス付着
第193号	5	7号	赤土 土器	甕	(26.0)	(7.0)			ココナデ・ナデ・ ハヤ目・胎オサエ・ ケズリ	ココナデ・ハヤ目・ ナデ	A・D・H	淡黄褐色	10YR8/4	紅褐色	10YR8/4	外面に窯痕あり 胎目に胎目調整あり
第193号	6	7号	赤土 土器	甕	(30.0)	(7.4)			ココナデ・ケズリ 胎ナデ	ココナデ	A・C・D・ E	紅褐色	10YR 7/3～7/4	黄褐色	10YR8/8	胎目調整あり 外面にスス付着
第193号	7	7号	土師器	甕	(13.3)	6.3			ナデ・胎オサエ	ハヤ目・ナデ	A・B・C・ D・E	黄褐色	7.5YR7/8	黄褐色	10YR6/8	外面に窯痕あり

第16表 出土土器観察表5

観号 番号	No	出土遺 跡	種類	法量 (cm)				形状		胎土	色調				備考		
				口径	高さ	底径	胴径	内径	外径		内面 (裏)	外面 (表)	底面				
第19号	8	7号	土師器	甕	0.60	7.0					A・B・C・ D・E	黒	淡褐色	3YR8/4	赤色 赤褐色	10YR6/8 2.5YR4/8	内面に黒線による赤化あり 経路不明
第19号	9	7号	弥生 土器	甕	8.4	8.7					A・C・D・ H	黒	淡褐色	3YR8/4	赤色 赤褐色	5YR 7.5R～6.8	内外面に黒線あり 底部による赤化あり
第19号	10	7号	弥生 土器	甕	8.2	8.5					A・C・D・ E・H	黒	灰白色 淡褐色	10YR8/2 10YR8/3	黒褐色 暗褐色	10YR8/6 10YR7/6	
第19号	11	7号	弥生 土器	甕	8.7	5.9					A・E	黒	淡褐色	7.5YR 8.4～6.8	赤褐色	7.5YR 6.8～7.8	内面に黒線あり
第19号	12	7号	土師器	高杯	0.22						B・C・E・ H	黒	褐色	3YR 7.8～6.8	褐色	3YR6/8	穿孔3部
第19号	13	7号	弥生 土器	高杯	0.20	20.1	(15.7)				A・B・C・ D・E	黒	淡褐色	7.5YR8/4 3YR6/8	淡褐色	7.5YR8/4 5YR8/8	内外面に黒線あり 内面に黒線による赤化あり
第21号	1	8号	土師器	甕	0.50	06.4					A・C・D	黒	赤褐色	7.5YR7/4	褐色	3YR7/4	外周に黒線にスス付着
第21号	2	8号	土師器	高杯	0.50	05.8					A・E	黒	赤褐色 黒褐色	5YR4/8 5YR3/1	褐色	5YR 6.6～6.8	内面にスス付着
第23号	1	9号	土師器	甕	0.20	9.8					A・B・H E・G・H	黒	淡褐色 赤褐色 黒褐色 黒褐色	10YR8/3 10YR7/3 10YR4/1 10YR3/1	赤褐色 赤褐色 黒褐色 黒褐色	10YR8/3 10YR7/3 10YR4/1 10YR3/1	内外面に黒線あり スス付着 内面に黒線による赤化あり
第23号	2	9号	土師器	高杯	8.0						A・C・D・ E・H	黒	淡褐色	3YR6/8	褐色	3YR6/8	外周にスス付着
第26号	1	11号	弥生 土器	甕	0.50						A・C・D E・H	黒	赤褐色	10YR7/3	赤褐色	10YR7/3	内面に赤線あり
第32号	1	4号	新石器	環状	0.22	0.8					C・F	黄	暗褐色	7/3	暗褐色	7/1	
第32号	2	4号	新石器	環状	0.28						C・E	黄	灰白色 赤褐色	10YR7/1 10YR7/2	灰白色 黒褐色	10YR7/3 10YR6/1	
第40号	1	1号	新石器	環状	16.1	2.8					E	黄	灰色	N5/	灰色	N5/	つまみ跡3.1cm
第40号	2	1号	新石器	環状	0.35	0.1					F	黄	灰白色	N7/	暗灰色	N3/	内面にへう虫記号あり 土師器にスス付着あり
第40号	3	1号	新石器	環状	0.3						B	黄	灰白色	N5/	灰色	N5/	
第40号	4	1号	新石器	環状	0.1						E	黄	赤褐色	N7/	灰白色	N5/	
第40号	5	1号	新石器	環状	0.38						E	黄	灰色	N4/	灰色	N4/	
第40号	6	1号	新石器	環状	0.3						E	黄	灰色	N5/	灰色	N5/	外周にへう虫記号あり
第40号	7	1号	新石器	環状	0.7						E	黄	灰色	N5/	灰色	N5/	つまみ跡0.5cm
第40号	8	1号	新石器	環状	0.30						E	黄	灰色	N5/	灰色	N5/	外周に黒線へう虫記号あり 受け部径(15.2cm)
第40号	9	1号	新石器	環状	0.22	4.5					E・F	黄	灰色	N6/	灰色	N6/	受け部径(15.0cm)
第40号	10	1号	新石器	環状	0.02	0.8					C・E	黄	灰色	N4/	灰色	N4/	1型式3部類(9号付属)
第40号	11	1号	新石器	環状	0.7						E	黄	灰白色	N7/	灰色	N6/	受け部径(15.2cm)
第40号	12	1号	新石器	環状	0.5						E	黄	灰白色	N7/	灰色	N5/	内面にへう虫記号 受け部径(13.6cm)
第40号	13	1号	新石器	環状	8.0	2.9	4.7				A・B	黄	淡褐色	10YR4/2	赤褐色 灰褐色	5Y5/1 5YR5/2	外周に黒線へう虫記号あり
第40号	14	1号	新石器	環状	0.8						E	黄	灰色	N6/	灰色	N6/	
第40号	15	1号	新石器	環状	0.28						E	黄	灰白色	N7/	灰色	N5/	
第40号	16	1号	新石器	環状	0.40	0.8	(0.6)				E	黄	灰白色	N7/	灰色	N7/	
第40号	17	1号	新石器	高杯	0.78						C・E・F	黄	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
第40号	18	1号	新石器	高杯	0.28	0.8					E	黄	灰色	N4/	灰色	N4/	
第40号	19	1号	新石器	甕	6.3						E	黄	灰白色	N7/	赤褐色	3YR5/3	底状文
第40号	20	1号	新石器	甕	8.2	8.9					E	黄	暗褐色	N3/	暗褐色	N3/	底面
第40号	21	1号	新石器	甕	0.07		(21.2)				E	黄	灰色	N6/	灰色	N6/	内面に付着物あり 底面
第40号	22	1号	新石器	ハコ ウ	0.2						E	黄	赤褐色	2.5YR5/3	赤褐色	2.5YR5/3	底状文
第40号	23	1号	新石器	甕	5.4	9.6	06.2				E・F	黄	灰色 暗褐色	N6/ N3/	灰色	N6/ N3/	
第40号	24	1号	新石器	高杯	4.2		(12.0)				E・F	黄	灰色	N6/	灰色	N6/	
第40号	25	1号	新石器	甕	23.0	5.8					E	黄	灰白色	2.5Y9/2	灰色	N7/	内外面に自然紋
第40号	26	1号	新石器	甕	0.8						E	黄	灰色	N5/	灰色	N5/	内外面に自然紋
第40号	27	1号	新石器	甕	0.6						E・F	黄	暗褐色	2.5Y5/1	暗褐色	2.5Y5/1	内外面に自然紋
第40号	28	1号	新石器	甕	0.3						中 心部	黄	赤褐色	2.5Y6/3	赤褐色	2.5Y6/3	
第42号	29	1号	新石器	甕	0.77						E	黄	赤褐色	5YR5/4	赤褐色	7.5YR6/2	
第42号	30	1号	新石器	甕	0.26	48.4					E	黄	赤褐色	3YR5/4	赤褐色	5YR6/4	
第42号	31	1号	新石器	甕	0.76						B	黄	灰色	N6/	灰色	N4/	
第42号	32	1号	新石器	甕	0.08						B・E	黄	灰色	N5/	灰色	N5/	底部に赤線あり
第42号	33	1号	新石器	甕	0.97		(42.8)				E	黄	灰色	N6/	灰色	N6/	内面に自然紋
第42号	34	1号	新石器	甕	8.1						E	黄	灰白色	N7/	灰色	N6/	内面に自然紋
第42号	35	1号	新石器	甕	0.34						E	黄	赤褐色	7.5YR5/3	灰色	N6/	

第17表 出土土器観察表6

図版番号	No.	出土層	種類	形状	法量 (cm)			用途		出土	色調		備考		
					口径	高さ	胴径	内面	外面		内面 (裏)	外面 (表)			
第4-2層	36	1層	煎茶碗	変					当て具	粘土目タタキ焼ナデ	F	黄	内面(裏) 7.5YR5/4	外面(表) 10YR7/3	
第4-2層	37	1層	煎茶碗	変					当て具	粘土目タタキ焼ナデ	F	黄	内面(裏) 6N7	外面(表) 6N7	外面に自然釉
第4-2層	38	1層	煎茶碗	変					丹心内状当て具	粘土目タタキ焼ナデ	F	黄	内面(裏) 7.5YR5/4	外面(表) 7.5YR7/3	
第4-2層	39	1層	煎茶碗	変					当て具	粘土目タタキ焼ナデ	F	黄	内面(裏) 2.5Y7/1	外面(表) 2.5Y6/1	内外面にわずかに自然釉
第4-2層	40	1層	煎茶碗	変					ナデ	粘土目タタキ焼ナデ	F-E	黄	内面(裏) 6N7	外面(表) 6N3	
第4-3層	41	1層	煎茶碗	変	日7.60	日7.20			ナデ	ナデ	F-E	黄	内面(裏) 5YR 7.5/6-6.5	外面(表) 7.5YR 6.5/6-7.8	
第4-3層	42	1層	煎茶碗	変	日7.40	日7.20			ハク目	ココナデ・煎茶碗・ナデ	A・C・D・E	黄	内面(裏) 7.5YR6/4	外面(表) 7.5YR5/4 7.5YR2/1	
第4-3層	43	1層	煎茶碗	変	日3.30	日6.50			厚縁のため調整不明	ココナデ・ハク目・厚縁のため調整不明	A・C・D	黄	内面(裏) 10YR7/3	外面(表) 7.5YR8/3	外面に黒染あり
第4-3層	44	1層	煎茶碗	変	日5.10				ナデ・ケズリ	ココナデ・ハク目・厚縁のため調整不明	A・C・D	黄	内面(裏) 7.5YR6/4	外面(表) 7.5YR6/4	
第4-3層	45	1層	煎茶碗	変	日4.00				ココナデ	ココナデ	A・C・E	黄	内面(裏) 10YR6/2	外面(表) 10YR6/2	外面に黒染あり
第4-3層	46	1層	煎茶碗	変	日7.50				厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	A・C・E	黄	内面(裏) 10YR7/2	外面(表) 10YR7/2	
第4-3層	47	1層	煎茶碗	高杯	日20.60	日11.40			厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	A・C・D・E	黄	内面(裏) 7.5YR7/3	外面(表) 7.5YR7/3	内外面に黒染による赤染あり 厚縁に黒染付
第4-3層	48	1層	煎茶碗	高杯	日19.10	日5.20			厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	A・C・E	黄	内面(裏) 10YR7/3	外面(表) 10YR7/3	
第4-3層	49	1層	煎茶碗	高杯	日4.00				煎ナデ・ナデ	ココナデ	A・C・D	黄	内面(裏) 2.5Y7/2	外面(表) 2.5Y7/2	
第4-3層	50	1層	煎茶碗	高杯	日4.00				ハク目	ココナデ	A・C	黄	内面(裏) 10YR8/3	外面(表) 10YR8/3	厚縁に黒染あり
第4-3層	51	1層	煎茶碗	碗	日5.50	日5.00			厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	A・C・D・E	黄	内面(裏) 5YR7/6	外面(表) 5YR7/6	
第4-3層	52	1層	煎茶碗	碗	日7.30	日3.00	日6.60		ココナデ・ナデ	ココナデ・上煎ナデ	C・D	黄	内面(裏) 7.5YR8/6	外面(表) 7.5YR8/6	
第4-3層	53	1層	煎茶碗	碗	日5.80	日3.30	日5.00		ココナデ・ナデ	ココナデ・ナデ・ケズリ	C・D	黄	内面(裏) 10YR7/3	外面(表) 7.5YR7/3	
第4-3層	54	1層	煎茶碗	鉢	日4	日6.10			煎茶碗・ナデ	煎茶碗・ナデ	A・C・D・E・H	黄	内面(裏) 7.5YR6/4 7.5YR5/4	外面(表) 7.5YR 6/3-5/3	外面に黒染あり ミニチュア
第4-3層	55	1層	煎茶碗	鉢	日3.00	日4.00	日2.00		煎茶碗・ナデ	煎茶碗・ナデ	C・E	黄	内面(裏) 2.5Y7/1	外面(表) 2.5Y7/2 2.5Y7/3	外面に黒染あり ミニチュア
第4-3層	56	1層	煎茶碗	鉢	日3.00	日2.70	日1.40		煎茶碗・ナデ	煎茶碗・ナデ	A・C・E	黄	内面(裏) 10YR7/4 10YR7/3	外面(表) 10YR4/1	黒染による赤染あり 内面に黒染付 ミニチュア
第4-3層	57	1層	煎茶碗	鉢	日2.50	日3.60			ケズリ後ナデ	煎茶碗・ナデ	A・C・E	黄	内面(裏) 10YR7/4 10YR7/3	外面(表) 10YR7/4 10YR7/3	内外面に黒染あり ミニチュア
第4-3層	58	1層	煎茶碗	鉢	日2.20	日3.80			煎茶碗・ナデ	煎茶碗・ナデ	A・C	黄	内面(裏) 5YR 7.5/6-6.5	外面(表) 7.5YR8/3 7.5YR8/4	外面に黒染あり ミニチュア
第4-3層	59	1層	煎茶碗	鉢	日2.50	日2.30			ケズリ・ナデ	ナデ	C・E	黄	内面(裏) 10YR8/4 10YR7/2	外面(表) 10YR 8.5/6-7.8	ミニチュア
第4-3層	60	1層	煎茶碗	変	日5.40	日4.80			ケズリ・ナデ・厚縁のため調整不明	ナデ	A・B・C・D・E・H	黄	内面(裏) 5YR 3/1-2/1	外面(表) 5YR 7/6-6/8	外面に黒染あり 内面に黒染あり
第4-3層	61	1層	煎茶碗	変	日3.70	日6.00			厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	B・C・E	黄	内面(裏) 10YR7/4	外面(表) 5YR7/4	
第4-3層	62	1層	煎茶碗	変	日3.00	日6.40			煎茶碗・ナデ・厚縁のため調整不明	ハク目・ナデ・厚縁のため調整不明	A・C・D・E・H	黄	内面(裏) 10YR7/2	外面(表) 5YR7/8	
第4-3層	63	1層	煎茶碗	変	日8.70	日5.20			ハク目	ハク目	A・C・D	黄	内面(裏) 2.5YR2/2	外面(表) 2.5YR2/2 2.5Y2/1	外面に黒染あり
第4-3層	64	1層	煎茶碗	変	日6.40	日5.00			ココナデ・ハク目	ハク目後ナデ	A・C・E・H	黄	内面(裏) 7.5YR 7/6-6.5	外面(表) 7.5YR 7/6-6.5	
第4-5層	1	2層	煎茶碗	変	日18.00	日16.60		(24.80)	ココナデ・上煎ナデ・厚縁のため調整不明	ココナデ・ハク目	A・B・D・E	黄	内面(裏) 7.5YR6/2 7.5YR5/4	外面(表) 7.5YR7/4 7.5YR6/4 7.5YR2/1	内外面に黒染あり
第4-5層	2	2層	煎茶碗	変	日19.00	日20.50		(25.40)	厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	B・E・H	黄	内面(裏) 7.5YR7/4	外面(表) 7.5YR7/4	
第4-5層	3	2層	煎茶碗	変	日18.80	日13.40			厚縁のため調整不明	厚縁のため調整不明	B・E・H	黄	内面(裏) 10YR7/3	外面(表) 7.5YR7/4	内外面に黒染による赤染あり
第4-5層	4	2層	煎茶碗	変	日7.80	日6.40			ココナデ・煎茶碗・ナデ・厚縁のため調整不明	ココナデ・煎茶碗・ナデ・厚縁のため調整不明	A・E・C・H	黄	内面(裏) 10YR7/4 10YR7/6	外面(表) 10YR5/4 10YR4/4	口縁部に黒染あり
第4-5層	5	2層	煎茶碗	変	日7.40	日10.00			ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ・ハク目	A・C・D・E	黄	内面(裏) 7.5YR7/8 7.5YR6/8	外面(表) 7.5YR 7/8-7/4	内面に黒染付
第4-5層	6	2層	煎茶碗	変	日5.40	日6.90			ココナデ・煎茶碗・ナデ・厚縁のため調整不明	ココナデ・ハク目後ナデ・厚縁のため調整不明	A・C・D・E・H	黄	内面(裏) 7.5YR7/6 7.5YR5/6	外面(表) 7.5YR7/6 7.5YR5/6	
第4-5層	7	2層	煎茶碗	変	日11.80	日10.30		(16.30)	ナデ	ナデ	A・C・D・E	黄	内面(裏) 7.5YR8/4	外面(表) 7.5YR8/4 7.5YR7/4	
第4-5層	8	2層	煎茶碗	変	日18.10	日12.60			ココナデ・煎茶碗・ナデ	ココナデ・ハク目後ナデ	A・B・C・E・H	黄	内面(裏) 7.5YR8/6	外面(表) 7.5YR 7/6-6/8	
第4-5層	9	2層	煎茶碗	変	日15.50	日10.00			ココナデ・ケズリ後ナデ・厚縁のため調整不明	ココナデ・厚縁のため調整不明	A・D・E・H	黄	内面(裏) 7.5YR7/8	外面(表) 7.5YR8/3 7.5YR7/4	外面に黒染あり
第4-5層	10	2層	煎茶碗	変	日16.40	日7.50			ココナデ・煎茶碗・ナデ・厚縁のため調整不明	ココナデ・厚縁のため調整不明	A・C・D・E	黄	内面(裏) 7.5YR7/8 7.5YR6/8	外面(表) 7.5YR 7/4-6/4	
第4-5層	11	2層	煎茶碗	変	日3.20	日8.00		(13.20)	ナデ	ナデ	A・E・H	黄	内面(裏) 10YR 6/3-6/4	外面(表) 7.5YR 7/3-7/4	
第4-5層	12	2層	煎茶碗	変	日20.20	日18.30			ココナデ・煎茶碗・ナデ・厚縁のため調整不明	ナデ・厚縁のため調整不明	A・C・E・H	黄	内面(裏) 10YR8/6 10YR7/4	外面(表) 10YR7/6 10YR7/4	外面に黒染あり 内面に黒染付 厚縁部に黒染付

第18表 出土土器観察表7

調査番号	坑	出土層	種類	図例	法線 (cm)				測器		胎土	形状	内面 (裏)		外面 (表)		備考	
					口径	底径	底寸	側径	内面	外面			色	色	肌	肌		
					単位	単位	単位	単位	不明	不明			Hue	Hue	不明	不明		
第4-6-13	13	2	土師器	甕	(口.1)				厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・F・H	直	赤い褐色	5YR7/7	赤い褐色	5YR7/7	外面にスス付着	
第4-6-14	14	2	土師器	甕	(口.6)		(口.1)		ズリ手ノズリ・厚肉のため測器不明	ズリ手ノズリ・厚肉のため測器不明	A・C・E	直	赤い褐色	5YR6/4	赤い褐色	7.5YR7.7/4	内面にススあり 外面にスス・鉄片付着	
第4-6-15	15	2	土師器	甕	9.4	14.0		13.5	厚肉のため測器不明	ハコ目	A・C・D・E	直	褐色	5YR7/6	黄褐色	7.5YR8/4	内面にススあり 外部に焼跡による赤化あり	
第4-6-16	16	2	土師器	甕	11.5	17.4		14.2	指オサエ・ノズリ手ノズリ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・D・E	直	褐色	5YR	7.8～6.8	褐色	5YR6/8	外面にススあり
第4-6-17	17	2	土師器	甕	7.9	10.0		9.4	ハコ目	指オサエノズリ・厚肉のため測器不明	A・C・E	直	褐色	5YR	7.6～6.6	赤い褐色	5YR7/4	2次焼跡あり
第4-6-18	18	2	土師器	甕	(口.1)	9.5		9.4	ハコ目・指オサエ	ハコ目・厚肉のため測器不明	A・C・D・E	平口	赤い褐色	7.5YR6/3	黄褐色	10YR8/4	外面にススあり	
第4-6-19	19	2	土師器	甕	6.9	8.6		9.6	厚肉のため測器不明・指オサエ	ハコ目・厚肉のため測器不明	A・D・E・H	直	赤い褐色	7.5YR7/3	黄褐色	7.5YR8/3	外面にススあり 外部に焼跡による赤化あり	
第4-6-20	20	2	土師器	甕	6.0	8.0		7.3	ヨコナデ・指オサエノズリ	ハコ目・厚肉のため測器不明	A・B・D・E	直	赤い褐色	10YR7/4	黄褐色	2.5YR4/4	外面にスス付着 3～5mmの小鉄片付着	
第4-6-21	21	2	土師器	甕	6.6	8.5		9.5	上面・厚肉のため測器不明	指オサエ・厚肉のため測器不明	A・C・E	直	黄褐色	2.5YR8/3	灰白色	2.5YR8/2		
第4-6-22	22	2	土師器	甕	(口.7)	9.4		9.2	ヨコナデ・指オサエノズリ・指オサエ	厚肉のため測器不明	A・C・E	直	黄褐色	7.5YR	7.1～7.2	黄褐色	7.5YR7/1	7.5YR6/1
第4-6-23	23	2	土師器	甕	(口.8)	8.3		(口.8)	指オサエ・ナデ	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・D・E	直	黄褐色	10YR8/4	赤褐色	10YR7/6		
第4-6-24	24	2	土師器	甕	(口.9)	8.1		7.1	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・厚肉のため測器不明	A・C・E	直	黄褐色	10YR8/3	赤褐色	10YR7/2		
第4-6-25	25	2	土師器	甕	(口.2)	6.3		(口.2)	ナデ	ナデ・指オサエ	A・C・E・H	直	黄褐色	10YR8/4	黄褐色	10YR7/6	外面にススあり	
第4-6-26	26	2	土師器	甕	(口.4)	6.8	3.6	(口.2)	ハコ目・ナデ	ハコ目・ナデ	A・C・D・E	直	赤褐色	2.5YR4/8	赤褐色	2.5YR4/8	外面にスス付着 焼跡による赤化あり	
第4-6-27	27	2	土師器	甕	(口.6)	6.2		(口.6)	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	直	赤い褐色	7.5YR7/4	赤い褐色	10YR	7.3～6.4	ミニチュア
第4-6-28	28	2	土師器	甕	(口.7)	5.8			ナデ・ハコ目	ナデ・ハコ目	A・C・D	直	黄褐色	10YR8/4	赤褐色	10YR7/4	外面にスス付着	
第4-6-29	29	2	土師器	甕	(口.1)	6.6		(口.1)	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	A・C・H	直	黄褐色	7.5YR7/2	赤褐色	7.5YR5/6	外面にスス付着	
第4-6-30	30	2	土師器	甕	(口.1)	7.1		(口.1)	ナデ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・E	直	褐色	7.5YR7/6	黄褐色	7.5YR5/6	外面にスス付着 内面に鉄片付着	
第4-6-31	31	2	土師器	甕	(口.2)	7.3		7.3	ナデ・指オサエ・厚肉のため測器不明	指オサエ・厚肉のため測器不明	A・B・C・E	直	黄褐色	7.5YR8/3	黄褐色	7.5YR7/2		
第4-6-32	32	2	土師器	甕	(口.3)	5.3		7.4	指オサエノズリ	ハコ目・厚肉のため測器不明	A・C・E	直	赤い褐色	10YR7/4	黄褐色	10YR6/1	外面にススあり	
第4-6-33	33	2	土師器	甕	(口.1)	(口.1)		(口.1)	ナデ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・D	直	灰白色	5YR6/2	赤褐色	5YR	7/4～7/3	
第4-6-34	34	2	土師器	甕	(口.7)	(口.7)		(口.7)	指オサエノズリ・指オサエ	厚肉のため測器不明	A・D	直	褐色	5YR6/8	赤褐色	5YR7/4		
第4-6-35	35	2	土師器	甕	(口.8)	(口.8)		(口.8)	厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・D・E	直	黄褐色	5YR8/4	黄褐色	5YR8/3		
第4-6-36	36	2	土師器	甕	(口.6)	(口.6)		(口.6)	厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・E・H	直	黄褐色	7.5YR7/6	黄褐色	7.5YR7/6		
第4-6-37	37	2	土師器	甕	(口.7)	(口.7)		(口.7)	ナデ・指オサエ・口縁ノズリ	ナデ	A・C・D・E・H	直	褐色	7.5YR7/6	褐色	7.5YR7/6		
第4-6-38	38	2	土師器	甕	(口.1)	(口.1)		(口.1)	厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・C・E	直	赤い褐色	10YR	7.3～6/3	赤褐色	2.5YR5/4	内面にスス付着 外部に焼跡による赤化・灰化あり
第4-6-39	39	2	土師器	甕	(口.2)	6.9		6.9	ナデ・ズリ手ノズリ	ナデ	A・C・E	直	灰白色	10YR	8/2～7/1	黄褐色	10YR8/6	内面にススあり
第4-7-40	40	2	土師器	高杯	(口.1)	14.6		(口.1)	ズリ手ノズリ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・E・H	直	褐色	5YR	7.6～6/6	赤褐色	2.5YR	6/6～6/8
第4-7-41	41	2	土師器	高杯	(口.2)	22.3		(口.2)	ズリ手ノズリ・厚肉のため測器不明	ズリ手ノズリ・厚肉のため測器不明	A・B・E	直	褐色	5YR7/6	黄褐色	5YR8/2		
第4-7-42	42	2	土師器	高杯	(口.3)	6.0		6.0	厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・B・C・E・H	直	赤褐色	10YR5/8	赤褐色	10YR	5/8～4/8	内面にススあり 内外部に焼跡による赤化あり
第4-7-43	43	2	土師器	高杯	(口.4)	6.0		6.0	厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・C・D・E・H	直	赤い褐色	10YR7/4	黄褐色	10YR8/6	外面にスス付着	
第4-7-44	44	2	土師器	高杯	(口.5)	5.6		5.6	厚肉のため測器不明	厚肉のため測器不明	A・B・C・D・E	直	褐色	5YR	7.8～6/8	黄褐色	7.5YR8/8	内外部に鉄片付着
第4-7-45	45	2	土師器	高杯	(口.6)	7.0		7.0	ナデ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・D・E	直	褐色	5YR6/8	褐色	5YR8/8	内外部にススあり	
第4-7-46	46	2	土師器	高杯	(口.7)	7.3		7.3	ナデ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・D・E・H	直	赤い褐色	10YR7/4	赤褐色	10YR4/8	内外部にススあり 外部に焼跡による赤化あり	
第4-7-47	47	2	土師器	高杯	(口.8)	6.0		6.0	ナデ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	A・C・D・E・H	直	赤褐色	10YR5/8	赤褐色	10YR5/8	内外部に焼跡による赤化あり	
第4-7-48	48	2	土師器	高杯	(口.9)	5.8		5.8	ナデ・厚肉のため測器不明	ナデ・厚肉のため測器不明	G・E・H	直	黄褐色	7.5YR	7.8～6/8	黄褐色	7.5YR8/6	内外部にススあり
第4-7-49	49	2	土師器	高杯	(口.1)	14.9		14.9	ヨコナデ	ヨコナデ・口縁ノズリ	A・C・D・E・H	直	赤褐色	5YR4/8	赤褐色	5YR5/8	内面にススあり	

第19表 出土土器観察表 8

図版番号	No.	出土通期	種類	形状	法量 (cm)				器型		出土	焼成	色調				備考
					口径	高さ	口径	製造径	内底	外底			内面 (裏)	底	外面 (表)	底	
第4780	50	2 Ⅲ	土器類	高杯	20.6	6.0			ナデフ・厚底のため調整不明	ナデフ・厚底のため調整不明	A・B・C・D	黒	褐色	2.5YR6/8	褐色黒色	2.5YR5/8	外底に黒染あり 内外面に黒染による赤化あり 外底に黒分付着
第4780	51	2 Ⅲ	土器類	高杯	18.8	6.3			厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	A・B・C・D	黒	濃い赤褐色	7.5YR 7/4 ~ 6/4	濃い赤褐色	7.5YR 7/3 ~ 6/4 2.5YR8/4	外底に黒染による赤化あり
第4780	52	2 Ⅲ	土器類	高杯	18.4	6.7			ナデフ・厚底のため調整不明	ナデフ・厚底のため調整不明	A・D・E・H	黒	濃い赤褐色 褐色黒色	7.5YR/3 7.5YR/2	褐色黒色 褐色 黒色	7.5YR/2 7.5YR/2 2.5Y2/1	外底に黒染あり
第4780	53	2 Ⅲ	土器類	高杯	16.2	6.6			ナデフ・厚底のため調整不明	ナデフ・厚底のため調整不明	A・C・D・E・H	黒	赤褐色 褐色	7.5YR/8 7.5YR/8	褐色 褐色	7.5YR/7 7.5YR/2	外底に黒染あり
第4780	54	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.4			ナデフ	ナデフ	A・C・E・H	黒	赤褐色 褐色	10B5/8 7.5YR/8	褐色 褐色	7.5YR/2	内底に黒染あり 外底に黒染による赤化あり
第4780	55	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.8			ナデフ・厚底のため調整不明	ナデフ・厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	灰白色 赤褐色	10YR7/1 10YR6/1	浅黄褐色 赤褐色	10YR8/4 10YR8/6	
第4780	56	2 Ⅲ	土器類	高杯		11.7			ケズリフ・ナデフ	ココナデ・ナデフ	A・C・E・H	黒	黄褐色	8.5Y ~ 7.0	褐色 褐色	7.5YR/8 7.5YR/8	
第4780	57	2 Ⅲ	土器類	高杯		11.8	11.4		ナデフ・ケズリ・厚底のため調整不明	ナデフ・厚底のため調整不明	A・B・C・D・H	黒	黄褐色	7.5YR/8	褐色 褐色	5YR/7 5YR/4	内底に黒分付着
第4780	58	2 Ⅲ	土器類	高杯		7.7	12.0		ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・D・H	黒	黄褐色 褐色	5YR/8 10YR/6	褐色 褐色	5YR/4 5YR/4	外底に黒分付着
第4780	59	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.4	12.0		厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	A・C・E	黒	褐色	5YR6/9	褐色	5YR/7	内外底に黒染あり 内外面に黒染による赤染あり
第4780	60	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.5	14.4		ナデフ・厚底のため調整不明	高オサエ・ケズリ・ナデフ・厚底のため調整不明	A・C・D・E・H	黒	濃い赤褐色 褐色	7.5YR/4 7.5YR/6	赤褐色 褐色	7.5YR/7	外底に黒分付着
第4780	61	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.8	13.7		ナデフ・ケズリ後ナデ	ココナデ・ナデ・厚底のため調整不明	A・C・D	黒	褐色	5YR/7	褐色	5YR/8	
第4780	62	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.5	13.6		シロリ面・厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	褐色 灰白色	2.5YR/8 7.5YR/8	褐色 赤褐色	2.5YR6/8 2.5YR6/2	
第4780	63	2 Ⅲ	土器類	高杯		7.8	11.8		シロリ面・ナデフ	厚底のため調整不明・高オサエ	A・D・H	黒	灰白色 黄褐色	5YR/1 5YR/3	灰白色 黄褐色	5YR/2 5YR/4	
第4880	64	2 Ⅲ	土器類	高杯		7.4			シロリ面・ココナデ	厚底のため調整不明	B・D・G	黒	灰褐色	7.5YR/1	濃い赤褐色	7.5YR 6/4 ~ 7/4	
第4880	65	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.8	12.0		厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	浅黄褐色	7.5YR/6	灰白色	7.5YR/2	
第4880	66	2 Ⅲ	土器類	高杯		7.7	14.4		ナデフ	ナデフ	A・C・E・H	黒	濃い赤褐色 褐色	10YR 7/3 ~ 7/2	褐色 濃い赤褐色	10YR/6 10YR/2	
第4880	67	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.2	8.2		ケズリ後ナデ	ナデ	A・D・E	黒	黄褐色	10YR/8	浅黄褐色	10YR/4	接合部等に黒分付着 (調整痕あり)
第4880	68	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.6	13.6		シロリ面・厚底のため調整不明	ココナデ・ケズリ後ナデ	A・B・C・E・G	黒	褐色	5YR 7/6 ~ 6/6	濃い赤褐色 褐色	5YR/4 5YR/6	
第4880	69	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.8			ナデフ・ココナデ・厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	灰白色 濃い赤褐色	7.5YR/8 7.5YR/3	浅黄褐色	7.5YR/8	
第4880	70	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.1			ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・E	黒	褐色 褐色黒色	7.5YR/8 7.5YR/8	赤褐色 褐色 褐色黒色	7.5YR/7 7.5YR/7 2.5YR6/8	内底に黒分付着 外底に黒染による赤化あり
第4880	71	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.5			シロリ面・ナデ	厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	濃い赤褐色 褐色	5YR/3 5YR/2	褐色 褐色 赤褐色	5YR/7 5YR/4 5YR/1	接合部粘土光沢
第4880	72	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.8			ケズリ後ナデ・ナデ	ナデフ	A・C・H	黒	濃い赤褐色	7.5YR/4 7.5YR/6	浅黄褐色 濃い赤褐色	7.5YR/4 7.5YR/4	内外面に黒染による赤化あり
第4880	73	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.6			高オサエ・ケズリ・厚底のため調整不明	ココナデ・厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	浅黄褐色	7.5YR/6	浅黄褐色	10YR/4	
第4880	74	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.6			シロリ面・ナデ	厚底のため調整不明	A・C・D・H	黒	浅黄褐色	7.5YR/4 7.5YR/6	浅黄褐色	7.5YR 8.4 ~ 8/3	
第4880	75	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.6			ケズリ後ナデ・ナデ	ナデフ	A・C・D・E・H	黒	浅黄褐色 黄褐色	10YR/4 10YR/6	浅黄褐色 黄褐色	10YR/4 10YR/6	
第4880	76	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.3			シロリ面・高オサエ・ナデ	厚底のため調整不明	A・B・E	黒	浅黄褐色	7.5YR/3	浅黄褐色 褐色黒色	7.5YR/4 7.5YR/1	
第4880	77	2 Ⅲ	土器類	高杯		8.2			シロリ面・ナデ	厚底のため調整不明	A・C・D・H	黒	褐色	5YR/8	褐色	5YR/3	
第4880	78	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.2			ケズリ後ナデ・ナデ	ナデフ・厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	灰白色 浅黄褐色	10YR/8 10YR/3	灰白色 浅黄褐色	10YR/8 10YR/3	
第4880	79	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.2			高オサエ後工具ナデ	ナデフ・ケズリ	A・C・E	黒	灰白色	7.5YR/2	浅黄褐色	7.5YR/8	
第4880	80	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.1			ケズリ後ナデ・ナデ	ナデフ・厚底のため調整不明	A・C・D・E	黒	浅黄褐色 褐色 褐色黒色	10YR/4 10YR/4	濃い赤褐色 褐色 褐色黒色	10YR/4 10YR/6	外底に黒染あり 黒分付着
第4880	81	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.4			シロリ面・ココナデ	ココナデ・厚底のため調整不明	C・D・H	黒	濃い赤褐色 赤褐色	10B6/4 10B6/2	赤褐色 褐色黒色	10B6/6 7.5R/1	
第4880	82	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.7			シロリ面・ナデ	厚底のため調整不明	B・D・E	黒	濃い赤褐色 褐色	10YR/2	浅黄褐色 灰白色	7.5YR/3 7.5R/2	
第4880	83	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.9			ココナデ	ココナデ・厚底のため調整不明	A・E	黒	濃い赤褐色 褐色黒色	7.5YR/4 7.5YR/2	褐色黒色 褐色	7.5YR/2 7.5YR/3	
第4880	84	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.6			ナデフ・厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	E・H	黒	濃い赤褐色	10B6/3	濃い赤褐色 褐色黒色	10B6/4 10B7/1	二次焼成あり
第4880	85	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.2			厚底のため調整不明	厚底のため調整不明	A・C・E	黒	浅黄褐色 褐色	10YR/4 10YR/4	浅黄褐色	10YR/8	
第4880	86	2 Ⅲ	土器類	高杯		6.4			ナデフ・厚底のため調整不明	ナデフ・厚底のため調整不明	A・B・E	黒	濃い赤褐色 褐色	7.5YR/3 7.5YR/4	褐色 褐色	7.5YR/8 7.5YR/1	

第20表 出土土器観察表9

国庫番号	No	出土時期	種別	形状	法量 (cm)				観察				出土	色調				備考
					口径	高さ	底径	取付厚	内面	外面	胎土	施文		内面 (裏)	裏	外面 (表)	裏	
第488号	87	2歳	土器器	円形鉢	(11.5)	7.1			ナデテ・厚肉のため調整不明	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・C・D・E・H	貝	黄褐色	7.5YR6/8	黄褐色	7.5YR6/6		
第488号	88	2歳	土器器	鉢	15.0	6.1			ココナデ・指オサエ・工具類	ココナデ・ハク日	A・C・D・E	貝	黄褐色	7.5YR6/6	褐色	7.5YR7/6		
第488号	89	2歳	土器器	鉢	(10.0)	7.1			指オサエ・ナデ・厚肉のため調整不明	指オサエ・ナデ・厚肉のため調整不明	A・D・E・H	貝	黄褐色	7.5YR7/6	黄褐色	7.5YR7/8		
第488号	90	2歳	土器器	碗	(3.6)	4.4			厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・B・C・D・E	貝	褐色	2.5YR6/8	明茶褐色	2.5YR6/6		
第488号	91	2歳	土器器	碗	(5.7)	4.0			ナデテ・厚肉のため調整不明	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・C・D・E・H	貝	灰黄褐色	10YR6/2	明茶褐色	10YR6/6		
第488号	92	2歳	土器器	碗・皿	12.8	3.6			ナデテ・厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・C・D・E	貝	灰黄褐色	10YR6/6	灰黄褐色	10YR6/2		
第488号	93	2歳	土器器	碗・皿	(4.9)	5.5			ナデテ・指オサエ	ナデテ・指オサエ	A・C・E・H	貝	褐色	5YR6/8	明茶褐色	5YR6/6		
第488号	94	2歳	土器器	鉢	(5.6)	5.4			ナデテ・厚肉のため調整不明	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・C・H	貝	褐色	7.5YR7/7	褐色	7.5YR7/8		
第488号	95	2歳	土器器	鉢	(16.0)	5.8			ナデテ・厚肉のため調整不明	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・C・D・E・H	貝	灰黄褐色	7.5YR7/4	赤褐色	10B5/8		
第488号	96	2歳	土器器	鉢	14.2	5.7			工具ナデ・ナデ	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・D・E	貝	褐色	5YR6/6	褐色	5YR7/7		
第488号	97	2歳	土器器	鉢・皿	(4.1)	6.2			厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・C・D・E・H	貝	褐色	5YR6/6	明茶褐色	5YR6/6		
第488号	98	2歳	土器器	鉢	3.8	3.8			指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・B・C・D・E	貝	褐色	7.5YR6/8	褐色	7.5YR6/8		
第488号	99	2歳	土器器	鉢	4.0	3.6			ワズリ指ナデ・指オサエ	指オサエ・ナデ	C・D	貝	黄褐色	7.5YR7/8	黄褐色	7.5YR7/8		
第488号	100	2歳	土器器	鉢	3.2	2.7			指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	D	貝	黄褐色	5YR7/8	黄褐色	7.5YR7/6		
第488号	101	2歳	土器器	皿		(3.8)			ナデテ・指オサエ	厚肉のため調整不明・ハク日	A・C	貝	灰黄褐色	10YR7/3	灰黄褐色	10YR7/3		
第488号	102	2歳	土器器	皿	16.1	12.1			ナデテ・ワズリ	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・C・D・E	貝	黄褐色	5YR6/8	黄褐色	5YR6/8		
第488号	103	2歳	土器器	皿	18.0	10.1			ナデテ・厚肉のため調整不明	ナデテ・厚肉のため調整不明	A・B・C・E	貝	黄褐色	7.5YR7/7	灰黄褐色	10YR7/4		
第488号	104	2歳	土器器	皿	(5.8)	(2.4)			ナデテ	ナデテ	A・C・E	貝	灰黄褐色	10YR6/1	灰黄褐色	10YR6/1		
第488号	105	2歳	土器器	皿	(3.3)	(3.5)			ナデテ・ワズリ	ナデテ	A・C・E	貝	灰黄褐色	10YR6/5	灰黄褐色	10YR6/3		
第488号	106	2歳	赤土土器	皿		(3.0)			厚肉のため調整不明	厚肉のため調整不明	A・C・E	貝	灰黄褐色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR7/4		
第518号	1	3歳	赤土土器	甕	18.4	19.9	4.1		ナデテ・ハク日・ワズリ	ココナデ・ハク日・ナデ	A・B・C・D・E	貝	黄褐色	10YR6/8	赤褐色	10YR6/8		
第518号	2	3歳	赤土土器	甕	(4.6)	13.7	(4.8)	(4.8)	指オサエ・ナデ	ハク日・ナデ	A・C・E	貝	灰黄褐色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR7/4		
第518号	3	3歳	赤土土器	甕	(20.4)	(16.1)			ココナデ・ハク日	ココナデ・ワズリ	A・C・D・E	貝	明茶褐色	2.5YR6/8	褐色	5YR6/6		
第518号	4	3歳	赤土土器	甕		(5.6)	5.2		ハク日・工具ナデ	工具ナデ	A・C	貝	褐色	5YR6/6	灰黄褐色	10YR7/3		
第518号	5	3歳	赤土土器	甕		(8.8)	7.4		工具ナデ・指オサエ	ナデ	A・C・D・E	貝	灰黄褐色	10YR6/3	灰黄褐色	7.5YR7/4		
第518号	6	3歳	赤土土器	甕	(2.1)	(5.2)			工具ナデ・ナデ	工具ナデ・ナデ	A・C・E	貝	灰黄褐色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR7/4		
第518号	7	3歳	赤土土器	甕	(4.7)	9.4			表面筋線・ハク日	表面筋線・工具ナデ	A・C・E・H	貝	灰黄褐色	10YR6/3	灰黄褐色	2.5YR6/4		
第518号	8	3歳	赤土土器	皿	(16.0)	31.6	7.4	(3)8	ココナデ・指オサエ	ココナデ・工具ナデ	A・C・D・E	貝	明茶褐色	2.5YR6/8	明茶褐色	5YR6/6		
第518号	9	3歳	赤土土器	皿	(13.8)	(8.1)		(1)8	ココナデ・指オサエ	ココナデ・ハク日・ナデ	A・C・D・E	貝	灰黄褐色	10YR7/2	灰黄褐色	10YR7/2		
第518号	10	3歳	赤土土器	皿		(8.8)	7.7		ハク日・指オサエ	ハク日・指オサエ	A・D・E	貝	灰黄褐色	10YR7/4	灰黄褐色	10YR6/3		
第518号	11	3歳	赤土土器	皿	(2.7)	4.5			指ナデ・指オサエ	工具ナデ	A・C	貝	黄褐色	2.5Y7/2	灰黄褐色	10YR6/2		
第518号	12	3歳	赤土土器	高鉢	(32.4)	(4.9)			ナデ	ナデ	A・C・D・E	貝	灰黄褐色	10YR7/3	灰黄褐色	10YR7/3		
第518号	13	3歳	赤土土器	高鉢	(4.9)	17.4			シロリ筋・厚肉のため調整不明	工具ナデ・厚肉のため調整不明	A・B・C・E	貝	灰黄褐色	2.5Y7/2	灰黄褐色	2.5Y7/2		
第518号	14	3歳	赤土土器	高鉢		(5.6)			シロリ筋・ハク日	ハク日	C・D・E・H	貝	灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR6/2		
第518号	15	3歳	赤土土器	鉢	(2.6)	6.4	4.4		指オサエ・工具ナデ	指オサエ・工具類	A・D・E	貝	褐色	5YR6/6	褐色	5YR6/6		
第518号	16	3歳	赤土土器	鉢	(18.3)	(13.5)	(1)8		ナデ	ワズリ・ナデ	C・D・E・H	貝	灰黄褐色	2.5Y7/2	灰黄褐色	2.5Y7/2		

第2 | 表 出土土器観察表 10

図版番号	No.	出土層	種類	形状	法量 (cm)				形状		胎土	色調				備考	
					口経	高さ	底径	取付径	内径	外径		内面 (裏)		外面 (表)			
												Hue	Value	Hue	Value		
第528号	17	3層	須古土器	須古	112.5	18.6	113.8	-	ハク日焼ナデ・高オサエ土道具類・高オサエナデ	ハク日焼ナデ・高オサエ土道具類・高オサエナデ	A・C・D・E	黒	にぶい・褐色	7.5397/4	にぶい・褐色	7.5397/4	外面に黒染あり
第529号	18	3層	須古土器	須古	112.4	16.7	-	-	ハク日・高オサエナデ	ナデ・ハク日ナデ	A・C・D・E・H	黒	にぶい・黄褐色	10.977/2	にぶい・褐色	7.5397/4	
第529号	19	3層	須古土器	須古	116.1	20.0	-	-	ナデ・ハク日・土道具類	ハク日	A・C・D・E・F	黒	にぶい・褐色	7.5397/4	にぶい・褐色	7.5397/4	斜口白文?
第534号	1	4層	須古土器	須古	13.3	17.4	-	-	須古ナデ	須古ナデ・須古ヘラケツリ	E・F	黒	灰色	N6/	灰色	N6/	
第534号	2	4層	須古土器	須古	14.0	10.3	-	-	ナデ・磨孔のため調整不明	ナデ・磨孔のため調整不明	C・F・H・H	黒	浅黄褐色 にぶい・黄褐色	10.978/3	灰白色	10.978/3	8.1 ~ 8.2
第538号	1	6層	須古土器	須古	262.2	36.2	-	263.3	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハク日ナデ	A・B・C・D・E・H	黒	黄褐色 明黄褐色	10.978/6 10.978/7	黄褐色 明黄褐色	10.978/6 10.978/7	内外面に黒染あり 文字付 外面に黒染あり
第538号	2	6層	須古土器	須古	118.8	8.2	-	-	ヨコナデ	ハク日・ハク日焼ナデ	A・B・C・D・H	黒	灰白色 浅黄褐色	10.978/2 10.978/5	灰白色 浅黄褐色	10.978/2 10.978/5	
第538号	3	6層	須古土器	須古	17.8	12.2	3.2	-	磨孔のため調整不明	磨孔のため調整不明	A・C・D・E・F	黒	浅黄褐色	10.978/3	灰色	10.978/3	外面にスス付 外面に黒染あり
第538号	4	6層	須古土器	須古	12.9	1.2	-	-	ハク日・ナデ	ハク日	A・D	黒	にぶい・褐色	7.5397/4	にぶい・褐色	7.5397/4	磨孔
第538号	5	6層	須古土器	須古	17.8	7.6	-	-	ハク日・高オサエナデ	ハク日・ナデ	A・B・C・D・E	黒	灰色 黄褐色	7.5397/1 7.5397/1	黄褐色 褐色	7.5397/8 7.5397/8	外面にスス付 外面に黒染による黒染あり
第538号	6	6層	須古土器	須古	112.3	7.2	-	-	工具ナデ・高オサエナデ	ナデ	A・C・D・H	黒	灰白色 にぶい・黄褐色	10.978/6 6.2 ~ 6.2	黄褐色 にぶい・黄褐色	10.978/6 10.978/6	外面に黒染あり 外面にスス付
第538号	7	6層	須古土器	須古	116.2	15.0	-	-	ヨコナデ・ナデ	ハク日・ヨコナデ	A・C・E	黒	褐色 黄褐色	7.5397/6 7.5397/6	黄褐色	7.5397/8	8と同じ一鉢
第538号	8	6層	須古土器	須古	11.2	19.0	-	-	ヨコナデ・ハク日・高オサエ	ハク日	A・C・D・E・F	黒	褐色	5.976/8	褐色	5.976/8	7と同じ一鉢
第538号	9	6層	須古土器	須古	8.5	11.8	11.2	-	高オサエ・シボリ 刷・ナデ	ナデ・タタキ	A・C・D・E	黒	灰白色 明黄褐色	7.5397/2 7.5397/4	浅黄褐色	7.5397/8 7.5397/8	外面に黒染による黒染あり 磨孔1箇 のみあり
第6036号	1	7層	須古土器	須古	229.4	40.3	7.4	30.2	ヨコナデ・高オサエ・ハク日・ナデ	ヨコナデ・ハク日・ナデ	A・B・C・H	黒	黄褐色 褐色 黄褐色	7.5397/8 7.5397/8 7.5397/1	褐色 明赤褐色 黄褐色	5.976/8 5.976/8 5.976/8	内外面に黒染あり 内外面にスス付
第6036号	2	7層	須古土器	須古	248.0	10.8	-	-	ヨコナデ・高オサエ 土器ハク日	ヨコナデ・ハク日	B・D・E・G	黒	にぶい・褐色	7.5397/3	にぶい・褐色	7.5397/3	外面に黒染による黒染あり
第6036号	3	7層	須古土器	須古	29.5	110.0	-	-	ハク日・ナデ・高オサエ	ハク日・ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	黒	灰白色	10.978/1	にぶい・黄褐色	10.978/3	外面に黒染あり 内外面に黒染あり 斜口白文あり
第6036号	4	7層	須古土器	須古	10.4	14.0	-	-	磨孔のため調整不明	磨孔のため調整不明	A・C・D・E	黒	にぶい・黄褐色	10.977/4	褐色	2.5396/6	
第6036号	5	7層	須古土器	須古	15.7	-	-	-	ハク日・磨孔のため調整不明	ハク日焼土器・磨孔のため調整不明	A・C・D・E	黒	明黄褐色	10.977/6	明黄褐色	10.977/6	外面に黒染あり
第6036号	6	7層	須古土器	須古	13.7	8.8	-	-	ナデ・土器類	タタキ・ナデ	A・C・D・E	黒	灰白色	5.976/1	にぶい・黄褐色	2.5396/6 (10.977/3)	
第6036号	7	7層	須古土器	須古	22.1	7.3	-	-	高オサエ・ナデ	工具ナデ・ナデ	A	黒	黄褐色	7.5397/2	にぶい・褐色	7.5397/3	
第6036号	8	7層	須古土器	須古	106.2	11.1	-	-	ヨコナデ・磨孔のため調整不明	ヨコナデ・ハク日	A・C・D・E	黒	にぶい・黄褐色	10.978/2	にぶい・黄褐色	10.978/2	外面に黒染あり
第6036号	9	7層	須古土器	須古	126.0	8.2	-	-	ヨコナデ・ハク日・ナデ	ヨコナデ・ハク日	A・C・D・E	黒	にぶい・黄褐色	10.978/3	にぶい・黄褐色	10.978/3	外面に黒染による黒染あり
第6036号	10	7層	須古土器	須古 須古	119.0	11.4	-	-	ナデ・高オサエ・ナデ ハク日	ナデ・ハク日	A・C・D・E・H	黒	黄褐色 明黄褐色	10.978/6 10.978/7	明黄褐色	10.978/7 10.978/8	外面に黒染あり 外面に黒付 磨孔あり 土器類に打ち欠きあり
第6136号	11	7層	須古土器	須古	100.0	30.0	-	145.0	ハク日・高オサエ 後ナデ	ヨコナデ・ハク日	A・C・D・E・H	黒	灰白色	10.978/1	にぶい・黄褐色	10.978/2	外面に黒染あり 斜口白文あり 斜口白文あり
第6136号	12	7層	須古土器	須古	12.7	17.1	24.0	-	磨孔のため調整不明	磨孔のため調整不明	A・C・D・E	黒	にぶい・黄褐色	10.977/4	にぶい・黄褐色	10.977/4	内外面に黒染あり
第6136号	13	7層	須古土器	須古	89.4	-	110.0	-	ナデ・ケツリ後高オサエ	ナデ・スボリ	A・C・E・H	黒	褐色 黄褐色 灰色 黄褐色	7.5397/6 7.5397/1 7.5397/1	黒色 黄褐色	7.5397/2 7.5397/2	内外面に黒染による黒染あり 内外面に付着
第6136号	14	7層	須古土器	須古	6.2	15.0	-	-	ナデ・高オサエ	ナデ・高オサエ・土道具類	A・C・D・E	黒	褐色	5.976/6	褐色	5.976/6	
第6136号	15	7層	須古土器	須古	15.6	17.0	-	-	ヨコナデ・高オサエ・シボリ刷・ナデ	ヨコナデ・ハク日	A・C・E	黒	にぶい・褐色	7.5397/4	にぶい・褐色	7.5397/4	
第6136号	16	7層	須古土器	須古	115.5	10.5	-	-	ヨコナデ・ハク日・ナデ	ヨコナデ・ハク日・ナデ	A・C・D・E	黒	にぶい・褐色	7.5397/4	にぶい・褐色	7.5397/4	
第6136号	17	7層	須古土器	須古	110.0	17.0	-	-	ヨコナデ・ハク日・土道具類	ヨコナデ・高オサエ・ハク日・ハク日	A	黒	褐色	7.5397/6	褐色	7.5397/6	外面に黒染による黒染あり
第6136号	18	7層	須古土器	須古	13.3	15.6	-	-	ヨコナデ・ハク日・シボリ刷	ヨコナデ・ハク日・土道具類	A・C・D・E	黒	にぶい・黄褐色	10.978/2	にぶい・黄褐色	10.978/2	外面に黒染あり
第6536号	1	8層	須古土器	須古	114.4	4.4	45.0	-	須古ナデ	須古ナデ・須古ヘラケツリ	A・B・C・E・H	黒	灰色 黄褐色	5.976/1 10.978/1	灰色	N5/	内外面に付着 非型式3段階 (中付編)
第6536号	2	8層	須古土器	須古	113.8	3.7	-	-	磨孔のため調整不明	磨孔のため調整不明	B・C・F	黒	灰色	2.53/	灰色	N6/	
第6536号	3	8層	須古土器	須古	114.2	12.8	16.4	-	須古ナデ	須古ナデ・須古ヘラケツリ	A・B・C	黒	灰白色	2.53/1	灰白色	N3/ N6/	
第6536号	4	8層	須古土器	須古	11.3	-	-	-	須古ナデ・ナデ	須古ナデ・須古ヘラケツリ	E	黒	灰白色	2.53/2	灰白色	2.53/3	外面に白黒 外面にヘラケツリ
第6536号	5	8層	須古土器	須古	112.0	13.8	-	-	須古ナデ	須古ナデ・須古ヘラケツリ	C・E	黒	灰色	N 6/1 ~ 4/1	灰色	N4/1 N3/1	非型式5段階 (中付編)
第6536号	6	8層	須古土器	須古	12.7	3.8	3.3	-	須古ナデ	須古ナデ・須古ヘラケツリ	C・H	黒	灰白色 黄褐色	2.53/4/1 2.53/4/2	灰白色	10.978/4	非型式4段階 (中付編)

第2表 出土土器観察表11

調査番号	坑	出土層	種類	器種	法量 (cm)				形状		胎土	焼成	内面 (裏)		外面 (表)		備考
					口径	底径	底厚	胴径	内径	外径			色	色	Hae	Hae	
第6-5区	7	8層	煎茶碗	洋碗	15.0	8.6	0.5	14.0	10.0	10.0	A・C・E	黒	黄褐色	N5/1	黄褐色	5P86/1	
第6-5区	8	8層	煎茶碗	洋碗	11.4	4.6	0.4	-	10.0	10.0	C・E	黒	黄褐色	2.5Y/4/2	黄褐色	2.5Y/3/1	非単式3段階 (中村編年)
第6-5区	9	8層	煎茶碗	洋碗	12.6	4.8	0.7	-	10.0	10.0	C	黒	黄褐色	1.0Y/7/1	黄褐色	1.0Y/6/1	非単式3段階 (中村編年)
第6-5区	10	8層	煎茶碗	洋碗	10.8	4.5	0.3	-	10.0	10.0	C・E	黒	黄褐色	N7/1	黄褐色	N5/2/1	非単式3段階 (中村編年)
第6-5区	11	8層	煎茶碗	洋碗	11.8	4.5	-	-	10.0	10.0	B・F	黒	黄褐色	5Y/1	黄褐色	1.0Y/7/1	2.5Y/4/1
第6-5区	12	8層	煎茶碗	洋碗	11.8	5.0	0.0	-	10.0	10.0	A・C・E	黒	黄褐色	5Y/1	黄褐色	5Y/7/1	非単式2段階 (中村編年)
第6-5区	13	8層	煎茶碗	洋碗	12.0	5.2	-	-	10.0	10.0	C・E	黒	黄褐色	5Y/5/1	黄褐色	2.5Y/4/1	非単式3段階 (中村編年)
第6-5区	14	8層	煎茶碗	鉢	17.4	-	-	-	10.0	10.0	E	黒	黄褐色	5Y/4/1	黄褐色	5Y/5/4	遺残文
第6-5区	15	8層	煎茶碗	鉢	14.3	-	-	-	10.0	10.0	E	黒	黄褐色	7.5Y/4/3	黄褐色	2.5Y/3/2	
第6-5区	16	8層	煎茶碗	鉢	12.6	-	-	-	10.0	10.0	E・F	黒	黄褐色	5Y/3/1	黄褐色	5Y/3/1	
第6-5区	17	8層	煎茶碗	蓋	24.8	8.1	-	-	10.0	10.0	E	黒	黄褐色	N6/1	黄褐色	N5/1	
第6-5区	18	8層	煎茶碗	蓋	22.0	8.1	-	-	10.0	10.0	E・F	黒	黄褐色	N6/1	黄褐色	N6/1	
第6-5区	19	8層	土師器	蓋	20.0	8.0	-	-	10.0	10.0	A・C・H	黒	黄褐色	1.0Y/8	黄褐色	1.0Y/8	外部にスス付着 内面に黒粒による剥離あり
第6-5区	20	8層	土師器	蓋	17.8	7.3	-	-	10.0	10.0	E・G	黒	黄褐色	1.0Y/8/4	黄褐色	1.0Y/8	外部にスス付着 内面に黒粒による剥離あり
第6-5区	21	8層	土師器	蓋	12.3	6.3	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/7/3	黄褐色	1.0Y/7/3	外部にスス付着 内面に黒粒による剥離あり
第6-5区	22	8層	土師器	蓋	15.4	7.3	-	-	10.0	10.0	A・C・D・H	黒	黄褐色	1.0Y/7/6	黄褐色	1.0Y/6/2	外部にスス付着 内面に黒粒による剥離あり
第6-5区	23	8層	土師器	蓋	14.7	8.0	-	-	10.0	10.0	A・C・E	黒	黄褐色	1.0Y/6/6	黄褐色	1.0Y/8	内面に黒粒あり
第6-5区	24	8層	土師器	蓋	16.6	8.2	-	-	10.0	10.0	A	黒	黄褐色	7.5Y/6/6	黄褐色	7.5Y/6/6	内面に黒粒あり
第6-5区	25	8層	土師器	蓋	8.4	5.7	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	2.5Y/7/1	黄褐色	2.5Y/7/3	口縁あり
第6-5区	26	8層	土師器	蓋	15.8	8.0	-	0.8	10.0	10.0	A	黒	黄褐色	1.0Y/7/3	黄褐色	1.0Y/7/3	外部に黒粒あり 口縁部にスス付着
第6-5区	27	8層	土師器	蓋	13.8	7.0	-	-	10.0	10.0	A・D	黒	黄褐色	1.0Y/7/3	黄褐色	1.0Y/7/3	外部にスス付着
第6-5区	28	8層	土師器	高杯	8.3	0.4	-	0.2	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	7.5Y/7/4	黄褐色	1.0Y/7/3	
第6-5区	29	8層	土師器	高杯	7.8	0.2	-	0.2	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/7/3	黄褐色	1.0Y/7/3	
第6-5区	30	8層	土師器	高杯	6.9	0.5	-	0.3	10.0	10.0	C・E	黒	黄褐色	7.5Y/7/4	黄褐色	7.5Y/7/4	
第6-5区	31	8層	土師器	高杯	7.6	0.4	-	0.1	10.0	10.0	C・E	黒	黄褐色	1.0Y/8/4	黄褐色	1.0Y/8/4	
第6-5区	32	8層	土師器	高杯	7.3	0.4	-	0.4	10.0	10.0	A	黒	黄褐色	2.5Y/7/2	黄褐色	2.5Y/7/3	厚口2箇所あり
第6-5区	33	8層	土師器	鉢	13.9	3.4	-	-	10.0	10.0	A・C・E	黒	黄褐色	1.0Y/7/3	黄褐色	1.0Y/7/3	外部に黒粒あり
第6-5区	34	8層	土師器	鉢	16.0	4.6	-	-	10.0	10.0	C	黒	黄褐色	7.5Y/6/4	黄褐色	7.5Y/6/4	ミニチュア
第6-5区	35	8層	土師器	鉢	14.4	3.8	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	2.5Y/2/1	黄褐色	2.5Y/2/2	内外面に黒粒あり ミニチュア
第6-5区	36	8層	土師器	鉢	3.4	3.5	1.8	-	10.0	10.0	A・C・H	黒	黄褐色	1.0Y/7/4	黄褐色	1.0Y/7/4	外部に黒粒あり ミニチュア
第6-5区	37	8層	土師器	鉢	3.3	3.6	-	-	10.0	10.0	A・C・E	黒	黄褐色	1.0Y/7/8	黄褐色	1.0Y/8	外部に黒粒あり ミニチュア
第6-5区	38	8層	土師器	鉢	3.7	3.8	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/6/3	黄褐色	1.0Y/7/3	ミニチュア
第6-5区	39	8層	土師器	鉢	3.4	2.9	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/8	黄褐色	1.0Y/8	内外面に黒粒あり ミニチュア
第6-5区	40	8層	土師器	鉢	2.1	-	-	-	10.0	10.0	A・C・D	黒	黄褐色	1.0Y/6/2	黄褐色	7.5Y/7/2	ミニチュア
第6-5区	41	8層	土師器	鉢	0.4	0.8	-	-	10.0	10.0	A・C・D	黒	黄褐色	7.5Y/7/6	黄褐色	7.5Y/6/4	赤色粘土 (厚さ 3mm) で口縁
第6-5区	42	8層	土師器	杯	14.4	3.8	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/7/3	黄褐色	1.0Y/7/3	外部にスス付着 内面一部剥落 (口) あり
第6-5区	43	8層	土師器	蓋	20.4	10.3	-	-	10.0	10.0	A・D・E	黒	黄褐色	7.5Y/7/7	黄褐色	7.5Y/7/6	厚口
第6-5区	44	8層	土師器	蓋	15.7	10.0	-	-	10.0	10.0	A・C・D・E	黒	黄褐色	1.0Y/4/1	黄褐色	1.0Y/6/2	厚口
第6-5区	45	8層	土師器	蓋	15.2	10.0	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	2.5Y/4/1	黄褐色	2.5Y/3/3	厚口?
第6-5区	46	8層	土師器	蓋	8.3	-	-	-	10.0	10.0	A	黒	黄褐色	1.0Y/6/3	黄褐色	1.0Y/7/3	口縁のみ
第6-5区	47	8層	土師器	蓋	5.2	-	-	-	10.0	10.0	A	黒	黄褐色	1.0Y/5/2	黄褐色	1.0Y/6/3	口縁のみ
第6-5区	48	8層	土師器	蓋	14.9	-	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	N3/1	黄褐色	1.0Y/6/1	口縁のみ
第6-5区	49	8層	赤土土師器	蓋	17.3	17.7	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/4/2	黄褐色	1.0Y/3/1	内外面にスス付着
第6-5区	50	8層	赤土土師器	蓋	13.2	4.5	-	-	10.0	10.0	B・C・E・G	黒	黄褐色	1.0Y/8	黄褐色	5Y/8	内外面に黒粒あり 外部剥離に布目痕あり
第6-5区	51	8層	赤土土師器	蓋	8.1	-	-	-	10.0	10.0	A・C	黒	黄褐色	1.0Y/3/1	黄褐色	1.0Y/7/3	内面に黒粒あり
第6-5区	52	8層	縄文土師器	鉢	13.2	7.4	-	-	10.0	10.0	A・C・E	黒	黄褐色	7.5Y/4/1	黄褐色	7.5Y/6/4	

第2表 出土土器観察表 12

図録番号	No.	出土遺物	種類	形状	法線 (cm)			調整		出土	焼成	色調			備考		
					上径	高さ	底径	前後	左右			内面	外面	内面 (裏)		外面 (表)	Hea
					1	2	3	4	5			6	7	8		9	10
第70図	53	赤土	縄文土器	鉢	22.6	6.0	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	黒	黒褐色	10YR4/1	灰褐色	10YR6/2		
第66図	54	赤土	縄文土器	支脚 仰臥	15.6	-	-	ナデ・胎オセエ	ハケ目・平行タタキ 胎オセエ	A・D	黒	灰褐色	10YR7/3	灰褐色	10YR7/3	外面に黒染あり	
第70図	1	赤土	縄文土器	筒	22.6	-	-	口ケロ	口ケロ	-	黒	灰褐色	10YR7/3	灰褐色	10YR7/3	筒縁	
第70図	2	赤土	縄文土器	高杯	14.6	-	-	ミガキナ	ナデ・ヨコナデ・ ハケ目	A・C	黒	灰褐色	10YR7/3	灰褐色	10YR7/3		
第70図	3	赤土	縄文土器	坪 (10.6)	15.6	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・C・E	黒	灰褐色	10YR7/3	灰褐色	10YR7/3	外面に黒染あり	
第70図	4	赤土	縄文土器	瓶	11.3	-	-	ケズリ・ナデ	ハケ目	A・D・E	黒	灰褐色	10YR7/3	灰褐色	10YR7/3	乳孔	
第70図	5	赤土	縄文土器	蓋	11.6	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A	黒	灰褐色	2.5Y7/2	灰色	5Y4/1	胎面不定	
第70図	6	赤土	縄文土器	坪 (16.0)	15.5	-	-	ナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・C	黒	灰褐色	7.5Y6/4	褐色	2.5Y6/6	内面に黒染あり 外面一部赤化あり	
第70図	7	赤土	縄文土器	環蓋 仰臥	12.7	13.3	-	胎オセエ	胎オセエ	E	黒	灰色	N5/	褐色	N5/		
第70図	8	赤土	縄文土器	環蓋 仰臥	12.7	13.3	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・胎ケズリ	F	黒	灰色	N6/	褐色	N6/	受け取厚 1.0(0.6)	
第70図	9	赤土	縄文土器	環蓋 仰臥	14.1	-	-	胎オセエ	胎オセエ・ケズリ	E・F	黒	灰色	N6/	灰色	N6/		
第70図	10	赤土	縄文土器	蓋	13.4	-	20.0	ナデ・胎オセエ	摩耗のため調整不明	A・C・E	黒	灰褐色	5YR7/4	褐色褐色	2.5Y6/6	内面にスス付前 外面全体的に焼跡により 赤化	
第70図	11	赤土	縄文土器	坪 (11.5)	14.5	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	B・C	中 不白	灰褐色	10YR7/4	灰褐色	2.5Y7/2	外面に黒染あり	
第70図	12	赤土	縄文土器	瓶	13.5	-	-	ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・E	黒	灰褐色	10YR7/4	灰褐色	10YR7/4	外面に黒染あり 胎子丸	
第70図	13	赤土	縄文土器	鉢 (18.7)	10.8	-	-	ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・E	黒	灰褐色	10YR7/4	灰褐色	10YR7/4	外面に黒染あり 胎子丸	
第70図	14	赤土	縄文土器	蓋 (22.8)	12.4	-	26.2	ハケ目・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	B・D・F	中 不白	灰褐色	10YR8/2	灰褐色	10YR8/2	1~2mmの砂粒を多く含む	
第70図	15	赤土	縄文土器	蓋 (22.8)	12.4	-	26.2	ハケ目・胎オセエ・ナデ	ヨコナデ・胎オセエ・ハケ目	A・C・D・E・H	黒	灰褐色	10YR7/2	灰褐色	10YR5/2		
第70図	16	赤土	縄文土器	瓶	17.5	17.5	-	ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・E	黒	灰褐色	2.5Y7/2	灰褐色	10YR8/3	胎子丸	
第70図	16	赤土	縄文土器	蓋 (20.2)	11.0	-	-	ナデ・ハケ目	ハケ目ヨコナデ・ 摩耗のため調整不明	A・D・H	中 不白	灰褐色	10YR8/3	灰褐色	10YR7/2	1~3mmの砂粒を多く含む	
第71図	1	P253	縄文土器	蓋	11.2	-	-	ナデ・胎オセエ・ケズリ	ナデ・ハケ目	A・D・E	黒	灰褐色	10YR7/2	灰褐色	10YR6/2	外面にスス付前 外面に黒染あり 胎子丸 (6mm)	
第71図	2	P102	縄文土器	蓋	15.6	-	-	ナデ・胎オセエ・ケズリ	ナデ・平行タタキ	A・C・D・E	黒	灰褐色	10YR7/2	灰褐色	10YR7/2		
第71図	3	P421	縄文土器	蓋	12.6	-	-	ハケ目	ヨコナデ・胎オセエ・ハケ目	A・D	黒	褐色	7.5Y5/1	灰褐色	7.5YR8/4		
第71図	4	P310	縄文土器	壺 7.2	8.3	-	7.6	ヨコナデ・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・E	黒	褐色	5YR8/4	灰褐色	7.5YR8/4	外面にスス付前	
第71図	5	P156	縄文土器	壺 (12.0)	16.6	-	-	ヨコナデ・ナデ・ 土具跡	ヨコナデ・胎オセエ・ タタキ・ハケ目	A・D・E	黒	灰褐色	7.5YR7/4	灰褐色	7.5YR7/4		
第71図	6	P23	縄文土器	壺	13.6	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	黒	灰褐色	10YR6/2	灰褐色	10YR7/1	内面に黒染あり 遺杖文	
第71図	7	P508	縄文土器	壺 (14.6)	14.1	-	-	ヨコナデ・胎オセエ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	黒	灰褐色	10YR7/4	灰褐色	10YR7/4		
第71図	8	P116	縄文土器	壺	12.1	-	-	ナデ	平行タタキ	A・C・E	黒	褐色	10YR3/1	褐色	10YR3/1	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	9	P7	縄文土器	高杯	16.7	-	-	ナデ	ナデ	C・D	黒	褐色	7.5YR7/6	褐色	7.5YR7/6		
第71図	10	P71	縄文土器	高杯	13.2	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・D・E	黒	褐色	10YR8/3	褐色	10YR8/3		
第71図	11	P164	縄文土器	鉢	16.4	-	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ハケ目	A・C・D	黒	灰褐色	10YR8/4	灰褐色	10YR8/4	外面に黒染あり	
第71図	12	P336	縄文土器	鉢 5.6	5.6	3.0	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ナデ	A・B・D・E	黒	灰褐色	10YR7/4	灰褐色	10YR7/4	内面に黒染あり	
第71図	13	P311	縄文土器	鉢 8.2	5.2	2.2	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・D・E	黒	褐色	5YR7/6	灰褐色	5YR7/4	内外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	14	P311	縄文土器	鉢 8.5	4.5	-	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・H	黒	褐色	7.5YR7/6	褐色褐色	10YR7/6	内面に黒染あり 胎子丸	
第71図	15	P141	縄文土器	鉢 4.7	3.0	-	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・D	黒	褐色	10YR6/6	褐色	10YR8/6	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	16	P330	縄文土器	鉢 (13.2)	-	-	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・D	黒	灰褐色	10YR8/4	灰褐色	10YR7/6	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	17	P574	縄文土器	鉢	12.1	-	-	ナデ	ナデ	A・C・D	黒	灰褐色	10YR7/3	灰褐色	10YR7/3	胎子丸	
第71図	18	P100	縄文土器	壺	14.1	-	-	ナデ	ハケ目	A・C・E	黒	灰褐色	10YR8/2	灰褐色	10YR8/2	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	19	P83	縄文土器	坪 (14.0)	14.6	-	-	ミガキ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	C・D	黒	褐色	5YR7/6	褐色	5YR7/6		
第71図	20	P83	縄文土器	坪 (12.4)	14.0	-	-	ミガキ・摩耗のため調整不明	ミガキ・摩耗のため調整不明	C	黒	灰褐色	7.5YR6/4	灰褐色	7.5YR6/4	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	21	P98	縄文土器	坪	15.6	-	-	ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	C・D・E	黒	灰褐色	7.5YR7/4	灰褐色	7.5YR7/4		
第71図	22	P682	縄文土器	坪 (10.0)	13.6	-	-	胎オセエ・ナデ	胎オセエ・ナデ	A・C・D・E	黒	灰褐色	10YR7/2	灰褐色	10YR7/2	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	23	P651	縄文土器	坪 (11.5)	2.5	-	-	ヨコナデ・ナデ・ ミガキ	ヨコナデ・胎オセエ・ ナデ	A・C・D	黒	灰褐色	10YR8/2	灰褐色	10YR8/3	内面にスス付前 内面1段・外面胎まで 黒染あり	
第71図	24	P361	縄文土器	坪	14.1	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	C・D	黒	灰褐色	10YR5/2	褐色	10YR4/1	外面に黒染あり 胎子丸	
第71図	25	P412	縄文土器	筒状坪	12.1	-	-	ナデ	ヨコナデ	A・C・E	黒	褐色	10YR2/1	褐色	10YR2/1		

第24表 出土土器観察表13

図版番号	No.	出土遺構	図種	法量 (cm)				形状		胎土	色調				備考		
				口径	高さ	底径	胴径	内径	外径		内面 (裏)	外底 (底)	外面 (表)	胎土			
第17図	26	P364	土師器	壺	6.7	-	-	ケズリ	ナデ・ケズリ・ハケ目	A・C・E	黒	淡褐色	2.5Y5/2	浅褐色色	10Y88/3	把手のみ	
第17図	27	P146	学生土器	甕	24.0	0.80	26.3	ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・D・E・G	黒	灰白色	10Y88/2	に高い・青褐色	10Y87/2	外面にスス付着	
第17図	28	P541	学生土器	甕	16.4	-	-	ハケ目・ナデ	タタキ・ナデ	A・D・E	黒	暗灰色	10Y85/1	灰白色	10Y87/1		
第17図	29	P50	土師器	皿	2.20	1.90	0.70	-	-	A	黒	に高い・褐色	Hue 5Y87/4	に高い・褐色	Hue 5Y87/4	内面赤色顔料をニメテマシ	
第17図	1	焼出	土師器	杯蓋	12.8	4.1	3.7	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	A・B・C・E	黒	黒灰色	N6/NT/	黒灰色	N6/NT/	耳取式2段階 (中村編年)
第17図	2	焼出	土師器	杯蓋	12.23	4.28	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ハケ目	C・E	黒	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
第17図	3	焼出	土師器	杯蓋	12.20	4.22	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C・E	黒	灰白色	5Y87/1	明褐色	5Y87/1	耳取式2段階 (中村編年)
第17図	4	焼出	土師器	高円形碗	11.2	0.11	0.40	-	回転ナデ	回転ナデ	E・H	黒	灰白色	5Y5/1	灰白色	5Y5/1	
第17図	5	焼出	土師器	付付鉢	10.6	4.2	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	E・F	黒	灰白色	N6/	灰白色	N6/	外面に黒色顔料をニメテマシ
第17図	6	焼出	土師器	甕	23.9	10.41	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	F	黒	灰白色	N6/	灰白色	7.5Y5/1	外面に自然釉
第17図	7	焼出	土師器	甕	11.23	4.9	-	-	ハケ目・ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ・ハケ目	A・C・E	黒	灰白色	7.5Y82/1	灰白色	7.5Y82/1	内面にスス付着
第17図	8	焼出	土師器	甕	14.3	4.4	0.50	-	ナデ・胎オサエ	ナデ・胎オサエ	A・C・E	黒	浅褐色	2.5Y7/3	に高い・青褐色	10Y86/4	外面に黒色顔料をニメテマシ
第17図	9	焼出	土師器	甕	13.2	-	-	-	ナデ	ナデ・胎オサエ・ハケ目	A・C・E	黒	に高い・青褐色	10Y87/4	に高い・青褐色	10Y87/4	
第17図	10	焼出	土師器	高円形碗	11.41	6.1	-	-	学生のため調整不明	学生のため調整不明	A・C・D	黒	に高い・褐色	7.5Y87/4	に高い・褐色	7.5Y87/4	
第17図	11	焼出	土師器	高円形碗	12.23	7.2	-	-	学生のため調整不明	学生のため調整不明	A・C・D	黒	に高い・褐色	7.5Y87/3	褐色	5Y86/6	
第17図	12	焼出	土師器	高円形碗	12.31	6.1	-	-	学生のため調整不明	学生のため調整不明	A・C・D・E	黒	に高い・褐色	5Y87/3	に高い・褐色	5Y87/4	
第17図	13	焼出	土師器	付付鉢	11.1	4.5	1.2	-	学生のため調整不明・ナデ	学生のため調整不明・ナデ	A・B・D	黒	浅褐色	10Y88/4	浅褐色	10Y88/4	
第17図	14	焼出	学生土器	甕	14.5	11.6	-	-	学生のため調整不明	学生のため調整不明・ナデ	A・B・E	黒	灰白色	5Y7/1	褐色	7.5Y87/6	

法量の単位は cm。() は厚径と高さを表す

胎土: A 内院石, B 石炭, C 頁石, D 赤色粘り, E 白色粘り, F 黒色粘り, G 雲母, H 黒粒

第25表 出土土製品・瓦観察表

図版番号	No.	出土遺構	図種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				縦長径	縦短径	厚			
第8図	39	3層	横溝瓦	7.20	7.70	3.00	-	A・D・E	黒面あり 調整 胎オサエ・ナデ 色調 灰白色 Hue 7.5Y88/2
第13図	66	4層	土瓦	3.40	3.80	3.80	39.93	A・C	黒面あり 調整 ナデ 色調 淡褐色 Hue 2.5Y8/3
第19図	14	7層	横溝瓦	13.29	13.00	6.90	-	-	
第28図	1	1層	土瓦	1.70	-	1.50	4.08	B・C・D	高面より厚 孔径 0.1~0.3cm 色調 に高い・青褐色 Hue 10Y87/3
第41図	65	1層	平瓦	3.90	2.80	1.60	-	A・C・E	色調 灰色 Hue N5/ (調子) 色調 灰色 Hue 5Y8/1
第49図	107	2層	土瓦?	4.10	1.35	1.00	4.85	A・C	調整 胎オサエ・ナデ 色調 黒褐色 Hue 7.5Y82/1
第49図	108	2層	横溝瓦	6.30	7.50	1.10	-	A・D・E・H	黒面あり 調整 胎オサエ・ナデ 色調 浅褐色 Hue 10Y88/3
第56図	1	5層	土瓦	11.50	11.80	6.90	29.91	硬玉	高面より厚 孔径 4.4~0.8cm
第28図	2	1層	土製瓦玉	5.50	2.80	1.50	15.82	A・C・D	調整 シボリ粘・ナデ 色調 浅褐色 Hue 10Y88/3
第71図	30	P248	土師	9.40	3.00	2.50	68.70	A・C・D・E	黒面あり 調整 ナデ 色調 灰白色 Hue 10Y88/2
第27図	15	横溝	横溝瓦	3.40	5.10	1.80	-	A・C・E	調整 ナデ・ケズリ 色調 褐色 Hue 5Y86/6

法量の単位は cm。() は厚径、もしくは厚を表す

胎土: A 内院石, B 石炭, C 頁石, D 赤色粘り, E 白色粘り, F 黒色粘り, G 雲母, H 黒粒

第2表 出土石製品観察表

図版番号	%	出土遺物	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				最大径	最大幅	最大厚			
第7-3図	1	2号	石鏃	12.45	11.50	0.40	11.33	ヤマトイ	
第7-3図	2	6号	石鏃	1.80	11.55	0.30	10.74	ヤマトイ	
第7-3図	3	4号	矢頭部	14.50	11.85	0.85	16.72	安山岩	
第7-3図	4	2号	石鏃	3.75	2.55	0.80	6.25	安山岩	
第7-3図	5	1号	石鏃	11.55	11.80	0.60	11.58	ヤマトイ	
第7-3図	6	1号	石鏃	2.90	13.70	0.60	6.11	安山岩	
第7-3図	7	1号	削部	2.40	4.05	0.85	8.25	ヤマトイ	
第7-3図	8	1号	削部	7.75	4.75	1.05	46.70	ヤマトイ	断面付録
第7-3図	9	2号	削部	2.85	3.20	0.85	7.06	安山岩	
第7-3図	10	4号	削部	14.10	12.10	0.45	13.18	粘板岩	
第7-3図	11	1号	削部	3.25	3.55	0.60	1.68	粘板岩	縦断面
第7-3図	12	2号	削部	2.80	0.95	0.40	1.14	粘板岩	縦断面
第7-3図	13	2号	削部	1.75	1.00	0.20	0.26	粘板岩	縦断面
第7-3図	14	2号	削部	2.25	0.85	0.40	0.96	粘板岩	縦断面
第7-3図	15	9号	削部	2.35	1.25	0.45	1.17	粘板岩	縦断面
第7-3図	16	11号	削部	2.85	1.65	0.90	2.86	粘板岩	縦断面
第7-3図	17	4号	削部	2.45	3.55	0.40	1.05	粘板岩	
第7-3図	18	P141	削部	2.40	1.35	0.35	1.58	粘板岩	縦断面
第7-3図	19	P533	削部	2.65	1.35	0.65	1.84	粘板岩	縦断面
第7-3図	20	5号	削部	3.45	1.25	0.75	2.75	粘板岩	縦断面
第7-4図	21	1号	削部	2.95	1.35	0.30	1.55	安山岩	縦断面
第7-4図	22	6号	削部	3.55	1.50	0.60	1.84	安山岩	縦断面
第7-4図	23	7号	削部	3.15	1.80	0.30	20.30	白岩?	
第7-4図	24	1号	打製石片	18.80	17.60	11.70	126.60	安山岩	断面図のふちめ線は手磨
第7-4図	25	1号	打製石片	11.30	6.80	1.80	123.50	安山岩	
第7-4図	26	P144	打製石片	11.20	5.30	1.80	104.70	白岩	
第7-5図	27	P113	打製石片	13.85	7.05	1.70	230.00	白岩	
第7-5図	28	P149	打製石片	17.60	7.95	1.70	114.40	砂岩	
第7-5図	29	2号	磨製石片	10.95	5.60	3.60	414.90	安山岩	断面にも用
第7-6図	30	8号	磨製石片	11.70	16.20	3.00	1470.00	板状岩	
第7-6図	31	5号	磨製石片	11.10	16.40	3.00	124.20	輝緑板状岩?	断面不明
第7-6図	32	17号	磨製石片	11.50	13.80	0.80	120.10	砂岩?	断面付録の河原石あり
第7-7図	33	1号	砥石	11.00	6.80	7.30	1111.00	安山岩	
第7-7図	34	1号	砥石	15.25	15.10	3.70	175.10	砂岩	
第7-7図	35	2号	砥石	9.70	4.60	2.80	206.80	白岩	石片断面に用か
第7-8図	36	8号	砥石	9.15	5.10	2.70	161.10	砂岩	
第7-8図	37	P267	砥石	11.05	6.10	2.70	260.90	白岩	
第7-8図	38	8号	石弓?	14.80	17.05	0.85	120.00	白岩	
第7-8図	39	8号	石弓?	5.40	6.55	0.80	30.70	ヤマトイ	
第7-9図	40	7号	石皿	24.30	17.80	5.40	3380.00	安山岩	

法量の単位はcm、()は残存、もしくは復元を表す

第2表 出土木製品観察表

図版番号	%	出土遺物	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				最大径	最大幅	最大厚			
第8-0図	1	8号	弦弓 (内りもの)	12.00	15.30	0.30	...	コナラ属、アカガシ属類 断面取り	
第8-0図	2	8号	弦弓 (内りもの)	15.40	17.20	ササガ属 断面取り	
第8-0図	3	8号	杵木	19.50	14.30	12.80	...	ササガ属 20x上同一部材	
第8-0図	4	8号	杵木	11.10	13.60	13.40	...	ササガ属 003上同一部材	
第8-0図	5	8号	横造材	199.60	3.6 ~ 5.8	イヌガヤ 断面一断面取り 高層加工	
第8-0図	6	8号	柄?	120.20	13.20	12.70	...	イヌガヤ 芯持ち丸木 断面面取り	
第8-0図	7	8号	残材	12.00	5.90	4.20	...	コナラ属、アカガシ属類 高層加工	
第8-0図	8	1号	不明木製品	117.70	14.70	11.50	...	片断収蔵品? 木ノ属 断面	

法量の単位はcm、()は残存、もしくは復元を表す



調査区空中写真（東から）



調査区空中写真（南から）
奥が平田遺跡



調査区全景（上が北）



調査区北側発掘状況（東から）

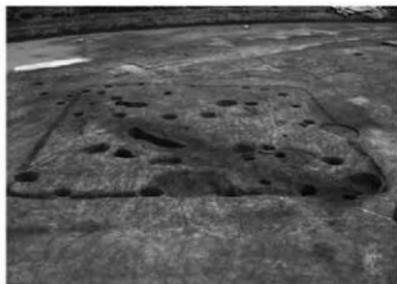


調査区中央発掘状況（西から）



調査区北側発掘状況（西から）

写真図版 4



① 1号竪穴建物発掘状況（南から）



② 2号竪穴建物発掘状況（南から）



③ 3号竪穴建物発掘状況（南から）



④ 3号竪穴建物土製模造鏡出土状況



⑤ 3号竪穴建物柱木出土状況



⑥ 5号竪穴建物発掘状況（南から）



⑦ 5号竪穴建物遺物出土状況



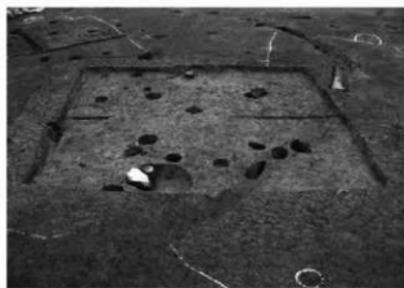
⑧ 5号竪穴建物炭化物出土状況



① 4号竪穴建物遺物出土状況
(南から)



② 4号竪穴建物遺物出土状況



③ 6号竪穴建物発掘状況 (東から)



④ 6号竪穴建物発掘状況 (北から)



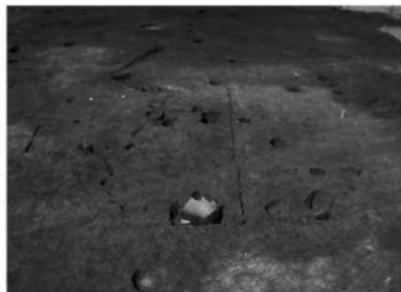
① 7号竪穴建物発掘状況（西から）



② 7号竪穴建物中央炉跡発掘状況（南から）



③ 8号竪穴建物発掘状況（南から）



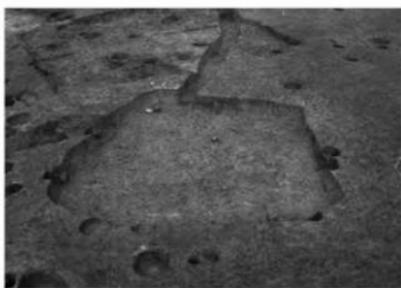
④ 9号竪穴建物発掘状況（南から）



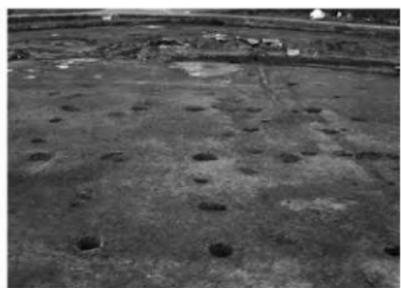
⑤ 10号竪穴建物発掘状況（南から）



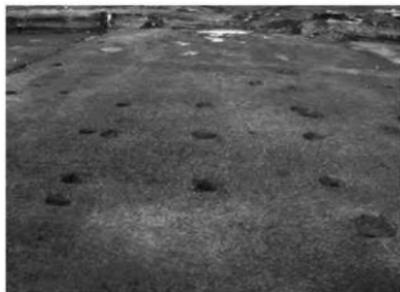
⑥ 10号竪穴建物カマド発掘状況（西から）



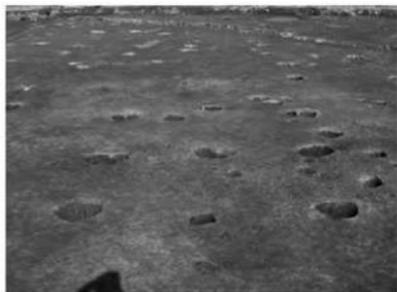
⑦ 11号竪穴建物発掘状況（南から）



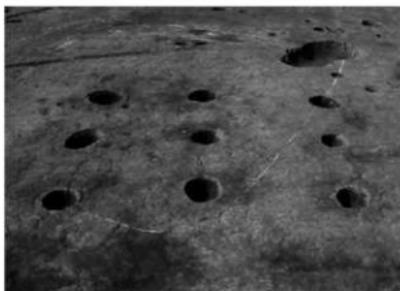
⑧ 1号掘立柱建物発掘状況（南から）



① 2号掘立柱建物発掘状況（南から）



② 3号掘立柱建物発掘状況（南から）



③ 4号掘立柱建物発掘状況（西から）



④ 5号掘立柱建物発掘状況（南から）



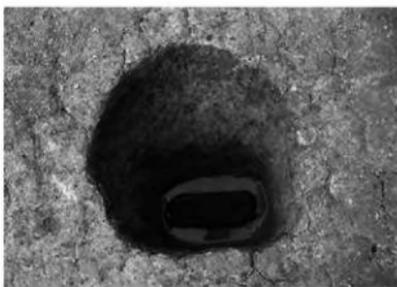
⑤ 6号掘立柱建物発掘状況（南から）



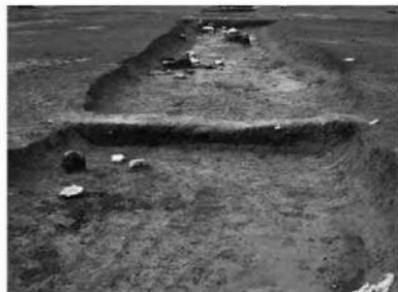
⑥ 7号掘立柱建物発掘状況（南から）



⑦ 8号掘立柱建物発掘状況（南から）



⑧ 9号掘立柱建物木板発掘状況



① 1号溝状遺構土層断面A (東から)



② 1号溝状遺構土層断面B (東から)



③ 1号溝状遺構土層断面C (南から)



④ 1号溝状遺構土層断面C (近景)



⑤ 1号溝状遺構土層断面D (西から)



⑥ 1号溝状遺構土層断面E (西から)



⑦ 1号溝状遺構7区出土遺物発掘状況



⑧ 2号溝状遺構遺物出土状況



① 2号溝状遺構土層断面 A (東から)



② 2号溝状遺構土層断面 B (東から)



③ 3号溝状遺構土層断面 (西から)



④ 3号溝状遺構遺物出土状況 1



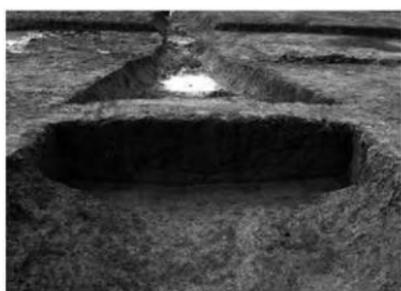
⑤ 3号溝状遺構遺物出土状況 2



⑥ 4号溝状遺構土層断面 A (西から)



⑦ 4号溝状遺構土層断面 C (東から)



⑧ 5号溝状遺構土層断面 (東から)



① 6号溝状遺構土層断面 (東から)



② 7号溝状遺構土層断面 (東から)



③ 7号溝状遺構遺物出土状況
(東から)



④ 8号溝状遺構サブトレンチ1
周辺発掘状況 (北から)

① 8号溝状遺構サブトレンチ2
遺物出土状況（北から）



② 8号溝状遺構サブトレンチ1
遺物出土状況（北から）



③ 8号溝状遺構サブトレンチ2
遺物出土状況（南から）





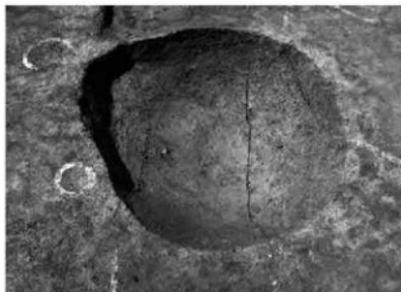
① 8号溝状遺構サブトレンチ2
遺物出土状況（近景）



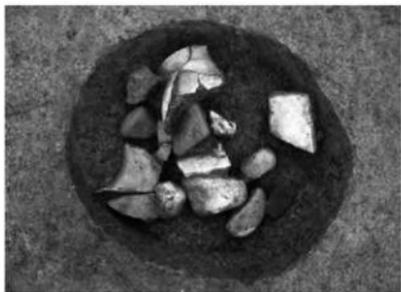
③ 8号溝状遺構サブトレンチ1
土層断面（南から）



② 8号溝状遺構サブトレンチ2
土層断面（南から）



① 1号土坑発掘状況(東から)



② 18号土坑発掘状況



③ P7 遺物出土状況



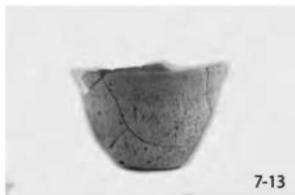
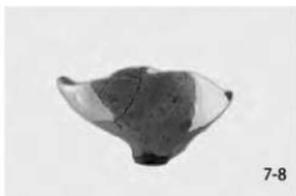
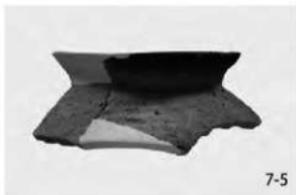
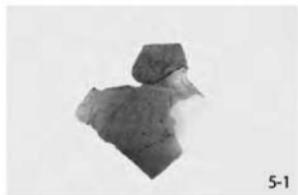
④ P146 遺物出土状況

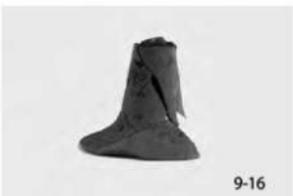
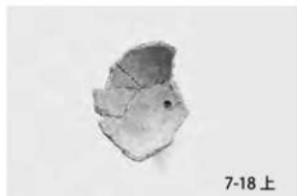
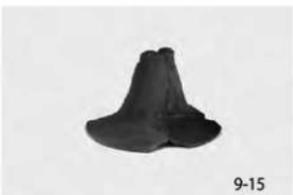
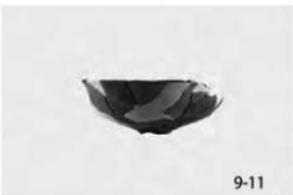


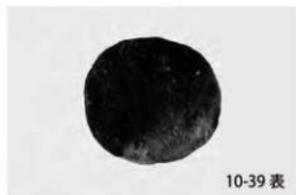
⑤ P310 遺物出土状況



⑥ P630 完掘状況









12-4



12-12



13-19



12-5



12-13



13-20



12-6



12-14



13-21



12-7



12-15



13-22



12-10



12-17



13-23



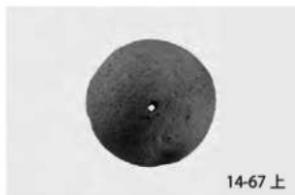
12-11



13-18



13-24

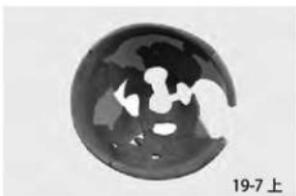




16-5



19-1



19-7 上



16-6



19-2



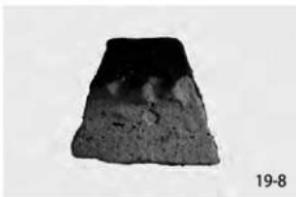
19-7



16-7



19-3



19-8



16-8



19-4



19-9



16-9



19-5



20-1



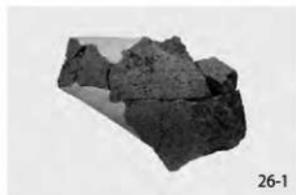
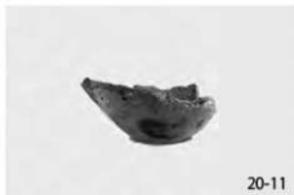
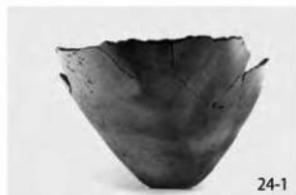
16-10



19-6



20-2





33-1



33-2



41-8



41-13



41-1



41-8 下



41-16



41-2



41-9



41-17



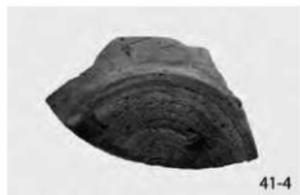
41-3



41-10



41-19



41-4



41-11



41-20



41-6



41-12



41-21



41-22



42-31



43-39



41-23



42-32



44-41



41-24



43-33



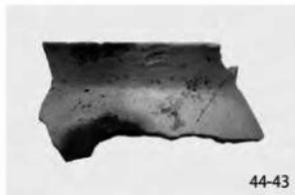
44-42



41-28



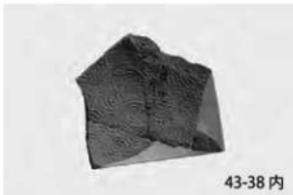
43-34



44-43



42-29



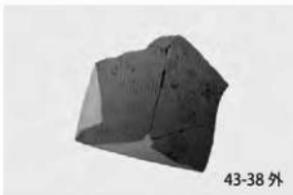
43-38 内



44-44



42-30



43-38 外



44-46



44-47



44-53



44-63



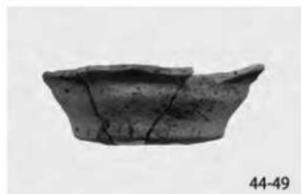
44-48



44-54



44-64



44-49



44-60



46-1



44-50



46-2



44-51



44-61



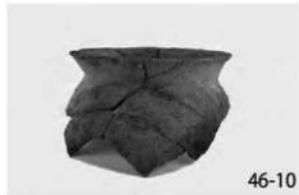
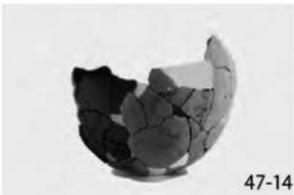
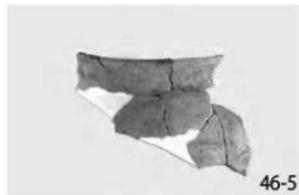
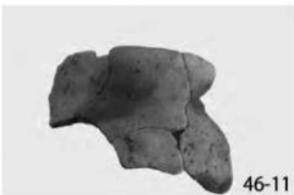
44-52



44-62



46-3





47-23



47-29



47-35



47-24



47-30



47-37



47-25



47-31



47-38



47-26



47-32



47-39



47-27



47-33



47-40



47-28



47-34



47-42





49-67



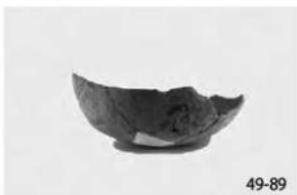
49-88



50-95



49-68



49-89



50-97



49-69



49-90



50-101



49-71



49-91



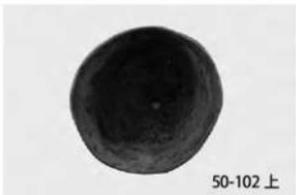
50-101 下



49-79



49-92



50-102 上



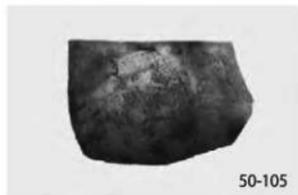
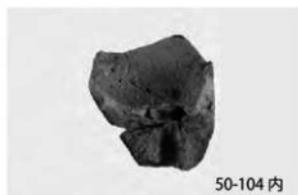
49-87



49-93

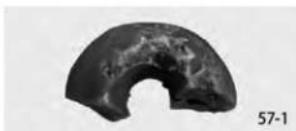


50-102





53-15



57-1



59-5



53-16



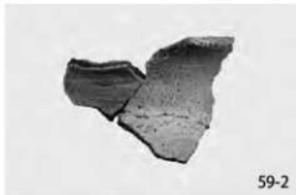
59-1



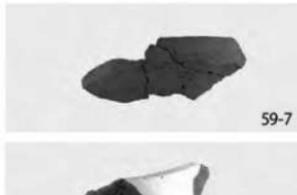
59-6



53-17



59-2



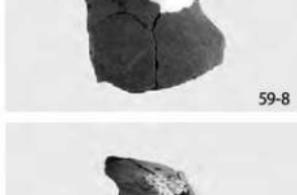
59-7



53-18



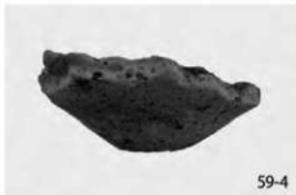
59-3



59-8



53-19



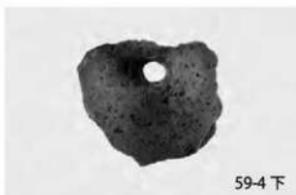
59-4



59-9



55-2



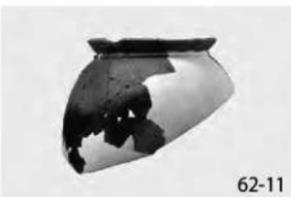
59-4 下



61-1



61-2



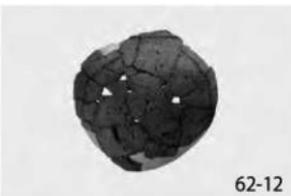
62-11



62-17



61-3



62-12



62-18



61-6



62-13



66-1



61-7



62-14



66-2



61-9



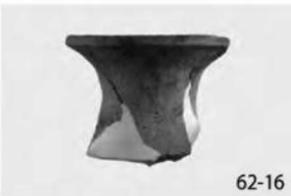
62-15



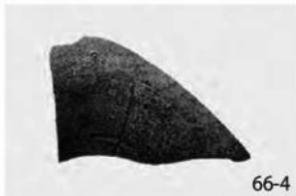
66-3



61-10



62-16



66-4



66-5



66-11



66-18



66-6



66-12



66-7



66-13



66-19



66-8



66-14



66-20



66-9



66-15



66-21



66-10



66-17



66-22



66-23



67-30



67-42



66-24



67-31



67-43



66-25



67-32



67-44



66-26



67-33



67-45



67-28



67-40



67-46



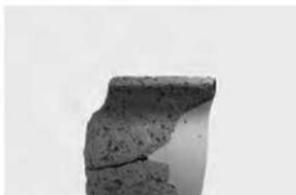
67-29

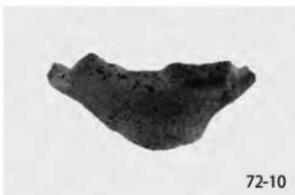
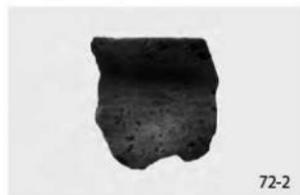


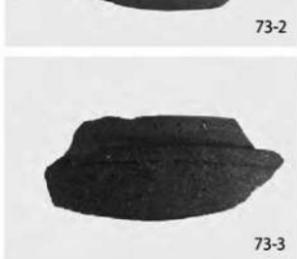
67-41



67-47









73-11



73-12



73-13



73-15 表



73-15 裏



74-1



74-3



74-4



74-8



75-24



76-27



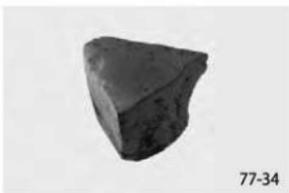
76-29



77-30



77-31



77-34



79-36



79-37



79-38



81-1



81-2



81-3



81-4



81-5



81-6



81-7



81-8

附編 「朝日の遺跡」の自然科学分析

今回報告する自然科学分析は、平成24・25年度に報告した「朝日の遺跡Ⅰ・Ⅱ」の追加報告である。諸般の事情で当該遺跡の報告書に掲載できなかった為、今回まとめて報告する。報告する遺跡の概要は以下のとおりである。詳細については、各報告書を参考にさせていただきたい。

【平田遺跡】

平成23年度に調査が行われた。調査面積は2,749㎡で二串川右岸、標高約80mの沖積地に所在する。調査では、弥生時代後期、古墳時代中期の竪穴建物がそれぞれ2軒前後検出されており、小規模であるが集落の存在が確認されている。また、7世紀から8世紀代の掘立柱建物が5棟検出され、これらは軸方向をそろえて配置されており、当該期の建物構成を考える上で重要な資料と考えられる。このほかに市内での出土例が少ない10世紀代の遺物が出土している。今回報告する自然科学分析は、この掘立柱建物より出土した柱材を対象としている。

【本村遺跡5次調査】

平成24年度に調査が行われた。調査面積は2,498㎡で吹上原台地と辻原台地の裾部から谷部にかけての標高約80mの沖積地に所在する。調査では、古墳時代後期の竪穴建物が4軒検出されている。このほか、竪穴建物を切る形で古代の溝状遺構が検出されている。水田に伴う水路と考えられ、古墳時代の集落を古代に入って水田として活用する土地利用の変遷を追うことが出来、当時の土地利用を考える上で一つの成果が挙げたといえる。今回の報告対象は、竪穴建物に残存していた柱材である。

(1) 平田遺跡出土木材の樹種同定

株式会社 パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市の二串川右岸の沖積面に所在する平田遺跡から出土した木材および炭化材について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

平田遺跡の試料は、奈良時代の2号掘立柱建物から出土した柱材10点である。

これらの試料から、剃刀を用いて3断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。プレパラートは(株)パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

平田遺跡では、広葉樹のネムノキとキハダの2分類群が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) ネムノキ属 *Albizia* マメ科 図版4 18a-18c (平田 No.10)

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列並び、晩材に移行するに従って

第28表 樹種構成

分類群	計
ネムノキ属	1
キハダ	9
計	10

徐々に径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状で、晩材部では翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は1～3列幅で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ネムノキは暖帯から熱帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で割裂性は大きく、切削加工は容易であるが、耐朽性や保存性は低い。

(2) キハダ *Phellodendron amurense* Pupr. ミカン科 図版4 19a-19c (平田No.6)、20a-20c (平田No.8)

大型の道管が早材部に配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅のきれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

4. 考察

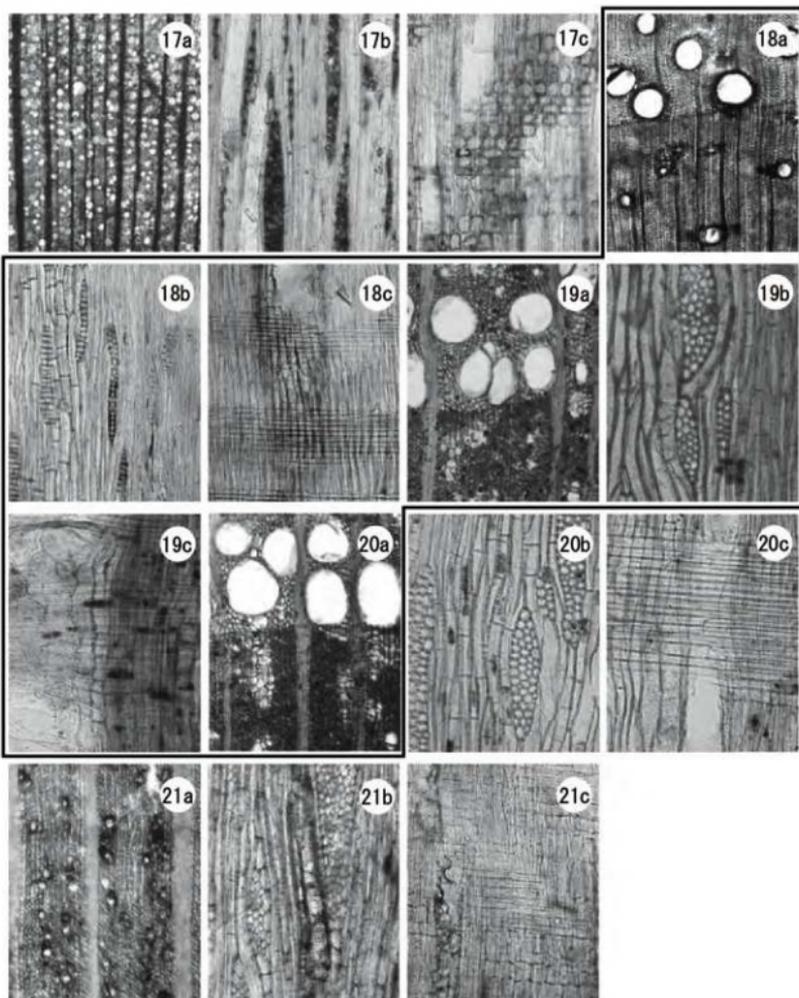
平田遺跡の試料は、すべて2号掘立柱建物から出土した柱材である。P3とP5、P7、P11、P12、P13、P14から出土した割材および半割材はキハダ、一括の割材はネムノキ属であった。キハダの材質は、やや軽軟であり強くないが、水湿に対する抵抗力があるため、近現代でも建築材の土台などに利用される(平井, 1996)。ネムノキ属の材質は、やや軽軟で耐朽性や保存性は低い。用途は一般に器具材や薪炭材である。対馬では屋根材に利用されていたという記録があるが(平井, 1996)、あまり建築材に利用される樹種ではない。一括で出土したネムノキ属以外は、すべてキハダが用いられており、柱材に使用する樹種を統一していた可能性がある。

引用文献

平井信二(1996)木の大本科。394p, 朝倉書店。

第29表 平田遺跡の樹種同定結果

No	遺構番号①	遺構番号②	樹種	木取り	備考
1	2号掘立柱建物	P3	キハダ	割材	劣化
2	2号掘立柱建物	P5①	キハダ	割材	劣化
3	2号掘立柱建物	P5②	キハダ	割材	細かい破片
4	2号掘立柱建物	P7	キハダ	芯なし、みかん割り	劣化
5	2号掘立柱建物	P11	キハダ	割材	劣化(芯なしのみかん割り)
6	2号掘立柱建物	P12①	キハダ	割材	劣化
7	2号掘立柱建物	P12②	キハダ	割材	劣化
8	2号掘立柱建物	P13	キハダ	割材	劣化(芯なしのみかん割り)
9	2号掘立柱建物	P14	キハダ	半割	劣化。底部に一部加工痕残る
10	2号掘立柱建物	一括	ネムノキ属	割材	劣化



スケール： 

図版9 平田遺跡出土木材の光学顕微鏡写真(1) ※枠で囲ったものが平田遺跡の資料

17a-17c. サクラ属(花ノ木No.3)、18a-18c. ネムノキ属(平田No.10)、19a-19c. キハダ(平田No.6)、20a-20c. キハダ(HRT8)、21a-21c. モチノキ属(花ノ木No.22)

a: 横断面(スケール=250 μ m)、b: 接線断面(スケール=100 μ m)、c: 放射断面(スケール=100 μ m)

(2) 本村遺跡 5 次調査出土木材の樹種同定及び年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 樹種同定

1. はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、本村遺跡第 5 次発掘調査より出土した木材に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行い、当時の木材利用と森林植生について検討する。

2. 試料と方法

試料は、本村遺跡第 5 次調査で出土した 1 号竪穴建物より採取された木材片 2 点である。試料の詳細は結果表に記す。

方法は次のとおりである。まず、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柎目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を製作し、生物顕微鏡によって 40～1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表 1 4 に結果を示し、各断面の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第 3 0 表 本村遺跡 5 次調査における樹種同定結果

試料	結果(学名/和名)	
1号竪穴建物 P 1	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ
1号竪穴建物 P 2	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ

・サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 写真 1・2

横断面：小型の道管が、単独ないし 2 個複合して、密に散在する散孔材であるが単独のものが多く。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 40 を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ 8～10 m、径 20～30 cm である。材は強韌、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

4. 考察

同定の結果、本村遺跡第 5 次調査の木材 2 点は、いずれもサカキであった。サカキは常緑の高木であり、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。木材としては、強韌、堅硬な材と言える。当時遺跡及び周辺に生育し、もたらされたとみなされよう。

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に校正する必要がある。

ここでは、本村遺跡第5次発掘調査で出土した1号竪穴建物の構築年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. の協力を得た。

2. 試料と方法

測定試料は、本村遺跡第5次調査で出土した1号竪穴建物より採取された木材片2点である。

放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸 (HCl) により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム (NaOH) により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸 (HCl) で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で 80°C で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、 n -ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表15にまとめた。

第3 | 表 測定試料及び処理

試料名	出土地点・層位	種類	前処理・調整	測定法
No.1	1号竪穴建物 P1	木材 (サカキ)	超音波洗浄、酸-アルカリ-炭処理	AMS
No.2	1号竪穴建物 P2	木材 (サカキ)	超音波洗浄、酸-アルカリ-炭処理	AMS

※ AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 結果

年代測定の結果を表16に示す。

1) ^{14}C 年代値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在 (AD1950年) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例により Libby の 5568年を使用した (実際の半減期は 5730年)。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

試料の炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値

に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。
なお、 $\delta^{13}\text{C}$ 値は加速器質量分析計によって自動的に計算される。

第3表 測定結果

試料名	測定値 (Beta)	未補正 ¹⁴ C年代 ¹⁾ (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ¹⁴ C年代 ³⁾ (年 BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾
No.1	367785	1510 ± 30	-27.8	1460 ± 30	交点: cal AD 600
					1 σ : cal AD 580 ~ 640
					2 σ : cal AD 550 ~ 650
No.2	367786	1460 ± 30	-28.3	1410 ± 30	交点: cal AD 650
					1 σ : cal AD 620 ~ 650
					2 σ : cal AD 600 ~ 680

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元

4) 暦年代 Calendar Age

14 C年代値を実際の年代値(暦年代)に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中14 C濃度の変動および14 Cの半減期の違いを校正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の14 Cの詳細な測定値、サンゴのU/Th(ウラン/トリウム)年代と14 C年代の比較、湖の縮状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。14 C年代の暦年代校正には、Beta Analytic社オリジナルプログラムであるBETACAL09(校正曲線データ: IntCal09)を使用した。暦年代の交点とは、補正14 C年代値と校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率)と2 σ (95%確率)は、補正14 C年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

4. 所見

本村遺跡第5次発掘調査で検出された1号竪穴建物の構築年代を明らかにする目的で、出土した木材を対象に加速器質量分析法(AMS法)により放射性炭素年代測定を行った。その結果、試料P1は1460 ± 30年BP(2 σ の暦年代でAD 550 ~ 650年)、試料P2は1410 ± 30年BP(2 σ の暦年代でAD 600 ~ 660年)の年代値が得られた。

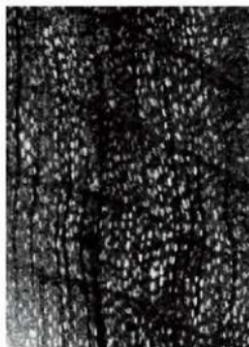
参考文献 I

- 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48。
佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100。
島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、p.296。
山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成、植生史研究特別第1号、植生史研究会、p.242。

参考文献 II

- Bronk Ramsey C.(1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2),425-430。
Bronk Ramsey C.(2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363。
Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE.(2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology, Radiocarbon, 51(4), 1151-1164。
中村俊夫(1999)放射性炭素法、考古学のための年代測定学入門、古今書院、p.1-36。
中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎、日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20、日本第四紀学会。
Paula J Reimer et al.(2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP, Radiocarbon 46, 1029-1058。
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP, Radiocarbon, 51, 1110-1150。

本村遺跡5次調査の木材



横断面 : 0.5mm

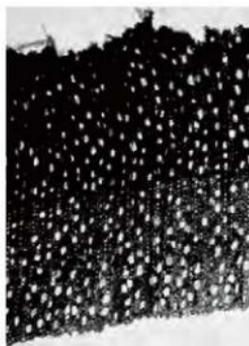


放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

1. P1 サカキ



横断面 : 0.5mm



放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

2. P2 サカキ

報 告 書 抄 録

ふりがな	あさひのいせき3 はなのきいせき1じのちようさ							
書名	朝日の遺跡Ⅲ 花ノ木遺跡1次の調査							
副書名	県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	(3)							
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第116集							
編著者名	上原翔平・若杉竜太							
編集機関	日田市教育庁文化財保護課							
所在地	〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1 0973(24)7171							
発行年月日	2015年(平成27年)3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はな きいせき 花ノ木遺跡 じ 1次	おおいけいんむかし 大分県日田市 おおいせき 大字小迫	44204-6	204379	130° 54' 41"	33° 20' 29"	2011 0704 ～ 2011 1205	10,723㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
花ノ木遺跡1次	集落	弥生 古墳 古代	竪穴建物11軒 掘立柱建物9棟 溝状遺構7条 土坑18基	弥生土器 土師器・須恵器 石器・木製品				
要 約	<p>花ノ木遺跡1次調査地は、日田盆地北部の宮原台地と吹上原台地の谷部、二串川左岸の標高約78mの沖積面に所在する。今回の調査では、谷部の西側入り口に弥生時代後期から古墳時代中期にかけて調査地周辺で水田を営む小規模な集落がつくられていた事がわかった。集落ではミニチュア土器が多量に出土し、祭祀施設の可能性がある竪穴建物が確認されたほか、日田地域のカマド導入期と考えられるカマドが敷設された竪穴建物が確認され、従来の成果を追究することができた。</p> <p>この他、水口を持つ溝状遺構が複数確認されていることから当集落では水田が営まれていたと想定される。また、明確な時期は不明だが古墳時代後期～古代と想定される掘立柱建物群が確認され、軸の方向から2時期に分けられると考えられる。上記のように、本調査ではこの地域における土地利用やその変遷を考える上で貴重な成果を得ることが出来た。今後は台地周辺との成果とあわせながら検討していく必要がある。</p>							

朝日の遺跡Ⅲ

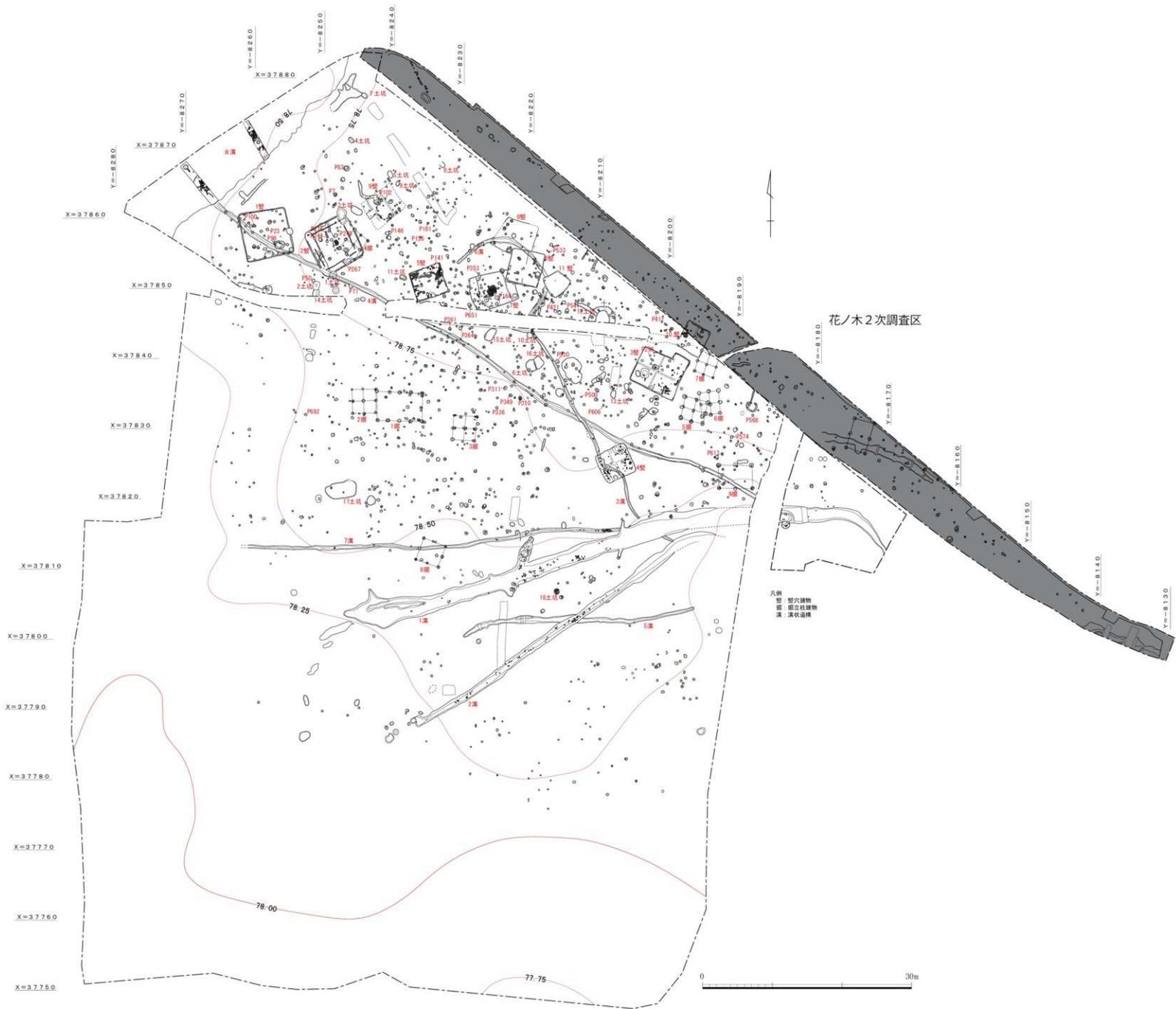
花ノ木遺跡1次の調査

2015年3月31日

編 集 日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1

発 行 日田市教育委員会
〒877-0023 大分県日田市田島2-6-1

印 刷 山本印刷工業株式会社
〒877-0059 大分県日田市大日町3986-3



附図 花ノ木遺跡調査区遺構配置図 (1/400)



日田市